

一般国道 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集  
10号

# 金居塚遺跡

## I

福岡県築上郡大平村所在金居塚遺跡の調査 I

1996

福岡県教育委員会

一般国道  
10号

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

かな い づ か い せ き

# 金居塚遺跡

I

福岡県築上郡大平村所在金居塚遺跡の調査1

1996

福岡県教育委員会



豊前バイパス俯瞰（南上空から）



金居塚遺跡古墳・横穴群（北東上空から）



金居塚 2号墳出土遺物

# 序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、一般国道10号線豊前バイパスの建設に係る発掘調査を昭和62年度から実施し、平成6年度に現場作業を終了したところであります。引き続いて整理・報告書の作成を行い、この度第4冊目が刊行の運びとなりました。

本書に収録した金居塚遺跡は、縄文・弥生時代から近世にいたる複合遺跡で、その内容は多岐にわたる豊富なものであります。

発掘調査にはほぼ1年間を費やし、その間に大平村教育委員会をはじめとして地元有志、そして実に多くの方々のご指導・ご協力を得ることができ、無事にこれを終了することができました。整理・報告に携わっていただいた方々も併せ、深く感謝申し上げます。次第です。

最後に、本書が地域史解明の資料としてだけでなく、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも貢献できれば、望外の喜びとするところであります。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安 常喜

# 例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した、一般国道10号豊前バイパス建設に係る埋蔵文化財の発掘調査報告である。
2. 本書は、平成2・3年度に発掘調査を実施した金居塚遺跡の第1冊目の報告である。金居塚遺跡は内容が多岐にわたるために、本書では古墳時代の遺構・遺物について記した。
3. 出土遺物は福岡県立九州歴史資料館において、土器類を文化課岩瀬正信氏、金属器を同館横田義章氏が、それぞれ指導してその整理を行った。
4. 本書に使用した図面は、遺構を柳田康雄・小川泰樹・日高正幸・犬塚カヲル・木下秀子・横山智保子・友田鈴香・高畑由美子・村上智文・飛野が、遺物を堀ノ内久美子・藤原さとみ・坂田順子・久富美智子・棚町陽子・平田晴美・星野恵美・小川・飛野が作成し、製図を豊福弥生・原カヨ子が行った。
5. 本書に使用した写真は、遺構の一部を柳田・小川が、他の大部分を飛野が撮影し、遺物については九州歴史資料館において、同館石丸洋氏に指導の下で北岡伸一がこれを行った。  
なお、空中写真は(有)空中写真企画に委託した。
6. 本書に使用した方位は座標北(T.N.)の他、特記しないものは磁北である。
7. 本書の執筆・編集は、小川の協力を得て飛野が行った。

# 本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織と関係者	5
II	位置と環境	7
1	地理的環境	7
2	歴史的環境	7
III	遺構と遺物	13
1	古墳	13
1)	1号墳	15
2)	2号墳	23
3)	3号墳	33
4)	4号墳	42
5)	5号墳	44
6)	小 結	49
2	横穴墓	51
1)	1号横穴	51
2)	2号横穴	56
3)	3号横穴	58
4)	4号横穴	60
5)	5号横穴	65
6)	6号横穴	74
7)	7号横穴	77
8)	8号横穴	79
9)	9号横穴	83
10)	10号横穴	86
11)	11号横穴	90
12)	12号横穴	94
13)	古墳・横穴周辺出土の土器	104
14)	小 結	104
3	西方古墳	108
4	金居塚古墳群	110

# 図版目次

- 巻頭図版1 豊前バイパス俯瞰(南上空から)
- 巻頭図版2 金居塚遺跡古墳・横穴群(北東上空から)
- 巻頭図版3 金居塚2号墳出土遺物(上;銅釧 下;馬具)
- 図版1 上;3号墳周辺現況(北東上空から) 下;調査後古墳周辺(北西上空から)
- 図版2 上;調査後古墳周辺(西上空から) 下;調査後古墳周辺(上空から)
- 図版3 上;1号墳現況(東から) 下;同主体部内(南東から)
- 図版4 上;1号墳主体部全景(南東から) 下;同敷石除去後(南東から)
- 図版5 上;1号墳墓道(南東から) 下;同閉塞状況(南東から)
- 図版6 上;1号墳墓道遺物出土状況(南東から) 中;同(南西から)  
下;同(南西から)
- 図版7 上;2号墳現況(東から) 下;同敷石検出状況(東から)
- 図版8 上;2号墳墓道周辺遺物出土状況(東から) 下;同墓道周辺遺物出土状況(北から)
- 図版9 上;2号墳銅釧出土状況(東から) 下;同馬具等出土状況(北東から)
- 図版10 上;3号墳現況(南東から) 下;同墓道発掘後(南東から)
- 図版11 上;3号墳横断土層(南東から) 下;同土層(東から)
- 図版12 上;3号墳土層(南東から) 下;同土層(北東から)
- 図版13 上;3号墳閉塞状況(北東から) 下;同石室(南東から)
- 図版14 上;3号墳石室(北西から) 下左;同(南東から)  
下右;同(北東から)
- 図版15 上;3号墳祭祀土器出土状況(南東から) 下;同(南から)
- 図版16 上;3号墳祭祀土器出土状況(東から) 下;同(東から)
- 図版17 上;4号墳閉塞状況(南東から) 下;同主体部(南西から)
- 図版18 上;4号墳全景(北西から) 下;同敷石除去後(北西から)
- 図版19 上;5号墳検出状況(北東から) 下;同敷石検出状況(北西から)
- 図版20 上;5号墳敷石除去後(南東から) 下;同閉塞付近遺物出土状況(南西から)
- 図版21 上;横穴墓群遠景(東から) 下;横穴墓群近景(東から)
- 図版22 上;1号横穴墓道土層(南東から) 下;1号横穴閉塞状況(北東から)
- 図版23 上;1号横穴全景(北東から) 下;1号横穴玄室(北東から)
- 図版24 上;2号横穴墓道土層(南東から) 下;2号横穴閉塞状況(東から)
- 図版25 上;2号横穴全景(東から) 下;2号横穴玄室(東から)

- |      |                          |                      |
|------|--------------------------|----------------------|
| 図版26 | 上 ; 3号横穴墓道土層 (北から)       | 下 ; 同閉塞状況 (北東から)     |
| 図版27 | 上 ; 3号横穴主体部 (北東から)       | 下 ; 同玄室 (北東から)       |
| 図版28 | 上 ; 4号横穴墓道土層 (南東から)      | 下 ; 同墓道遺物出土状況 (東から)  |
| 図版29 | 上 ; 4号横穴墓道遺物出土状況 (南東から)  | 下 ; 同閉塞状況 (東から)      |
| 図版30 | 上 ; 4号横穴全景 (東から)         | 下 ; 同玄室 (東から)        |
| 図版31 | 上 ; 5号横穴墓道土層 (東から)       | 下 ; 同全景 (北東から)       |
| 図版32 | 上 ; 5号横穴墓道遺物出土状況 (北東から)  | 下 ; 同羨門 (北東から)       |
| 図版33 | 上 ; 5号横穴羨門部遺物出土状況 (北東から) | 下 ; 同 (南西から)         |
| 図版34 | 上 ; 5号横穴玄室遺物出土状況 (北から)   | 下 ; 同玄室敷石除去後 (北東から)  |
| 図版35 | 上 ; 6号横穴墓道土層 (南東から)      | 下 ; 同閉塞状況 (東から)      |
| 図版36 | 上 ; 6号横穴主体部 (東から)        | 下 ; 同玄室 (東から)        |
| 図版37 | 上 ; 7号横穴墓道土層 (東から)       | 下 ; 同閉塞状況 (東から)      |
| 図版38 | 上 ; 7号横穴主体部 (東から)        | 下 ; 同玄室 (東から)        |
| 図版39 | 上 ; 8号横穴墓道土層 (東から)       | 下 ; 同墓道遺物出土状況 (東から)  |
| 図版40 | 上 ; 8号横穴閉塞状況 (南から)       | 下 ; 同主体部 (東から)       |
| 図版41 | 上 ; 8号横穴主体部 (東から)        | 下 ; 同玄室遺物出土状況 (北から)  |
| 図版42 | 上 ; 9号横穴閉塞状況 (北東から)      | 下 ; 同閉塞状況 (北東から)     |
| 図版43 | 上 ; 9号横穴主体部 (北東から)       | 下 ; 同玄室 (北東から)       |
| 図版44 | 上 ; 10号横穴墓道土層 (北西から)     | 下 ; 同閉塞状況 (北東から)     |
| 図版45 | 上 ; 10号横穴主体部 (北東から)      | 下 ; 同玄室 (北東から)       |
| 図版46 | 上 ; 11号横穴墓道土層 (北から)      | 下 ; 同全景 (北東から)       |
| 図版47 | 上 ; 11号横穴主体部 (北東から)      | 下 ; 同玄室 (北東から)       |
| 図版48 | 上 ; 11号横穴玄室遺物出土状況 (北西から) | 下 ; 同玄室遺物出土状況 (北東から) |
| 図版49 | 上 ; 12号横穴墓道土層 (北から)      | 下 ; 同墓道遺物出土状況 (北東から) |
| 図版50 | 上 ; 12号横穴墓道遺物出土状況 (北から)  | 下 ; 同墓道遺物出土状況 (北から)  |
| 図版51 | 上 ; 12号横穴主体部 (北東から)      | 下 ; 同玄室 (北東から)       |
| 図版52 | 上 ; 12号横穴玄室遺物出土状況 (南から)  | 下 ; 同玄室遺物出土状況 (北から)  |
| 図版53 | 古墳出土遺物 1 (1号墳 1)         |                      |
| 図版54 | 古墳出土遺物 2 (1号墳 2)         |                      |
| 図版55 | 古墳出土遺物 3 (1号墳 3、2号墳 1)   |                      |
| 図版56 | 古墳出土遺物 4 (2号墳 2)         |                      |
| 図版57 | 古墳出土遺物 5 (2号墳 3)         |                      |
| 図版58 | 古墳出土遺物 6 (2号墳 4)         |                      |

- 図版59 古墳出土遺物7(3号墳1)
- 図版60 古墳出土遺物8(3号墳2)
- 図版61 古墳出土遺物9(3号墳3、4号墳、5号墳1)
- 図版62 古墳出土遺物10(5号墳2、1号横穴1)
- 図版63 古墳出土遺物11(1号横穴2、2号横穴1)
- 図版64 古墳出土遺物12(2号横穴2、3号横穴、4号横穴1)
- 図版65 古墳出土遺物13(4号横穴2)
- 図版66 古墳出土遺物14(4号横穴3)
- 図版67 古墳出土遺物15(5号横穴1)
- 図版68 古墳出土遺物16(5号横穴2)
- 図版69 古墳出土遺物17(5号横穴3、5号横穴接合資料)
- 図版70 古墳出土遺物18(6号横穴)
- 図版71 古墳出土遺物19(7号横穴、8号横穴1)
- 図版72 古墳出土遺物20(8号横穴2)
- 図版73 古墳出土遺物21(8号横穴3、9号横穴1)
- 図版74 古墳出土遺物22(9号横穴2、10号横穴1)
- 図版75 古墳出土遺物23(10号横穴2)
- 図版76 古墳出土遺物24(11号横穴1)
- 図版77 古墳出土遺物25(11号横穴2、12号横穴1)
- 図版78 古墳出土遺物26(12号横穴2)
- 図版79 古墳出土遺物27(12号横穴3)
- 図版80 古墳出土遺物28(12号横穴4)
- 図版81 古墳出土遺物29(12号横穴5)
- 図版82 上;西方古墳全景(西上空から) 下;西方古墳全景(西から)
- 図版83 上;西方古墳後円部(西から) 下;西方古墳後円部(南西から)
- 図版84 上;西方古墳後円部北側(北西から) 下;西方古墳西半(北から)
- 図版85 金居塚古墳群全景(東から)
- 図版86 上;金居塚古墳群7(左)・10号墳(南西から)下;同7(右)・10号墳(北から)
- 図版87 上;金居塚古墳群畑中の古墳(北東から) 下;同石室(東から)
- 図版88 上;調査風景(3号墳頂から北西をみる) 下;5号横穴内部から下唐原をみる

# 插图目次

	本文頁
第1図 豊前バイパス (1/500,000) .....	2
第2図 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20,000) .....	3
第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000) .....	8
第4図 周辺地形図 (1/2,000) .....	12~13折込
第5図 古墳・横穴群配置図 (1/300) .....	12~13折込
第6図 1・2号墳墳丘土層実測図 (1/80) .....	14
第7図 1号墳主体部実測図 (1/60) .....	14~15折込
第8図 1号墳閉塞状態・墓道遺物出土状態実測図 (1/40) .....	16
第9図 1号墳出土玉類・鉄製品実測図 (1/1、1/3) .....	17
第10図 1号墳出土土器実測図1 (1/3) .....	18
第11図 1号墳出土土器実測図2 (1/3、1/6) .....	19
第12図 1号墳出土土器実測図3 (1/6、1/3) .....	21
第13図 2号墳主体部実測図 (1/60) .....	22
第14図 2号墳出土玉類実測図1 (1/1) .....	24
第15図 2号墳出土玉類実測図2 (1/1) .....	25
第16図 2号墳出土玉類実測図3 (1/1) .....	26
第17図 2号墳出土鉄製品等実測図1 (1/3、1/1) .....	27
第18図 2号墳出土鉄製品等実測図2 (1/3) .....	28
第19図 2号墳出土土器実測図1 (1/3) .....	29
第20図 2号墳出土土器実測図2 (1/3) .....	30
第21図 2号墳出土土器実測図3 (1/3、1/6) .....	31
第22図 3号墳墳丘土層実測図 (1/80) .....	32~33折込
第23図 3号墳主体部実測図 (1/60) .....	32~33折込
第24図 3号墳閉塞状態実測図 (1/60) .....	34
第25図 3号墳出土玉類実測図 (1/1) .....	35
第26図 3号墳出土鉄製品実測図 (1/3) .....	36
第27図 3号墳墳丘遺物出土状態実測図 (1/40) .....	36
第28図 3号墳出土土器実測図1 (1/3) .....	37
第29図 3号墳出土土器実測図2 (1/3) .....	38
第30図 3号墳出土土器実測図3 (1/3) .....	39

第31図	3号墳出土土器実測図4 (1/6) .....	40
第32図	4号墳閉塞状態実測図 (1/60) .....	42
第33図	4号墳主体部実測図 (1/60) .....	42~43折込
第34図	4号墳出土耳環実測図 (1/1) .....	43
第35図	4号墳出土土器実測図 (1/3) .....	43
第36図	5号墳閉塞状態実測図 (1/60) .....	44
第37図	5号墳主体部実測図 (1/60) .....	44~45折込
第38図	5号墳出土玉類実測図 (1/1) .....	45
第39図	5号墳出土鉄製品実測図 (1/3) .....	46
第40図	5号墳出土土器実測図1 (1/3) .....	47
第41図	5号墳出土土器実測図2 (1/3) .....	48
第42図	手製シューター .....	50
第43図	横穴群配置図 (1/300) .....	52
第44図	1号横穴実測図 (1/60) .....	53
第45図	1号横穴出土耳環実測図 (1/1) .....	54
第46図	1号横穴出土土器実測図 (1/3) .....	55
第47図	2号横穴出土玉類・鉄製品実測図 (1/1、1/3) .....	56
第48図	2号横穴実測図 (1/60) .....	56~57折込
第49図	2号横穴出土土器実測図 (1/3) .....	57
第50図	3号横穴出土玉類実測図 (1/1) .....	58
第51図	3号横穴実測図 (1/60) .....	58~59折込
第52図	3号横穴出土土器実測図 (1/3) .....	59
第53図	4号横穴実測図 (1/60) .....	60~61折込
第54図	4号横穴出土土器実測図1 (1/3) .....	61
第55図	4号横穴出土土器実測図2 (1/3) .....	62
第56図	4号横穴出土土器実測図3 (1/3) .....	63
第57図	4号横穴出土土器実測図4 (1/6) .....	64
第58図	5号横穴実測図 (1/60) .....	64~65折込
第59図	5号横穴墓道縦断土層実測図 (1/60) .....	66
第60図	5号横穴出土玉類実測図 (1/1) .....	67
第61図	5号横穴出土鉄製品実測図 (1/3、1/6) .....	68
第62図	5号横穴出土土器実測図1 (1/3) .....	70
第63図	5号横穴出土土器実測図2 (1/3) .....	71

第64図	5号横穴出土接合土器実測図1 (1/3、1/6).....	72
第65図	5号横穴出土接合土器実測図2 (1/6) .....	73
第66図	6号横穴実測図 (1/60) .....	74~75折込
第67図	6号横穴出土玉類・鉄製品実測図 (1/1、1/3).....	75
第68図	6号横穴出土土器実測図 (1/3) .....	76
第69図	7号横穴実測図 (1/60) .....	76~77折込
第70図	7号横穴出土耳環実測図 (1/1) .....	78
第71図	7号横穴出土土器実測図 (1/3) .....	78
第72図	8号横穴実測図 (1/60) .....	78~79折込
第73図	8号横穴出土玉類実測図 (1/1) .....	80
第74図	8号横穴出土鉄製品等実測図 (1/1、1/3、1/6) .....	81
第75図	8号横穴出土土器実測図 (1/3、1/6).....	82
第76図	9号横穴実測図 (1/60) .....	82~83折込
第77図	9号横穴出土鉄製品実測図1 (1/3) .....	84
第78図	9号横穴出土鉄製品実測図2 (1/6) .....	84
第79図	9号横穴出土土器実測図 (1/3、1/6).....	85
第80図	10号横穴実測図 (1/60) .....	87
第81図	10号横穴墓道遺物出土状態 (1/20) .....	88
第82図	10号横穴出土玉類・鉄製品実測図 (1/1、1/3).....	88
第83図	10号横穴出土土器実測図 (1/3) .....	89
第84図	11号横穴実測図 (1/60) .....	90~91折込
第85図	11号横穴出土玉類実測図 (1/1) .....	92
第86図	11号横穴出土鉄製品実測図 (1/3、1/6).....	93
第87図	11号横穴出土土器実測図 (1/3、1/6).....	94
第88図	12号横穴実測図 (1/60) .....	94~95折込
第89図	12号横穴出土玉類実測図1 (1/1) .....	96
第90図	12号横穴出土玉類実測図2 (1/1) .....	97
第91図	12号横穴出土鉄製品実測図 (1/3) .....	98
第92図	12号横穴出土土器実測図1 (1/3) .....	99
第93図	12号横穴出土土器実測図2 (1/3) .....	100
第94図	12号横穴出土土器実測図3 (1/3) .....	101
第95図	12号横穴出土土器実測図4 (1/3) .....	102
第96図	12号横穴出土土器実測図5 (1/3、1/6).....	103

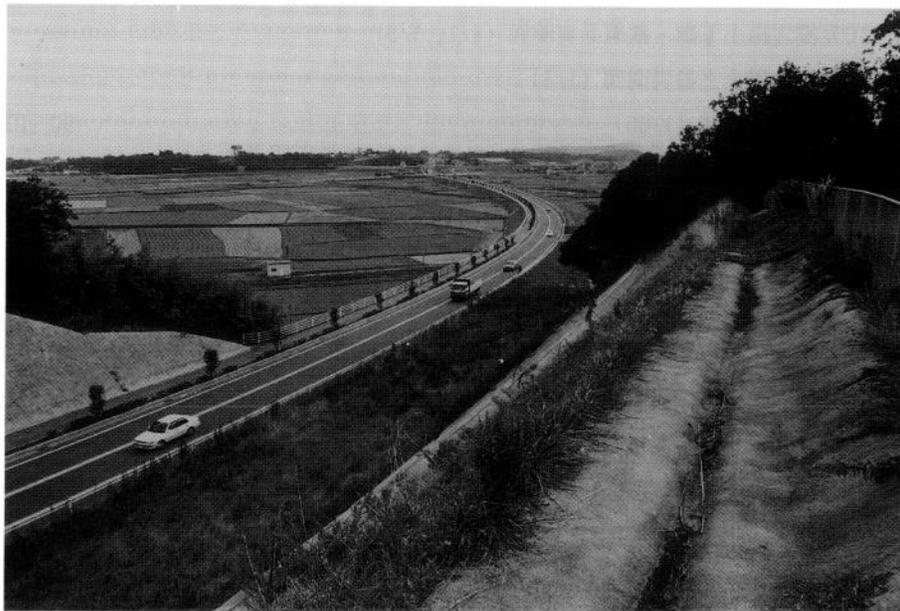
第97図	古墳・横穴周辺出土土器実測図（1/3、1/6）	105
第98図	西方古墳周辺地籍図（1/2,000）	107
第99図	西方古墳地形測量図（1/400）	108～109
第100図	金居塚古墳群地形測量図（1/400）	110～111折込

## 表 目 次

第1表	一般国道10号豊前バイパス関係遺跡一覧表	4
第2表	金居塚遺跡古墳・横穴一覧表	114
第3表	金居塚遺跡出土玉類一覧表	115～122

## 付 図

金居塚遺跡遺構配置図（1/500）



開通になった豊前バイパス金居塚遺跡  
（対岸の段丘は大分県三光村上の原遺跡の所在地）

# I はじめに

## 1 調査に至る経過

いつのころから現在に至るまで、九州の大動脈として西回りルートが重要視されてきた。平成7年7月、九州縦貫自動車道は最後の難関にトンネルが開通して全線が一本とり、九州新幹線も一部で工事が開始されている。他方、東海岸で南北を繋ぐ幹線は国道10号線、そしてJ R日豊本線のみである。東九州の主要都市である大分市・宮崎市などは、九州を横断して縦貫自動車道を介して福岡県・本州と繋がるが、距離的には大きく迂回している。

特に北九州市の周辺では、苅田町海岸部工業地域・港湾の発展や、行橋市等のベッドタウン化などが相俟って幹線道路の国道10号線はパンク状態となりつつあった。

こうした九州東北部の交通体系を改善するために、この10号線バイパス―北大道路は計画された。その後の文化財調査に至る経緯については『豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 宇野代遺跡』に詳しい。

ここに報告する金居塚遺跡は、当初「第7地点 カネツキ遺跡(古墳群)」として協議の対象となっていた遺跡であるが、その後に「カネツキ」とは「金居塚」の訛ったものであることが判り、表記をあらためたものである。

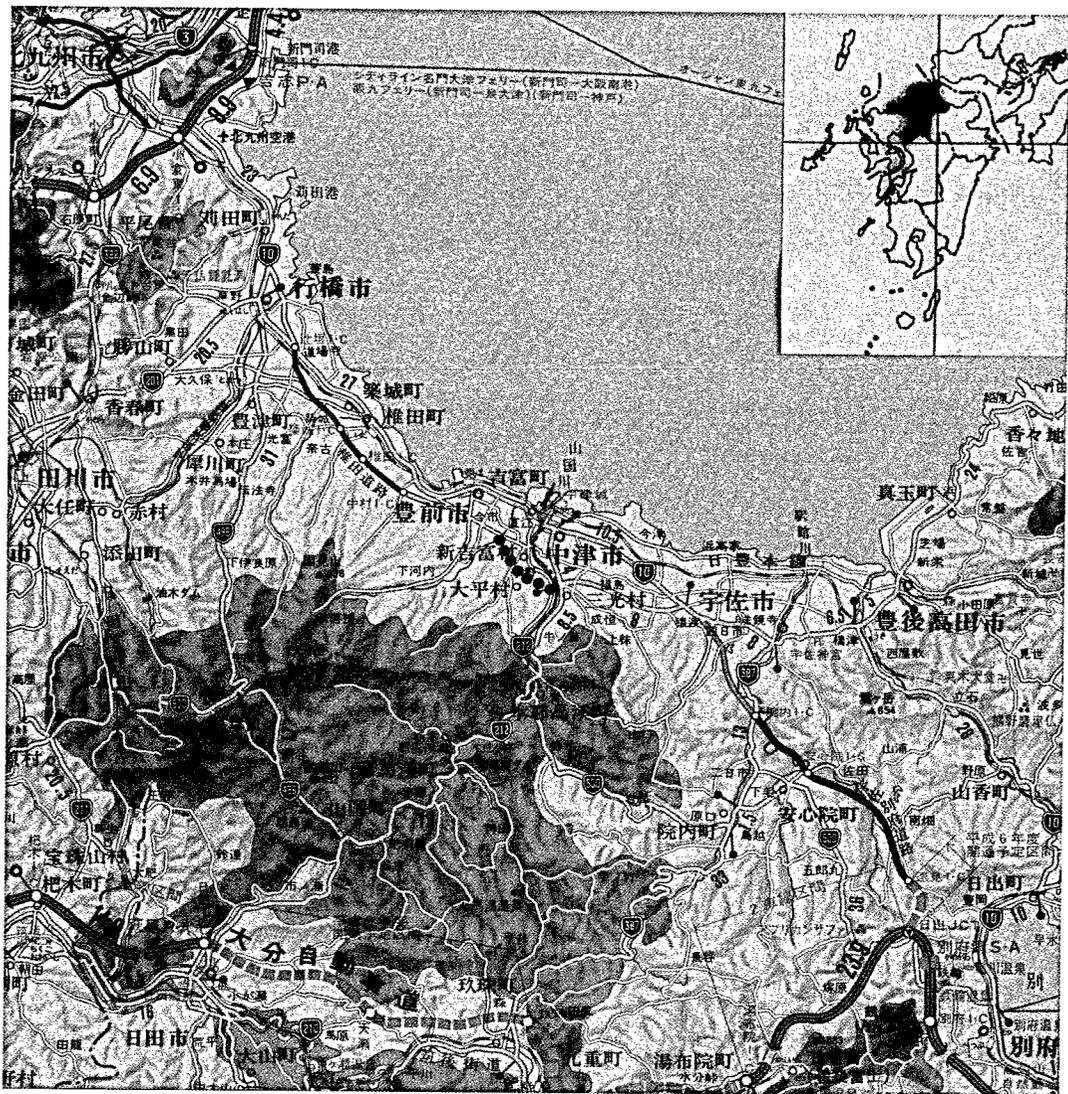
8A地点(上唐原遺跡)、8B地点(郷ヶ原遺跡)の調査を終えた後、平成2年に着手した遺跡がこの金居塚遺跡である。対象面積は山国川が形成した河岸段丘の縁から、背面の小谷にいたる約13,000㎡の規模であった。現状で3基の古墳と無数の近世墓が確認できたが、調査の結果は以下に記すような大規模な遺跡となった。

なお、調査の過程において、本古墳群を理解する上で欠かせない調査地南の檜林中の密集する古墳群、そして調査地北に隣接する林の中で偶然に発見した、築上郡及び山国川下流域ではじめて確認された前方後円墳の測量調査を併せて実施した。

### 調査日誌抄録

平成2年(1990)年

- 5月14日 器材搬入開始。下草伐採等の清掃、地形測量から始める。
- 5月23日 調査前の空撮
- 5月24日 古墳から発掘開始
- 6月21日 飛野が加わる。
- 6月30日 柳田、筑紫野バイパスへ。
- 7月1日 近世墓の本格的な発掘開始。地表に石材が露出するために、人力で表土を剥ぐ。



第1図 豊前バイパス路線図 (1/500,000)

7月末日 小川、筑紫野バイパスの発掘調査へ移動へ。

8月30日 古墳、近世墓が一段落し、横穴の発掘を開始。まだ、古墳等の調査もあるために、段丘上端から下端まで達する排土用のシューターを足場板と波板で作成。

10月4日 横穴前面の斜面から、思いも寄らぬ細型銅剣片出土。

11月23日 古墳・横穴周辺空撮。以後、調査は順次西へ進む。

12月4日 古墳の地山を剥いで、下層を発掘。石鏃・フレイク等多数検出。

12月20日 調査区南の古墳群について、地権者の了解を得て測量を開始する。

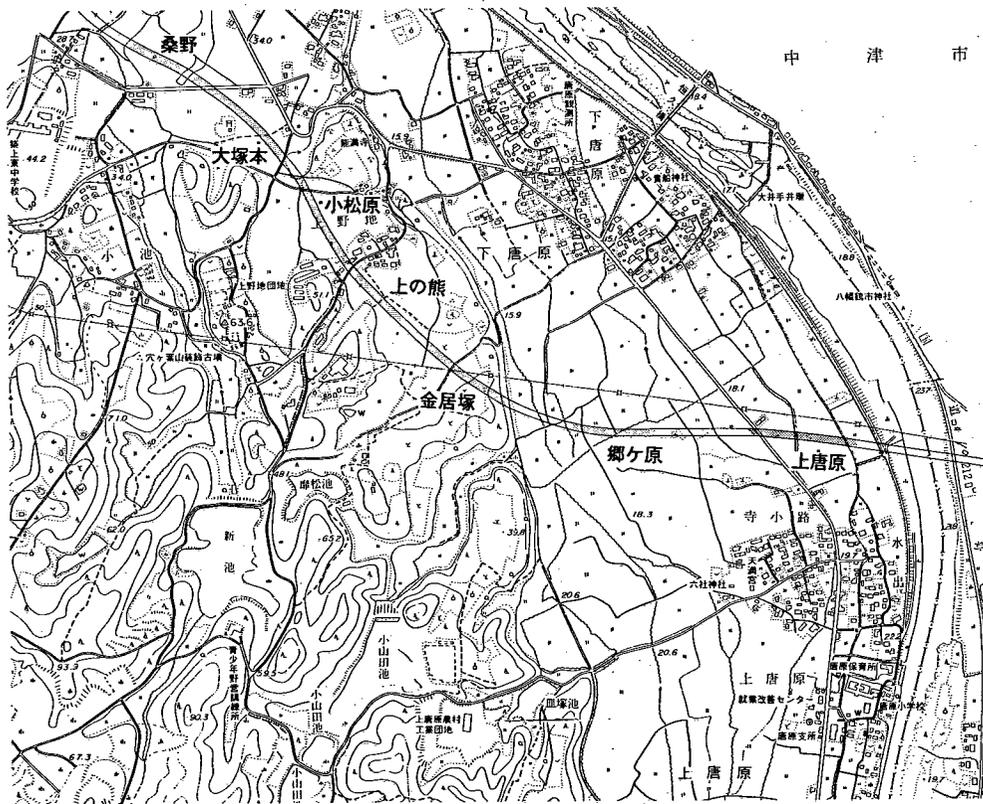
3年(91)年

1月22日 村道以西の遺構検出開始。

2月8日 西方古墳の測量を開始する。

3月4日 テント設営地付近の表土掘削により、石蓋土墳墓を発見。また、付近に落とし穴状の土坑集中する。

4月30日 多雨のため、土墳墓等の湧水が甚だしく発掘は難渋を極めたが、すべてを終了し撤収する。



第2図 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/20,000)



## 2 調査の組織と関係者

平成2・3年、および報告書を作成した7年度の関係者は以下の通り。

	2年度	3年度	7年度
建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所			
所 長	森 久	竹中 幸生	大内英吉郎
副 所 長	久谷 秀明	中山 高虎	高崎 寿男
建設専門官	田中 睦憲	田中 睦憲	安部 純弘
建設監督官	田中 常美	百田 国広	
工務課長	溝上 利毅	溝上 利毅	中川 博勝
同係長		浅田 敏光	徳重 栄紀
調査課長	松崎 安則	松崎 安則	田中 光助
同係長	田中 敏則	荒瀬 美和	竹下 卓宏
建設技官	井上 敏彦	杳掛 孝	田邊 稔
用地課長		竜口 登	桑田 優二
同係長		樋口 昭裕 (第2係長)	
同用地官			馬場 直

井本 真樹尾

### 福岡県教育委員会

総括 教 育 長	御手洗 康	御手洗 康	光安 常喜
教 育 次 長	浜地 甫伯	光安 常喜	松枝 功
指導第二部長	月森清三郎	月森清三郎	丸林 茂夫
文 化 課 長	六本松聖久	森山 良一	松尾 正俊
参 事	森本 精造	森本 精造	安野 義勝
		石松 好雄 (兼文化財保護室長)	柳田 康雄 (兼文化財保護室長)
課 長 補 佐	安野 義勝	国武 康友	元永 浩士
	石松 好雄	松尾 正俊	
参 事 補 佐	中矢 真人	柳田 康雄 (調査班総括)	井上 裕弘
	大塚 健	井上 裕弘 (総括補佐)	橋口 達也 (調査班総括)
	松尾 正俊	石山 勲	川述 昭人
	柳田 康雄 (調査班総括)	清水 圭輔	木下 修

井上 裕弘 (総括補佐)	濱田 信也	児玉 真一
石山 勲	副島 邦弘	新原 正典
濱田 信也		磯村 幸男
副島 邦弘		中間 研志

庶務

管理係長	池原 脩	岸本 実	柴田 恭郎
事務主査	東 勇治	東 勇治	久保 正志

調査担当

主任技師	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文 (京築教育事務所技術主査)
技 師	小川 泰樹		小川 泰樹 (九州歴史資料館主任技師)

平成7年度整理関係者

整理指導員	岩瀬 正信 (接合復原)	平田 春美 (土器実測)		
	北岡 伸一 (写真撮影)	豊福 弥生 (製図)		
整理補助	原カヨ子	関 久江	土山真弓美	岡由美子
	田中典子	堀江圭子	棚町陽子	久富美智子
	坂田順子	藤原さとみ	江口幸子	堀之内久美子
	山本千鶴美	星野恵美	辻 清子	山田知子
	穴見裕子	小国みどり	高島妙子	坂本恵津子
	安永啓子	近藤京子	森 紀子	安武道子

また、上記したように調査には長期間を要し、多くの方々のご協力・ご指導を得た。

福岡県文化財保護指導委員宮本工・浜島三司・川本義継・一川淳江、福岡県立求菩提資料館長重松敏美、福岡県京築教育事務所伊崎俊秋・緒方泉(平成2・3年度)、同西弘・宮部順治・中谷雅俊・土屋健一(平成7年度)、吉永真砂子、木村康子、県文化課椎田事務所中原三枝子、福岡県文化課の諸兄、大平村教育委員会(峯 速見教育長)、大分県教育委員会坂本嘉弘・村上久和、大分県中津市教育委員会栗焼憲児(現福岡県豊前市教育委員会)、同三光村教育委員会植田由美、立命館大学和田晴吾、地権者の早川菊雄・大平村・豊前市・椎田町の方々。

## Ⅱ 位置と環境

### 1 地理的環境

この金居塚遺跡は、福岡県築上郡大平村大字下唐原番地他の河岸段丘上に所在する。

大平村は福岡県東端部に位置する、人口4,500人ほどの農村である。東は一級河川山国川を挟んで、南は標高1,131mの犬ヶ岳に連なる山岳を介して大分県に接する。村内の地勢は、西側（旧友枝村）では丘陵地とそれを開析した小谷が展開し、東（旧唐原村）では山国川によって形成された河岸段丘及び沖積平野からなるといったように比較的明瞭な違いを見せる。

この遺跡は、地質学的には山国川左岸の中津面と呼ばれる中位段丘上、その縁に位置し、この地形は下末吉期（6～13万年前）に形成されたとされる<sup>※1</sup>。眼下には決して広くはない上・下唐原の沖積地が広がり、それとの比高差は約20mある。いわゆる地山は安山岩の風化礫層を含む赤褐色粘質土層で、表層では礫が少なくなる。本遺跡では横穴墓を含むすべての遺構がそれに掘り込まれている。

### 2 歴史的環境

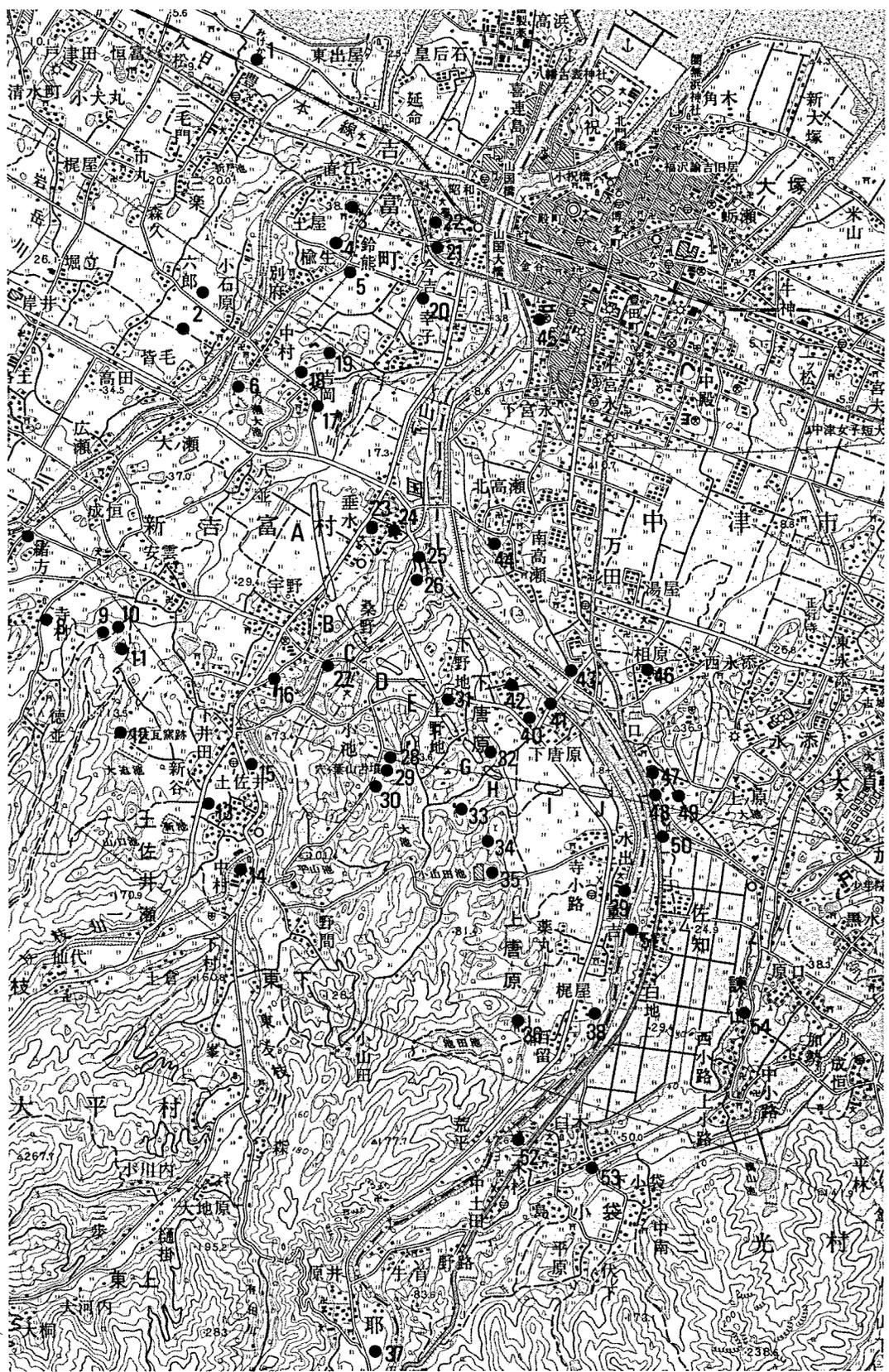
昭和58（1983）年、福岡県教育委員会は機構改革を行い、それまで旧郡ごとに設置されていた教育出張所を統廃合して6教育事務所を設置、各教育事務所に文化課技術職員を兼任配置した。それまで文化課で受託事業以外を担当していた職員を固定配置したのである。これによって、県教委文化課・地教委との意志疎通が一層図られることとなり、現在に至る福岡県文化財保護行政にとって大きな転換点となった。

それと併せ、ここ数年来の圃場整備事業や道路改良等の開発行為に伴う事前調査の増加によって大平村周辺でも新たな発見が相次ぎ、住民にも文化財に対する関心が高まりつつある。

さて、大平村は昭和30年に唐原村・友枝村が合併して発足したもので、村名は両村の南になだらかな山容を見せる標高611mの<sup>おおひらやま</sup>大平山に由来する。また、築上郡は明治29年に<sup>ついき</sup>築城、<sup>こうげ</sup>上毛両郡が合併したものである。ここに報告する金居塚遺跡は旧唐原村、旧上毛郡に属する。以下で、旧上毛郡を中心に考古学的な知見を記す。

#### 縄文時代以前

この周辺では旧石器時代の遺跡と呼べるものはまだ未確認であるが、遺物は散見する。量的にかなりまとまった遺跡として豊前市青畑向原遺跡<sup>※2</sup>がある。圃場整備事業に伴う事前調査で調査され、黒曜石製・水晶？製ナイフ型石器、安山岩製剥片尖頭器などが出土した。他にはこの豊前バイパスに関わる大平村桑野遺跡、上の熊遺跡などの調査で、遺構に伴わない状態でナイフ型石器、剥片尖頭器が採集されている。



第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

1. 三毛門遺跡 2. 小石原泉遺跡 3. 鈴熊山古墳 4. 楡生山古墳 5. 今吉遺跡 6. 日熊山古墳群 7. 緒方古墳群 8. 尻高畑遺跡 9. 山田瓦窯跡 10. 山田窯跡群 11. 山田1号墳 12. 友枝瓦窯跡 13. 土佐井ミソノテ遺跡 14. 今蔵遺跡 15. 土佐井遺跡群 16. 宇野台古墳群 17. 吉岡遺跡 18. 巨石塚古墳 19. 大塚古墳 20. 矢頭田遺跡 21. 天仲寺古墳 22. 広運寺古墳 23. 垂水廃寺 24. 垂水遺跡 25. 牛頭天王遺跡 26. 中桑野遺跡 27. 桑野代古墳群 28. 穴ヶ葉山南古墳群 29. 穴ヶ葉山南遺跡 30. 穴ヶ葉山古墳 31. 能満寺古墳 32. 金居塚前方後円墳 33. 上ノ熊古墳群 34. 小山田古墳群 35. 皿山古墳群 36. 百留横穴群 37. 原井三ツ江遺跡 38. 百留居屋敷遺跡 39. 上唐原稲本屋敷遺跡 40. 下唐原居屋敷跡 41. 下唐原宮園遺跡 42. 川下遺跡 43. 上万田遺跡 44. 高瀬遺跡 45. 高畑遺跡 46. 相原廃寺 47. 幣旗邸古墳群 48. 上ノ原横穴群 49. 勸助野地遺跡 50. 佐知久保畑遺跡 51. 佐知遺跡 52. 城横穴群 53. 白木古墳群 54. 疎山遺跡群 A. 垂水地区遺跡群 B. 宇野代遺跡 C. 上桑野遺跡 D. 桑野遺跡 E. 大塚本遺跡 F. 小松原遺跡 G. 上ノ熊遺跡 H. 金居塚遺跡 I. 郷ヶ原遺跡 J. 上唐原遺跡

縄文時代の遺跡は特に後期に属する集落跡の発見が相次いでいる。山国川左岸の大平村原井三ツ江遺跡<sup>23</sup>、同上唐原遺跡<sup>24</sup>、右岸の大分県三光村佐知遺跡<sup>25</sup>、友枝川左岸の大平村土佐井遺跡<sup>26</sup>、同新吉富村垂水遺跡<sup>27</sup>、佐井川左岸の豊前市狭間宮ノ下遺跡<sup>28</sup>、小石原泉遺跡<sup>29</sup>、角田川左岸の中村石丸遺跡<sup>30</sup>等が旧上毛郡域に属する。いずれも大小の河川に接する段丘上に営まれた集落跡で、同様な立地を見せる遺跡は築上郡椎田町山崎<sup>31</sup>・石町遺跡<sup>32</sup>、同郡築城町松丸遺跡<sup>33</sup>、京都郡豊津町節丸西遺跡<sup>34</sup>など、周防灘沿岸に広く共通する様相である。以上は最も資料が充実する後期の遺跡であるが、早期に遡る遺跡・遺物も発見されている。

豊前市吉木遺跡<sup>35</sup>は、標高12mほどの微高地の東側縁部に位置する。ここでは明確な遺構を確認できなかったが、押型土器などがかなりまとまって出土しており、生活の場であったことが想定されている。また、周辺の調査でも同じ頃の土器・石器が出土し、遺跡の広がりが確認されている。椎田町小原岩陰遺跡<sup>36</sup>は当地で調査されたはじめての洞窟遺跡である。トレンチ調査で、前期と考えられる埋葬人骨や、早期、前期、後・晩期などの数枚の文化層が確認されている。この岩陰遺跡は現在では小河川である真如寺川に浸食されたとされ、間口82m、高さ18m、奥行き6mの大規模なものである。後期以前のまとまった遺跡は以上であるが、遺物は各地で採集されている。

晩期の遺跡も調査例が乏しいが、大平村下唐原川下遺跡<sup>37</sup>で採集された資料が紹介されている。山国川左岸の自然堤防上にあり、晩期中頃ないし若干下降する時期とされる鉢あるいは深鉢や打製石斧がある。

#### 弥生時代

山国川流域の弥生時代の遺跡は、弥生時代前期後半でも末葉に近い時期の遺跡が中流域の段丘上・自然堤防上などで確認されている。代表的な遺跡は段丘上の新吉富村牛頭天王（中桑野）遺跡<sup>38</sup>で、ここでは中期前半までに巨大な掘立柱建物跡を営み、中期後半頃には環濠を備えるなど、拠点的な集落とみて間違いない。豊前バイパス路線内で発見した大型の方形周溝墓（墳丘墓）を含む墓地である大塚本遺跡<sup>39</sup>や、小規模な建物からなる倉庫群を含む桑野遺跡<sup>40</sup>なども牛頭天王遺跡を中心に形成された遺跡と考えられる。その他には、大平村上唐原の山国川左岸の自然堤防上、新吉富村垂水の友枝川左岸段丘上で前期後半から中期にかけての遺物が出土しているが、まとまった遺構は乏しい。

旧上毛郡域で最も古式の弥生土器は、豊前市赤熊の昭和町遺跡<sup>41</sup>から出土したという壺棺であるが、これは偶然の発見であって遺跡の内容ははっきりしない。しかし、位置的には海岸に近い砂丘上にあることから伝播ルートが推測できる。

後期でも後半の遺跡は、金居塚遺跡の眼下にある上唐原遺跡<sup>42</sup>・郷ヶ原遺跡<sup>43</sup>・佐知遺跡などが自然堤防・微高地上で発見され、あるいは友枝川左岸の新吉富村宇野・垂水の段丘上<sup>44</sup>、佐井川左岸の段丘上の小石原泉遺跡<sup>45</sup>などにも濃密に分布する。そのうち、道路幅という限ら

れた調査範囲であったが、郷ヶ原遺跡は環濠を有する点で特記される。

弥生時代の墓地としては先の大塚本遺跡が中期に遡る特定家族墓として重要である。開墾のために残存状況はよくないが、周辺で列状配置をとる土壙墓群も検出された。後期の墓地は調査されたものとして大平村穴ヶ葉山遺跡<sup>226</sup>、そしてこの金居塚遺跡があるが、他にも各所で石蓋土壙墓が発見されている。穴ヶ葉山遺跡では、二次にわたる調査で密集する86基の石蓋土壙墓、2基の土壙墓が検出され、舶載内行花文鏡片1点、素環頭を含む刀子や鉄鏃、鈍等39点の鉄製品などの豊富な副葬遺物を有していた。構造的にも、大部分が削出しの枕を付設し、ベンガラを多用するなど、優位にある集団を想定できた。

青銅器としては、古く大平村東下で出土したという中広銅矛1点の他は、先の穴ヶ葉山遺跡の鏡片、この金居塚遺跡出土の細型銅剣片が知られる。

### 古墳時代

従来、広く築上郡内で前・中期の古墳あるいは前方後円墳は全く知られていなかったが、この金居塚遺跡の調査中に隣接する西方古墳（前方後円墳）、次いで平成5年にはその北500mの段丘肩で偶然に能満寺古墳群<sup>227</sup>が発見・調査された。能満寺古墳群は1号墳（円墳、木棺）、2号墳（方墳、石蓋土壙墓）、3号墳（前方後円墳、竪穴式石室？）が調査され、2号墳から完形のいわゆる弥生時代小型仿製鏡・鉄剣・玉が、3号墳から舶載夔鳳鏡片・同四獣鏡が出土するなど、内容的にも特筆されるものである。これらに次ぐ5世紀を前後する遺跡として、山国川右岸の段丘縁に勘助野地遺跡<sup>228</sup>や幣旗邸古墳群<sup>229</sup>などの方墳があり、5世紀中葉頃には永添遺跡<sup>230</sup>の造出しを有する円墳が続く。山国川左岸では5世紀代の有力な古墳は、中葉前後の前方後円墳と推定される楡生山古墳<sup>231</sup>以外にまだ未発見であるが、後期には再びこの段丘肩付近に大型古墳が占地する。本編に紹介する金居塚古墳群や穴ヶ葉山古墳<sup>232</sup>などである。穴ヶ葉山古墳は葉・鳥などの線刻を有する国指定史跡の円墳であり、近年環境整備に先立つ調査が実施され、多量の土器が出土し、大規模な墳丘の様子が明らかとなった。これ以外にも、旧上毛郡西端の豊前市黒部古墳群<sup>233</sup>、新吉富村山田古墳<sup>234</sup>などの線刻壁画古墳が知られる。また、横穴としては豊前市平原横穴墓群<sup>235</sup>や大平村百留横穴墓群<sup>236</sup>が、凝灰岩に彫り込まれた精美な姿を有して知られる。また、学史的にも重要な遺跡となった大分県三光村上ノ原横穴墓群<sup>237</sup>は、山国川を挟んでこの金居塚遺跡とちょうど対峙する位置にあり、段丘の法面に掘り込むという同様なあり方をしている。

古墳時代の集落は、前期に属するものは弥生後期以来の集落と連続性がある。中期に属するものはまだ例が乏しく、新吉富村宇野・垂水地区で発見されるのみである。後期の集落は、上唐原遺跡<sup>238</sup>・佐知遺跡・小石原泉遺跡等前代以来の場所に占地する例や、豊前市荒畑中ノ原遺跡のように内陸部の低丘陵上に位置するものなどがある。豊前市域の低丘陵は開墾が進んで遺跡の遺存が悪いため、特異な状況を示すものか、まだ今後の資料の蓄積が必要である。

生産遺跡としては新吉富村山田<sup>註37</sup>・照日窯跡群<sup>註38</sup>が6世紀中葉頃から須恵器の生産を開始する。

### 歴史時代

『和名抄』ではこの地域を「上毛（加牟津美介）郡」と記した。また、『釋日本紀』卷十三には筑紫君磐井の最後について『筑後国風土記』をひき、「豊前国上膳縣」と記す。同時代の記録としては、文武天皇2（698）年に鑄造され筑前観世音寺梵鐘の口縁下端に「上三毛」の線刻が、また、大宝2（702）年戸籍断簡に「豊前国上三毛郡塔里」、同「加自久也里」とあり、上膳から上三毛、そして上毛へと転訛したことが窺える。先の戸籍などから秦氏が広く豊前地方に進出していたことが指摘されているが、考古学的にそれを傍証する資料は乏しい。中で注目されているのは古代寺院に使用された瓦である。豊前では旧京都・仲津・上毛・下毛・宇佐の各郡で古代寺院の存在が確認されているが、屋瓦は大宰府系と呼ばれるものの他に高句麗系・新羅系・百濟系といった多様なものが出土し、渡来系工人の活躍を想定できる。

上毛郡では新吉富村垂水廃寺<sup>註41</sup>が古くから知られ、確認調査もなされたが、伽藍配置や規模などはまだ判然としていない。供給した窯跡は、大平村に所在する国指定史跡友枝瓦窯跡<sup>註42</sup>、新吉富村桑野窯跡<sup>註43</sup>・同山田窯跡<sup>註44</sup>などが知られ、一部は調査を実施している。また、牛頭天王遺跡で礎石列が存在したといい、須恵器と同様な製作手法などを有する特異な瓦が採集されており、古代の重要な遺跡が存在した可能性が高い。この瓦は、中津市伊藤田窯跡群から供給されたといい、6世紀末から7世紀初頭を下らない時期に比定される<sup>註45</sup>。

また、平成6年には従来から推定されていた付近で古代官道と思われる遺構が確認<sup>註46</sup>され、7年には新吉富村大字大ノ瀬の微高地で、官道推定線に隣接して郡衙かと思われる遺跡も発見<sup>註47</sup>されており、この地域が上毛郡の中心地であった可能性も強まった。

古代末期以来、豊前一円に宇佐八幡宮の荘園が成立する。また、鎌倉時代には関東下り衆宇都宮氏が仲津郡木井郷に入り、やがて豊前一带に一族を配することとなる。それと前後する中世居館跡の発見・調査も近年相次いでいる<sup>註48</sup>。中でも、大平村庁舎改築工事で発見された「林崎城」と伝承される遺跡は、従来宇都宮氏との関係で語られることが多かった地域にあって、平安後期に遡ることが判明した点でより重要である。

註 1 千田 昇他「山国川流域の地形」（『山国川—自然・社会・教育—』 大分大学教育学部、1989）

註 2 小池 史哲「旧石器時代」（『豊前市史 考古資料』、1995）

註 3 大平村教育委員会「原井三ツ江遺跡」（『大平村文化財調査報告書』第5集、1989）

註 4 福岡県教育委員会「上唐原遺跡 II」（『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1996）

註 5 大分県教育委員会「佐知遺跡」（『大分県文化財調査報告書』第81輯、1989）

註 6 大平村教育委員会「土佐井遺跡群」（『大平村文化財調査報告書』第6集、1990）

註 7 渡辺正気「福岡県築上郡新吉富村垂水遺跡調査報告」（『古文化談叢』第11集、1983）

註 8 團場整備事業に先立ち、1994～95年にかけて豊前市教育委員会が調査。

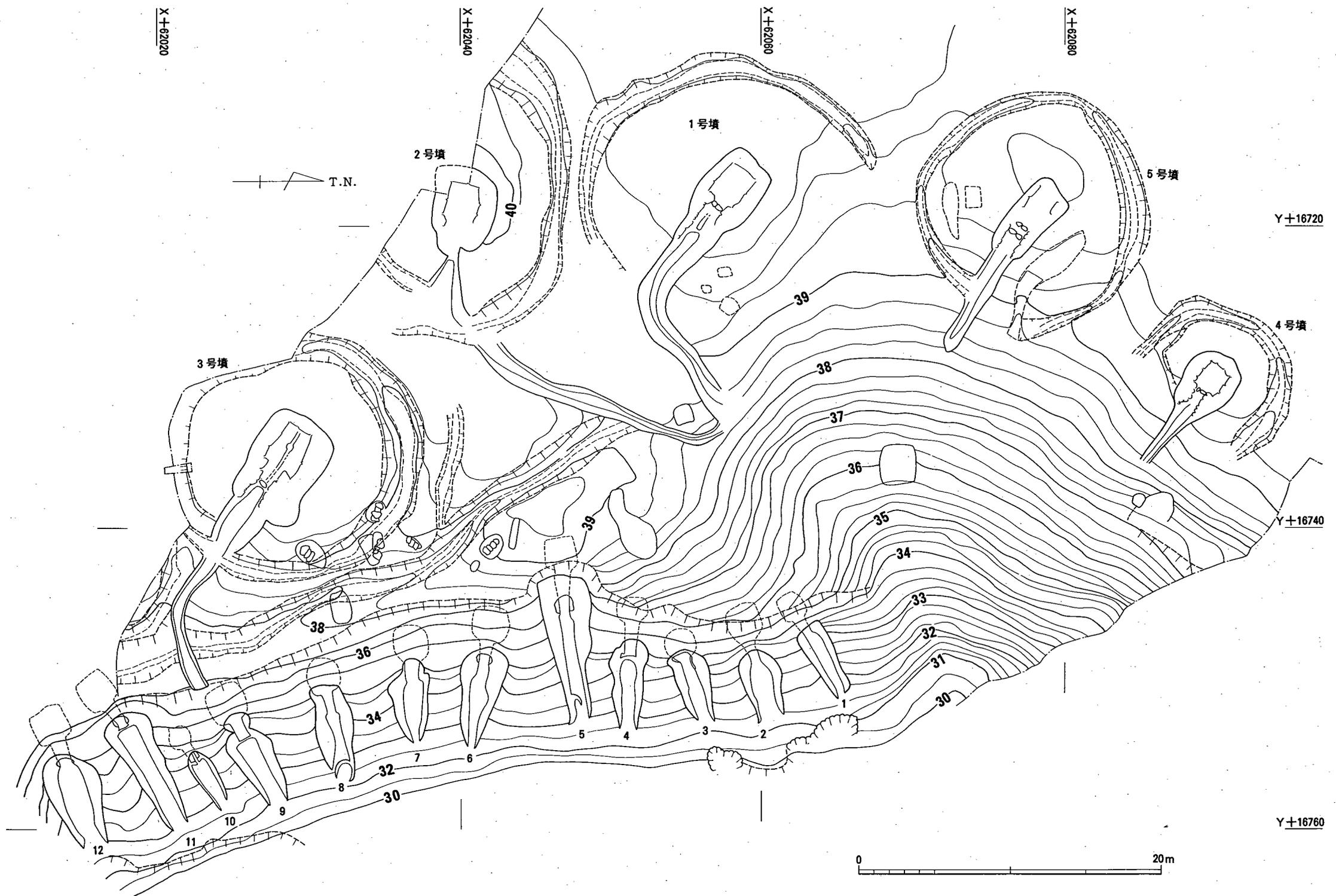
註 9 小池 史哲「小石原泉遺跡」（『豊前市史 考古資料』、1993）

註 10 福岡県教育委員会「中村石丸遺跡」（『一般国道10号線推田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1996）

- 註 11 福岡県教育委員会「山崎遺跡」(『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』-7-、1992)
- 註 12 椎田町教育委員会「石町遺跡」(『椎田町文化財調査報告書』第1集、1988)
- 註 13 築城町教育委員会「城井谷Ⅰ」(『築城町文化財調査報告書』第2集、1992)
- 註 14 豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」(『豊津町文化財調査報告書』第9集、1992)
- 註 15 福岡県教育委員会「吉木遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第83集、1989)  
小池 史哲「吉木常松遺跡」(『豊前市史 考古資料』、1993)
- 註 16 椎田町教育委員会「小原谷Ⅰ」(『椎田町文化財調査報告書』第4集、1992)
- 註 17 宮本 工・村上 久和・城戸 誠「山国川流域における縄文時代後・晩期の遺跡」(『九州考古学』59、1984)
- 註 18 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡・垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集、1994)  
新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第3集、1978)
- 註 19 平成2～3年度にかけて、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査。
- 註 20 平成3年度に、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査。
- 註 21 武末 純一「昭和町遺跡」(『豊前市史 考古資料』、1993)
- 註 22 福岡県教育委員会「上唐原遺跡Ⅰ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1995)
- 註 23 平成元年度、豊前バイパス建設に伴い、福岡県教育委員会が発掘調査。
- 註 24 平成4～6年度にかけて、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査。
- 註 25 平成5～7年度にかけて、豊前東部工業用地造成に伴い、市教委が発掘調査。
- 註 26 大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第8集、1993)
- 註 27 大平村教育委員会「能満寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第9集、1994)
- 註 28 大分県教育委員会「勘助野地遺跡」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告(1)』、1988)
- 註 29 中津市教育委員会「幣旗邸古墳」(『中津市文化財調査報告書』第4集、1984)
- 註 30 中津市教育委員会「永添遺跡 中津城跡(御用屋敷跡) ホヤ池窯跡」(『中津市文化財調査報告書』第13集、1993)
- 註 31 吉富町教育委員会「楡生山古墳」(『吉富町文化財調査報告書』第3集、1991)
- 註 32 大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第3集、1985)
- 註 33 玄洋開発株式会社「黒部古墳群」、1979
- 註 34 北代 茂ほか「山田古墳」(『新吉富村誌』、1990)
- 註 35 丹羽 博「平原横穴墓群」(『豊前市史 考古資料』、1993)
- 註 36 宮本 工「先史・原始時代」(『大平村誌』、1986)
- 註 37 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ～Ⅲ」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告(2)～(4)』、1989～91)
- 註 38 豊前市教育委員会「県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告-Ⅲ-」(『豊前市文化財調査報告書』第7集、1991)
- 註 39 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第2集、1976)
- 註 40 新吉富村教育委員会「照日遺跡群」(『新吉富村文化財調査報告書』第9集、1995)
- 註 41 新吉富村教育委員会「垂水廃寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第2集、1976)
- 註 42 大平村教育委員会「友枝瓦窯跡」、1976  
大平村教育委員会「友枝遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第4集、1988)
- 註 43 森田 勉「垂水廃寺」・「友枝瓦窯跡」・「山田窯跡」(『九州古瓦図録』九州歴史資料館編、1981)に触れている。
- 註 44 前掲註40・43
- 註 45 村上 久和・吉田 寛・宮本 工「豊前における初期瓦の一樣相-大分県中津市伊藤田窯跡群で生産された初期瓦-」(『古文化談叢』第18集、1987)
- 註 46 平成6年、新吉富村大字垂水で、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が調査。
- 註 47 平成7年、圃場整備事業に伴い新吉富村が発掘調査、保存の方向で検討中。
- 註 48 大平村今蔵遺跡、豊前市小石原泉遺跡、同三毛門放生田遺跡、椎田町西八田堂の本遺跡等がある。  
大平村教育委員会「恵良古墳群・今蔵遺跡・縄手遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第10集、1996年度刊行予定)  
福岡県教育委員会「三毛門放生田遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第121集、1995)  
平成6年、椎田町教育委員会が国営農地再編パイロット事業に伴い発掘調査。



第4图 周边地形图 (1/2,000)



第5図 古墳・横穴群配置図 (1/300)

### Ⅲ 遺構と遺物

前にも記したように、この遺跡では旧石器時代に属する資料をはじめとする多種多様な遺構・遺物が出土したために、報告にあたって2分冊に分けて行うこととした。

遺構の分布は段丘の縁近くに古墳・近世墓が集中し、その古墳下層に旧石器・縄文時代の遺構・遺物が包蔵され、段丘法面に横穴が掘り込まれる等、調査区東端付近が遺跡の中心をなす。そして、調査区中央付近を横断する村道東で落とし穴状土坑や弥生時代（石蓋）土壙墓群を集中して検出、その西で落とし穴状土坑や掘立柱建物跡、近世の溝を調査した。また、炭が入り、壁が焼けて赤変硬化した焼土坑を調査区内で広く検出した。

今回の調査で検出した主要な遺構は以下の通り。

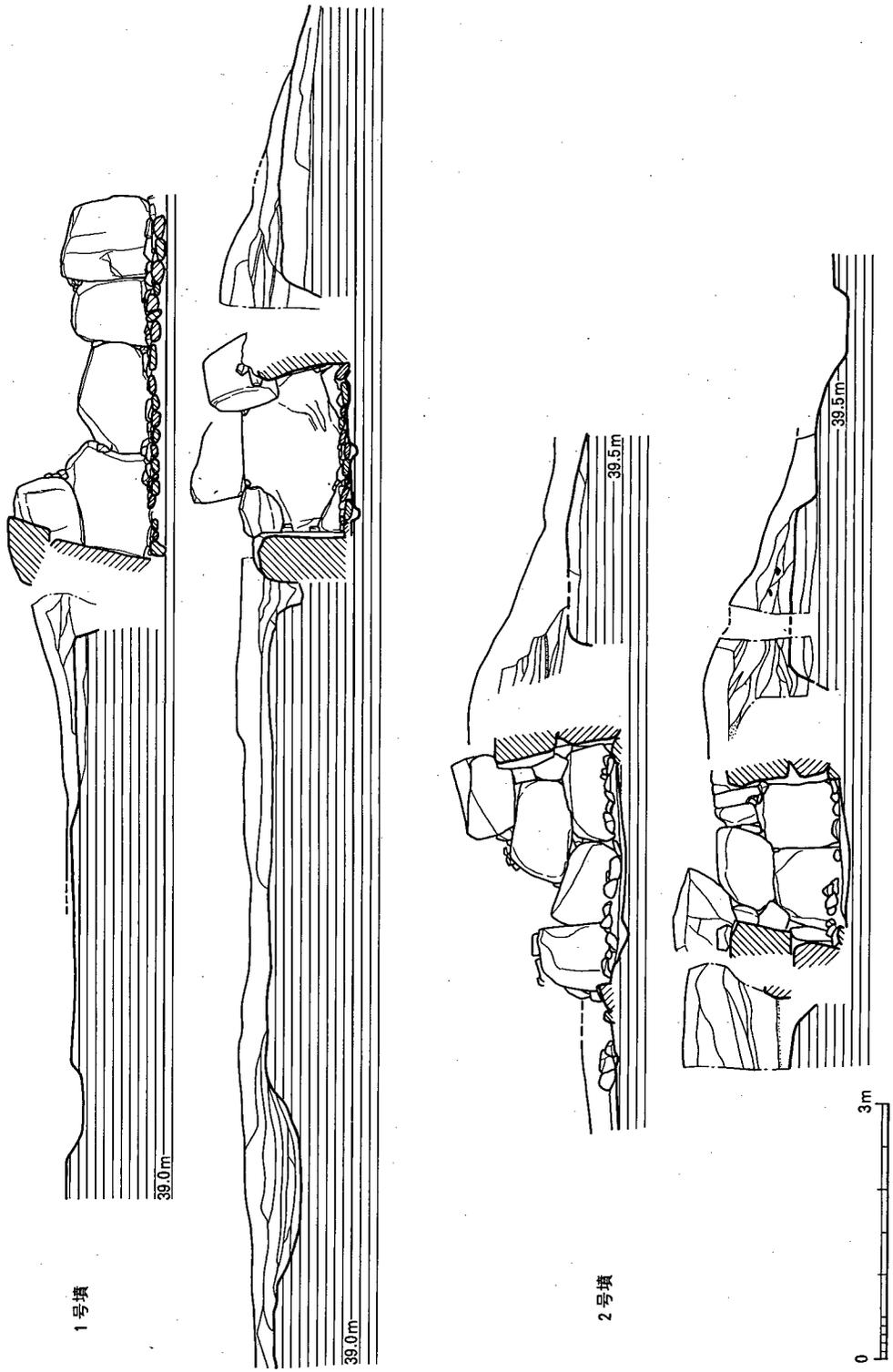
石組炉	1基
竪穴式住居跡	1軒
掘立柱建物跡	2棟
古墳	5基
横穴	12基
(石蓋)土壙墓	25基
(焼)土坑	約40基
近世墓	約186基
溝状遺構	約10条

本書では古墳・横穴について報告する。残余は次年度に報告する予定である。

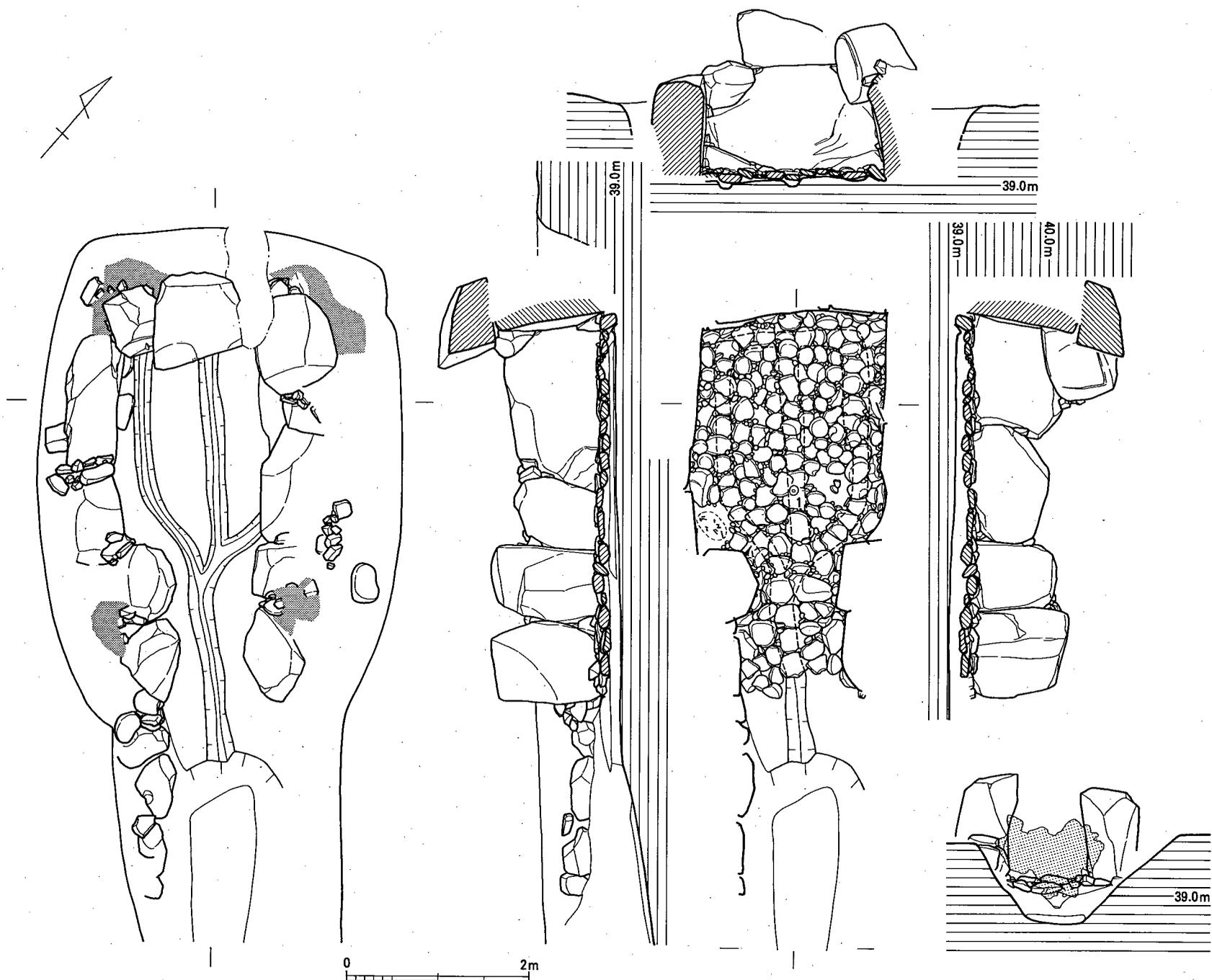
#### 1. 古墳

5基の古墳の発掘を行い、その南の路線外にある11基の古墳および、北方で発見した前方後円墳（西方古墳）について地形測量を行った。路線外の古墳については項を改めて記す。

古墳の中、3号墳は整った墳丘を既に見せていた。1号墳は石材と古墳らしいわずかな高まりを残し、2号墳は栗畑で墳丘のほぼ半分を削平されながらもそれと判る形状を有していた。しかし、4・5号墳は現状では全くその存在を把握できないほどに封土を失い、表土掘削してはじめて確認したために遺構番号が前後した。また、現況地形の測量も行っていない。なお、遺構番号はそのままにして記述を進める。



第6图 1·2号墳丘土層実測図 (1/80)



第7图 1号墳主体部実测图 (1/60)

## 1) 1号墳

発掘調査を行った5基の中、中央に位置する古墳である。地形を細かくみると、この古墳の北東部に小規模な谷状地形が入り込んでおり、その肩に立地する。4・5号墳を現状で認知できなかったために、小規模な墳丘を有し、石材が露出していたこの古墳を1号墳と呼称したもので、本報告においてもそのまま踏襲する。

### 墳丘（図版1～3、第5・6・100図）

径9～12mの範囲で、最高0.5mの高まりが残存し、そこに石室の石材が露出していた。盛土は灰黒色のいわゆる旧地表上になされ、表土まで含めたところで最高0.7mが残る。

周溝は内径17m余の円形に、幅1～2m、深さ0.4mほどの規模で巡るが、谷にかかる部分が掘削されず、完周せずに終わる。周溝から推測される墳丘規模は後述する3号墳を上回っており、石室規模も同程度であることから相当な破壊がなされたことが推測される。

### 墓道（図版5・6、第8図）

羨道部から約5mの間は主体部の延長線上に延び、そこからほぼ直角に折れて約10m続いて谷部に向かって開く。

羨道部の敷石が途切れる付近から約1m前面で、約0.3mの段差が認められ、排水溝もそこで途切れる。また、袖石の切れる付近の埋土中、床面から0.4m浮いた位置で礫とともに多数の土器を検出している。

### 閉塞（図版5、第8図）

閉塞は基底部にのみ比較的大型の石材を置き、以上に径30cm前後の川原石を積み上げて構成される。多くが墓道側に崩れ落ちるが、最下段の石材の状況からみて、本来は柵石のすぐ前面から、羨道部前端までなされていたようである。閉塞石の規模はおよそ長さ1.1m、高さ0.7m以上である。

### 主体部（図版3・4、第7図）

単室の横穴式石室で、壁体はほぼ腰石を残すのみであるが、床面はよく遺存する。

玄室は幅2～2.2m、長さ約2.6mの整った長方形プランで、腰石は直立ないしは若干内傾して据えられる。巨石の間隙には小礫を詰めるが、さらに粘土で目張りがなされたようである。袖石の最小幅は0.9mで、長さは約0.8m、羨道部は左右ともに各1つの石材で構成され、幅約



第8図 1号墳閉塞状態・墓道遺物出土状態実測図 (1/40)

1.1m、長さも約1mの小規模なものである。その前面に貼石を施すが、右側のそれはすでに抜き取られ、左側は約2mの長さにわたって、羨道部腰石の延長線上にはほぼ1段が残る。

床面は、径20~30cmの川原石を敷き詰め、その上に径数cmの小石を敷いたようである。敷石の範囲は袖石間に置かれた柵石を挟んで、羨道部まで同様に施される。敷石下には、幅約20cm、深さ10cmに満たない小溝（暗渠）が石室中軸線上と奥壁および左右腰石下に掘り込まれており、それが一本となって墓道へ通じる。この小溝の先端で墓道に約20cmの段が付されている。

遺物（図版5・6、第8図）

石室内から主として玉類や鉄製品等が若干出土したが、土器のほとんどが墓道埋土中、床面からかなり浮いた部分に集中していた。原位置とは思えないものの、完形に近い土器も数点存在することから一概に破壊時に遺棄されたとも考えがたい状況であった。

玉類（図版53、第9図）

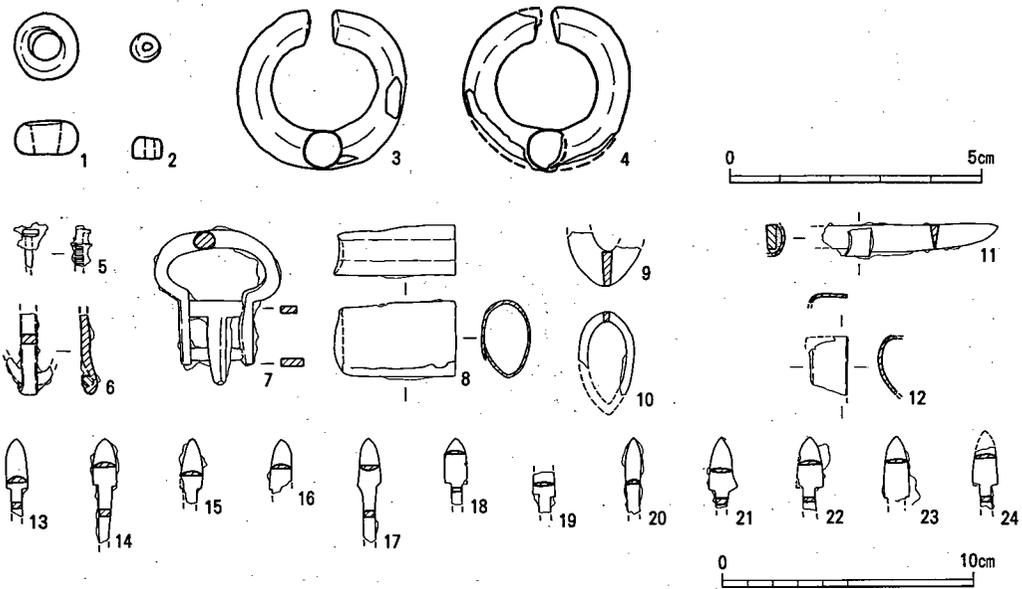
ガラス玉を図示した。1は黄味帯びる白色、2はくすんだ青色を呈する。

金属器（図版53、第9図）

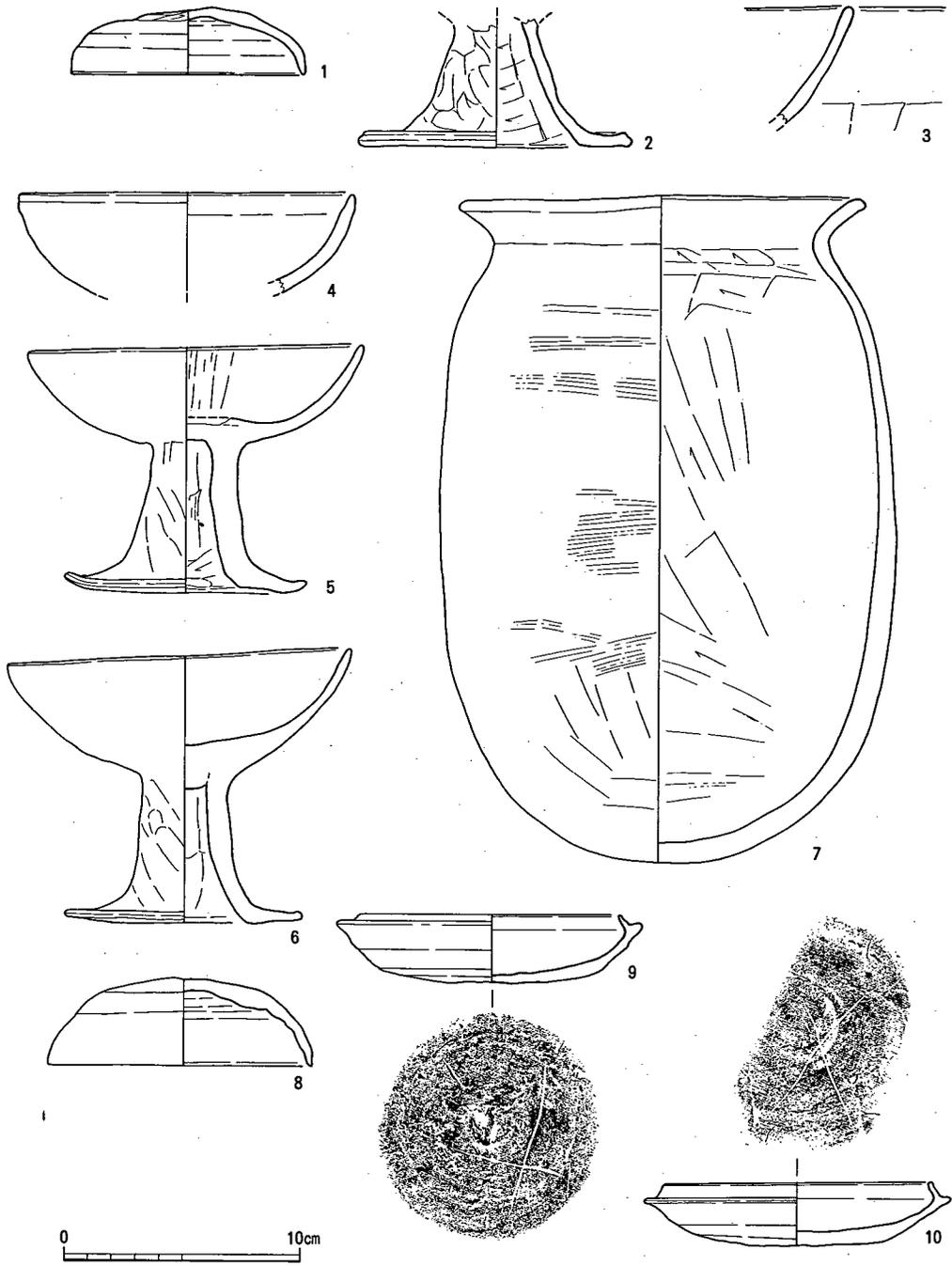
3は閉塞石中から出土したようである。全体に黒ずむが表面の残りはよく、一部に金が見える。重量感がある。4は出土地の記録を失念している。3に似るが、器表が荒れる。

石室実測図に書かれた遺物の一部は所在が不明であり、確認できたものを記す。

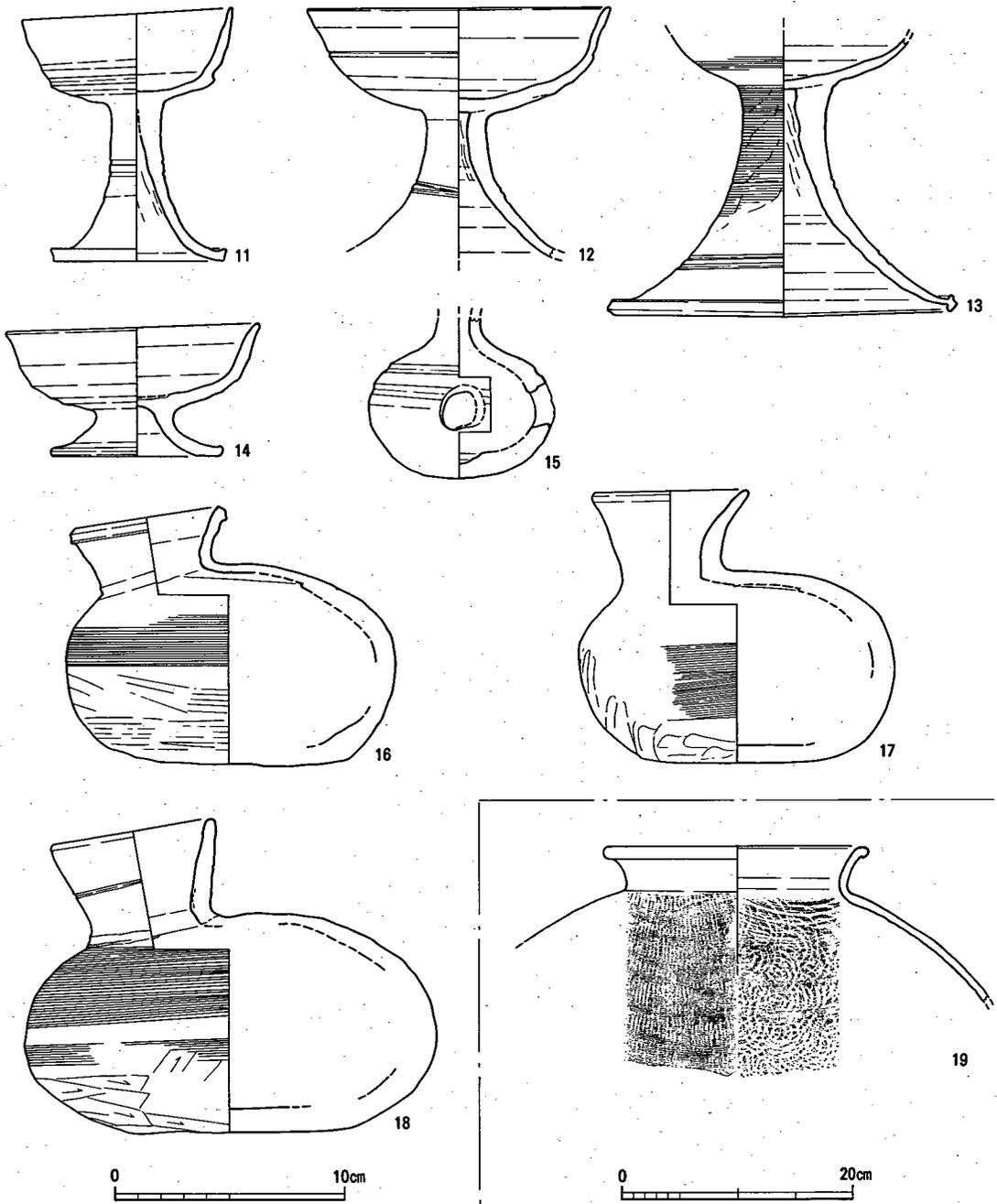
5は石室内右奥出土の釘。約1.5cmが残存し、頭部が曲がる。断面は長方形である。6は石室内出土の鉸具と思われるもの。7は墓道土器群中から出土したもの。8は石室左奥出土の鞘



第9図 1号墳出土玉類・鉄製品実測図（1/1、1/3）



第10图 1号墳出土土器実測図1 (1/3)



第11图 1号墳出土土器实测图2 (1/3、1/6)

屍金具で、鉄板を巻いて作った痕跡がよく見える。9は石室右奥敷石上出土の鉄製鐙、10は石室内出土の鉄製貴金具の残片。11は玄室内左手前の敷石上出土。縁金具が残る。12も太刀あるいは刀子の金具であろう。

13~20は石室左前隅からまとまって出土した。20は関がはっきりしないが、他はいずれも柳葉形片平造りである。21~24は石室内右奥出土。

#### 土器（図版53~55、第10~12図）

1は石室内から出土し、ほぼ完存する。調整は丁寧で、天井部も丁寧に篋切りし、そのままである。2・3は閉塞石中出土。2は約1/2が残る土師器高杯片で、脚部の指撫で痕が顕著。3は瓦器碗の小片。口縁部付近が白く、他は灰黒色となる。器表は風化が著しい。

4以下は墓道から出土したものである。8・11・13がやや離れて出土したほかはすべて集中していた。

4~7は土師器。4は杯部の小片で、約1/4弱が残る。赤褐色を呈し、造りは全体によい。5はほぼ完形。器表が荒れるが、内面にかすかに放射状の暗文が観察できる。6は杯部の半分を欠くが、それ以外はよく残る。これも器表は荒れる。7は口縁部の約1/2を欠く他はよく残存する。体部外面は回転台を使用してカキ目を施し、底部付近はその後に篋削りを行う。内面は全体に雑な篋削りで仕上げる。なお、体部内面中位に黒色の付着物が見える。

8は生焼けで、灰黄色に近い。口端部のほとんどを欠き、それ以外は完存に近いが、器表もほとんど磨滅する。9・10は同様な篋記号が内外に記されるよく似た土器で、9は完存、10は口縁部の約1/2を欠く。9の外底面は篋削りの後で撫でている。

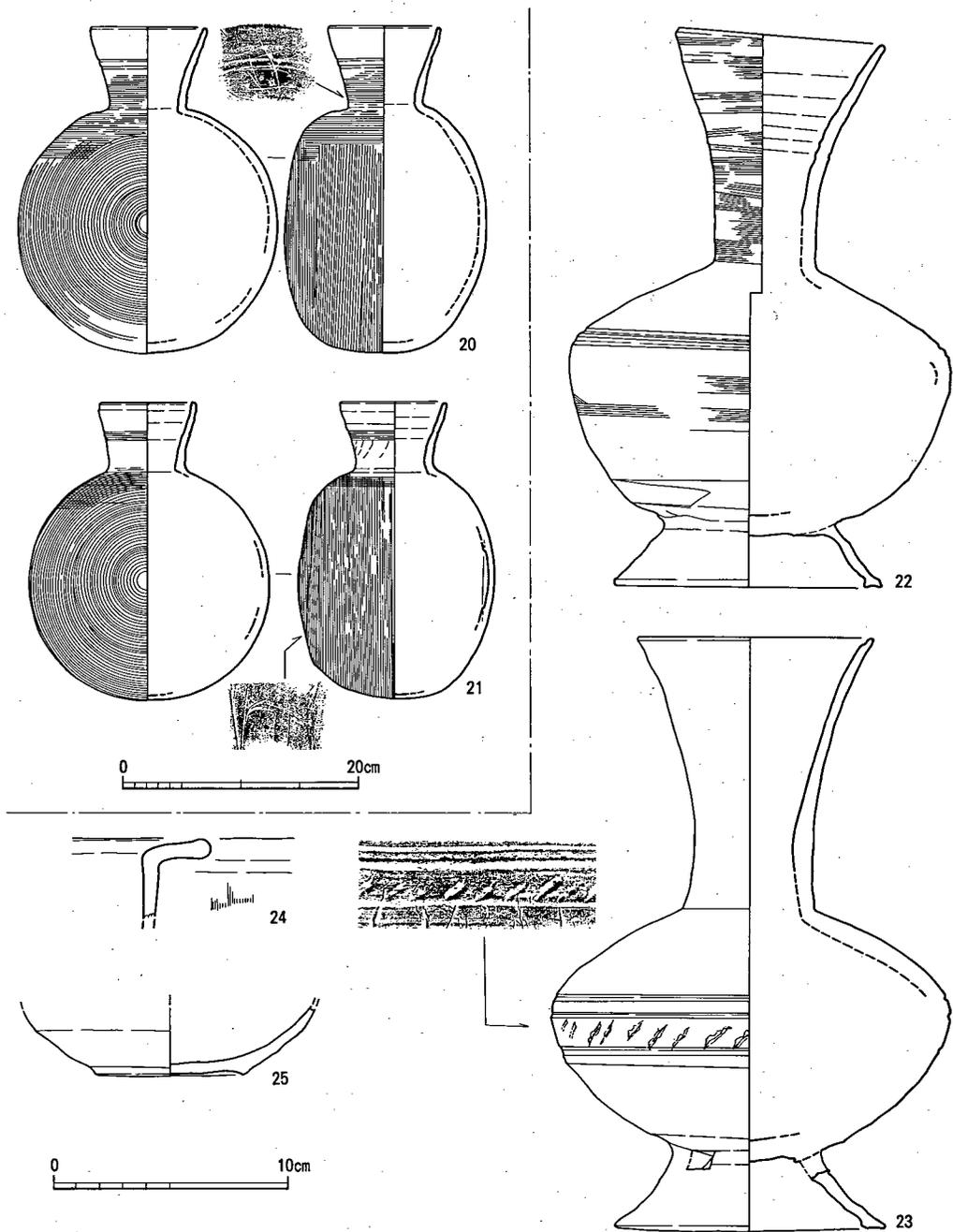
11はほぼ完存。非常に焼きがよく、灰が飛んでいる。杯部外底面は篋削りの後に横撫でを施す。12は器肉が灰赤褐色となる焼成の甘いもので、杯部・脚部に刻まれた沈線も甘い。杯部外底面は篋削りのままである。13は図示部分が完存。カキ目調整が著しく、全体に丁寧。14は短脚で、一部が残るのみの杯部とほぼ完存する脚部は接合不可であるが図上復原を行った。造作は丁寧。

15は図示部分が完存するが、酸化炎で土師質に焼き上がっており器表は磨滅し、細部は不明。2条の沈線が刻まれるようである。

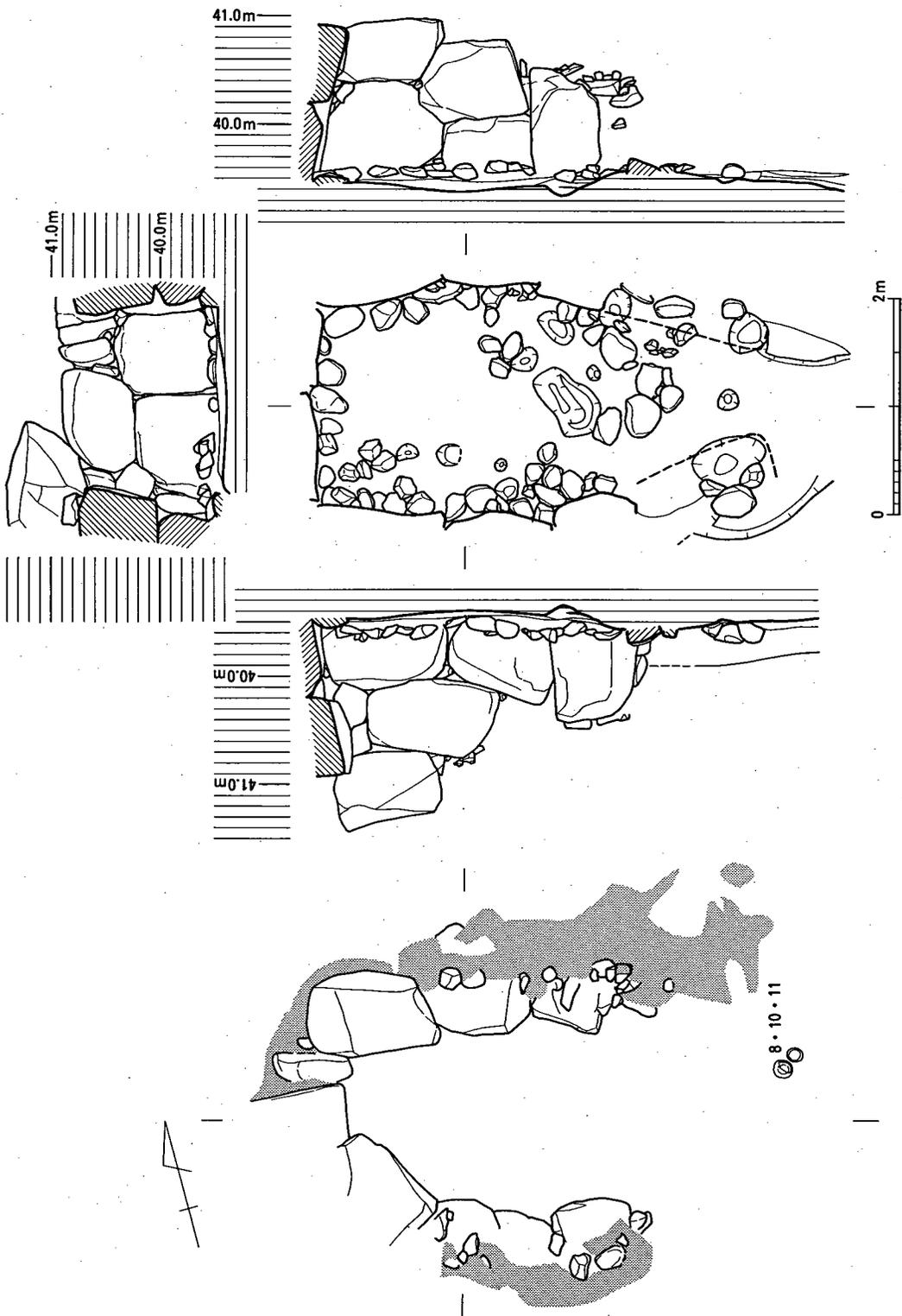
16は口縁部の一部を欠くのみ。体部最大径付近で原体を替えてカキ目を施し、底部付近は篋削りで仕上げる。なお、外底面には蕈状の圧痕が著しい。17も口縁部の約1/3を欠く他はほぼ完存する。体部下半を不定方向の篋削りで仕上げる。18の体部下半も同様な調整を行う。頸部中位の沈線は甘い。

19も図示部分は完周する。20・21は全体が判る提瓶。いずれも体部の全体をカキ目で仕上げ、頸部中位に非常に甘い沈線を2条付す。20には篋記号と思われる刻線がある。

21は口頸部・脚部のほぼ半分を欠く。体部の文様体は上下をシャープな沈線2条、甘い沈線



第12图 1号墳出土土器実測図3 (1/6、1/3)



第13图 2号墳主体部実測図 (1/60)

1条で画し、櫛状工具の刺突を行う。脚部の方形孔は不均等に3孔穿たれる。なお、体部下半は篋削りの後に横撫でを加えて仕上げる。22はほぼ完存。焼成時の高温によって口縁部・脚部がかなり歪んでいる。

23は墓道出土の弥生土器小片。24は墓道下層から出土した瓦器碗である。図示部分はほぼ完周し、攪乱の時期を示す。

## 2) 2号墳

1号墳の南に位置し、墳丘のほぼ半分が調査区外へ続く。墳丘の大部分はすでに失われており、かつ墳丘や墓道に近世墓が多数造営されていて調査は難渋した。出土状態は決して良好ではなかったが、豊富な副葬遺物はこの古墳群の性格を判断する上で貴重なものである。

### 墳丘 (図版1・2・7、第5・6・100図)

大部分がすでに失われる。石室背面(西側)では奥壁基底部から約1.7mまで、表土を含む高さ1mの規模の封土が残存するが、全体に地山成形面ははっきりしない。北トレンチの土層観察では、石室中心から4.1mの地点で約0.3mの高さの地山成形がなされ、その範囲に盛土がなされる。さらに1.2mの犬走り状の平坦面、そして幅1.2m、深さ0.3mの周溝へと続く。石室中心から周溝内径までの規模(墳丘半径)は約5.4mとなる。

南トレンチは墳丘の裾まで及ばないが、ここでは左側壁の腰石上面に対応する盛土ラインに薄い粘土層が、そして2段目の石材上面に対応する層にやはり薄い風化花崗岩の粉末化した層がそれぞれ挿入されているのが確認された。二つの間層は非常に硬く締まっており、また下位の粘土層は西トレンチでも同じ位置で確認されていて、それぞれ石材の据え置きと盛土作業が連動してなされたことが推測される。

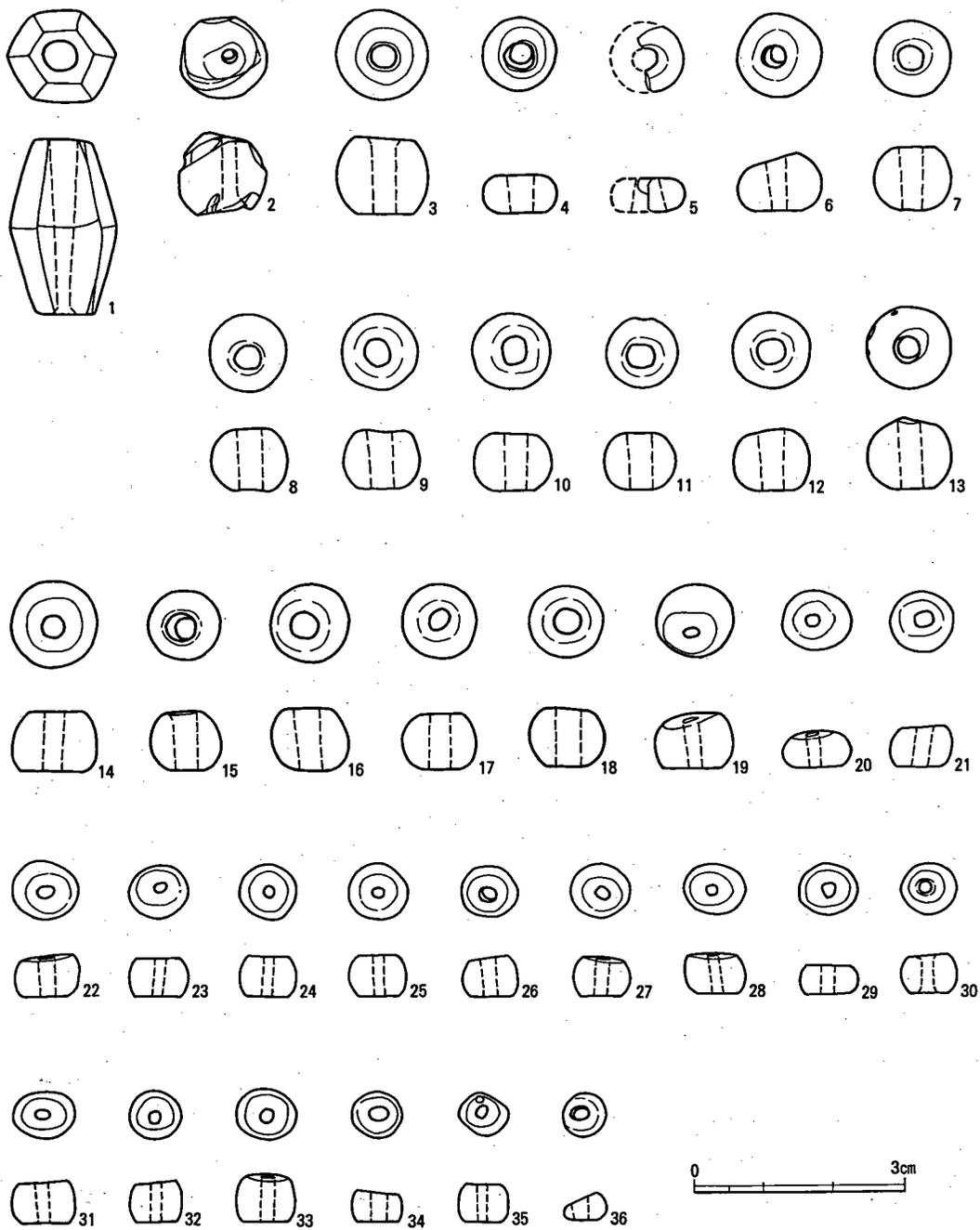
なお、以上のことから、墳丘は15mを超えない円形墳丘に、幅2mに満たない周溝を巡らせた円墳に復原できる。

### 墓道 (図版8)

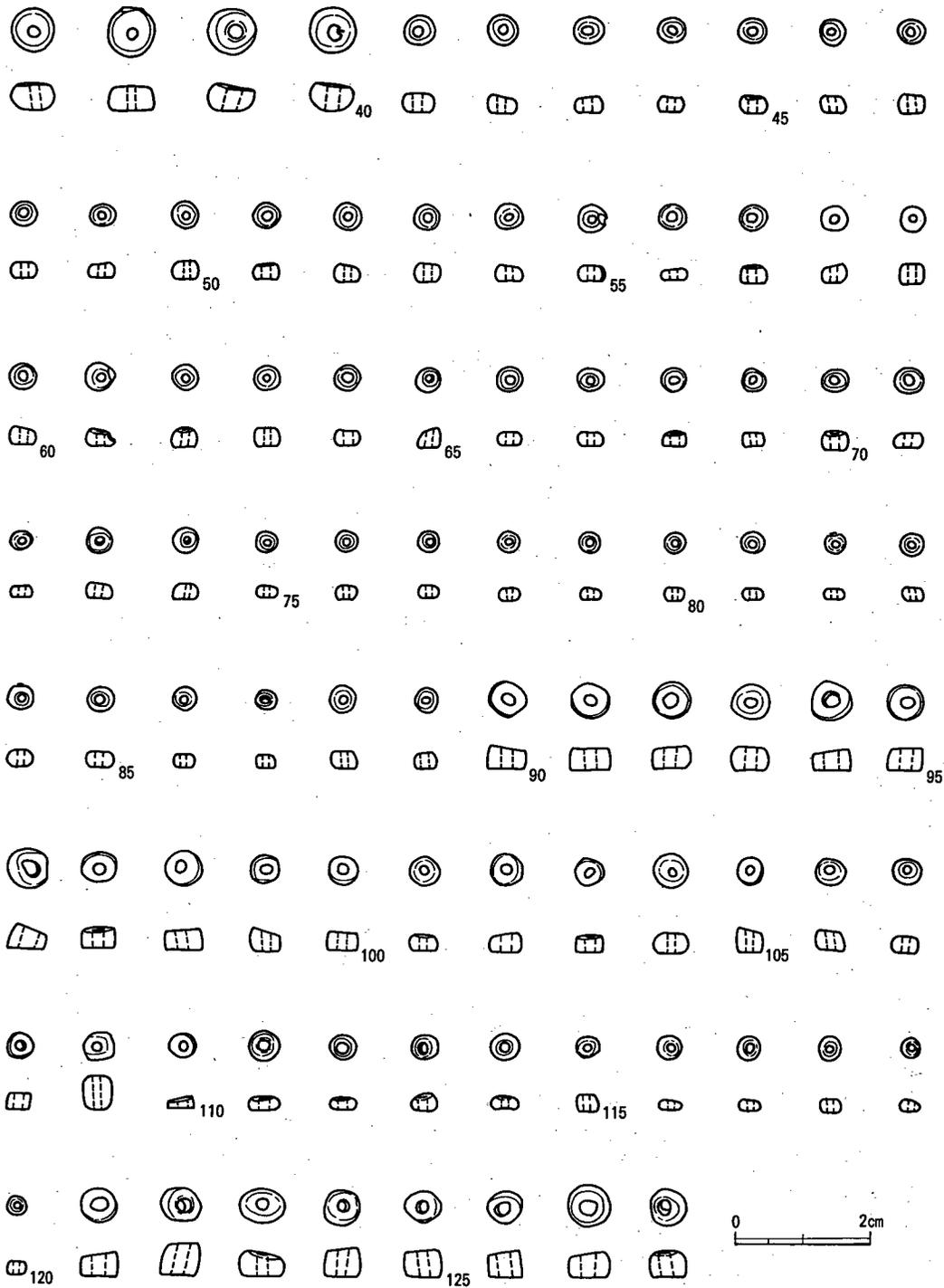
墓道は約24mの長さで、弧を描き、その始点は1号墳墓道の始点に接する。近世墓が密集しており、羨道に接続する部分あるいは周溝と切り合う部分などで発掘を上手にできなかった。

出土遺物取り上げのほとんどが「墓道攪乱中」との注記があり、後世の掘削を大きく受けていた。

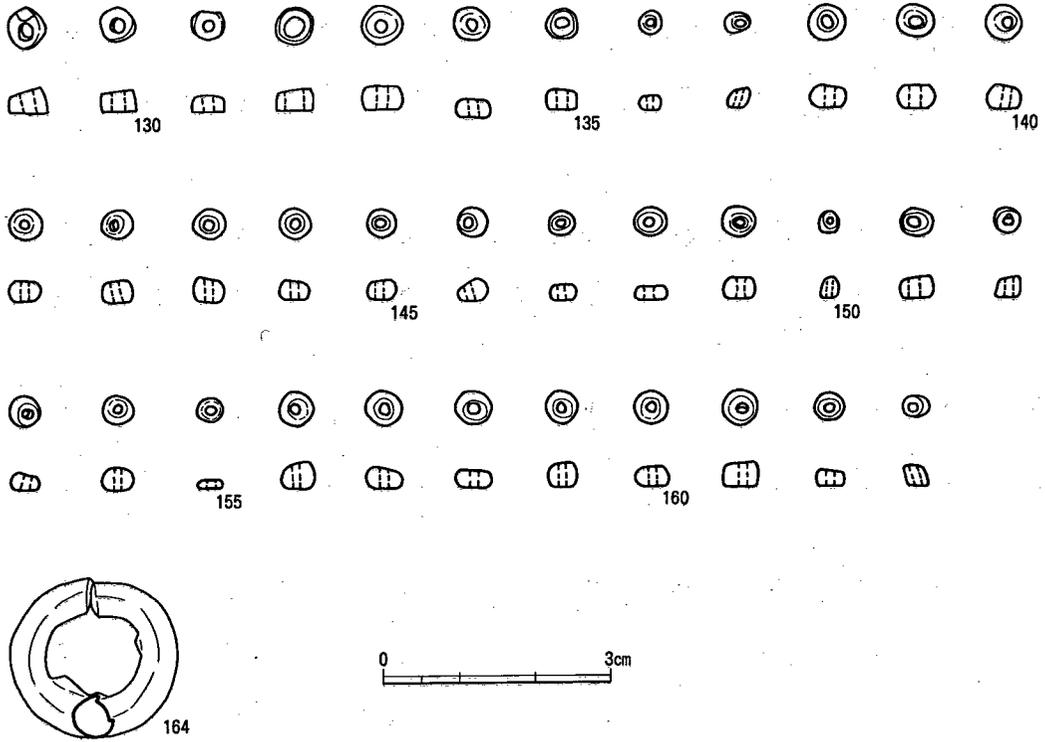
### 閉塞



第14图 2号墳出土玉類実測図1 (1/1)



第15图 2号墳出土玉器実測图2 (1/1)



第16図 2号墳出土玉類実測図3 (1/1)

ここも大きく破壊されており図化を要するような状態の石材は残存していなかった。

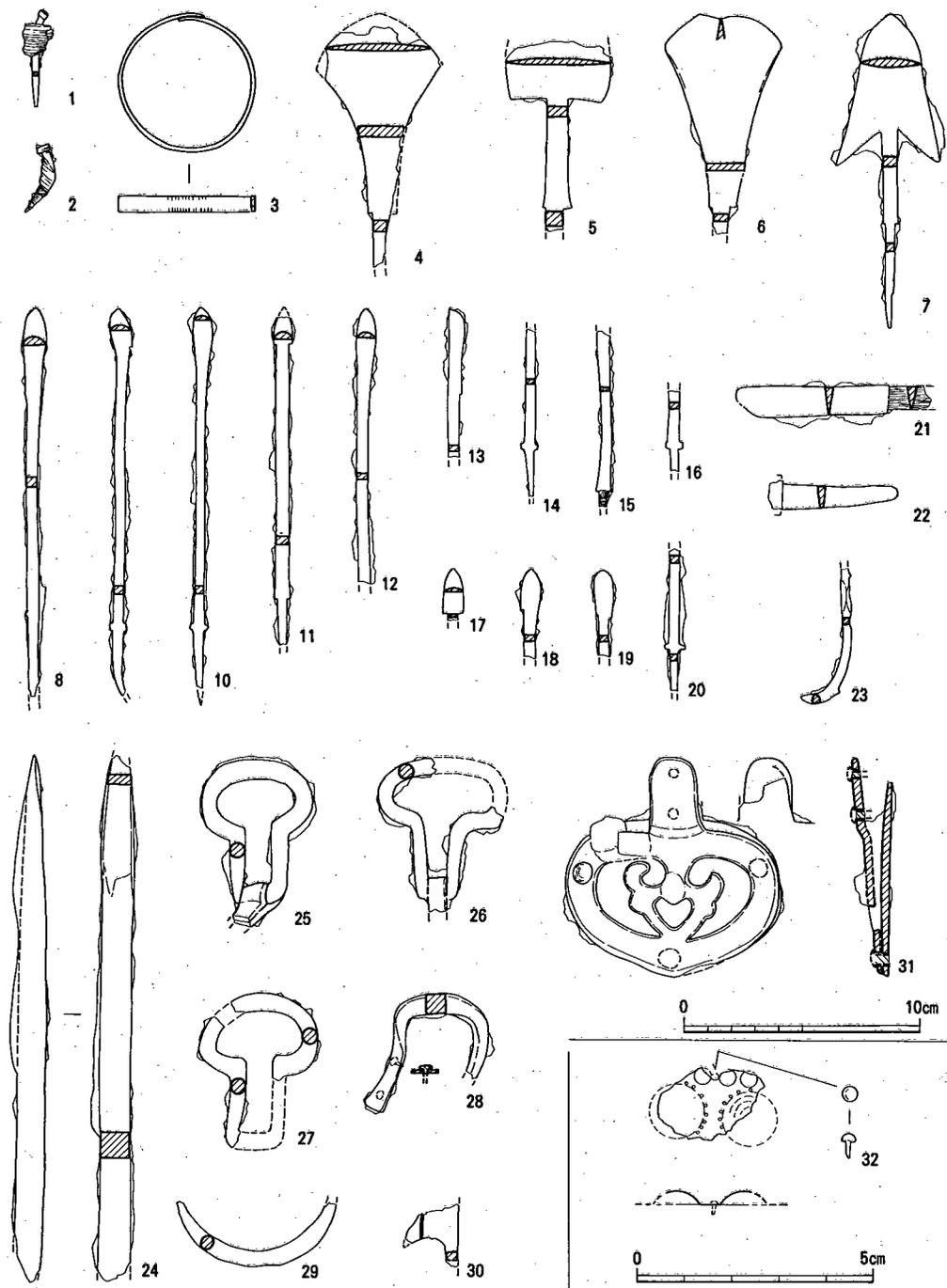
主体部 (図版7・8、第13図)

主体部は大破するが、単室の横穴式石室に復原できよう。玄室プランは、幅1.8~2.1m、長さ2m強のほぼ方形で、奥壁部分が最も狭い形となる。石材は奥壁、左右両側壁ともに比較的大型の石材を2個ずつ使用する。

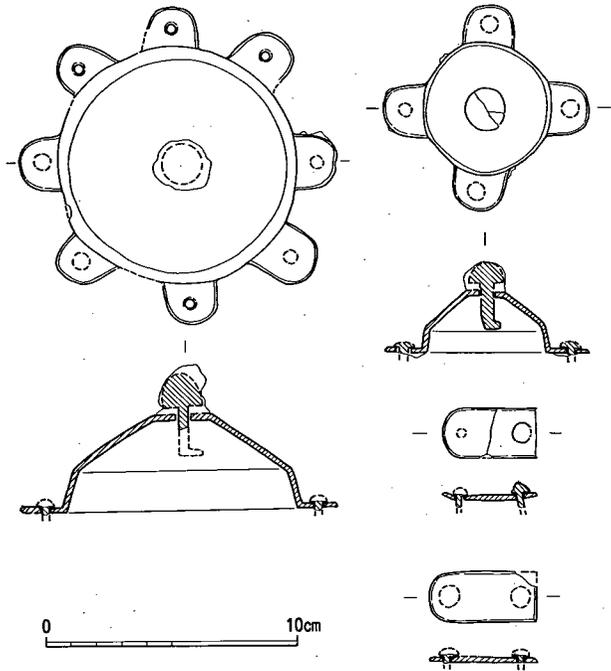
羨道部の石材は多くが抜き取られるが、小さく迫り出して配置される石材の使用法が玄室部分と異なっており、これを羨道玄門部と考えてよいと思われる。抜き取り痕から推測すると図のように前面に向かって急激に幅が狭まる形態が推測されるが、このような石室の類例を近辺で知らず、いささか不安がある。長さは2m余。

なお、残存する壁体の背面には多量の粘土が使用されていた。

敷石は径20~40cmの扁平な川原石を使用するが、これも大部分が失われ、あるいは原位置を保っておらず、床面も荒らされる。



第17图 2号墳出土鉄製品等実測图 1 (1/3、1/1)



第18図 2号墳出土鉄製品等実測図2 (1/3)

る。詳細は別表を参照。

#### 金属器 (図版55・56、第16~18図)

耳環が1点出土している。中実で金がよく残るが、めくれた部分では緑青が吹く。装飾品として、他に腕釧が石室左奥隅付近から出土している。幅7mm、厚さ2mmの銅板を円環としたもので、継ぎ目が明瞭である。外面の両端に鑿状の工具で細線を刻むが、不規則なものである。

第17図1・2は通有の釘で、頂部が折れ曲がり、身に木質が残る。身の断面形は長方形である。4~20は鉄鏃で、ほとんどが墓道攪乱中から出土するが、18~20は主体部南側の墳丘上で検出された。いわゆる平根式と尖根式がある。錆化の程度もあって、後者は関の形状がはっきりしないものが多く、篋被には棘篋被のものもある。

21は刀子であるが、身の部分にも刃が研ぎ出されているように見える。23は釣針であろうか。湾曲部の断面形状は三角形に近く、内側には逆刺がないが、外側の突起があるいは生きているかも知れない。

24は鑿であろう。両端を欠くが、残存長は22cm強。身の中程が一辺1cmの方形断面を呈し、刃部は片刃のようである。

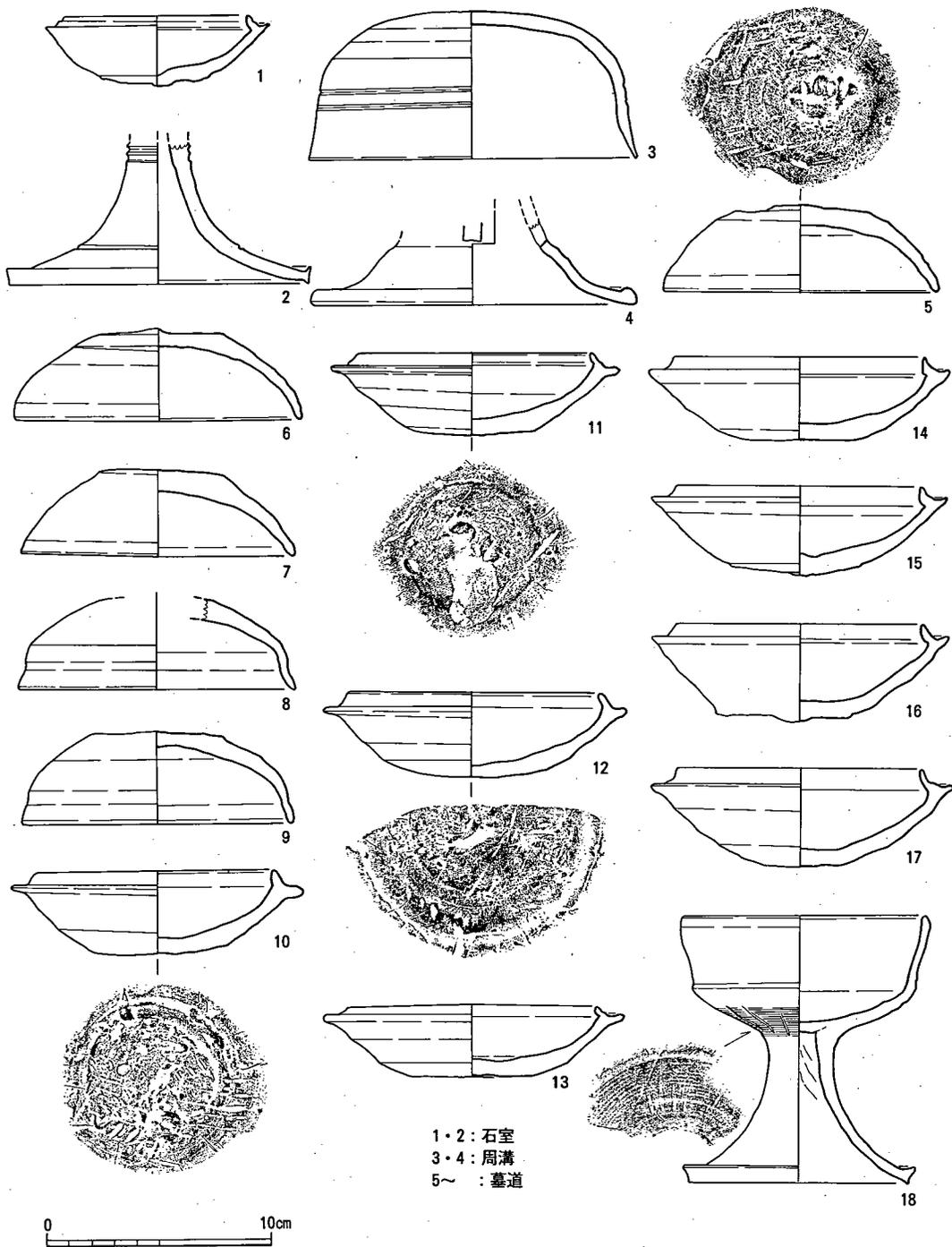
25~27は環の形状が若干異なるが、よく似た形の鉸具。断面形状は円形に近い。28は鍍金具

#### 遺物 (図版8・9)

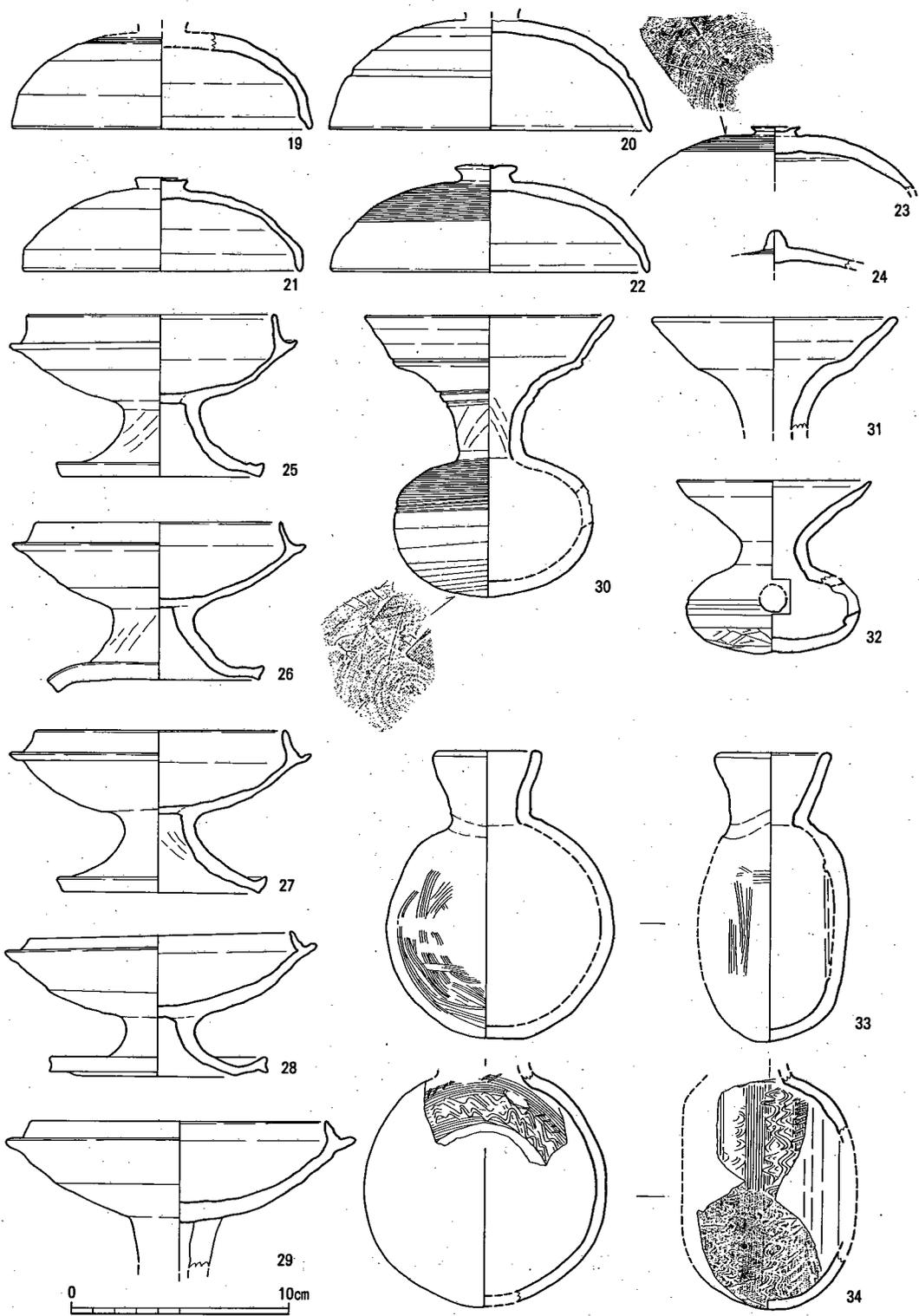
石室は大きく攪乱されているために原位置を知りえないが玄室右(奥)側埋土中から多くの玉類が、墓道から鉄製品や土器が出土している。土器や金属製品の多くは、墓道と連続していたと思われる周溝南辺、そして墳丘上にも一部が細片化して散乱していた。

#### 玉類 (図版55、第14~16図)

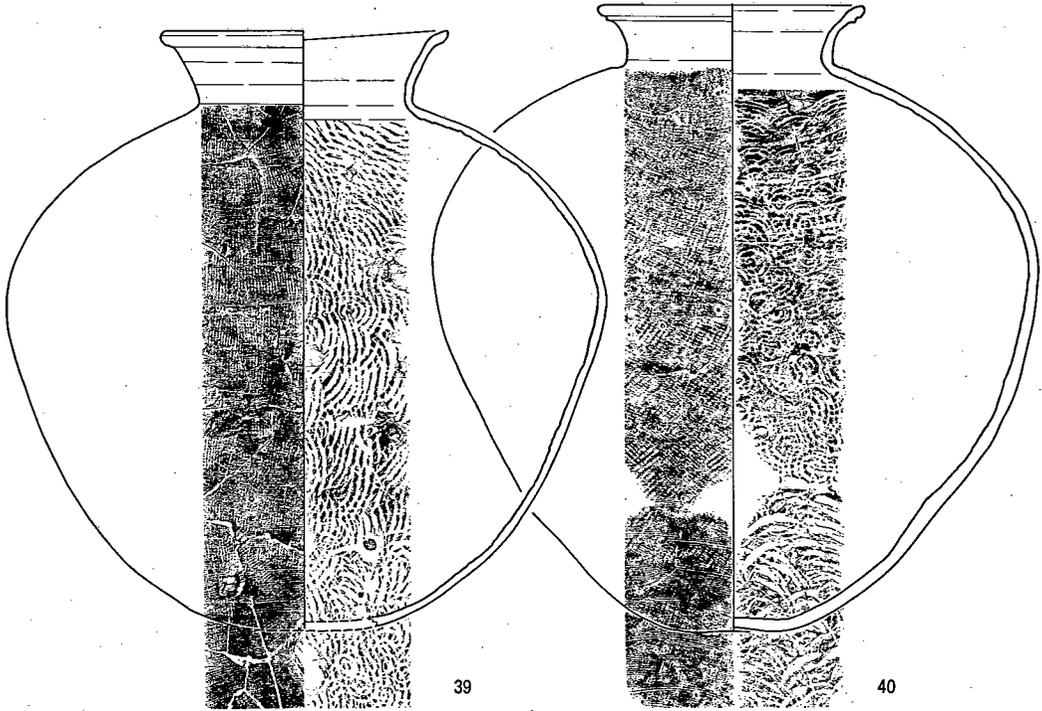
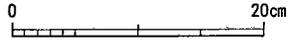
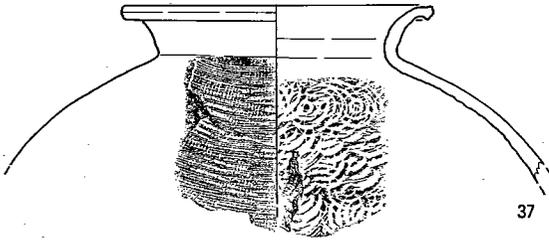
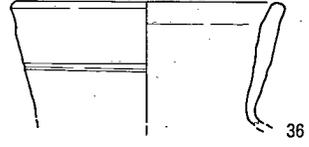
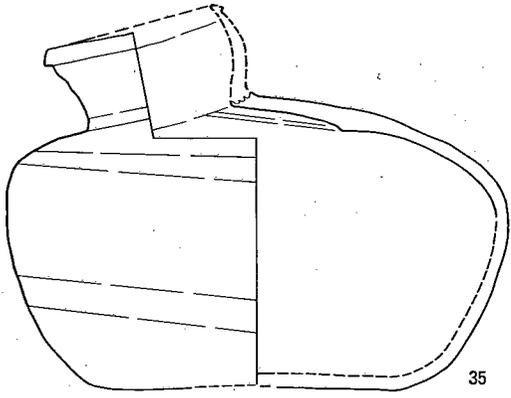
水晶製切子玉、瑪瑙製丸玉各1点の他161点はすべてガラス玉である。材質は詳しく知り得ないが、発色の傾向はコバルトブルー62点、青(紺・水)色系70点、緑色15点、黄色8点、黄緑色6点である。中、第図4・5は器表が白味帯びた淡緑色に発色す



第19图 2号墳出土土器実測図1 (1/3)



第20图 2号墳出土土器実測图2 (1/3)



第21图 2号填出土土器实测图3 (1/3、1/6)

に似るが、いささか小型である。中央部は方形断面を呈し、端部は板状となって鋳が打たれる。

29・30は用途不明金具。30は鎌状の形態であるが、幅広い部分は両刃のようである。

31はいわゆるハート形の杏葉。形状は楕円形に近い。3個の鋳で止めた2枚の鉄板が遊離するが、原形はよく解る。心葉形文様を透かした鉄板の表面には鍍金を施す。立聞から杏葉に移行する部分で小さな段がある。

32は太刀の鞘飾りであろう。金銅の薄板からなる。文様は直径約1cm、高さ3mmの半球形を打ち出し、その周囲に針で刺突したような小孔を巡らせ、さらに直径3mmほどの円文を鑿で刻んでいる。円文の間には所々にやはり金銅製の小型鋳が打たれていたようである。

33・34はよく似た雲珠と辻金具。鉄地金銅張で、半球形部分には明瞭に稜線が入る。頂部の鋳は錆のために形状がはっきりしない。35・36はやはり鉄地金銅張金具。いずれも2個の鋳の痕跡が見えるが、大きさがやや異なる。

#### 土器（図版56～58、第19～21図）

8・10・11が石室入り口付近からまとまって出土したもの。1も石室内出土で、外底面は篋削りの後に撫でている。2も石室内側壁下から出土したが、地点は記録されていない。約1/4が残存し、透孔は2方向で、孔上端に3条、下端に1条の沈線が見える。

3・4は周溝南辺から出土。3は口端部の一部を欠くがほぼ完形で、壺類の蓋であろう。天井部の篋削りは丁寧で、口縁部上端の沈線は非常に甘い。4は高杯脚部片であるが、形態は臚口縁部に通じる。、長方形透孔が残り、作りは丁寧である。

以下は5・11を除いて墓道出土で、一部は周溝南辺からも破片が検出されている。5～7ともに酸化炎焼成で、灰赤色に焼き上がる。器肉が厚く、天井部を篋削りのままで終わる点で共通する。5の天井部には板材状の圧痕が残る。8・9も口端部が外折る点で同形態である。

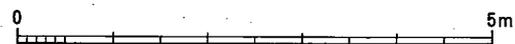
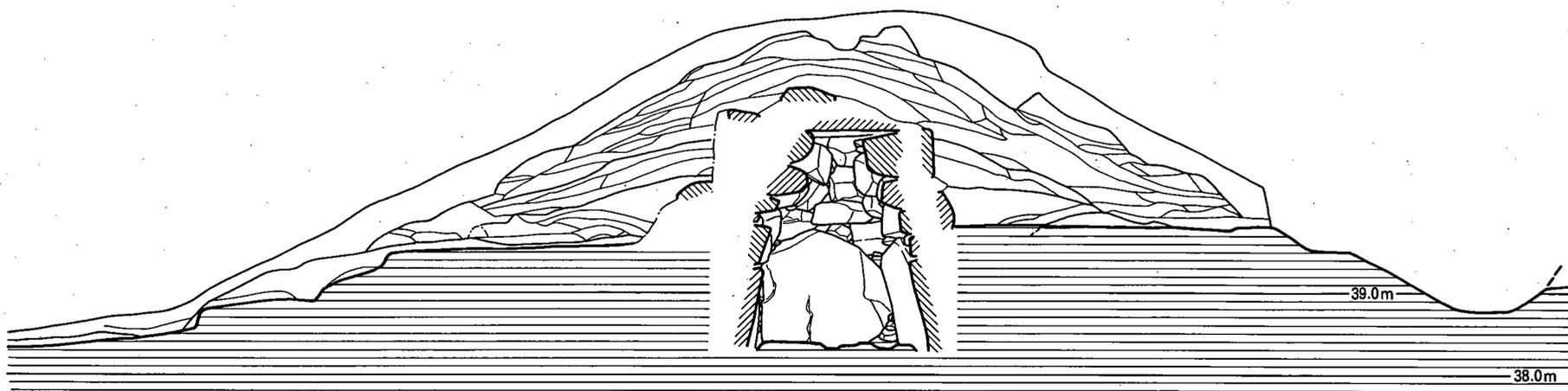
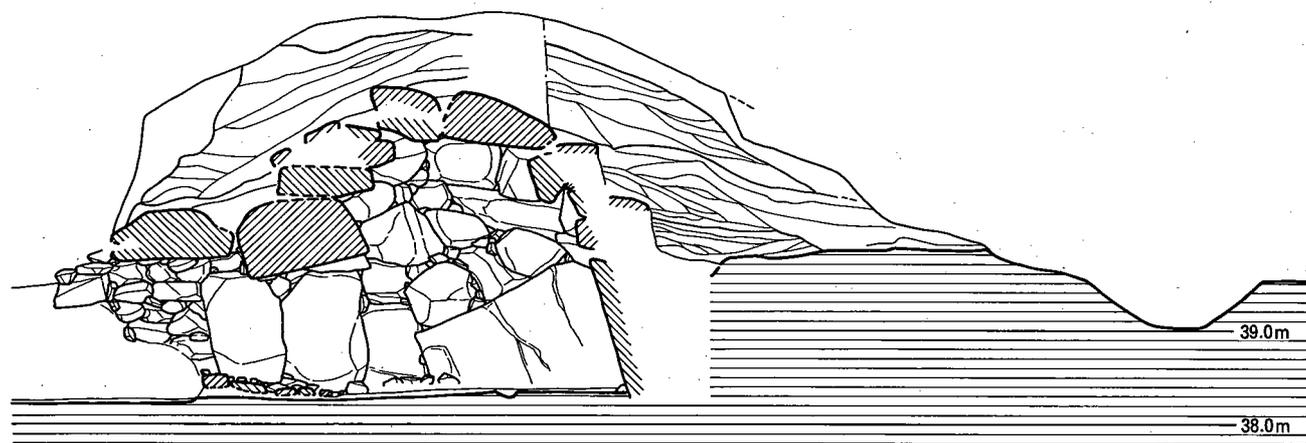
10～13も酸化炎焼成で、器肉の厚いことや外底面の技法は蓋に似る。また、いずれも外底面に板材状のあるいは葉状の圧痕を残す。他例に比して器高が低い点も特徴的である。14・15、16・17はいずれも口径はほぼ同じであるが、器高が若干異なる。外底面の仕上げはいずれも粗雑である。

18は無蓋高杯で、杯部下半にカキ目を施すとともに、篋記号状の浅い刻みがある。

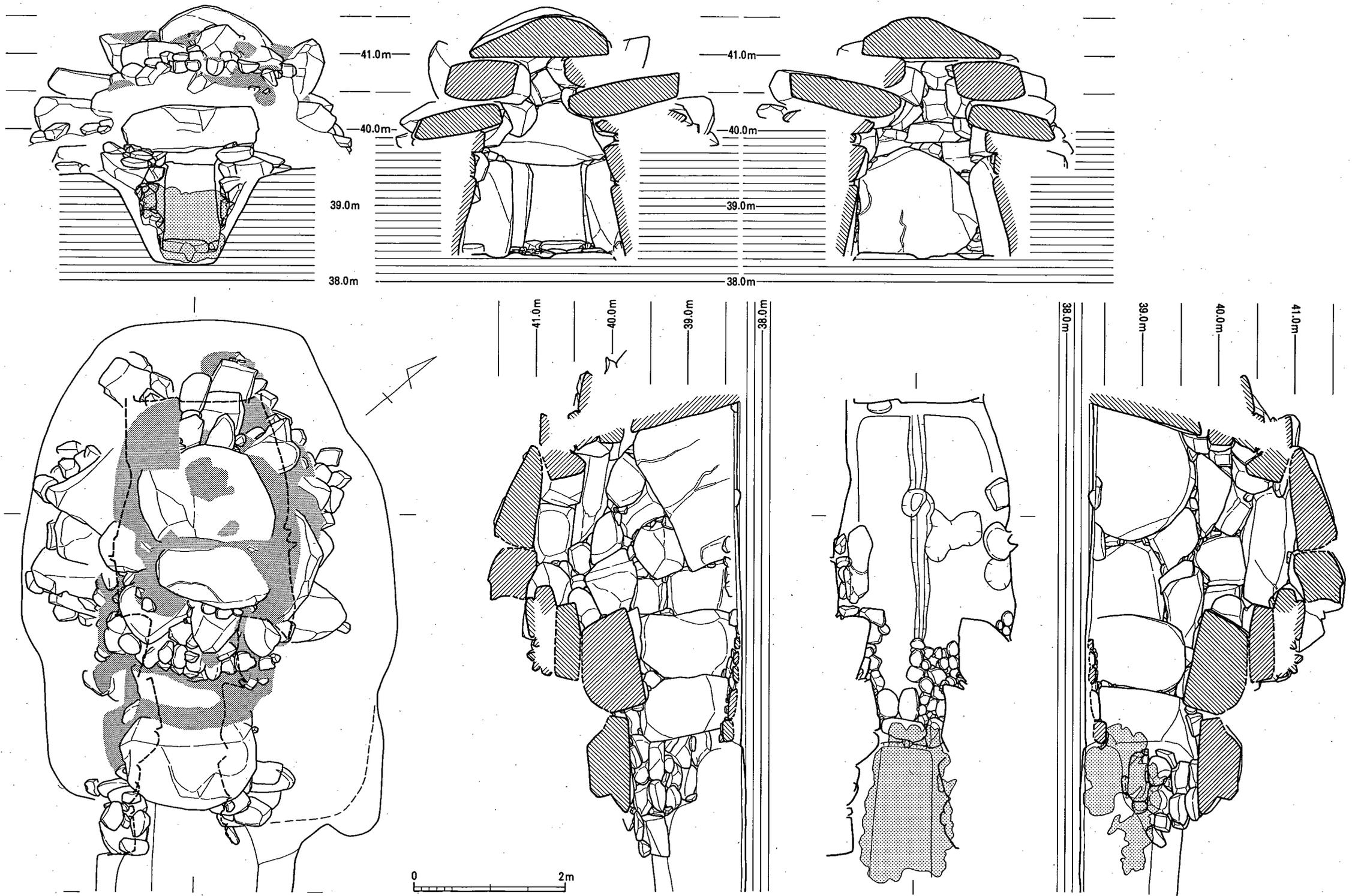
19～24は高杯の蓋。いずれもつまみを付すが、21が小振りで他と異なる。また、21は25～28と胎土や造りが非常に似て丁寧に造られており、本来的にセットであったと思われる。大型の蓋は29のような、おそらく長脚の高杯に伴うのであろう。

30～32は臚。30は体部上半をカキ目、下半を丁寧な篋削りで仕上げるが、孔の部分を欠く。外底面にシャープに刻んだ篋記号がある。32は図上復原した小型品で、やはり体部上半をカキ目で、下半を不定方向の粗雑な篋削りで調整する。

33・34はミニチュアの提瓶。33はほぼ完形品で、腹部（成形時の下半部）を不定方向の刷毛



第22图 3号墳墳丘土層实测图 (1/80)



第23图 3号墳主体部実测图 (1/60)

目、背部（同上半部）を篋削りの後に撫で消す。34は小片であるが、カキ目の後で残存部全体を櫛描波状文で加飾する。

35は焼け歪みの大きな平瓶で、体部下端外周を篋削りで仕上げる。以上は横撫で調整。36は短頸壺であろうか。口端部の器肉が厚くなり、頸部中位に甘い沈線を付す。

37~40は大甕。

### 3) 3号墳

調査区最南端の古墳で、一部が調査区外へ続くが、ほぼ全体を調査しえた。現状は盗掘坑が開口していたものの、帽子を伏せたような、ほぼ完全な形の墳丘が残存しており、周溝も見てそれと判る浅い窪みとなっていた。

墳丘（図版1・2・10~12、第5・22・100図）

現状での見かけの墳丘規模は直径13m、周溝底からの高さ約3mの墳丘を、幅3m、深さ0.5m弱の周溝が巡る、非常に良好な形状を残す円墳であった。

発掘調査は、トレンチを開けての土層観察、そして人力によって盛土のすべてを除去した。盛土は概ね黒色系の層となるいわゆる旧地表上になされ、そこから現地表までの最高値は約2.6mである。標高40~40.2m、そして天井石下付近で一見して大きく3層に分けうる。

西（石室背面）トレンチ 奥壁基底部から3.8mまで盛土を確認した。そこから周溝肩までは盛土を未確認であり、周溝内側の肩は同地点から4.8mの位置にある。

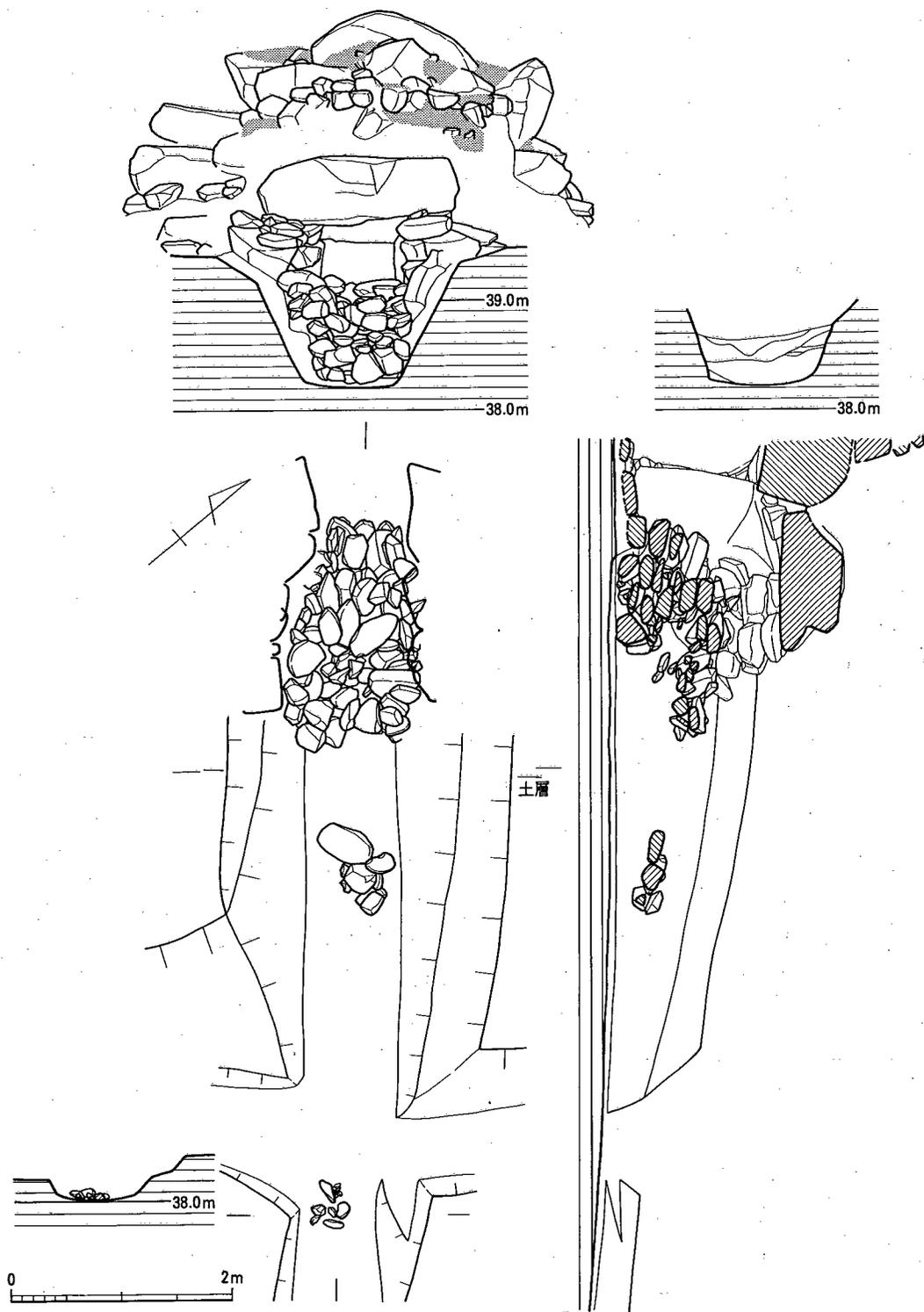
北（石室右側壁背面）トレンチ 石室中心から5.6mの地点まで盛土を確認しているが、そこから周溝肩までの盛土は確認していない。周溝は同6.6mの地点から始まり、幅2.4m、深さ0.7mの規模である。

東（石室左側壁背面）トレンチ 石室中心から5.6mの地点まで盛土がなされ、その先は同7.6mまで盛土がなされない犬走り状の地山成形面が続く。さらに7.8~9mの地点まで平坦に近い地山を掘削した面が続き、これが周溝へ続くのであろう。

以上のことから3号墳は、直径15m弱の円形墳丘に幅2m弱の周溝を巡らせた円墳であることが判明した。

墓道（図版10、第24図）

一部が後世の山道で切られるが、ほぼ10mの長さにわたって検出し、その先端は段丘肩まで延びる。図面上は周溝と連続しているが、調査時に両者が交わる付近の床面近くの土質を観察したところでは墓道埋土が周溝埋土を切っていると判断された。また、墓道と周溝が交わる付



第24図 3号墳閉塞状態実測図 (1/60)

近の墓道床で小礫が数点検出されたが、意図を持ってなされたものとの確信は得られていない。閉塞石からやや離れて所在する礫群は除去された閉塞石の一部であろう。

閉塞（図版13、第24図）

閉塞石はその上端が破壊されるが、ほぼ下半分が旧態を残していた。羨道部最前部、柵石上から前面にかけて川原石を積み上げている。

床面には、柵石前面で約0.2mの段差が設けられている。

主体部（図版13・14、第23図）

先の閉塞の一部、床面が破壊される他、壁体はすべて完存する。ほぼ長方形プランを呈する単室横穴式石室である。

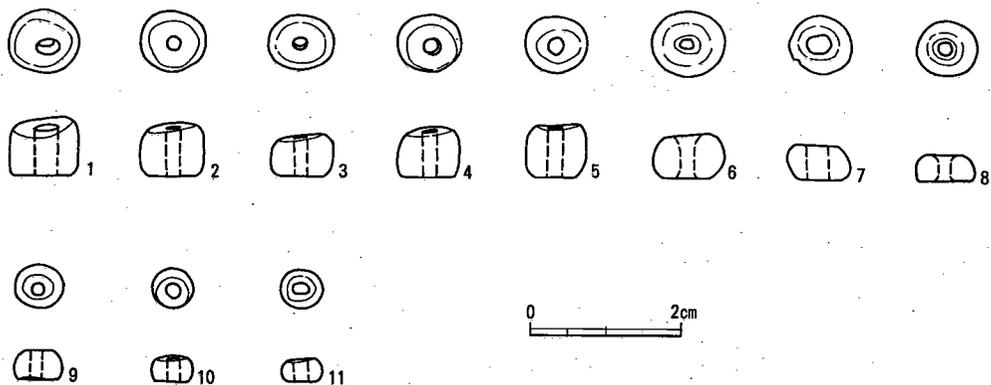
掘形は旧地表上からなされ、幅4.5m、長さ6.5mほどの略長方形プランを有する。また、深さは1.5m弱で、ほぼ腰石全体が納まる深さとなっている。

玄室は奥壁1個、両側壁各2個の大型石材を使用するが、それ以上に架構される石材は比較的小振りである。長さ2.8m、幅は1.8~2.3mで奥壁部分がすばまる形となる。高さは約2.6m。

床面は中央部に掘削された幅0.2m、深さ0.1mに満たない暗渠が残存するのみで、石材のほとんどが旧態を残していなかった。しかし、羨道部に一部残存する状況は、他の石室・横穴と同様であり本来の姿は容易に想像できる。

羨道部は大型石材と小型石材で構成される。袖石は玄室側壁から大きく迫り出し、前面に向かって羨道幅が狭くなるが、柵石を境にまた広がって行く。同じく柵石を境に壁体の構造も小石材となるが、天井石はそこまで架構される。

石室外観は大型石材の間隙に小礫を挿入し、さらに粘土で覆うといった入念な漏水対策がなされている。



第25図 3号墳出土玉類実測図 (1/1)

遺物 (図版15・16、第27図)

石室内は既述したようにほぼ完全に破壊されており、良好な状態での遺物は確認できなかった。反面、墓道南側の墳裾付近で祭祀に供されたと思われる土器群が一括して検出され、貴重な資料を得ることができた。

玉類 (図版59、第25図)

現位置で確認できていないが、石室埋土中から出土した。いずれもガラス製で、コバルトブルーに発色する。

金属器 (図版59、第26図)

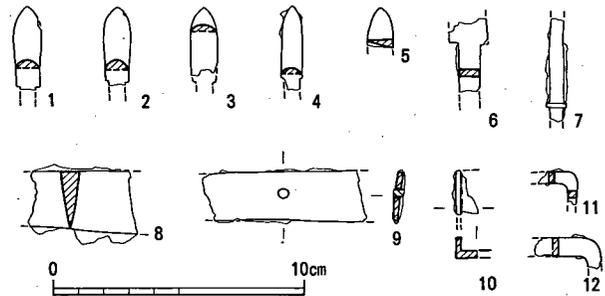
これも現位置での検出はなく、かつ細片化した残片が多く出土した。

1～7は鉄鏃。1～4は柳葉形片平造りで関を有する5は刀子形(片刃箭式)と思われる。7は棘筥被部分。8は太刀残片。9は金銅部分が見えないが、銚の痕跡がある。

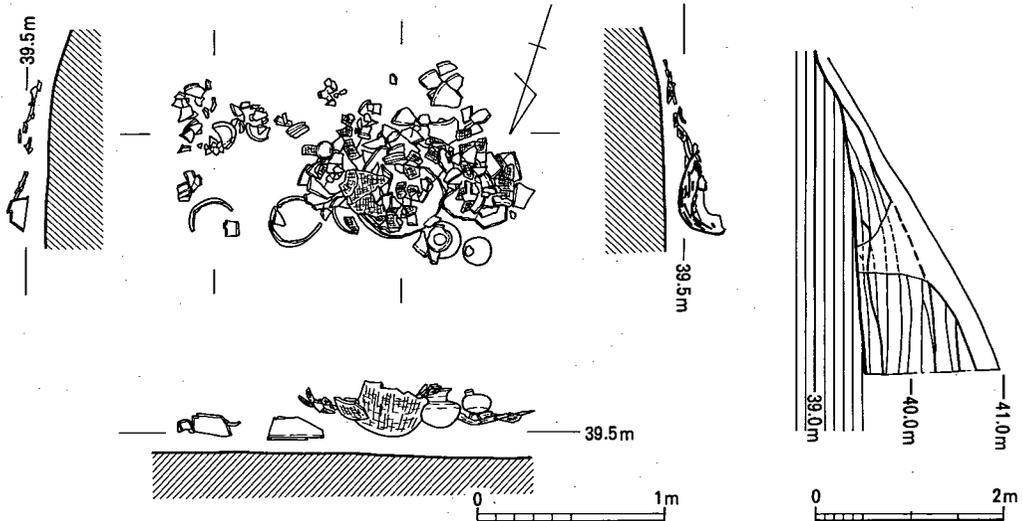
10～12は不明鉄製品。10は鉄板を、11・12は棒状の鉄を直角に折り曲げている。他にカコらしき残片などがある。

土器 (図版59～61、第28～31図)

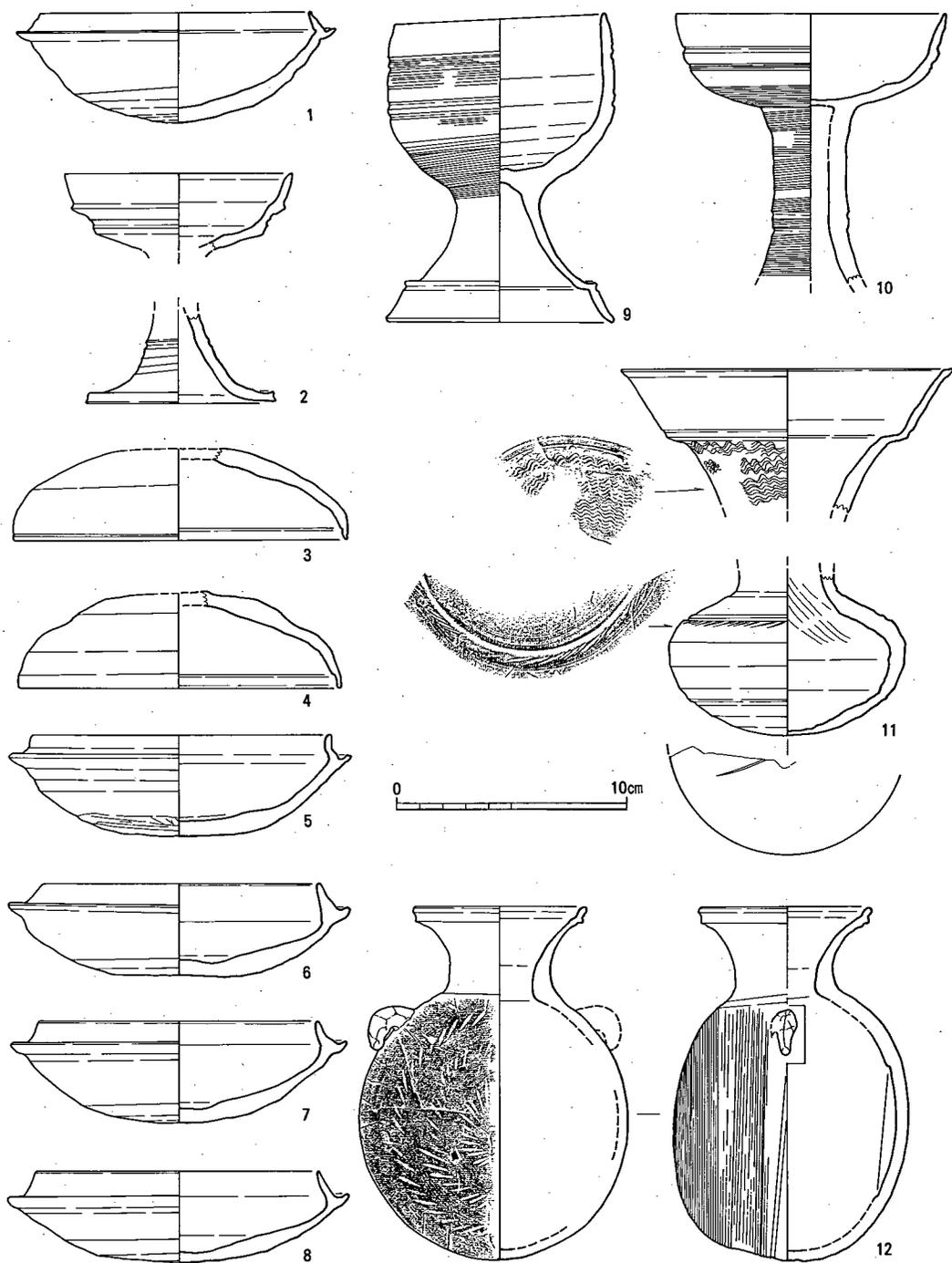
上記したように、墓道左側の墳裾のほぼ地山上から多くの土器が並んだ状態で出土した。盛土との関係を確実に捉え得たわけではないが、地山の断面形状から推して封土が施されていた部分に置かれていたものと



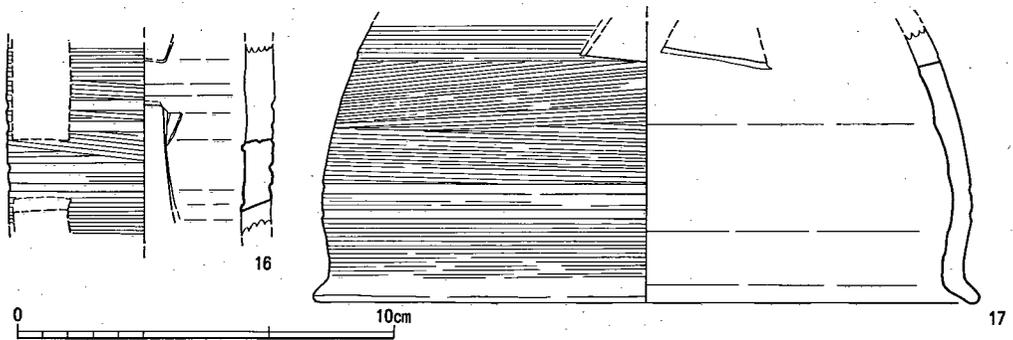
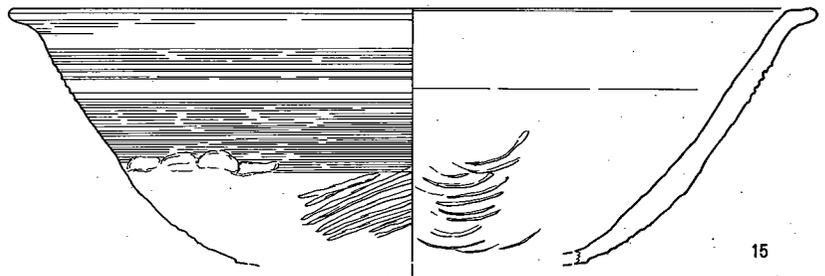
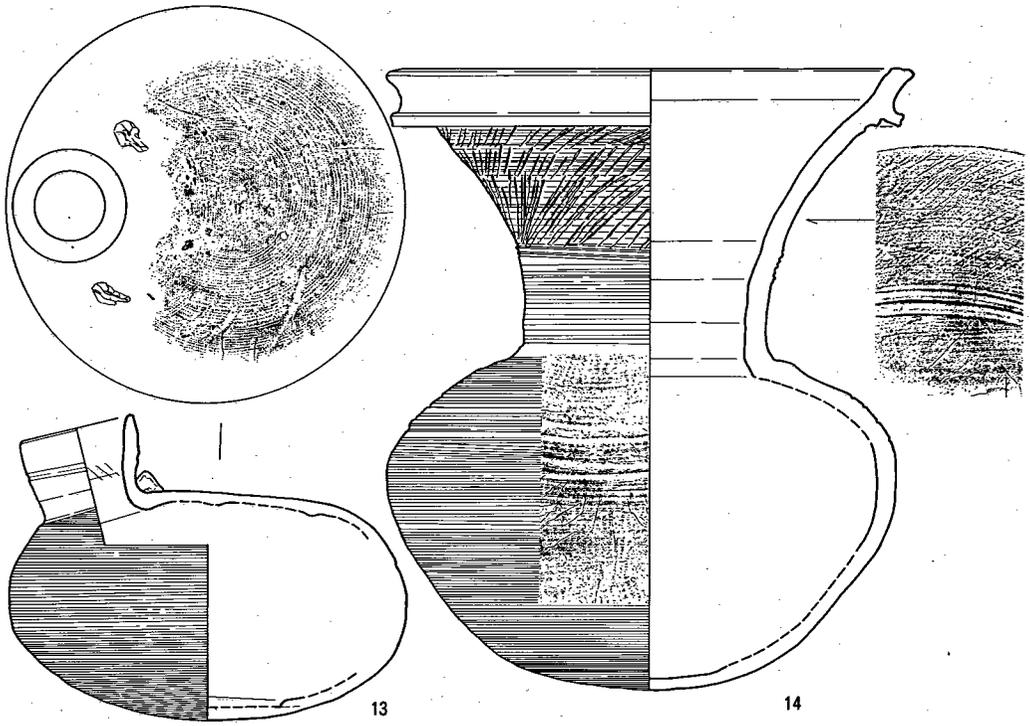
第26図 3号墳出土鉄製品実測図 (1/3)



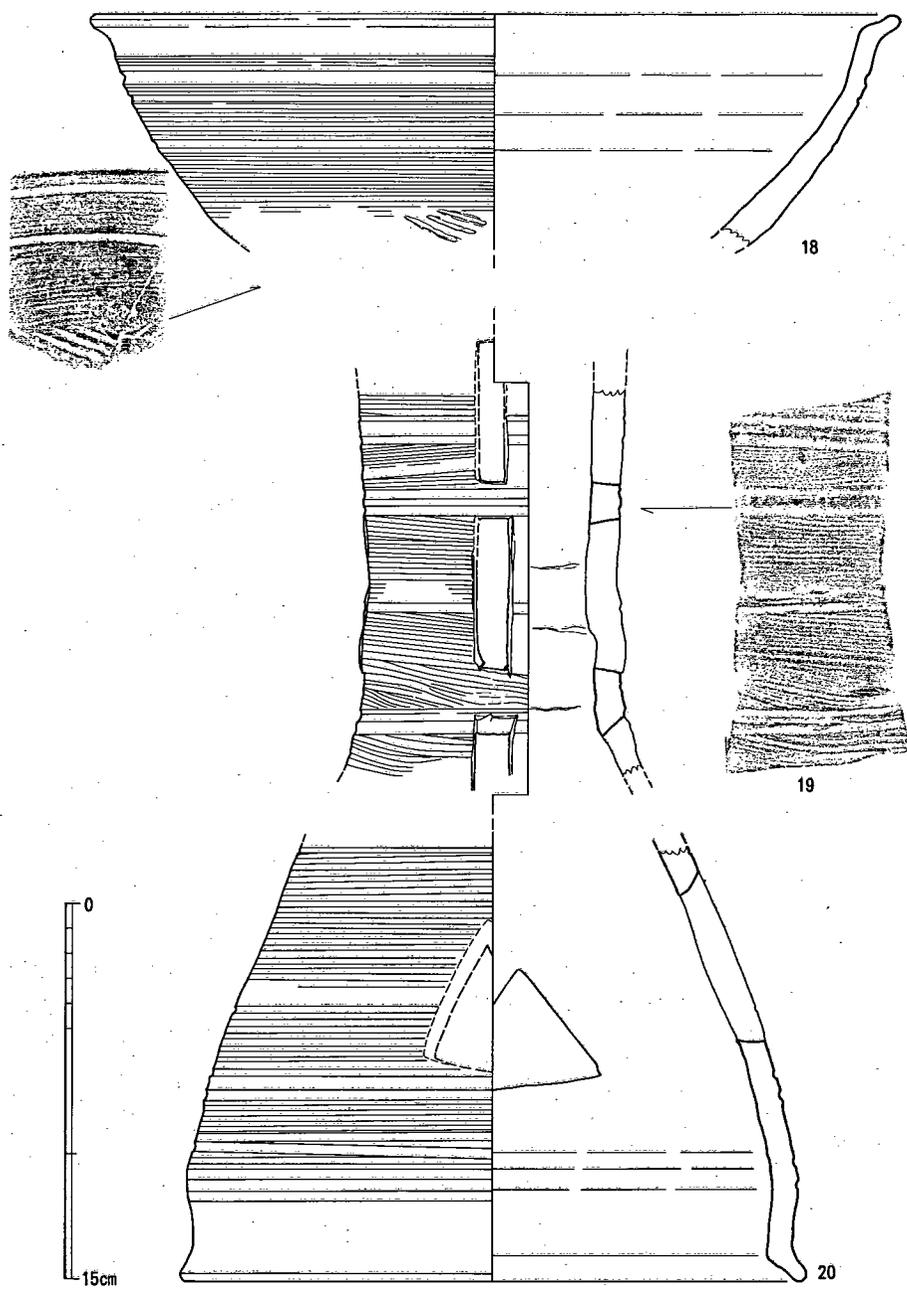
第27図 3号墳墳丘遺物出土状態 (1/40)



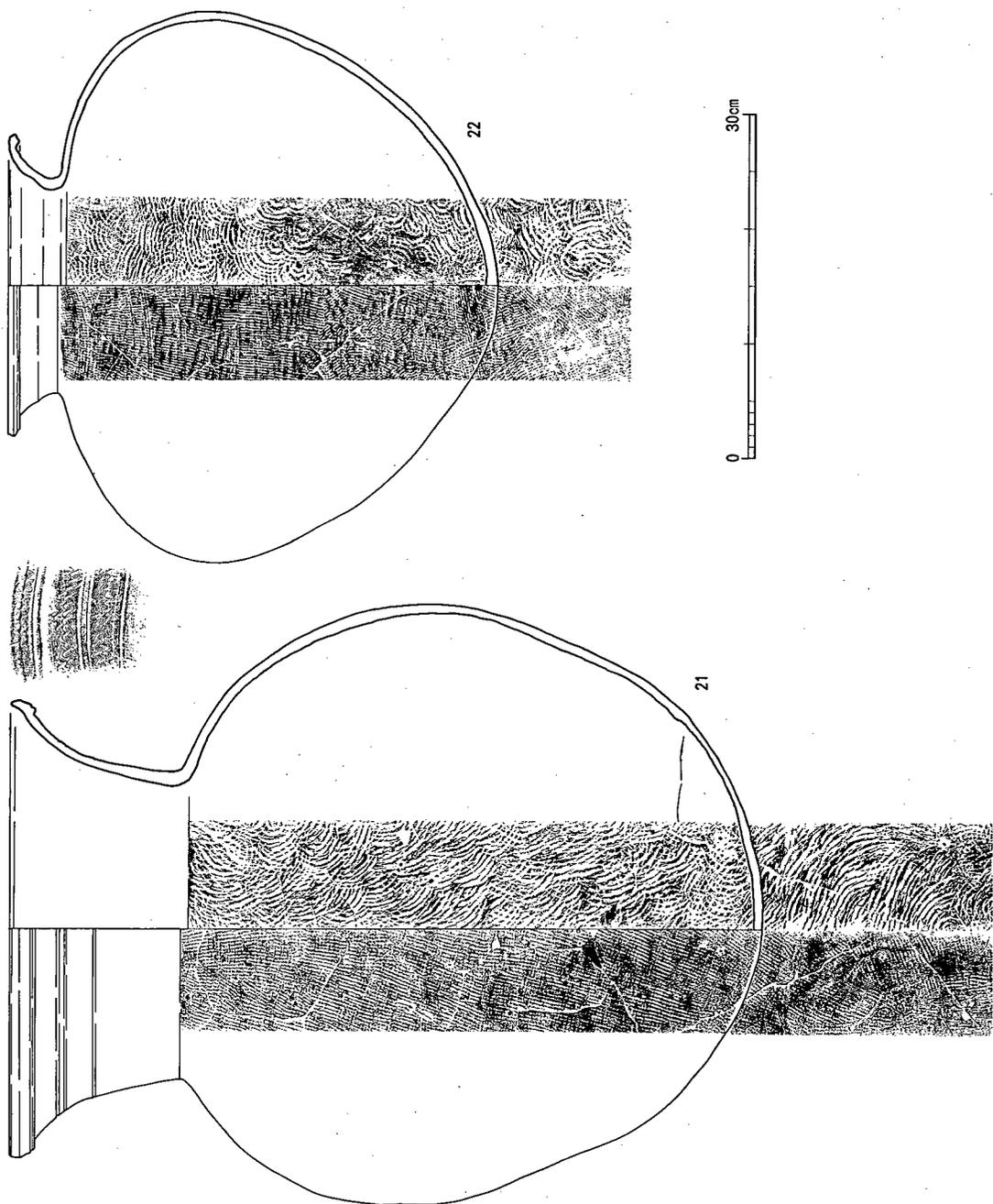
第28图 3号墳出土土器実測図1 (1/3)



第29图 3号墳出土土器実測图2 (1/3)



第30图 3号墳出土土器実測図3 (1/3)



第31图 3号墳出土土器実測图 4 (1/6)

思われる。一部の土器が正置された状態で検出されたこと、大甕の上半部が内側へ落ち込んでいたこと、器台が上半部を欠失していたことは、底部付近が盛土に埋められ、上半部が露出していた状況を想定させる。

検出状況は以下の通りである。

器台2点の基底部分が20cm弱の距離を置いて正立。この上に置かれたと思わせる土器はなく、乗せられていたとすれば有機質のものであろう。さらに横に直線的な位置で大甕2点の下半が正立。それに隣接して壺・平瓶がほぼ原形のままで立っていた。器台の南には蓋杯が破碎した状態で検出されたが、これらについてはも据え置かれたと考えてよからう。

1は墓道出土の杯身で、口縁部の約1/4が、体部下半は全体が残る。外底面は雑な篋削りを施す。2は石室内から出土した高杯で、同一個体のものである。沈線・稜線はシャープな造りである。

3以下は祭祀一括。3・4は酸化炎焼成で、灰黄色ないし赤褐色を呈する。口端部内面に段を有し、3は磨滅が進むが、4では天井部頂部の仕上げが篋切りのままで終わる。3は約1/2、4は約3/4が残存する。5も酸化炎焼成で、4によく似る。口縁部の約1/4を欠く他はよく残る。外底面は丁寧に篋削りを行うが、その後は未調整である。6～8も全体によく残存する。7の外底面は不定方向の、8では丁寧な篋削りを行っている。以上の杯身はいずれも最大径約15cm、器高4～5cmの法量である。

9は椀形の高杯であるが、一見して脚部は臚口縁部と同形であることが解る。杯部は雑なカキ目で覆い、4条の甘い沈線を巡らせる。約半分が残存。10もカキ目の使用が著しい高杯。

11は接合し得ないが同一個体と思われる臚。造りは丁寧であるが酸化炎焼成に近い。頸部に整った波状文、体部文様体には櫛描刺突文を付し、底部の篋削りもきわめて丁寧なものである。底部に篋記号の一部が残る。

12は体部の一部を欠くが全体が窺える提瓶で、体部全体をカキ目調整し、さらに上半部に3単位の刺突文帯を巡らせる。

13は完形の平瓶。頸部中位に甘い沈線を巡らせ、体部は全体をカキ目で調整する。なお、この個体は通常の平瓶と製作方法が異なり、通常底部にする部分に口縁部を付し、成形時の上半部を製品の底部とする。

14は13の平瓶と並んで検出された壺で、これも完形品である。口縁部にタガ状の突帯を付すなど加飾が著しい。頸部上半は篋状工具による斜線文が3段にわたって刻まれ、直下に4～5条の螺旋状の沈線を刻む。以下は底部まで叩き調整を隠すようにカキ目で覆われるが、肩部に4上の沈線が刻まれている。

15～20は器台。2個体が存在するが、いずれも生焼けでかつ遺存状況が悪く、接合不可であるとともにも個体識別もできない。杯部は浅く大きく開き、口端部を外折させる。筒状部は一つ

は千鳥状に、他方は同方向で長方形透孔を穿つ。脚部は膨らみをもち、端部は杯部同様に外折する。最下段の透孔は三角形で、20に示した例では2方向である。全体にカキ目調整が著しいが、要所に配される沈線は非常に甘く、カキ目と識別が困難なほどである。後者(20)は4方に配する。

21・22はやはり据え置かれていた大甕。21は口縁部のほぼ半分を欠く他は完存に近く、22も完形に近い。

#### 4) 4号墳

調査区の前墳中最北端にある。4号墳自体現状で確認できず、表土掘削後にはじめて発見したものであり、調査区北側に古墳がないとは断言できないが、地形的に谷が入る部分となることや、横穴群がすでに途切れることなどから、金居塚古墳群中の最北端に位置するものではないかと考えている。

##### 墳丘 (図版1・2、第5・100図)

先述したように、封土はまったく残っていない。周溝は下位斜面には掘削されず、内径で約7mの円形を描き、幅1~2m、深さ0.3m前後の規模である。

##### 墓道 (第33図)

墓道は4m強の長さで、主体部中軸線に添って直線的に延びる。また、床面は敷石が切れる付近で0.1m強の明瞭な段がつく。

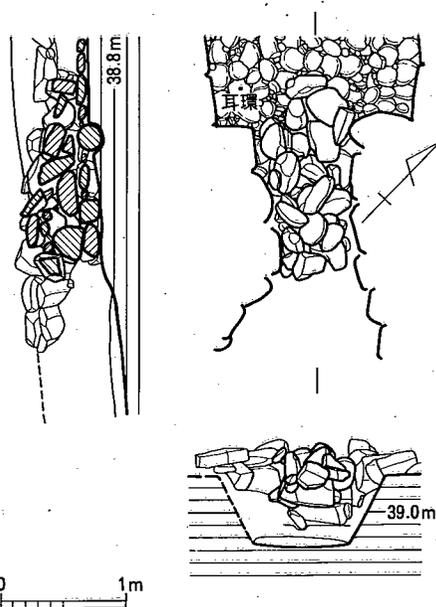
##### 閉塞 (図版17、第32図)

玄門から敷石の切れる地点までの約1.5mの間に、大小の川原石を用いた閉塞石が1~2段残存していた。

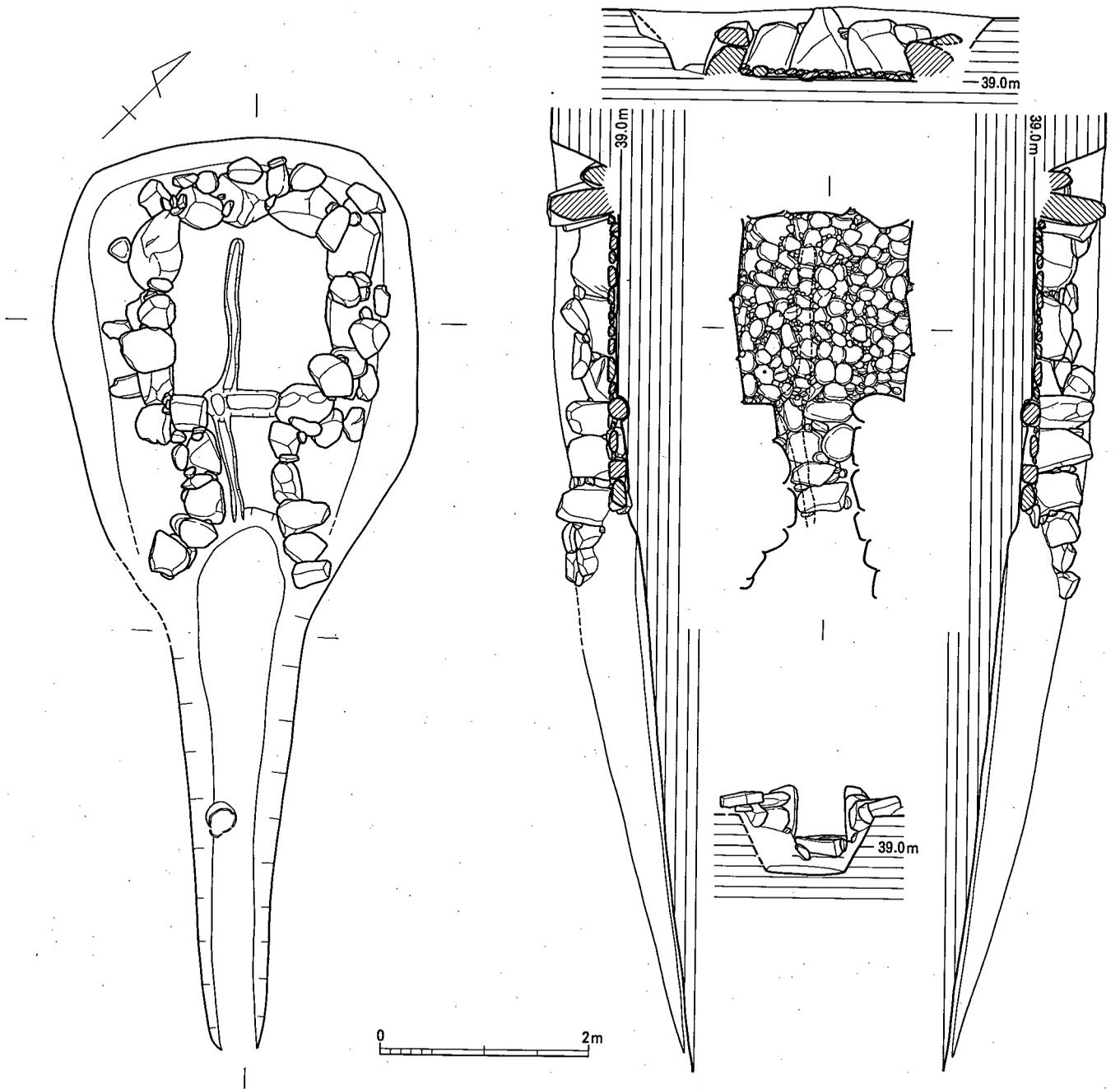
##### 主体部 (図版17・18、第33図)

ほぼ腰石を残すだけの単室横穴式石室である。奥壁、両側壁、そして羨道部も3個ずつの石材を使用しているが、他の石室に比べて石材は小さい。

玄室は左壁で若干の胴張りを有するが右壁は直



第32図 4号墳閉塞状態実測図 (1/60)



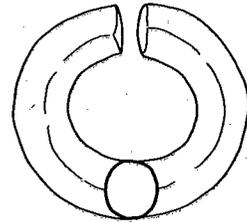
第33图 4号墳主体部実測図 (1/60)

線的であり、胴張りプランを意識したものとは思えない。幅1.6m、長さ1.8mの方形に近い平面プランを有し、石材の配置は整っている。

羨道部は大型石材3個を立て据えた部分と想定されるが、明瞭に意識された玄門袖石から前面にかけて幅が狭まり、さらに小型石材を使用する部分になって一転して幅広となる。

敷石はほぼ完全に遺存する。玄室部分は径20cm前後の扁平な川原石を主体とし、その間に小石を埋める。なお、中央やや左寄りを主軸に添って走る幅0.1m、深さ0.05mほどの浅い暗渠部分では整然と蓋石状に敷石が施される。これは他の石室、横穴にも共通する技法である。ただ、暗渠が中軸線にのらず、羨道部左壁に添うように掘削される点は今回調査の古墳・横穴の中で唯一である。

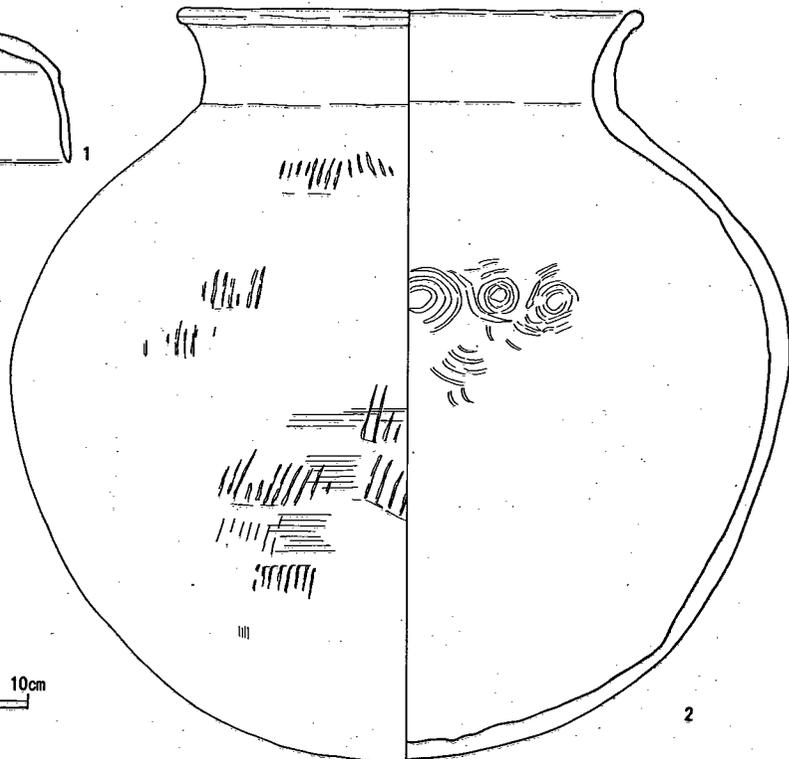
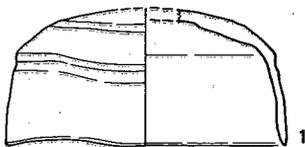
玄門部に据えられた櫛石から羨道部にかけての敷石は、玄室に比して大型のものが使用される。



第34図 4号墳出土耳環  
実測図 (1/1)

### 遺物

石室内から耳環が1点、墓道から土器が若干出土した。



第35図 4号墳出土土器実測図 (1/3)

金属器 (図版61、第34図)

石室左前隅付近の敷石上で検出した。全体に黒ずむが、銀がよく残る。端面に緑青がわずかに吹く。重量感があり、中実である。

土器 (図版61、第35図)

いずれも墓道中、床面から20cmほど浮いた状態で検出した。1は壺の蓋、あるいは高杯杯部であるかも知れない。焼成時に大きく歪み、約1/2弱が残る。2は酸化炎焼成、生焼けの甕で、器表の風化が著しい。黄白色ないし灰白色を呈する。

5) 5号墳

調査区内の北から2番目、小規模な谷の最奥部に位置する古墳である。これも表土掘削時に検出したもので、現況では確認できなかった。石室も大破しているが、敷石はかなり良好な状況で残存する。

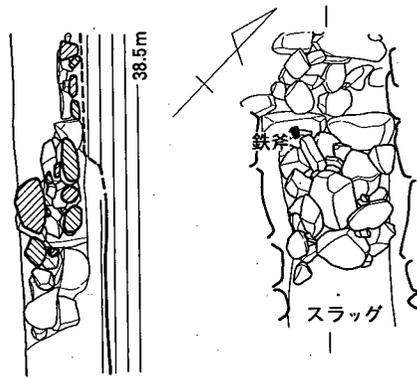
墳丘 (図版1・2、第5・100図)

封土はまったく残存しない。周溝は内径13~14mの円形を描き、幅1~2m、深さ0.2mの規模である。

南辺は墓道と交わり、北辺は途中で途切れる。南辺が墓道と交わる付近には、深さ0.2mの浅い土坑がさらに重複している。この土坑は無遺物で、所属する時期は判らないが、墓道・周溝を切っている。また、その土層観察では墓道埋土が周溝埋土を掘り込んでおり、墓道の管理が周溝埋没までなされていたことが想定される。

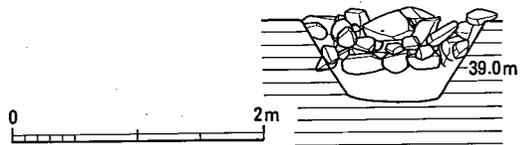
墓道 (図版19、第37図)

石室主軸と若干方位を違え、7m余の長さになたって、谷に向かって直線的に延びる。これも柵石直前の床面に約0.1mの段差がある。

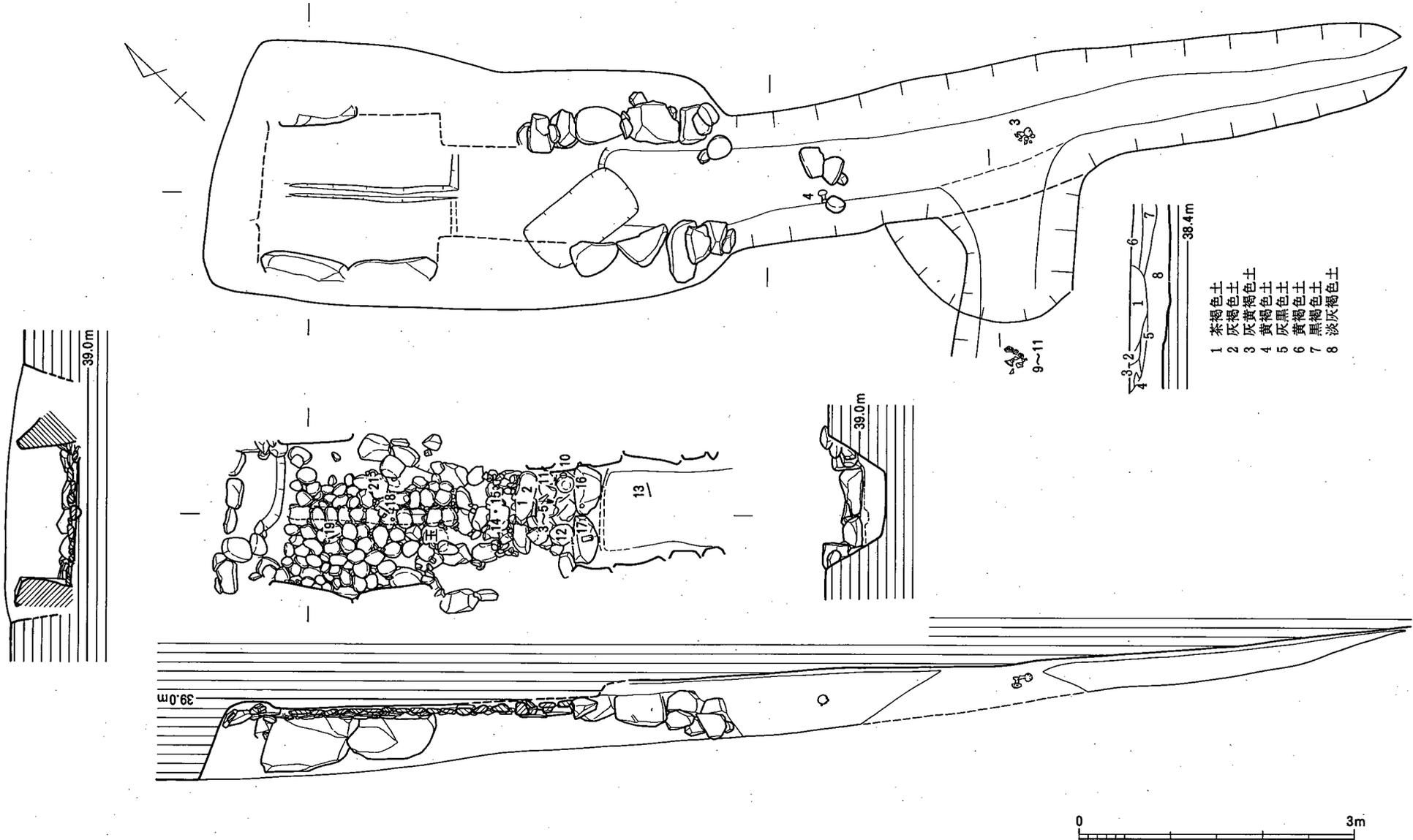


閉塞 (図版19・20、第36図)

川原石を積み上げたその一部が残存していた。位置的にはやはり柵石から前面に、長さ1.1mになたって積み上げられる。墓道堆積土の縦断面の観察を行っていないために判然としないが、



第36図 5号墳閉塞状態実測図 (1/60)



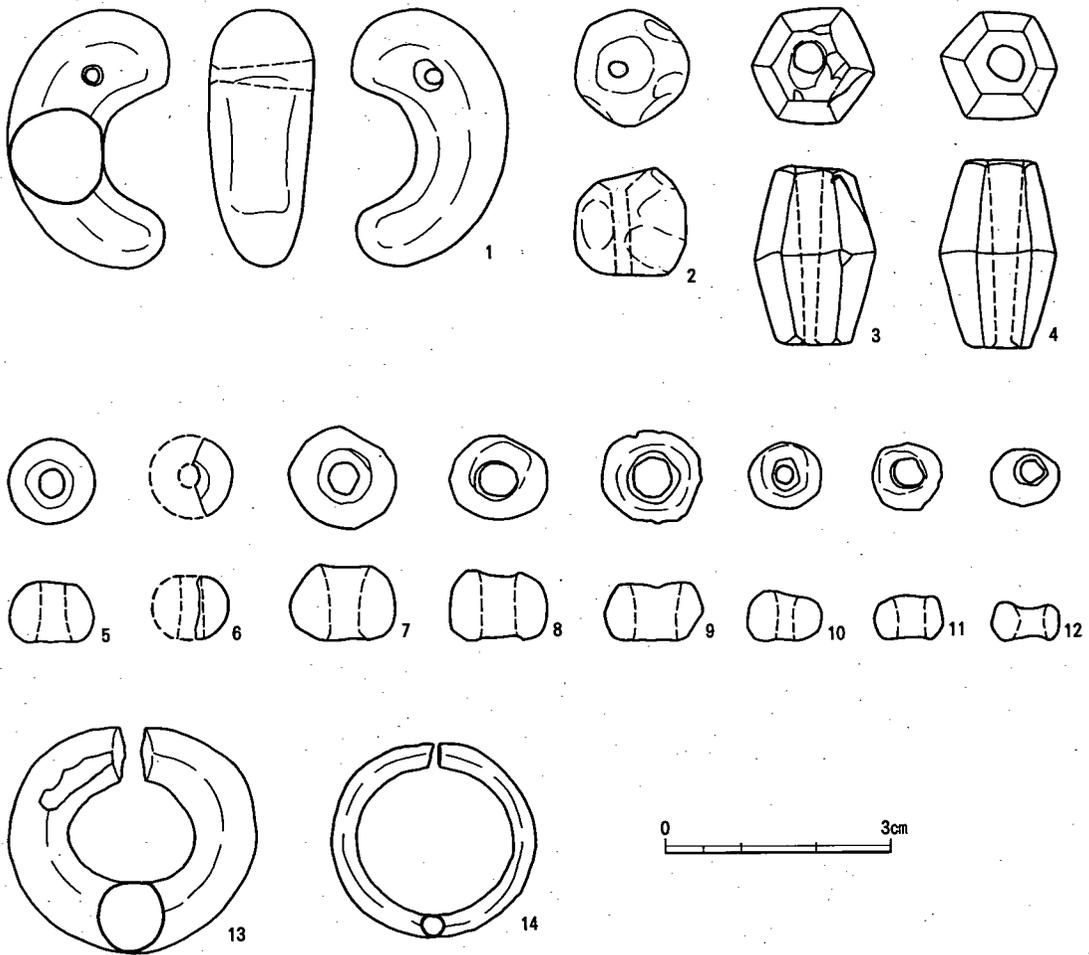
第37图 5号墳主体部実測図 (1/60)

閉塞石の基底部が墓道床に達していないことは再使用の結果であろう。

主体部 (図19・20版、第37図)

石材の多くが既に抜き取られるが、単室の横穴式石室が想定できる。掘形は幅2.8m、長さ5.5mほどの長方形で、深さは0.7mが遺存する。

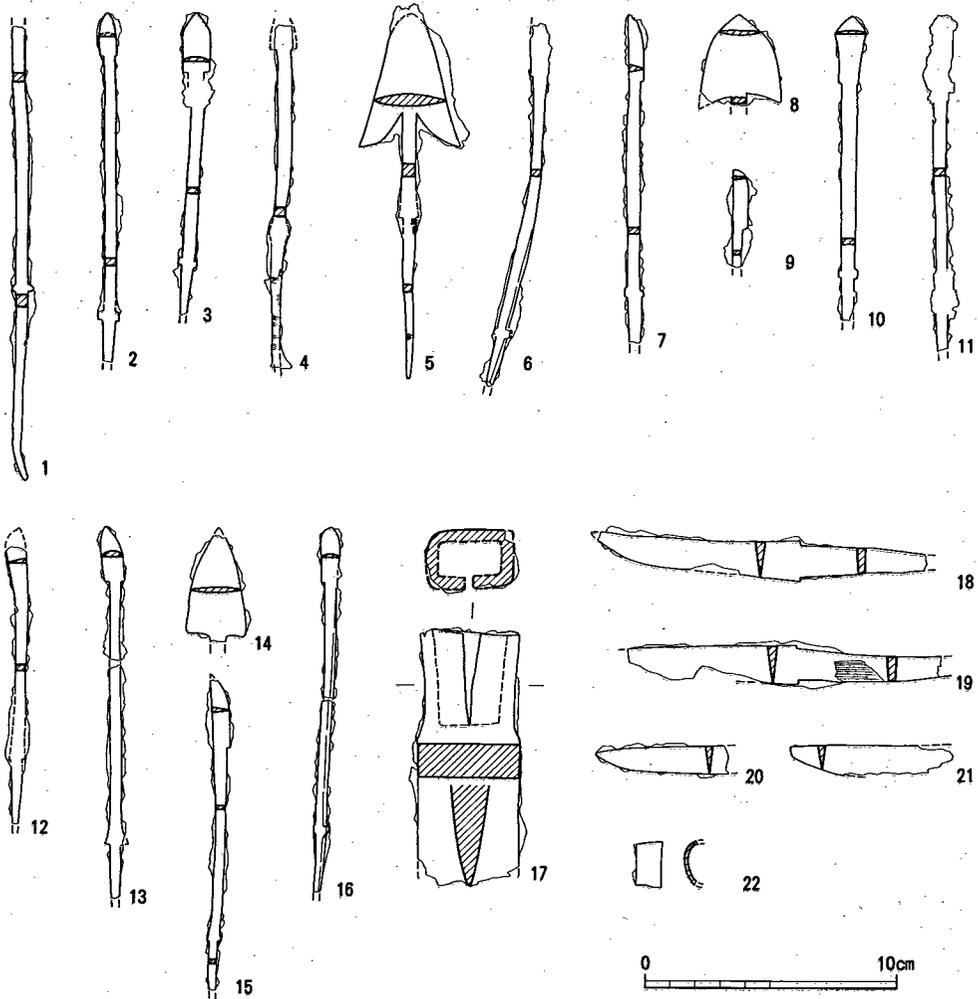
壁体の石材は玄室の左右側壁に計3個、そして羨道部から墓道にかけての左右両側壁には小型石材がかなり連続して残っている。調査を行った他の石室の石材使用法を参考とすれば、5号墳前面に残る石材は高さが櫛石とほとんど同じであり羨道部の腰石とは考えられない。また、他例では、側壁・羨道部ともに2~3個の石材を横位置あるいは立てて据えており、本古墳も敷石の状況から玄室、羨道部ともに2個の石材を腰石として使用していたものと思われる。



第38図 5号墳出土玉類実測図 (1/1)

上記の想定の下での玄室規模は、幅約1.4m、長さ約2mの長方形プランとなる。

敷石は他の古墳と同様に扁平な川原石と小石を併用し、ほぼ中軸線に沿って施された暗渠上には一列に並べられた様子がよく分かる。羨道部を想定した部分に柵状に配された石材が2組有り、その間の敷石が非常に乱雑に置かれ、鉄製品などが多く出土したことから複室構造を強く意識しているものと思われる。なお、敷石前端以外に、推定玄門部にも地山を削り出した低い段が認められた。

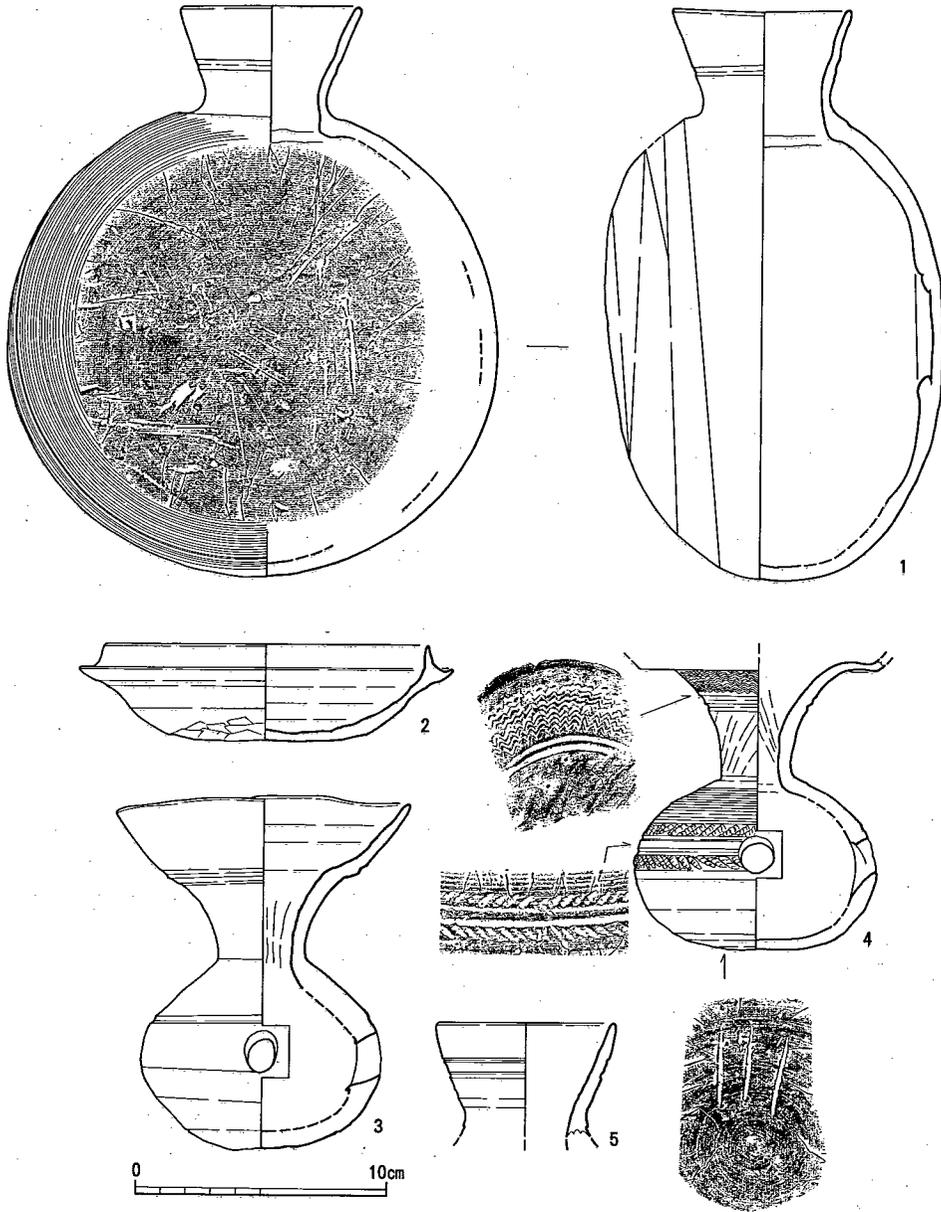


第39図 5号墳出土鉄製品実測図 (1/3)

遺物（図版20、第37図）

玄室内からかなり多くの遺物が出土した。中程右側壁下（勾玉等）および左側壁下（切子玉、瑪瑙等）から玉類が、また、刀子が玄室内、鉄鏃が敷石最前端付近の右側から出土するなど石室内の所々で鉄製品が検出された。柵石上に図示した鉄斧は閉塞石上にあるもので原位置ではない。なお、閉塞石前面の埋土中から鉄滓小片が1点出土している。

墓道・周溝からは土器が出土した。墓道の土器は床面から10cm、周溝出土土器は同30cmほど

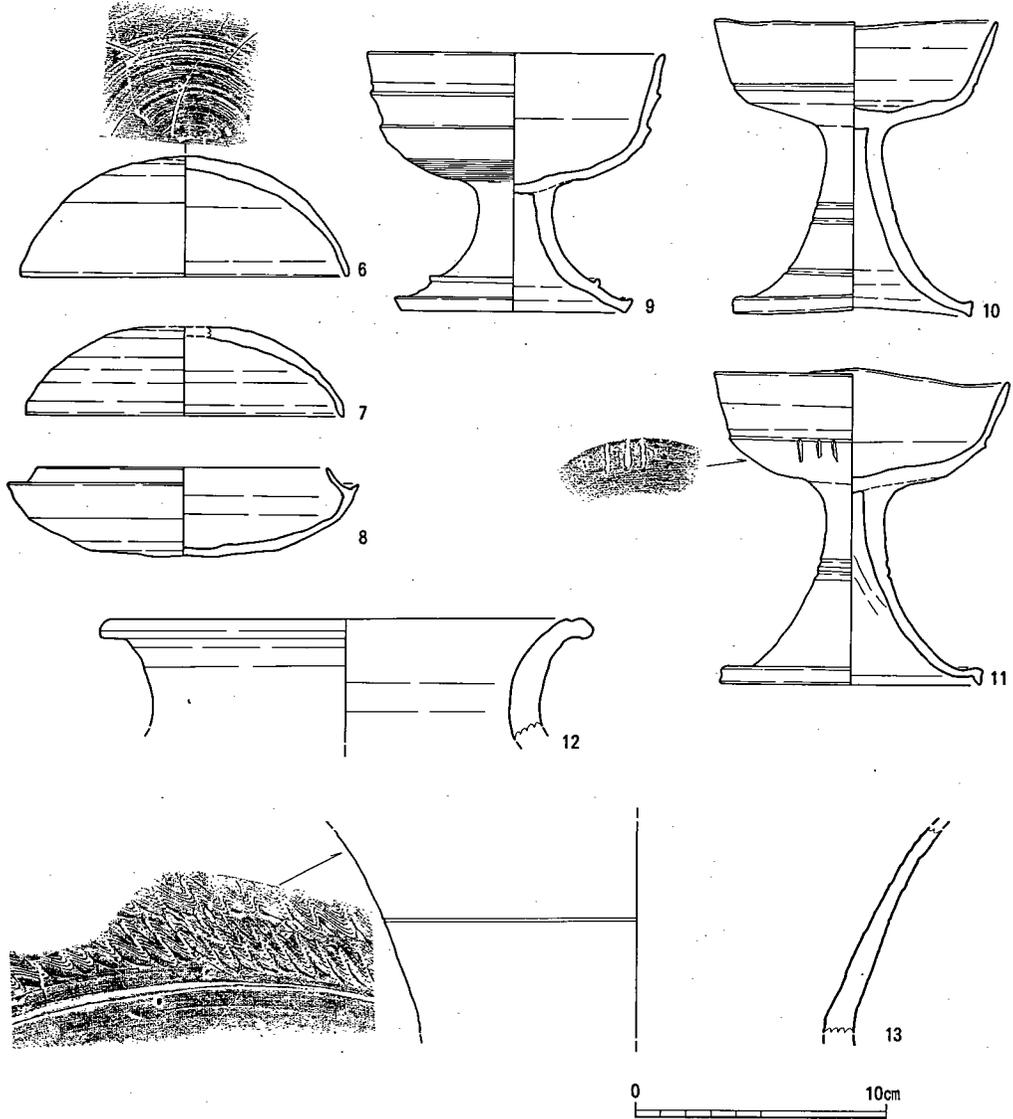


第40図 5号墳出土土器実測図1 (1/3)

浮いた状態であった。

玉 類 (図版61、第38図)

1は硬玉製勾玉。緑が薄く、質は劣るようである。穿孔は片面から鉄錐上の鋭利なものなされる。2は瑪瑙製丸玉でこれも表面が荒れている。孔の周囲は一方は窪み、他方は平坦な面となり、その他の部位よりも平滑化される。また、孔は両端の口径がほぼ同じである。3・4は水晶製切子玉。これも質は良好とはいえず、製作時の横方向の擦過痕がよく残る。5以下は



第41図 5号墳出土土器実測図2 (1/3)

ガラス玉で、風化が著しく、多くが表面の色を失う。残りのよいものは表面が一見硬玉のような緑色を呈し、部分的に黄白色斑が入る。

#### 金属器（図版61、第38・39図）

13・14は耳環。13は玄室中央付近から出土したもので、よく金が残る。緑青も観察でき、重量感がある。14は敷石下排水溝中から出土した。金・銀は見えず、灰茶褐色を呈する。錆も同様で、緑青や鉄錆は全く見えない。中実。

鉄製品は13の鍬が墓道から出土した他はほぼ石室内で検出された。銹化のために関や篋被の形状がはっきりしないものがある。鉄斧は袋部が方形断面となるもので、肩の張りが小さいが有肩斧に属するものであろう。先端を欠く。

#### 土器（図版62、第40・41図）

1は柵石脇に据え置かれていた提瓶で完存する。口縁部は直口素縁で、頸部中位に沈線を巡らせる。腹部は丁寧な篋削りで、背部はカキ目で仕上げる。なお、背部の篋記号状の沈線は製作時の傷である。2～5は墓道出土。2は約1/4が残る残片で、外底面を不定方向の篋削りで仕上げる。3はほぼ完形の甕。体部が下膨れとなり、底部は平坦面に近い。体部下半の篋削り調整は雑である。4の図示部分は完存する。3と異なって頸部の櫛描き波状文、肩部のカキ目、体部の粗雑な櫛描波状文などの装飾がなされる。底部の篋削りは丁寧で、3条の平行線からなる篋記号が刻まれる。5は提瓶の口頸部であろう。中位に2条の沈線を刻む。

6～8・10～13は周溝出土。9は墓道・周溝双方から破片が出土している。

6は天井部の1/2、口縁部の一部が残り、灰被りが著しい。器高が高く、天井部に篋記号が見える。7は小片。8は約1/2が残る。破面、内面、受部付近が錆が付着したような黄褐色に発色する特徴ある個体である。9は細部がシャープに造られ、杯部が深い。全体は窺えるが、残存部は少ない。10は完形。焼きが甘く、器表の残りもよくないが造りは丁寧。11もほぼ完形である。全体に造りは丁寧であるが、杯部が若干焼け歪む。また、杯部稜付近に篋記号が見られる。12・13は小片。

## 6) 小 結

以上が古墳の調査で得られた資料である。2号墳の攪乱坑から検出された馬具類や、4号墳を除く各古墳から比較的多くの土器が出土したなどを考え併せると、過去の乱掘が悔やまれる。

それぞれの古墳の築造年代を考える際には総合的な評価が必要であるのだが、中でも土器が一等の判断材料であり、ここでもそれをを用いる。しかし、出土した時期の土器は各器種で変化に富み、個々の評価は容易でない。したがって、主に須恵器蓋杯を判断材料とする。

1号墳では資料が少ないが蓋杯ともに口径が11cm前後で、器高は蓋で3.5cm、身で3cm前後と

なり、特に身は扁平化する。また、天井部あるいは外底面の調整は篋削りの後に撫でて丁寧に仕上げ、これらの特徴は小田富士雄氏のいうⅢB様式後半～ⅣA様式前半に属するものと思われる。

2号墳は比較的資料に恵まれる。蓋は口径12cm前後、器高4cm前後で、身は同11cm前後、4cm前後である。いずれも天井部・外底面が平坦化する。平坦化と関連して、これらの調整は篋切り後未調整であり、削り残しの粘土が付着するものもある。以上の点からⅣA様式に比定できる。

3号墳は墳丘祭祀の土器があり、蓋の口径・器高はそれぞれ14cm前後、4cm前後である。身は12～13cm、4cm前後となる。蓋の口端部には段を有するなどⅢB様式の特徴を有する。

4号墳の資料は位置付けが困難である。

5号墳も資料が少ないが、蓋は口径13cm前後、器高は大きく異なるがそれぞれ3.5・5cmを測る。身も同13・11.5cm、4・3.5cmとかなり法量が異なる。ただ、いずれも天井部・外底面は全体を篋削りしておりⅢB様式とできよう。

横穴式石室であり追葬は当然のごとく想定されるが、蓋杯を見る限りは追葬の確認はほとんどできない。3号墳出土資料中、墓道出土の杯身が墳丘祭祀に供された土器に比して器高が高くなるが、形態や手法的にほとんど差異がなく、同一様式内の変化といえるものである。したがって、これらの古墳の使用期間はかなり短かったことが想定される。



第42図 手製シューター

## 2. 横穴墓

地山の洪積層に掘り込まれた12基の横穴墓の調査を行った。このうち、11・12号横穴は玄室部分が工事用地外に所在していたが、工事の過程で影響が避けられないものと判断されたことから地権者に了解をいただいて調査したものである。

横穴の墓道が掘り込まれた付近は、段丘法面の上位に位置し、調査前は畑地として茶などが栽培されていたようである。地元の人話では、横穴などは全く知らないということであったが、重機を用いて急斜面の表土を剥ぐ中に須恵器壺の完形品を検出し、よもやと思ったところ墓道が次々と現れ、最終的に12基を調査することとなった。

段丘肩にある古墳や古墳下層の調査と平行して行ったために、排土に難渋し、足場板や波板を使用して手製のシューターを作成、段丘肩から下端まで接続し、途中に作業員を配して土をかき落とすなどの工夫を行っての調査となった。

遺構は調査区北端付近に入る浅い谷で途切れ、調査区南へはさらに続くため、北から順に番号を付した。

### 1) 1号横穴（図版22・23、第43・44図）

横穴群中で北端にある比較的小規模な横穴。天井の大部分が崩落するが、盗掘等の攪乱は受けていないと判断している。。

#### 墓道

5 m弱の長さで延びる。縦断土層の観察では、暗灰黄褐色土が閉塞石を包み込み、墓道床面には地山と同質の締まりのない土が厚く堆積、その上層もほぼ水平の堆積層が見られ、最上層付近に黒色系埋土が入っていた。この土層を見る限り、追葬は確認できない。

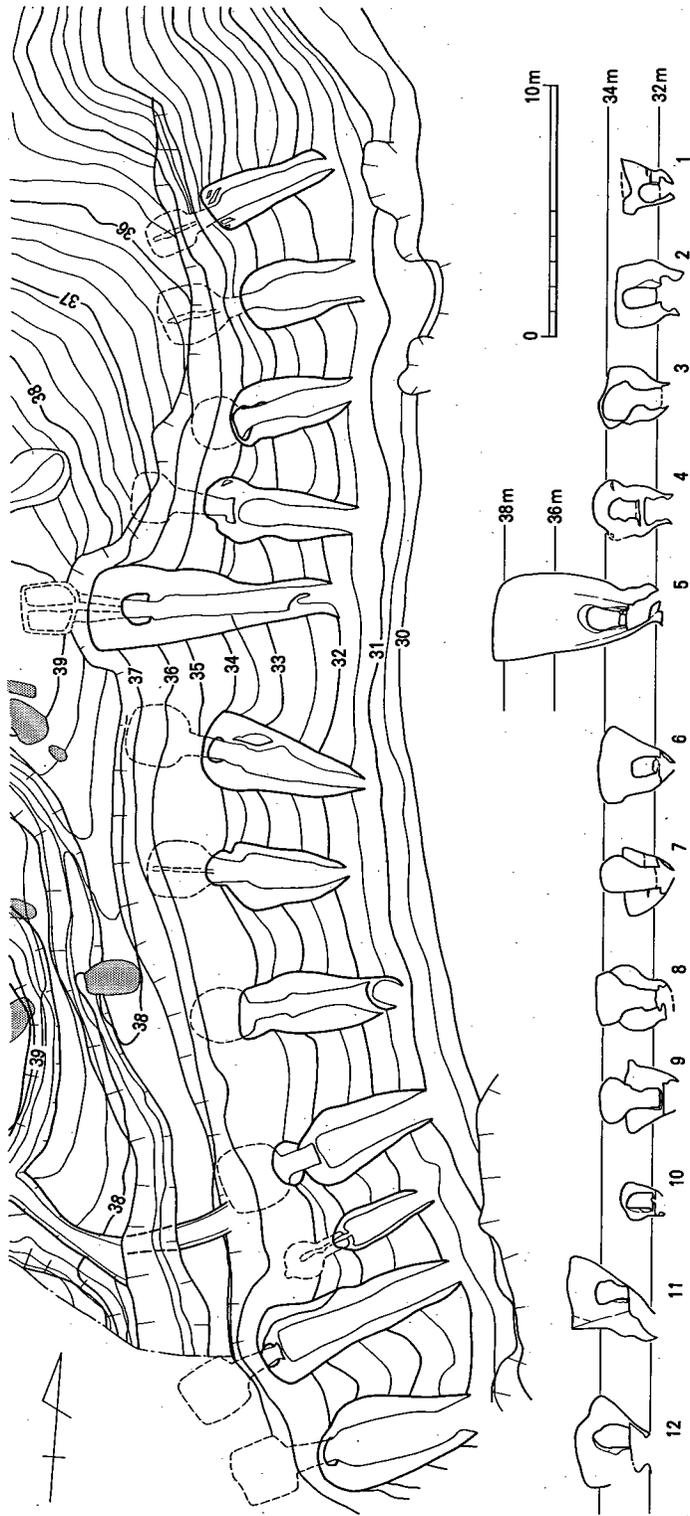
#### 閉塞

羨道部に川原石を用いて積み上げる。基底部には比較的大型の、以上には小型の石材を使用するが、前面はおそらく崩れているのであろう。

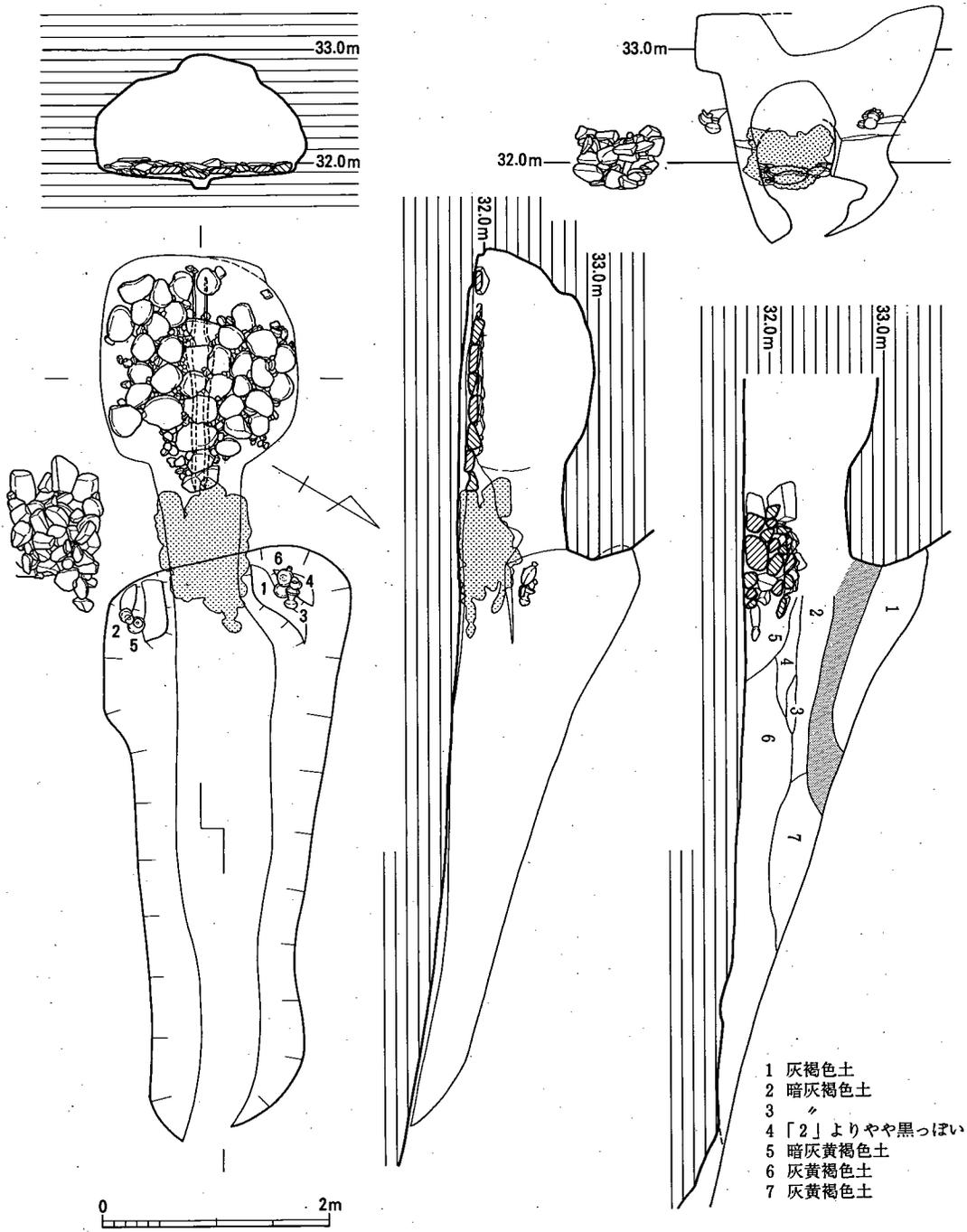
#### 主体部

羨道部および天井部の大部分は崩落する。

玄室は長さ約1.9m、幅1.75mの不整隅丸方形に近い平面プランを有し、横断面形はドーム



第43図 横穴群配置図 (1/300)



第44図 1号横穴実測図 (1/60)

形に近いようである。床面には扁平な川原石を乱雑に敷き、さらに小石を間隙に詰める。この敷石施工法は他の横穴はもちろん、横穴式石室とも共通し、使用石材の大きさにも差異はない。また、玄室中軸線上に幅15cm前後、深さ5cmほどの排水溝が付設されるが、この直上に石材を並べる点も同様である。

羨道部は長さ1.2m、幅0.8~0.6mの規模で、玄門が広く、前面が狭くなっている。天井の高さは0.9mを越えず、断面はドーム形を呈したようである。なお、床面は墓道と連続する。

### 遺物

玄室内部では耳環1点が中央付近左壁近くで出土した他は、なんらの遺物も確認できなかった。

墓道では、左右入り口部の壁面に小規模なテラスを各2段設け、それぞれの上段で須恵器を検出した。下段には有機物の供献がなされたものと思われる。

左側では、倒置された高杯と平瓶、右側では杯身を伏せて、他の土器は斜めに傾いた状態で検出した。伏せられた高杯と杯身は原状と考えてよかろうが、傾いた土器は本来は正立していたものかも知れない。それ以外に墓道埋度中から杯身を出土している。

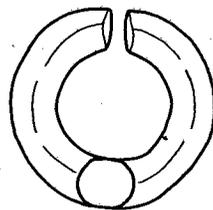
### 金属器（図版62、第45図）

表面の残りはよいが、全面に緑青が吹き、金は一部が見えるだけである。重量感がある耳環。

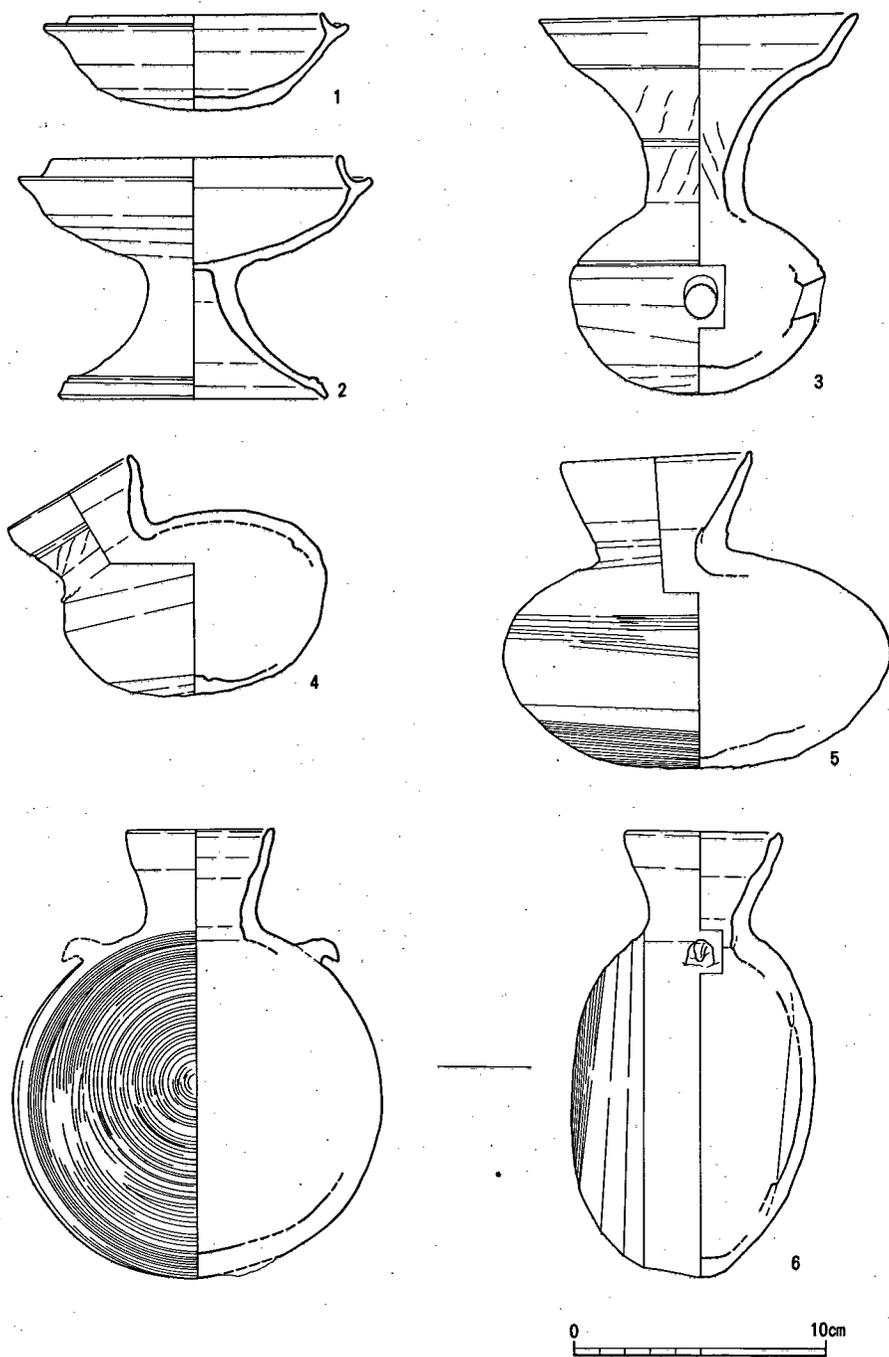
### 土器（図版62・63、第46図）

1・3・4・6が右側、2・5が左側のテラスから出土。他は墓道埋土中出土である。

1は口径10cmほどで、外底面は篋切り未調整のままである。2の高杯は細部はシャープに作られる。脚部の1/4を欠く。3も丁寧に作られる甕で、沈線はシャープに彫り込まれ、体部最大径以下を篋削りで調整する。4も同様に丁寧に、頸部中位に沈線を施し、体部下半を篋削り調整する。5は口縁部の一部を欠く。体部下半はカキ目の後に篋削りを巡らせる。6は口縁部が焼け歪み、耳の一方を欠く他は完形。腹部は篋削りを施した後に中央部にカキ目を施す。



第45図  
1号横穴出土耳環実測図 (1/1)



第46图 1号横穴出土土器实测图 (1/3)

## 2) 2号横穴 (図版24・25、第43・48図)

1号横穴のすぐ南にあり、それと主軸方位を異にするが、比較的近い。これも未盗掘墳である。

### 墓道

5 m弱の長さを有し、床面幅は1.4m前後と広い。縦断土層の観察では、上段が崩れた閉塞石直上および閉塞石下段付近に黒色系の埋土が2層かんでいる。閉塞石基底は、1号横穴同様の灰黄褐色の締まった土が包むように盛り上げられており、黒色系土層の間には地山土が入っていた。これは単なる前面上方の崩落堆積か、あるいは追葬の痕跡を示すものかも知れない。

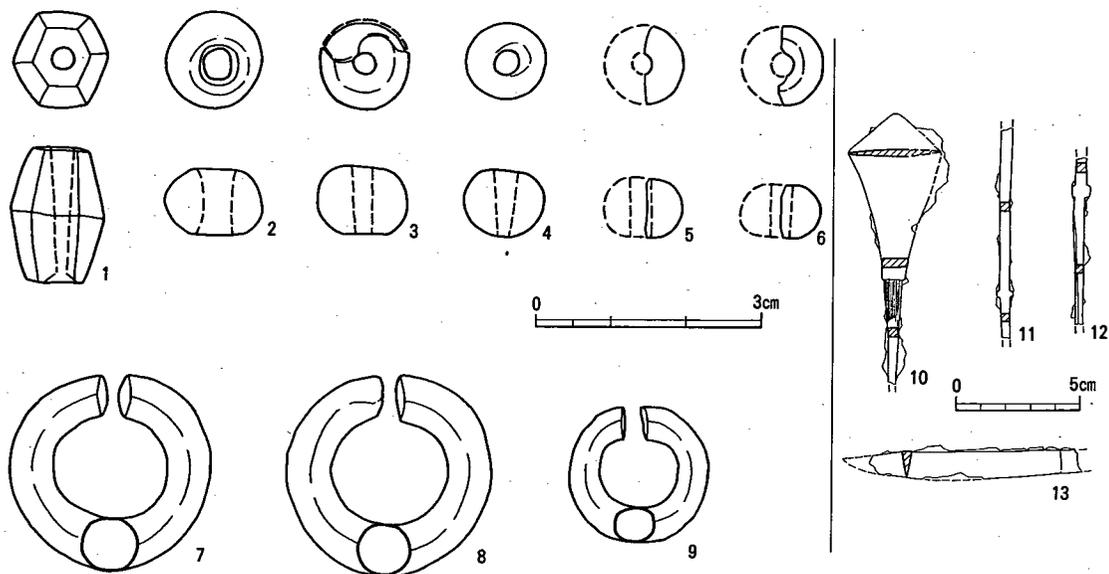
### 閉塞

これも敷石前端から羨道部にかけて、川原石を積み上げて閉塞を行う。基底部に比較的大型の石材を使用する点も1号横穴等と共通する点である。

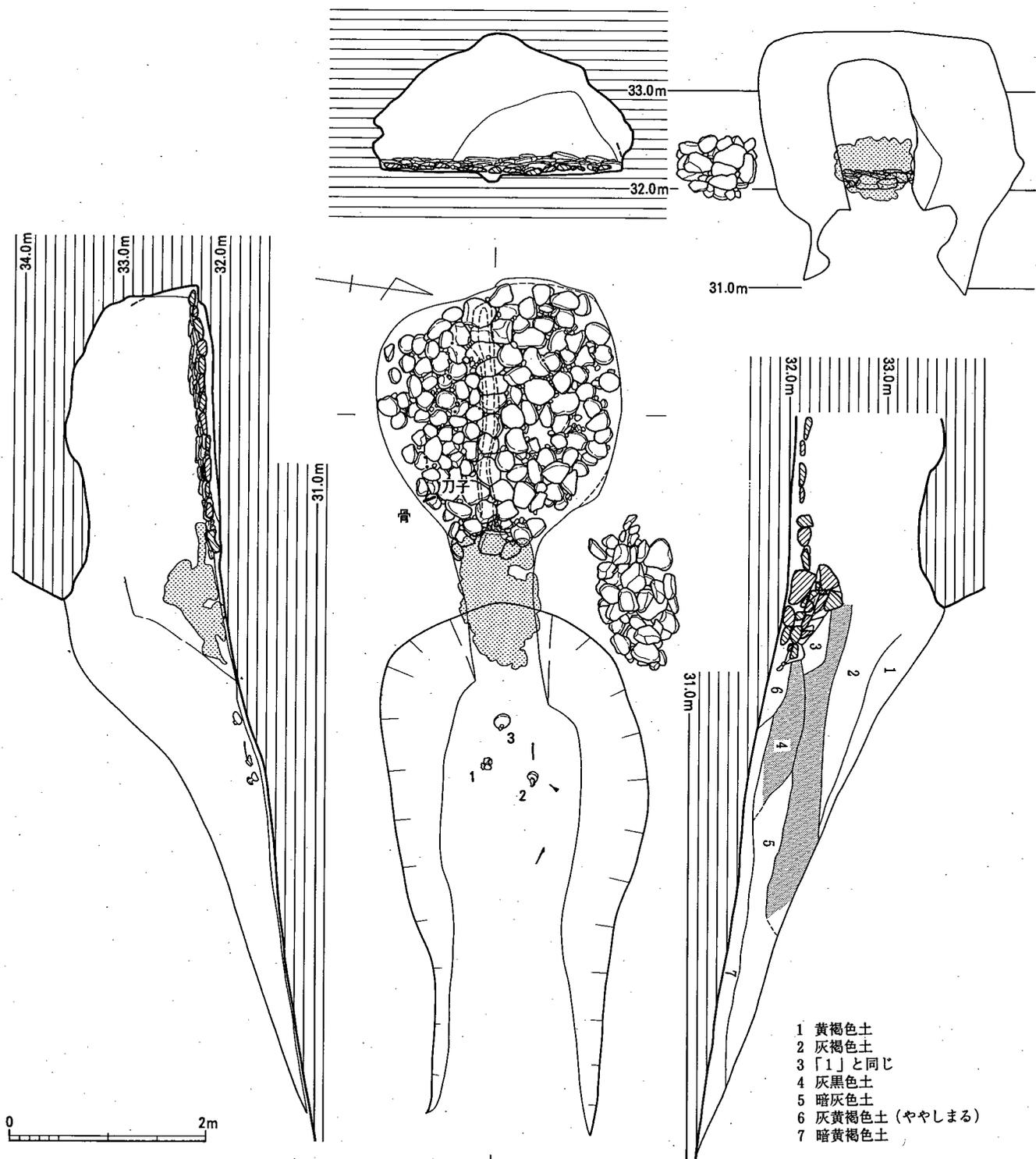
### 主体部

玄室は、長さ約2m、幅2.5mの不整円形という様な平面プランを有し、天井は大きく崩落する。崩落後の高さは約1.4m。床面はほぼ全面に扁平な川原石を敷き詰め、間隙に小礫をつめる。なお、中央付近に、幅0.15m、深さ0.1mの排水溝が設けられている。

羨道部は左右が不揃いであるが、およそ長さ1.5m前後の規模で、幅0.7~0.9mとやはり玄門



第47図 2号横穴出土玉類・鉄製品実測図 (1/1、1/3)



第48図 2号横穴実測図 (1/60)

部が最も広い。高さはこれも本来の規模は不明であるが、床上1m付近の壁面にほぼ水平に走る剥離界が観察でき、それほどの高さを有していたものかも知れない。

### 遺物

主体部内から玉類、耳環3点、刀子が、閉塞前面で平瓶、高杯、鉄鏃などが、図のような状態で出土した。

#### 玉類 (図版63、第47図)

1は水晶製切子玉で、白濁しあるいは石理が入るなど材質は不良。孔尻は孔の周縁が摺鉢上に窪む。それ以外はガラス玉で、これも風化が進む。残りのよいものはやはり硬玉状で、風化したものの一部は表面が銀化する。

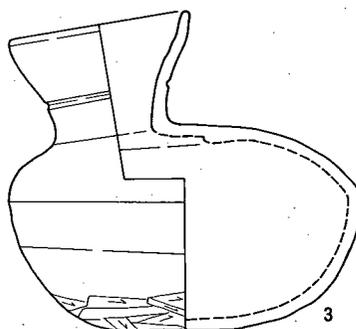
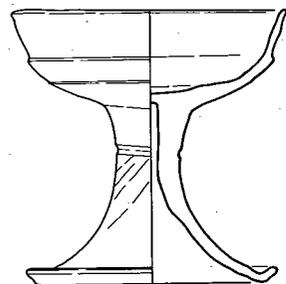
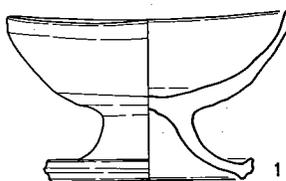
#### 金属器 (図版63、第47図)

7~9は耳環で、7・8はセットであろう。いずれも緑青が著しいが、7には一部に金が見える。9は小型で、緑青が多く吹き、地色は見えない。銀であろうか。いずれも中実。

13は刀子で、縁金具が鏤着する。全体が膨らみ、細部ははっきりしない。10~12は墓道出土。10は錆のため膨らむ。図示した以外にも茎小片が若干あり、数本の鏃が置かれていたようである。

#### 土器 (図版63・64、第49図)

いずれも須恵器。1は口縁部の一部を欠く。口縁部が小さく直立するように造作されるタイプで、焼きが甘い。2は脚端部を一部欠損する。非常に焼きがよく、杯部内面に自然釉が溜まっている。3は「2号墳墓道」と注記がなされるが、おそらくこの横穴出土と思われるもの。口縁部のほとんどを欠くが、体部は完存する。口縁部は直立し、頸部には沈線を1条付す。体部は底部付近を不定方向の篋削りで、以上を細密なカキ目で仕上げる。



第49図 2号横穴出土土器実測図 (1/3)

### 3) 3号横穴 (図版26・27、第43・51図)

2号横穴の南に隣接し、ほぼ主軸を等しくする。1～3号横穴は、主軸方位が近く、規模も相似たものであり、造営主体間に近い関係を想定できる。これも未掘。

#### 墓道

他の横穴のように羨道部がはっきりとしないが、右壁で観察できたわずかな剥離の違い、および閉塞石の状況から判断して、閉塞石前端からが墓道と認識されていたようである。その場合の墓道の長さは約3.6mとなる。

縦断土層の観察では、閉塞石最上段付近に黒色系の土層が覆い、以下では3層に分層しうる。いずれも閉塞側が高く、再掘削された痕跡は認められない。

#### 閉塞

川原石を積み上げたもので、基底部長1.4m、高さ約1mが残存する。断面形状は三角形となり、特に前面(墓道側)では本来の状態をよく残しているものと思われる。基底部分には大型の石材が使用されていない。

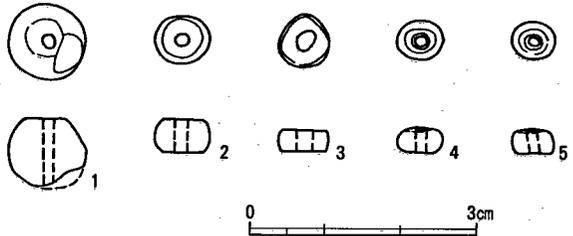
#### 主体部

玄室は長さ2m、幅2.1mほどの不整円形の平面プランを有し、天井の大部分が大きく崩落する。崩落後の天井高は約1.6mほどである。床面は、他と同様に排水溝は見られなかった。扁平な川原石を敷き詰め、その間隙に小石を置く。

先述したように、羨道部は天井が大きく崩落し、かつ床面プランも墓道と連続的で判然としない。閉塞石が積み上げられた範囲を想定すれば長さ約1m、幅0.7mほどとなる。

#### 遺物

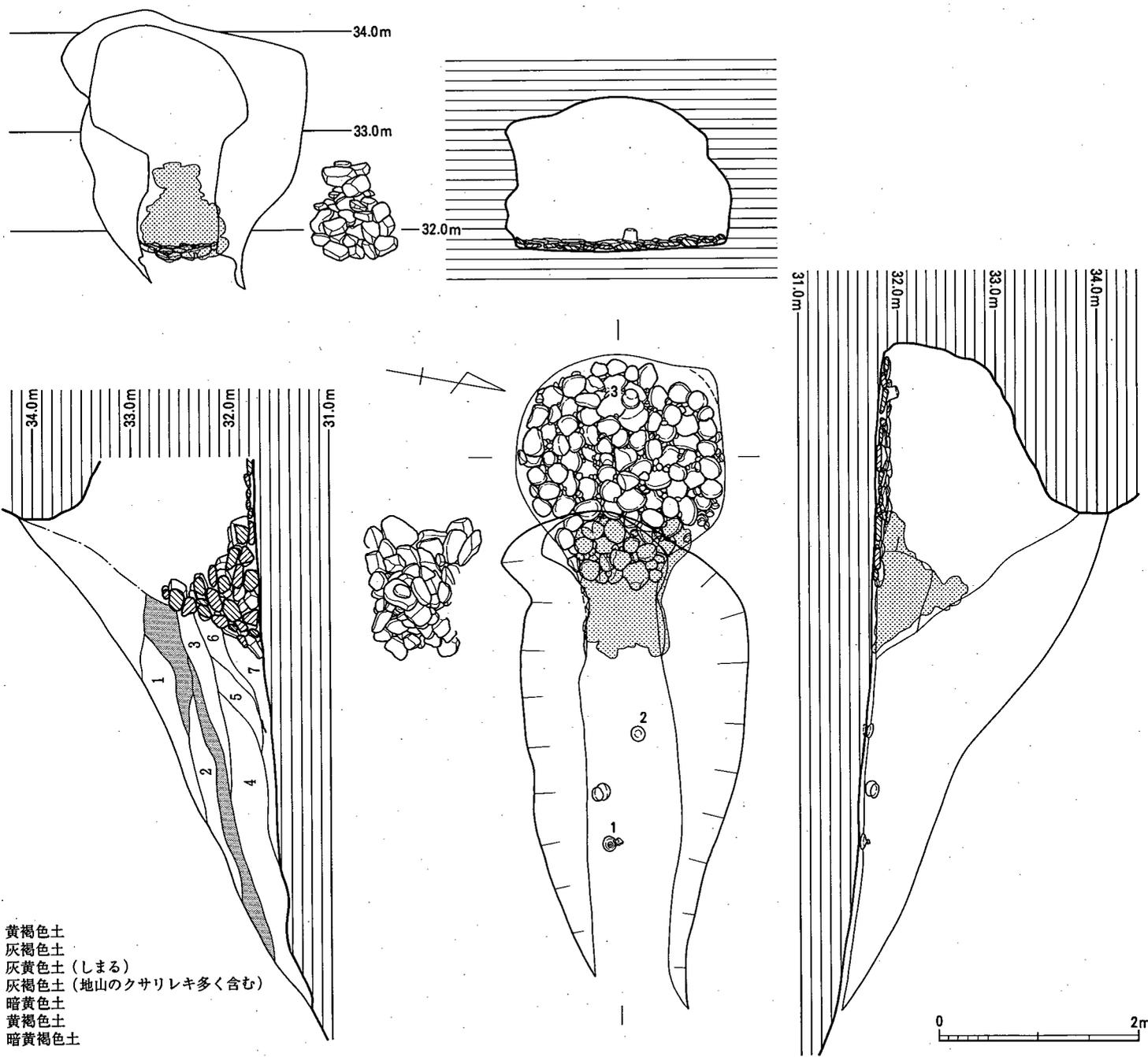
主体部から玉類が若干と土師器甕が、墓道から土器類が出土するが、墓道出土の完形に図示される土器の行方が判明しておらず、紹介できない。鉄製品は全く検出されていない。



玉類 (図版64、第50図)

1は瑪瑙、その他はガラス玉。瑪瑙は

第50図 3号横穴出土玉類実測図 (1/1)



第51図 3号横穴実測図 (1/60)

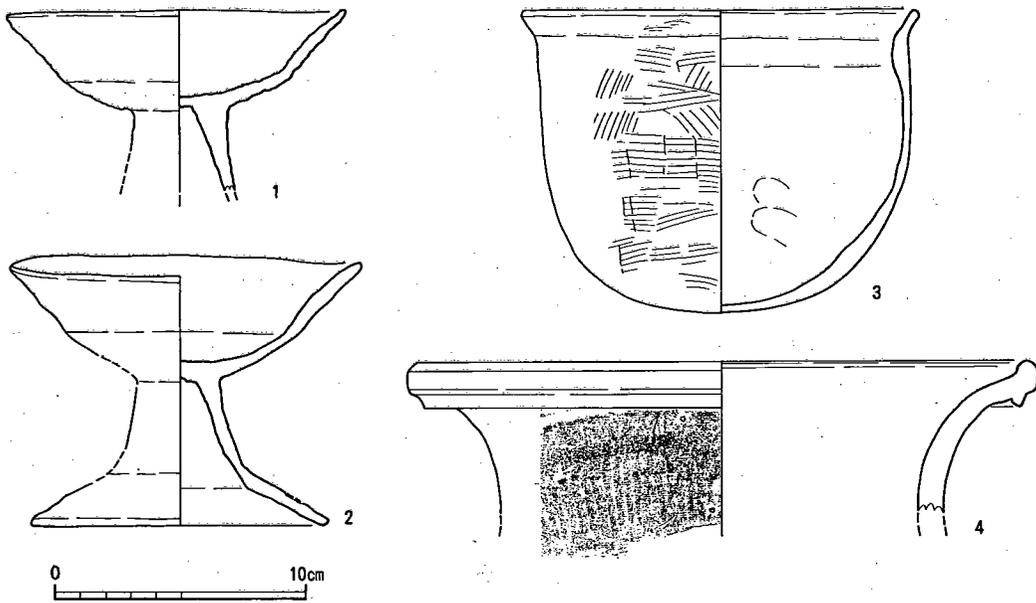
穿孔面の一方が大きく割れており、玉としては不良品のようである。

### 金属器

直径1mmほどの棒状を呈し、芯にごくわずかに緑青が観察できる灰黒色の用途不明の出土品がある。おそらく銅の細線に何かを巻いているのであろうが、長さ5mmほどの小片が3点あるのみで、全体は判らないが、残片は緩く弧を描くようである。

### 土器 (図版64、第52図)

3が玄室で伏せられていた土師器甕で、完存する。外面は縦刷毛の後に横刷毛を、内面の仕上げは丁寧に撫でて行う。焼成は良好で、色調は黄白色から灰黄色を呈する。なお、底部付近に焼成後に開けられた1×2cmほどの孔があるが、意図的なものかどうかは判断できない。1・2は墓道出土の赤みが濃い土師器高杯で、焼きが甘く、器表も荒れる。4も墓道出土で、約1/4が残る須恵器。他に、玄室から出土した須恵器甕辺(ポリ袋1)が5号横穴墓道出土土器と接合しているが、資料の紹介は5号横穴の項で行う。



第52図 3号横穴出土土器実測図 (1/3)

#### 4) 4号横穴 (図版28~30、第43・53図)

先の3基の横穴と主軸を大きく違える。墓道を埋め尽くすように大量の土器片が出土した例は、今回調査した中で唯一である。玄室は未盗掘。

##### 墓道

閉塞石前面床に、約0.2mの段があり、そこから前端までの長さは約4.8mである。

縦断土層の観察では、閉塞石上端から墓道埋土中位付近に黒色系土層が観察できるが、その下は床面までびっしりと破碎した土器片が入っていた。この土器層の土層観察は行っていないが、他の例では最下層には主として地山の崩落土が入る例が多く、ここでも特殊な土は確認されておらず同様と思われる。したがって、埋葬後、閉塞石を土で覆い込んだ後、破碎した土器などをここに放置したものと考えられる。

##### 閉塞

羨道部前半部に川原石を積み上げて閉塞する。現状では、長さ1.8m、高さ0.8mの規模であるが、敷石上の石材の多くは崩落したものと思われ、本来は敷石前端から積み上げられていたものであろう。

##### 主体部

玄室は長さ1.6m、幅約2.2mの横長の隅丸長方形に近い平面プランを有する。この種の形態は今回調査を行った中で唯一である。天井部は大きく崩落する。

敷石は奥壁部分や隅付近で略されているが、石材や用法は他と同じである。

羨道部の長さは左右で若干異なるが約2.2mを測り、玄門幅0.9m、羨門幅0.6mで、平面は直線的である。天井部は大きく崩れるが、現状での高さは1mである。

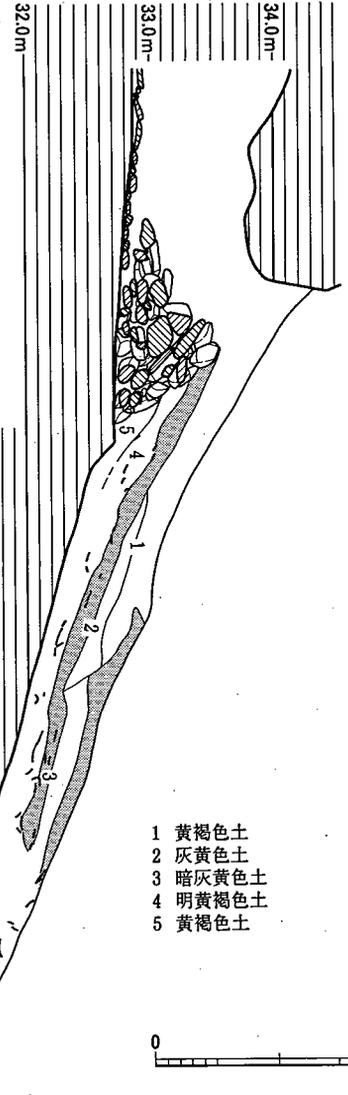
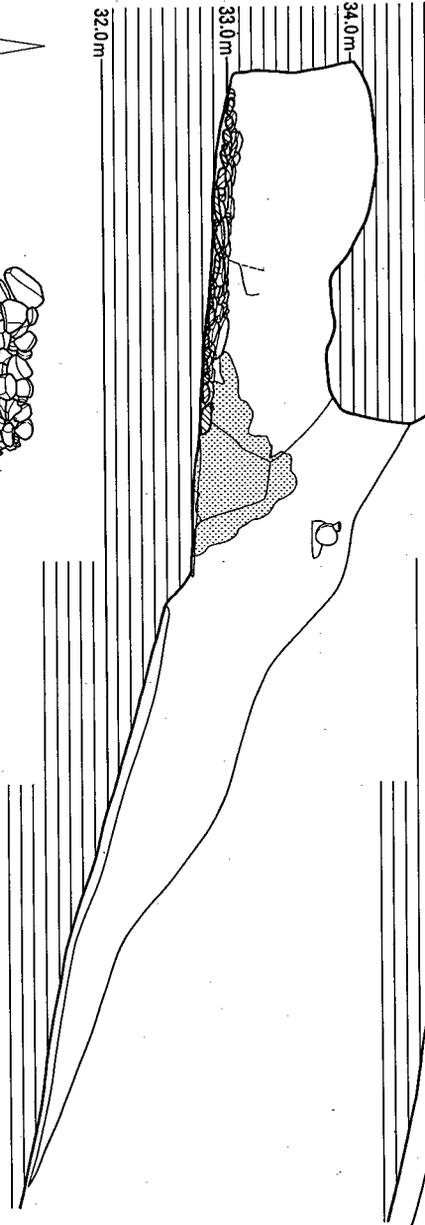
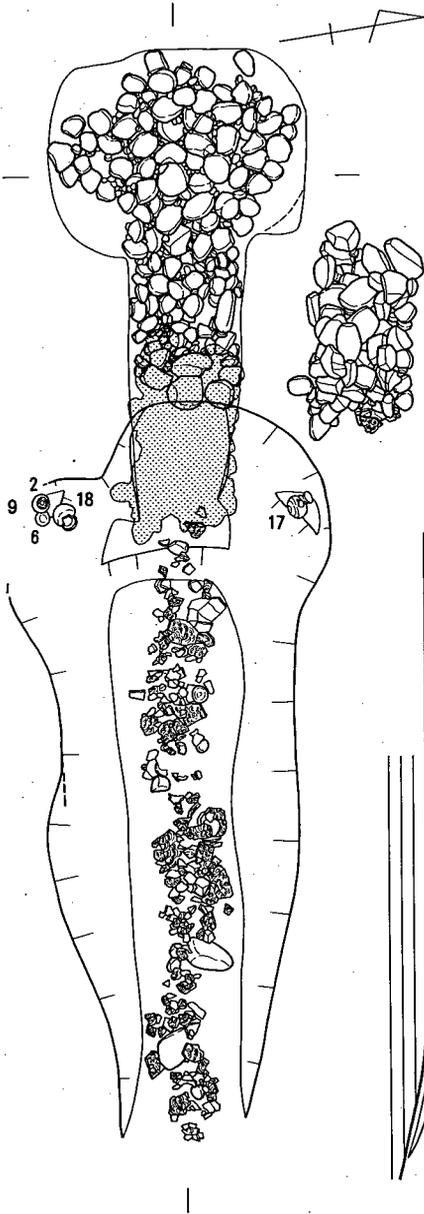
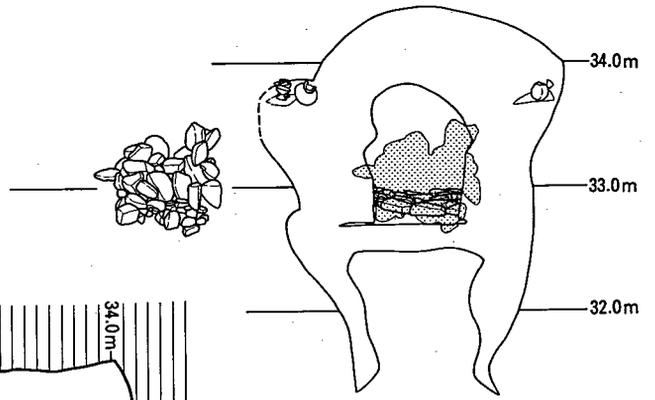
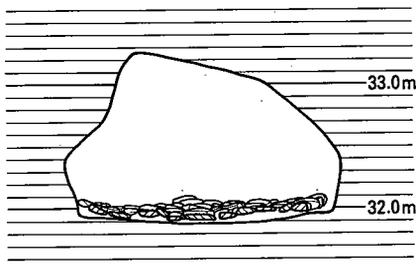
##### 遺物

主体部は無遺物であったが、墓道から多くの土器が出土した。鉄製品はない。

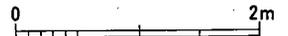
墓道出土の土器は、主体部入口の左右に設けられたテラス上に置かれたもの(17・2・6・9・18)と、墓道床面付近に積み重なったものがある。

##### 土器 (図版64~66、第54~57図)

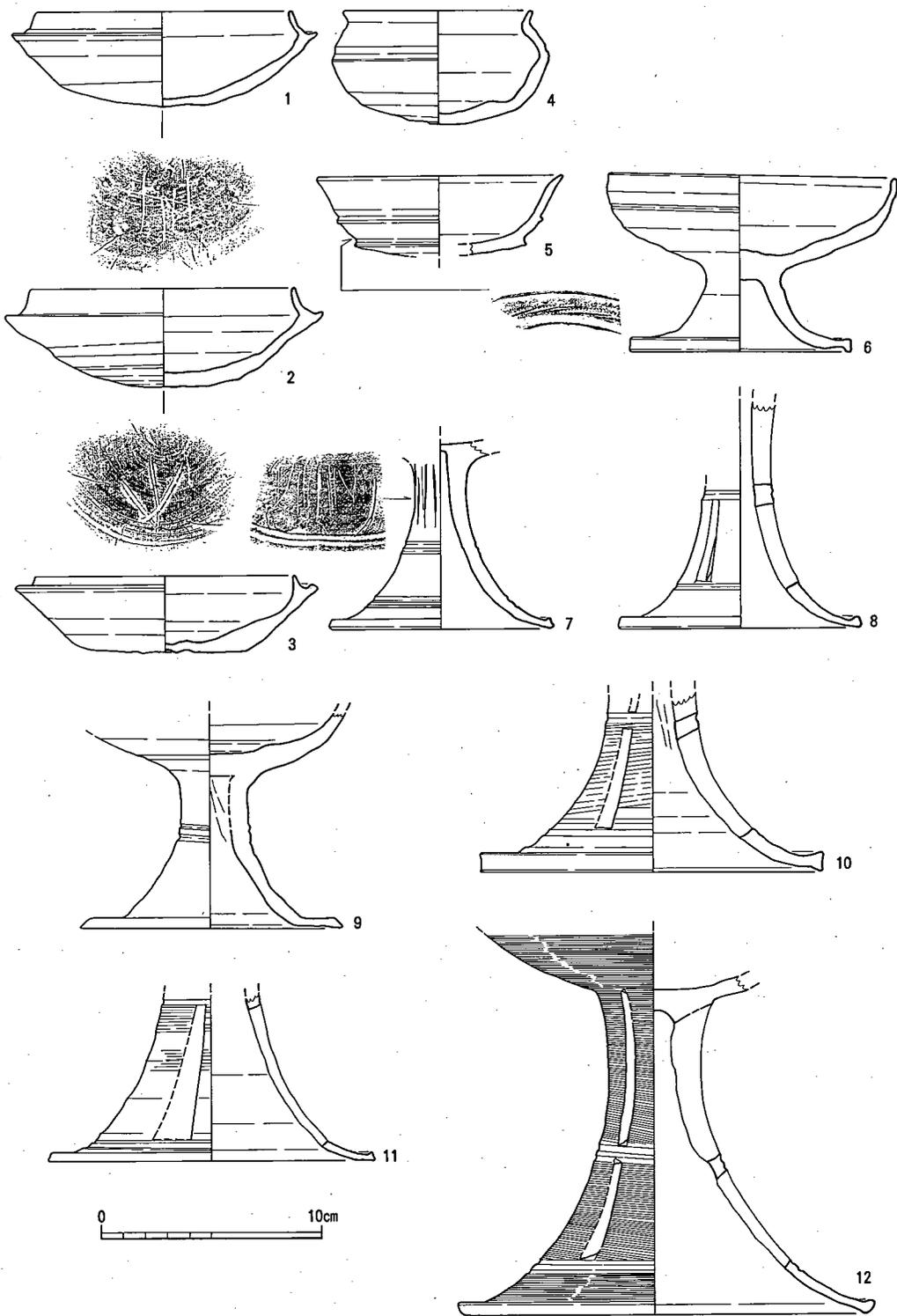
17の提瓶は右側のテラス上にあったもので完形。口縁部がつままれるような形状となるが、装飾はない。体部は全体を繊細なカキ目で覆う。2は9に図示した高杯上に置かれていた埴で完形。外底面は丁寧に篋削りを行う。6はほぼ完形の短脚高杯で、口端部を直立させるように



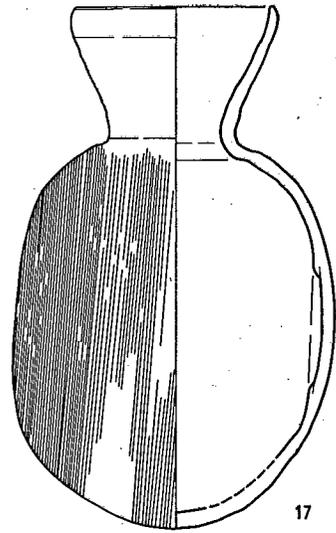
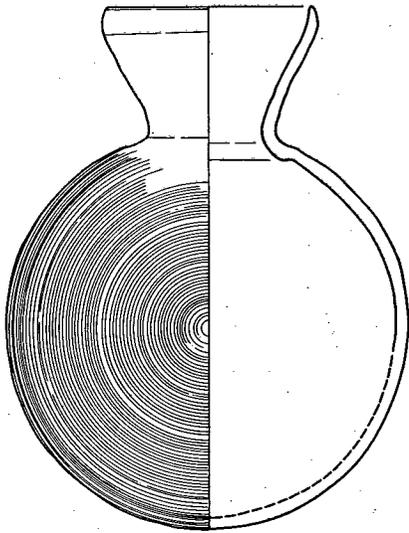
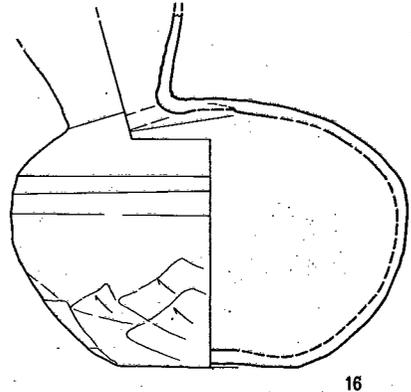
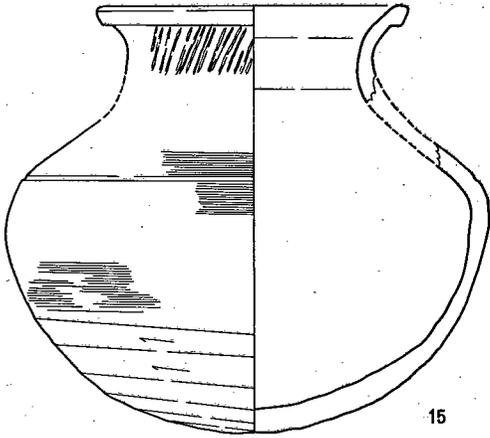
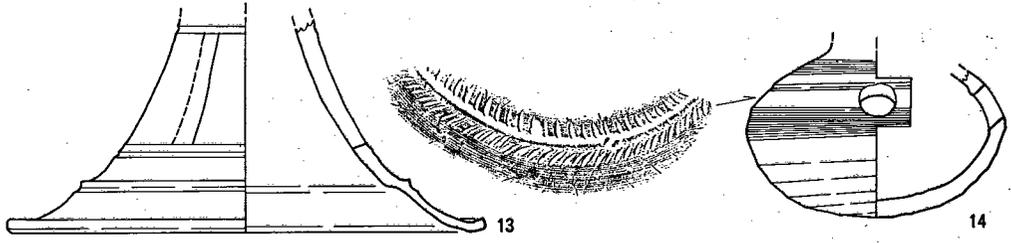
- 1 黄褐色土
- 2 灰黄色土
- 3 暗灰黄色土
- 4 明黄褐色土
- 5 黄褐色土



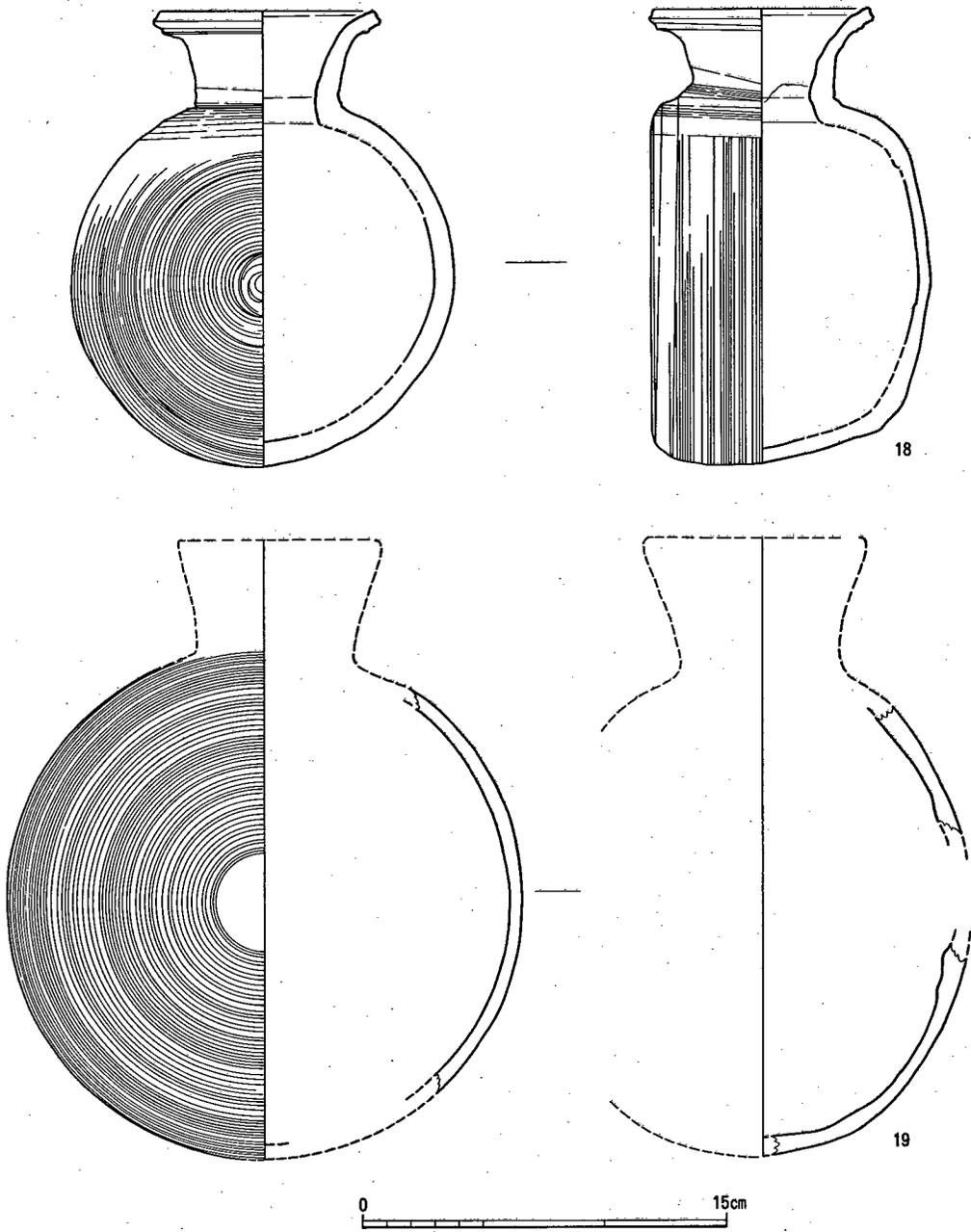
第53图 4号横穴实测图 (1/60)



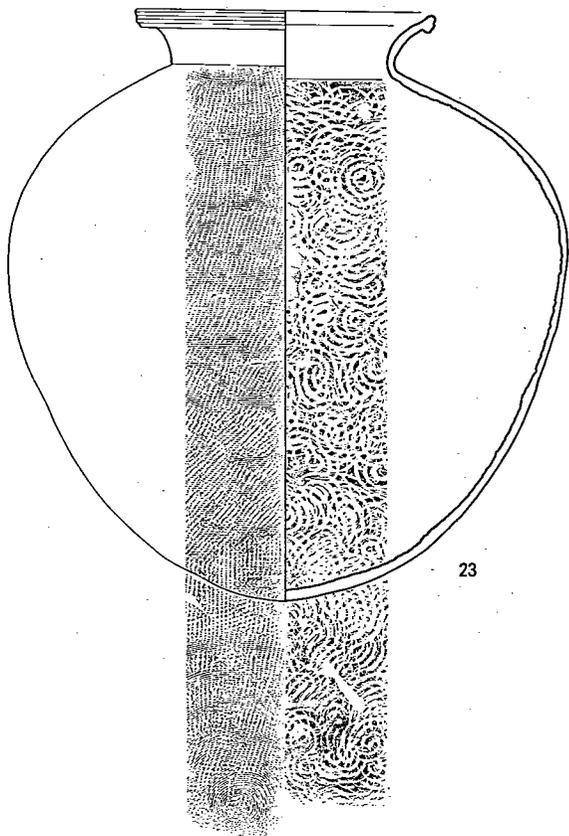
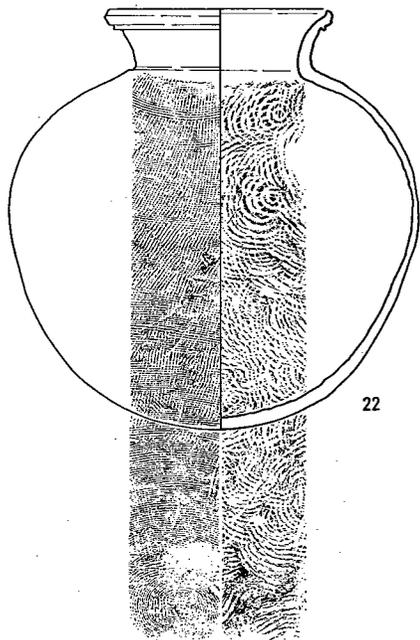
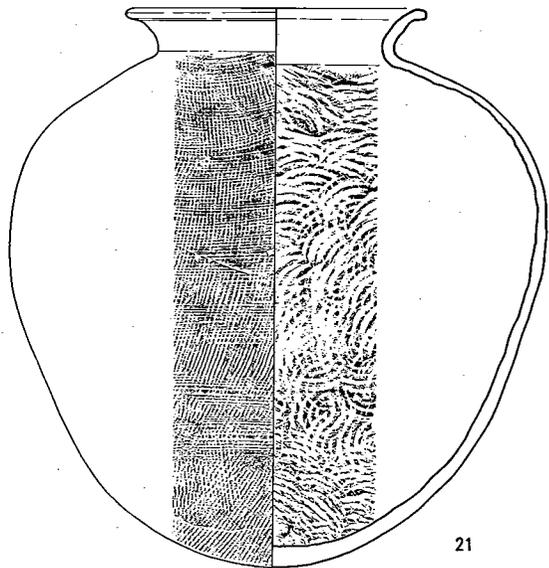
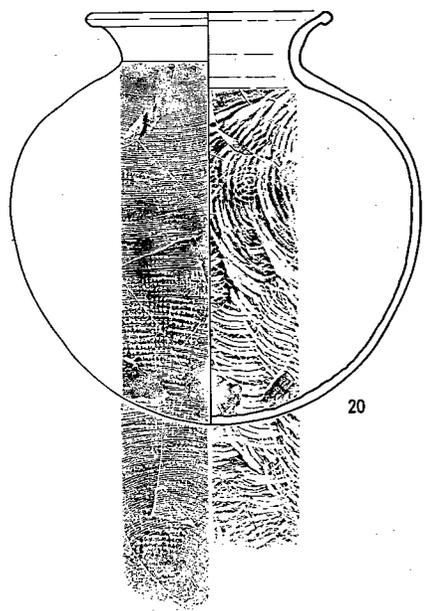
第54图 4号横穴出土土器实测图1 (1/3)



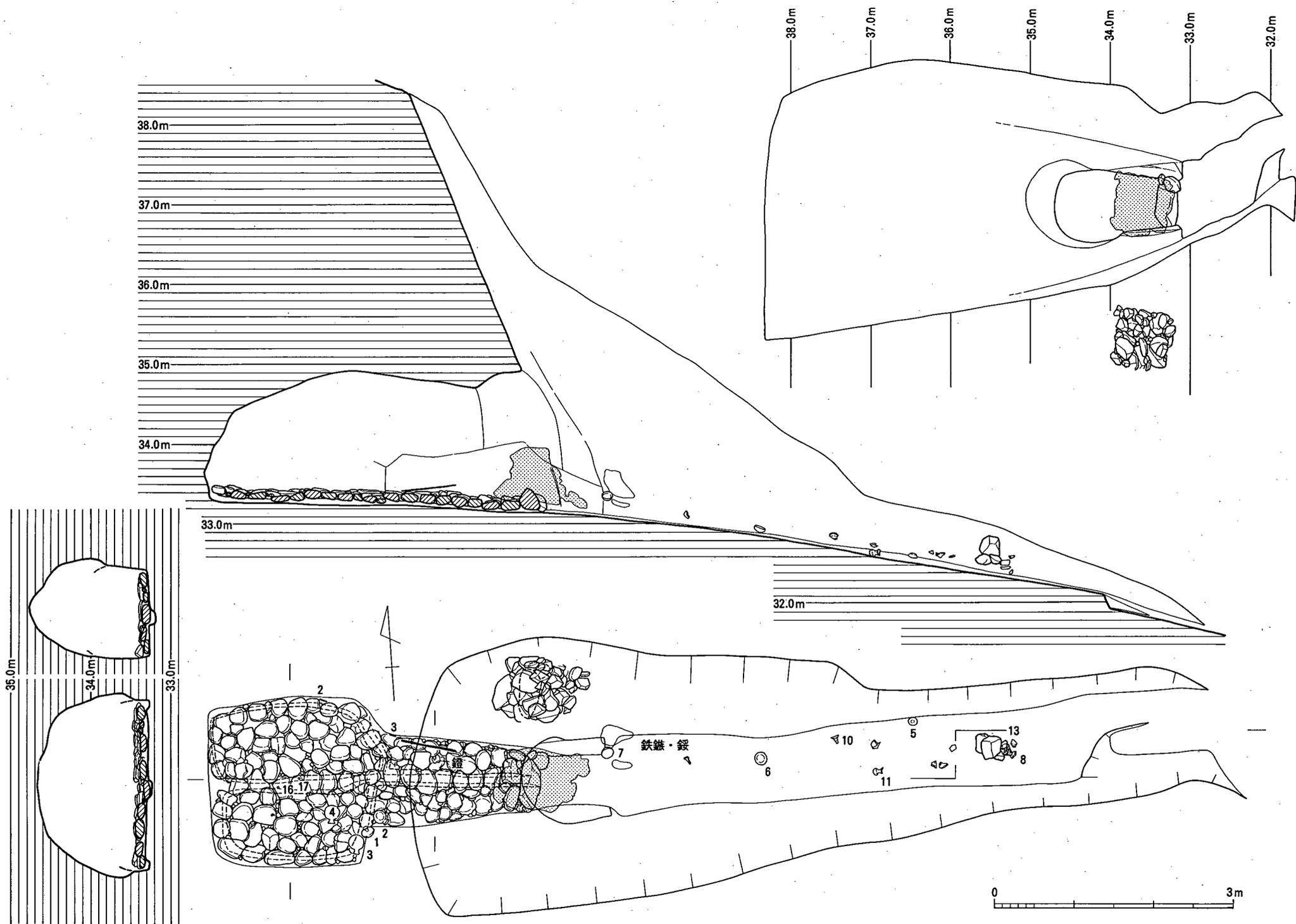
第55图 4号横穴出土土器实测图2 (1/3)



第56图 4号横穴出土土器实测图3 (1/3)



第57图 4号横穴出土土器实测图4 (1/6)



第58図 5号横穴実測図 (1/60)

ある。全体を横撫でで仕上げる。9は口縁部を欠くが、以下はほぼ完存する。焼きが甘く、灰白色を呈する。18は口縁部の一部を欠く。腹部が平らとなり、全面をカキ目調整する。以上の4点は左側のテラスに置かれていたものである。

1～3の杯身は口径12cm前後で、外底面を篋削り調整するというほぼ同様の形態を有する。1・2は生焼けでかつ外底面にはそれぞれ篋記号が見えるなどよく似ている。いずれもほぼ完形で、特に2・3は原形のまま出土した。5は作りがシャープな小片。

7は脚上半に繊細な篋記号が見られる。透孔はない。8は3方に透孔をもつ。細部は甘い。10～13は脚が大きく開くタイプで、前3点はカキ目の使用が顕著である。いずれも透孔は3方。13は脚裾に段を有するが、この部分は踵の口頸部と共通する形態のようである。14は口頸部を欠く踵。肩部に文様帯を有し、体部下半はカキ目の後に篋削りを行う。内底面には当具痕が残る。15は墓道内に広く散乱していた。16は墓道先端部で潰れて出土したが、口縁部を欠く。体部最大径付近を回転の、下半を不定方向の篋削りで仕上げている。19も墓道の先端付近で出土した残片。

20～23は大甕。いずれも細片化し、破片は広範に散乱していた。しかし、21が約1/2を欠く他はいずれもほぼ完形に近く復原できた。

## 5) 5号横穴 (図版31～34、第43・58・59図)

全体規模や副葬遺物の内容は今回調査を行った12基の中では突出しており、盟主的な存在である。未盗掘であった。

主軸は4号横穴に近いが、1～3号および6・7号の各横穴は本横穴に寄り添うようにも見える。

### 墓道

羨門部直前で床面幅が若干広がっており、そこから計測する墓道長は約8mを測る。

また、この横穴は本来の段丘法面を大きく加工しており、その最大幅は3.4m、床面からの高さは5mで、その頂部は段丘肩に及ぶ。

縦断土層の観察では、閉塞石のすぐ上を締めりのない灰褐色土で覆い、さらに外側を軟質で締めりのある黄褐色土で包んでいた。その上方に堆積した土はいずれも地山の崩落土と思われるものである。閉塞石を覆う土層に不整合面は認められず、追葬時に想定される掘り込みを確認できなかった。

### 閉塞

羨道部前端付近に、やはり川原石を用いて積み上げられる。基底には通常の柵石状に大型の石材を横位置で置き、その上に組む。この最下段の図示した石材が、あるいは柵石ではないかとも考えたが、稜線を頂部に配置して置いていることや閉塞石石組の真っ直中にあることなどから、最終的に閉塞の基底と判断した。

また、羨門部外壁には板扉を受けるような彫り込みがなされているが、閉塞石は明らかにその内側にある。

### 主体部

玄室は長さ2m、幅2.1mのほぼ正方形の平面プランを有し、天井部が崩落した状態で1.6mの高さがある。床面中央部に加えて四周にも排水溝が掘られ、敷石前端まで延びる。その上に架けられた石材が並ぶ様や、敷石の構造等は他の横穴と同様である。

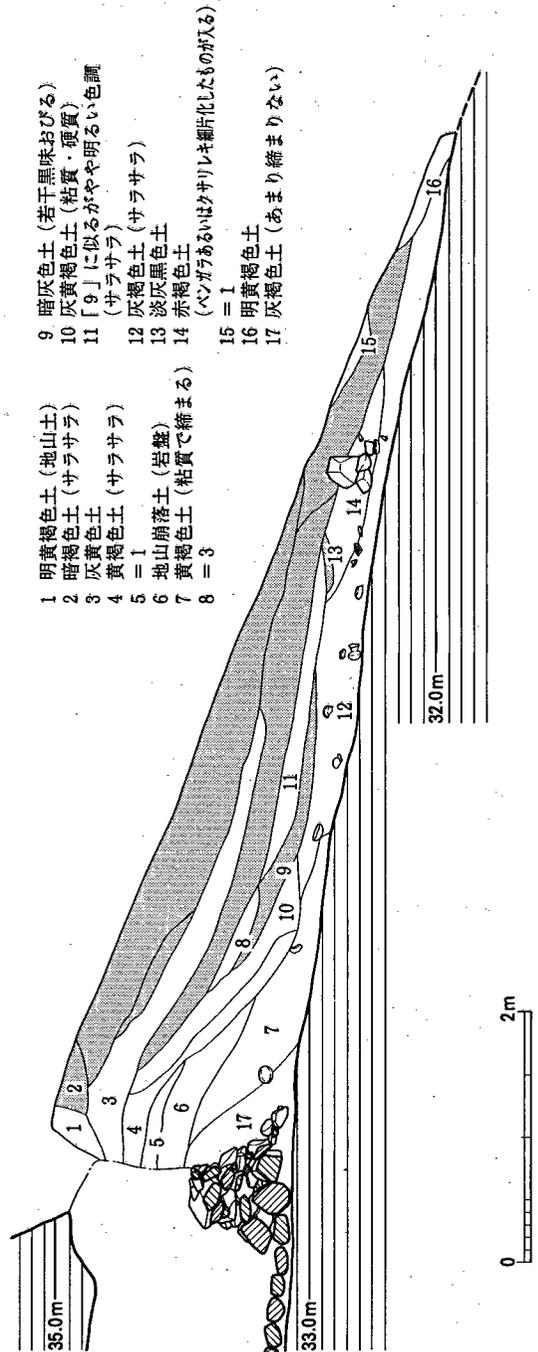
羨道は長さ3mに及び、天井部は大きく崩落して現状の高さは1.6mを測るが、壁面に残る痕跡や閉塞石の高さから、本来は0.8mほどであったと推測される。幅は玄門部で1.1m、羨門部では0.6mとなる。

### 遺物

玄室では、奥壁よりの中央付近で耳環が、左寄りでは勾玉・ガラス玉が、そして右奥でガラス玉が、右手前付近で刀子が出土している。また左手前に集中して土器が検出された。

羨道部では右壁に添って太刀が、中央付近には馬具が置かれており、太刀の近くにも刀子があった。

墓道の最奥部、羨門手前の右側では床から10



第59図 5号横穴墓道縦断土層実測図 (1/60)

～60cm浮いた位置で鉄鏝が集中して発見された。切先の確認を行っていないが、あるいは矢筒に納めたまま供献されたものかも知れない。土器類の多くは墓道前半の床面近くから出土した。

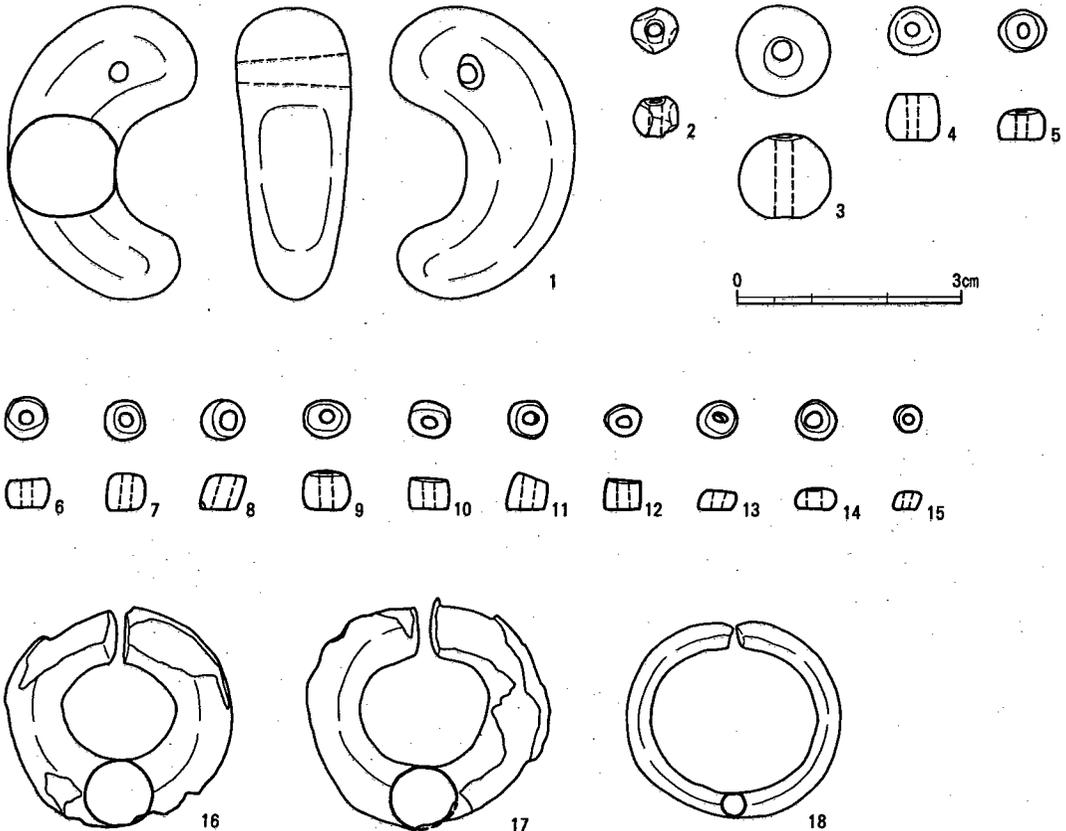
また、この横穴と他の遺構から出土した土器のいくつかが接合しており、その資料もまとめて紹介する。

玉 類 (図版67、第60図)

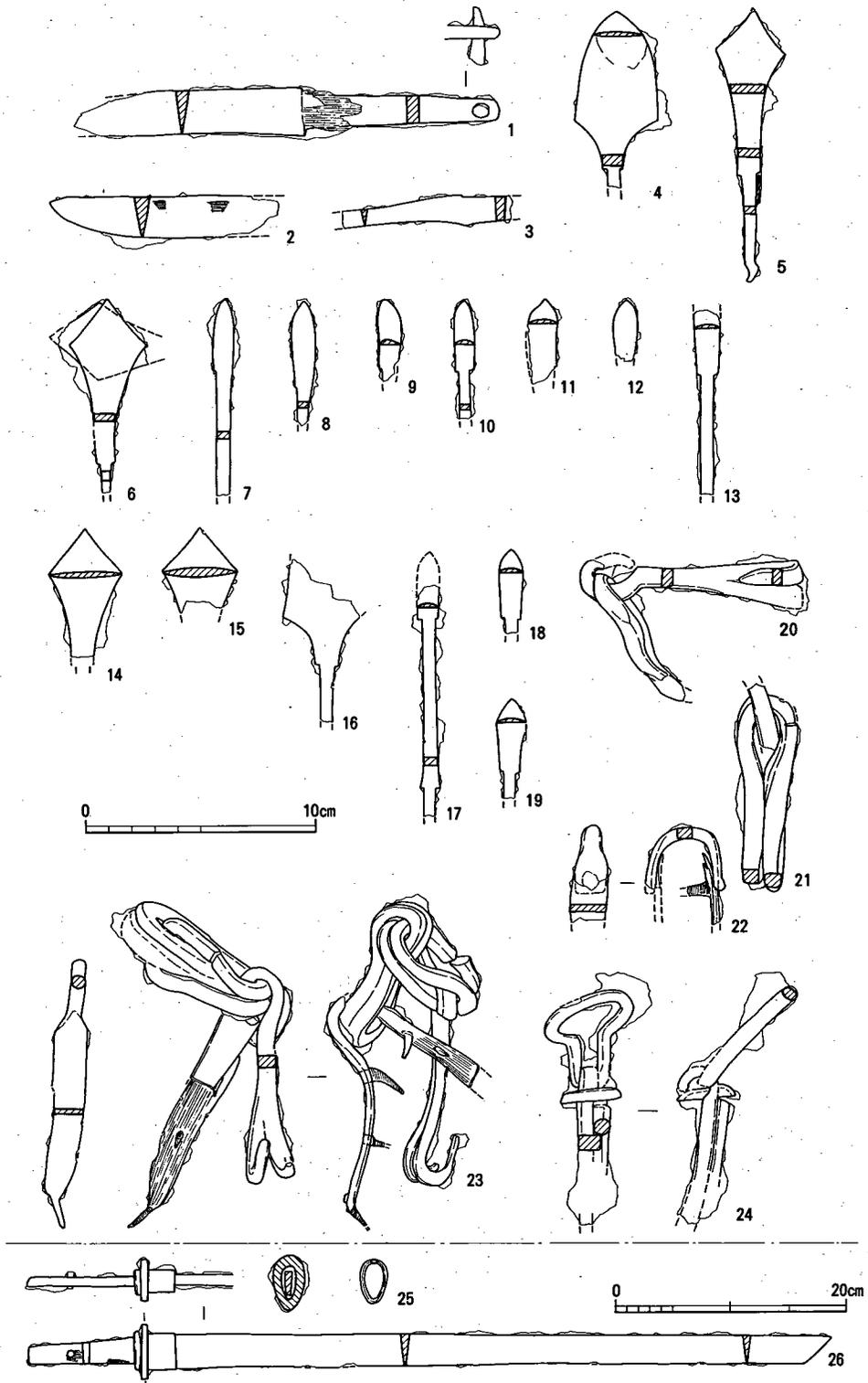
1は硬玉製の勾玉で、緑味は弱く、白色部分が多い。2は瑪瑙製丸玉。3以下はガラス玉。3は気泡を多く含む淡緑色透明の整った球形となる。小玉は1点が黄緑の他は青・紺系統に発色するが、濃紺色ものは両小口の角が鋭利な感じになるのに対して、薄い色ものはそこがより丸みを帯びる傾向があるようである。

金属器 (図版67・68、第60・61図)

耳環が3点出土するが、細身の1点は敷石除去時に検出したらしく、出土位置を確認できない。細身の18は5号墳出土品に似る。大きさも等しく、あるいは本来セットであったものかも知れない。ただ、本例の出土位置が特定できないことや両遺構番号が同じであり、整理時に混



第60図 5号横穴出土玉類実測図 (1/1)



第61图 5号横穴出土鉄製品実測图 (1/3、1/6)

入した可能性を完全には排除できない。16・17はセットとなるもので、いずれも表面が非常に荒れる。全体に緑青が吹くが、両者とも金・銀は見えない。ともに重量感があり、中実である。

刀子は3点出土している。1は出土地点が記録されていないが柄の残りがよく、目釘が残存する。3は研ぎ減りのためか、身が細い。

4～13は墓道出土鉄の内、高い位置にあったもので、14～19はその下位にあったもの。本来分ける必要はないのであろう。これらも銹化のために関や篋被が判然としないものがある。

20～23は羨道部から出土した鎧で、20～22は連結していたもの。鎧部分の補強材は長さ7cm、幅1.5cm、厚さ3mmほどで3個の鋸が見える。上部に2連の兵庫鎖を介して通常カコとなる部分へ連なるが、その先端をY字状に加工して折り曲げている。

24の出土地点ははっきりしないが、調査後の遺物台帳ではこれも墓道から出土したと記録されている。直径2.5cmほどの円盤を介してカコと棒状の金具が連結している。棒状金具は2本が銹着するが、錆が甚だしく細部は確認できない。釵であろうか。

26は羨道部北壁下から出土した太刀。切先を墓道側へ、刃を壁側へ向けて出土した。装着して図示した鍔・縁金具・銀張責金具等の金具はそのままで出土した。また、別図の責金具も銀張で、すぐ横から出土している。全長69.6cm。

#### 土器（図版68・69、第62～65図）

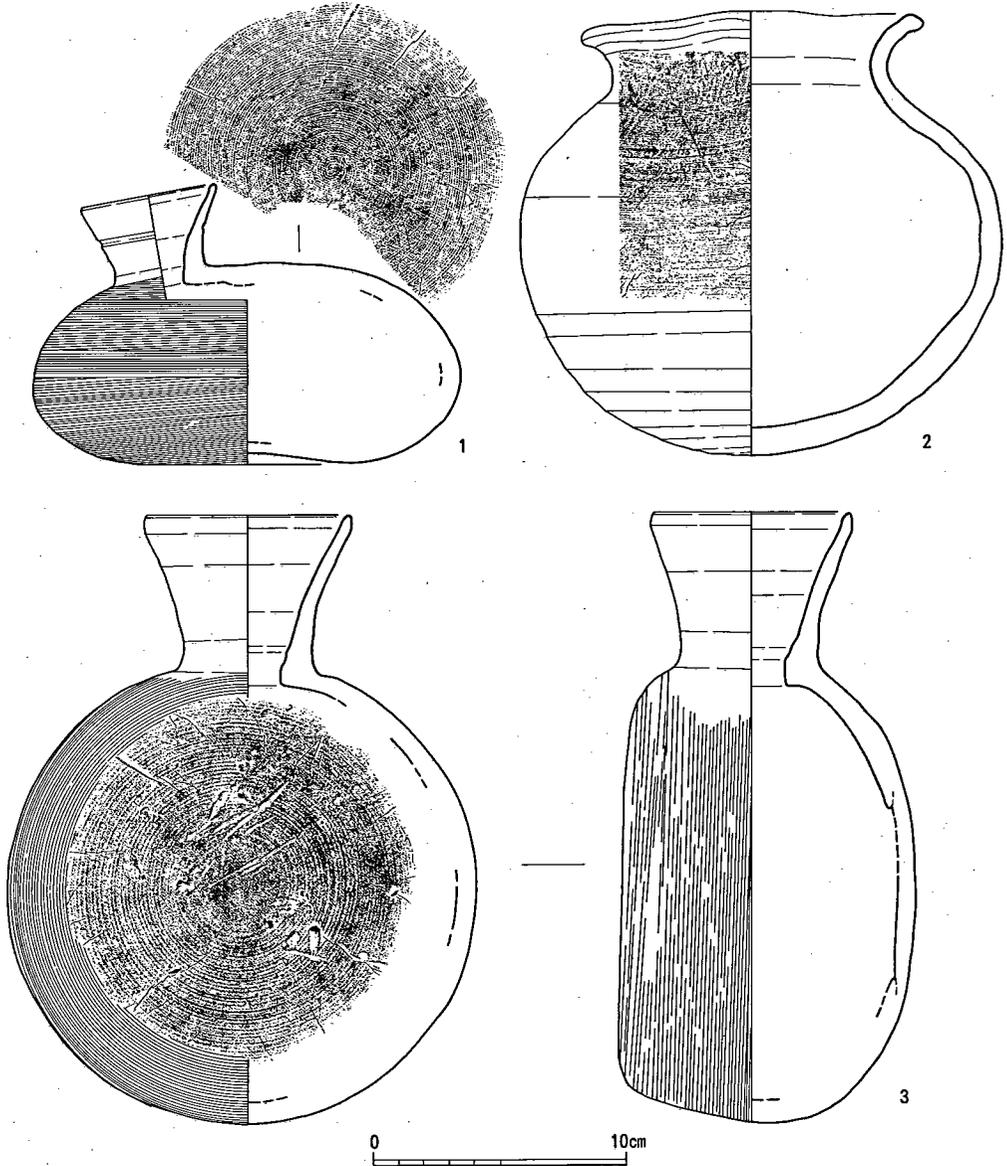
1～4は玄室出土で、4の耳を除いていずれも完存する。1は体部が扁球形となる平瓶で、焼成が甘い。頸部中位の沈線はきわめて甘く、体部は全体をカキ目調整する。2は全体に灰被りし、意図的に行ったものか口縁部が焼け歪む。体部外面は上半をカキ目で、下半を篋削りで調整し、同内面は丁寧に撫でて当て具痕を消して仕上げる。3は体部の全体にカキ目を施す。口頸部も無文であるが、口縁部を小さく直立させる。4は環状の耳を有していた提瓶で、口縁部下端までの全体をカキ目で仕上げる。口縁部は3と同様。赤く焼き上がる。

5・6は口径14cm前後、器高4cm前後の杯蓋。5は天井・口縁部の境が不明瞭で半球形に近く、口端部内面は小さく匙面状となる。黄白色～灰白色を呈する生焼け品で器表は磨滅する。完形。6は口縁・天井部の境が比較的明瞭に見て取れる。天井部で使用される篋削りは非常に丁寧に、全体に作りがよい。これも完形。7は口径13cm、器高4cm強の杯身で、これも完形。作りは丁寧に、6とセットをなすものと判断される。8は3方に透孔を配し、ほぼ全体を細かいカキ目調整で仕上げる。繊細な篋記号が残る。9は無透孔で、沈線を施す。10は長脚2段透孔をやはり3方に穿つ。透孔間および下端に2条1組の沈線を巡らせる。11は口縁部の1/2を欠くがそれ以外はほぼ完存。頸部上半・体部最大径付近に施文し、体部上半をカキ目で、下半を丁寧に回転篋削りする。13は土師器甕の小片。器表が荒れる。

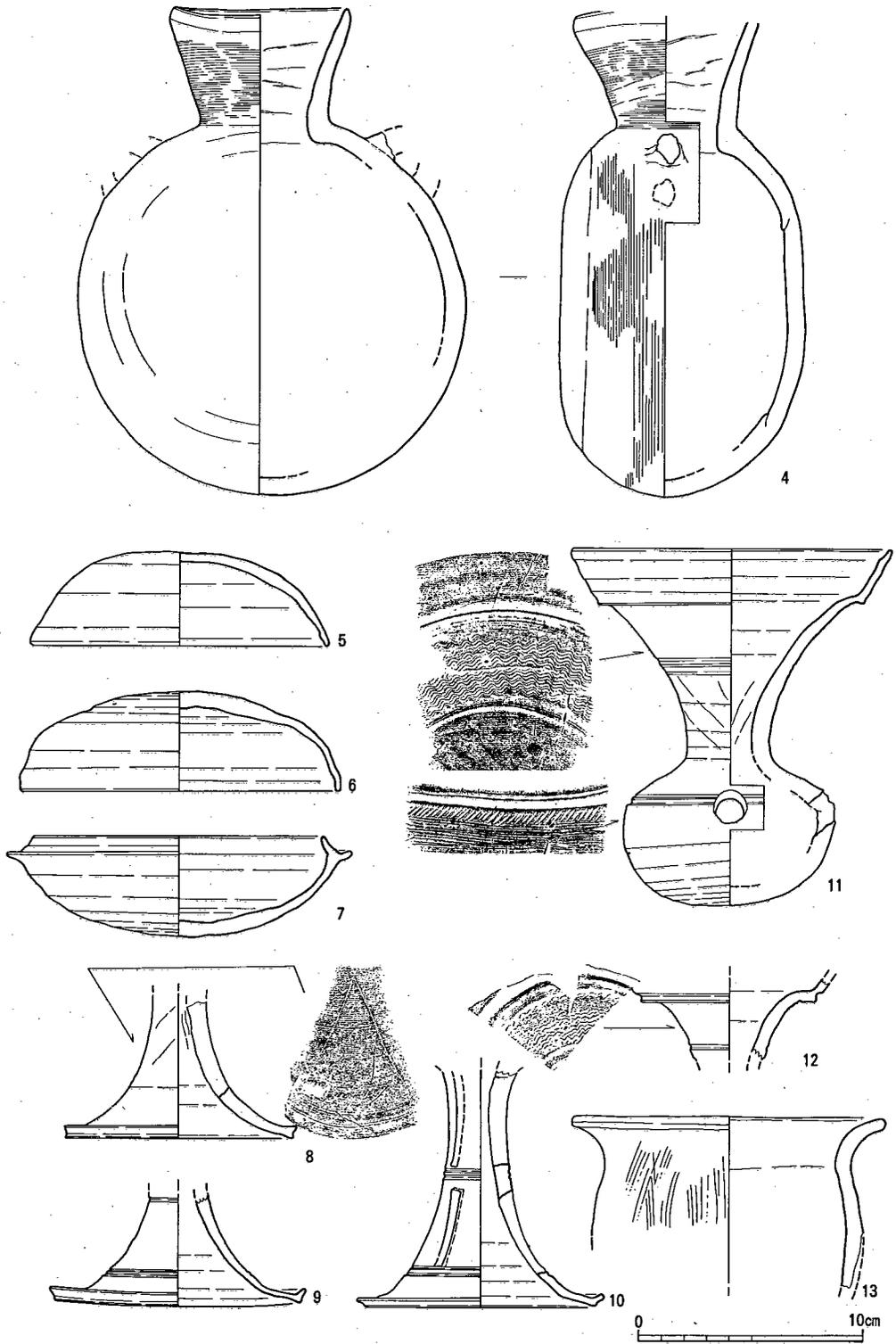
第64・65図に示した土器は複数の遺構間で接合した資料。いずれも5号横穴が加わる。

1は4号墳墓道・4号横穴墓道出土土器片と接合した。杯部中位に櫛描の刺突文が付される。

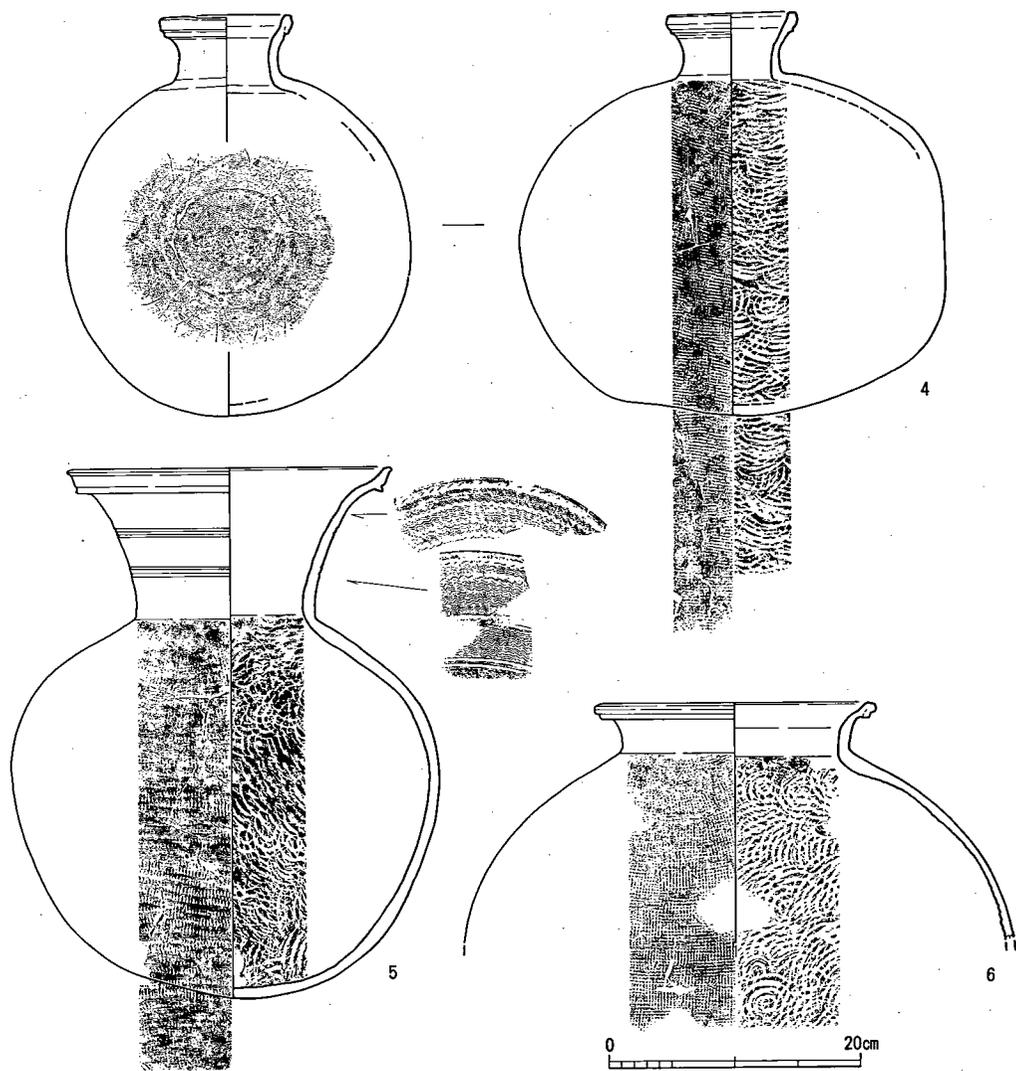
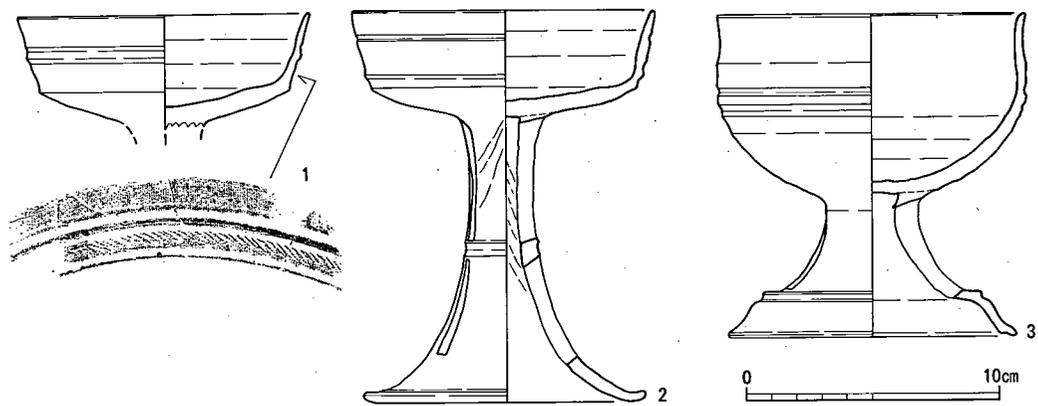
2～6は4号横穴墓道出土土器との接合資料。2は3方2段に長方形透孔を配するもので、脚端部の誇張が見られない。3は大型碗形の杯部をもつ高杯で、脚付碗と呼ぶべきであろうか。口縁部は外彎し、中に沈線を2条付す。脚部は段を有するが、これは甕の口縁部と共通する形態である。なお、長方形透孔が2方に穿たれる。4は横瓶で、整形時の上面を塞いだ付近は特に丁寧なカキ目を施し、その他の部分は叩きの後に雑なカキ目を巡らす。ほぼ完形となる。5は口縁部が発達する壺で、1/2弱が残る。丁寧に作られた土器。6は図示した部分の約1/2が残る。



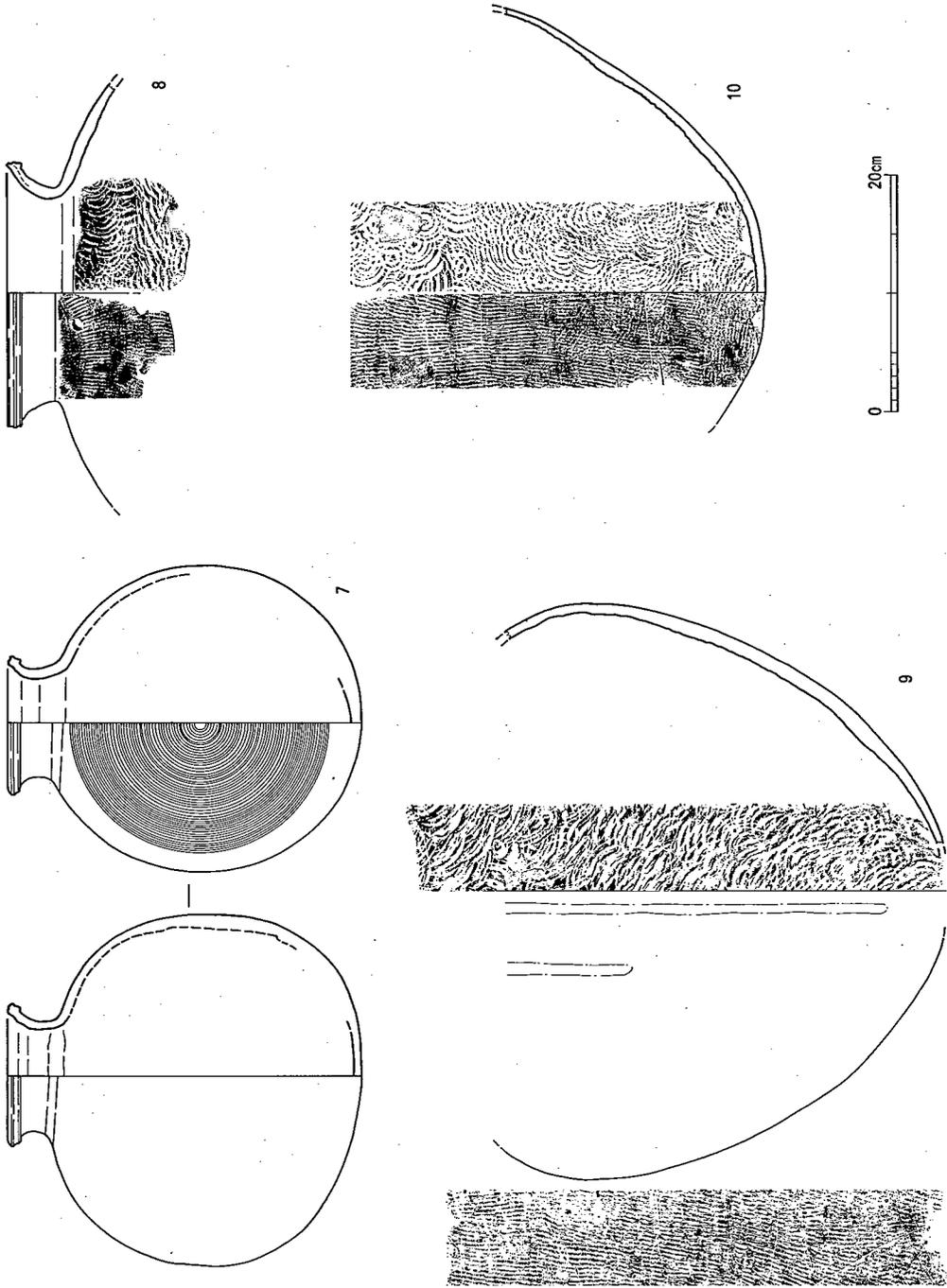
第62図 5号横穴出土土器実測図1 (1/3)



第63图 5号横穴出土土器实测图2 (1/3)



第64图 5号横穴出土接合土器实测图1 (1/3、1/6)



第65图 5号横穴出土接合土器实测图2 (1/6)

第65図7は3号墳祭祀土器群中大甕周辺、同墓道中、2号墳南辺周溝中の資料と接合した横瓶で、体部は球形に近い。口径部は短く、口縁部を加工する。腹部(成形時の下半)は叩きの後に粗いカキ目を施すが、背部は全体をカキ目調整する。ほぼ完形に近い。8は2号墳南辺周溝、同墓道出土品と接合。9は3号横穴玄室出土の土器片と接合したもので、興味ある例である。図示した部分の約1/2が残存する。10は1号墳墓道および周溝出土品と接合したものである。

## 6) 6号横穴 (図版35・36、第43・66図)

5号横穴に寄り添うように掘り込まれた横穴で、これも未盗掘。

### 墓道

閉塞石前面の床に0.05mほどのごく浅い段があり、羨道と墓道を区画している。ここから先端までの長さは約5.6mを測る。

墓道縦断土層の軸の設定が北に寄ったために、閉塞石を覆う土層の連続的観察はできなかった。埋土は黒色系土層が大きく2層に分かれて入っていたが、最下層は地山崩落土と思われるものであった。

### 閉塞

羨道部のほぼ全面に川原石を使用した閉塞石が広がるが、高さが低いことから崩落したものと思われる。羨道中程に0.1mほどの段があって、その直前に比較的大型の櫛石状の石材が置かれている。おそらくこの石材が閉塞石の玄室側先端を示すのであろう。なお、櫛石状石材付近の両側壁直下に図示した溝状の掘り込みは発掘ミスのようなものである。

### 主体部

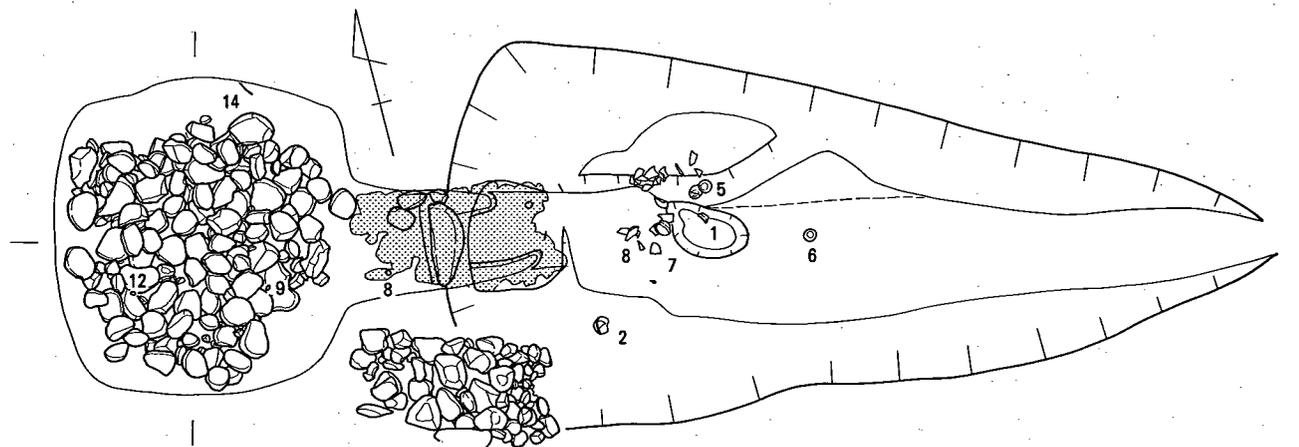
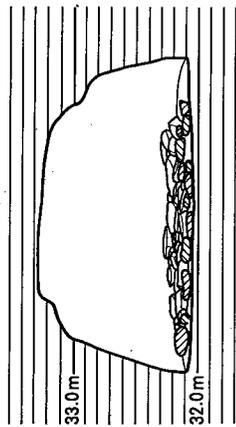
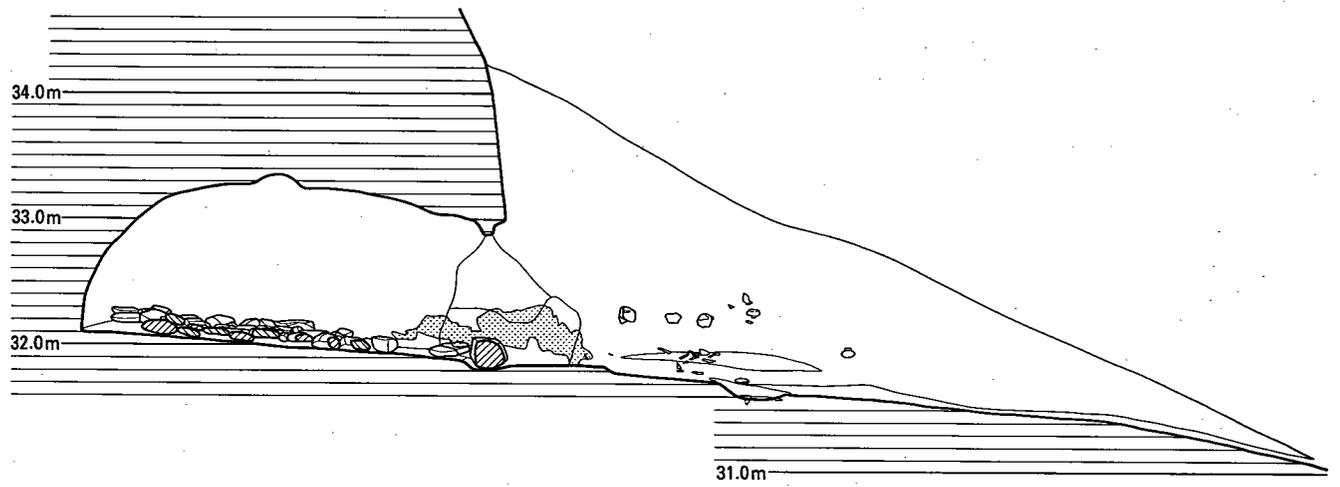
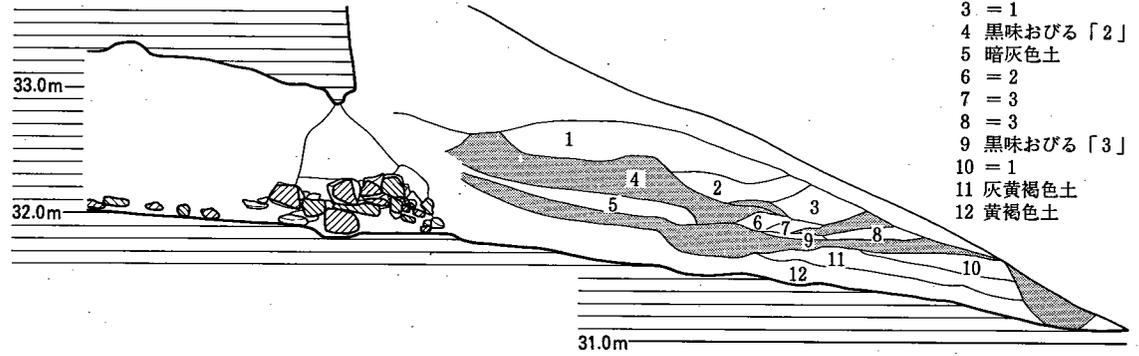
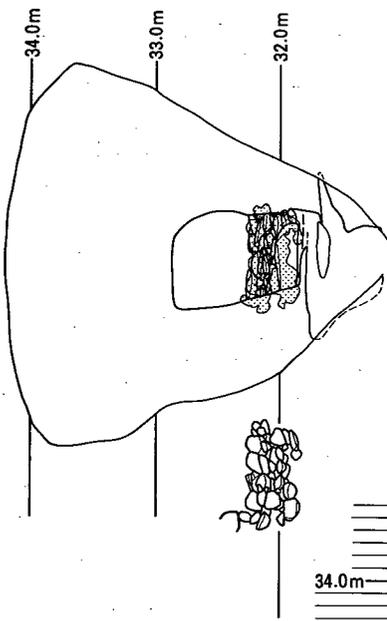
長さ2.4m、幅2.5mを測り、ほぼ正方形の平面プランとなる。天井部は比較的崩落が少ないようで、高さ1.3mとなるが、やはり本来の高さは判らない。

床面には川原石を敷くが、周壁近くに及ばず、他例のように小石を間隙に積めた状況もない。粗雑な感じを受けるものである。

羨道部は、閉塞石前面の小さな段までで長さ1.6mを測り、幅は0.8~1mでやはり玄門部が広い。その中程に段があることは先に触れた。

### 遺物

主体部内では耳環6点が分散して敷石上あるいは石間で、玄室右壁下で刀子がそれぞれ検出



第66図 6号横穴実測図 (1/60)

された。耳環の3点は敷石除去に際して発見され、場所の特定はできていない。

墓道から土器とともに3点の鉄製品も出土するが、多くは床から浮いた状態であり、かつ散乱するといった状態であった。

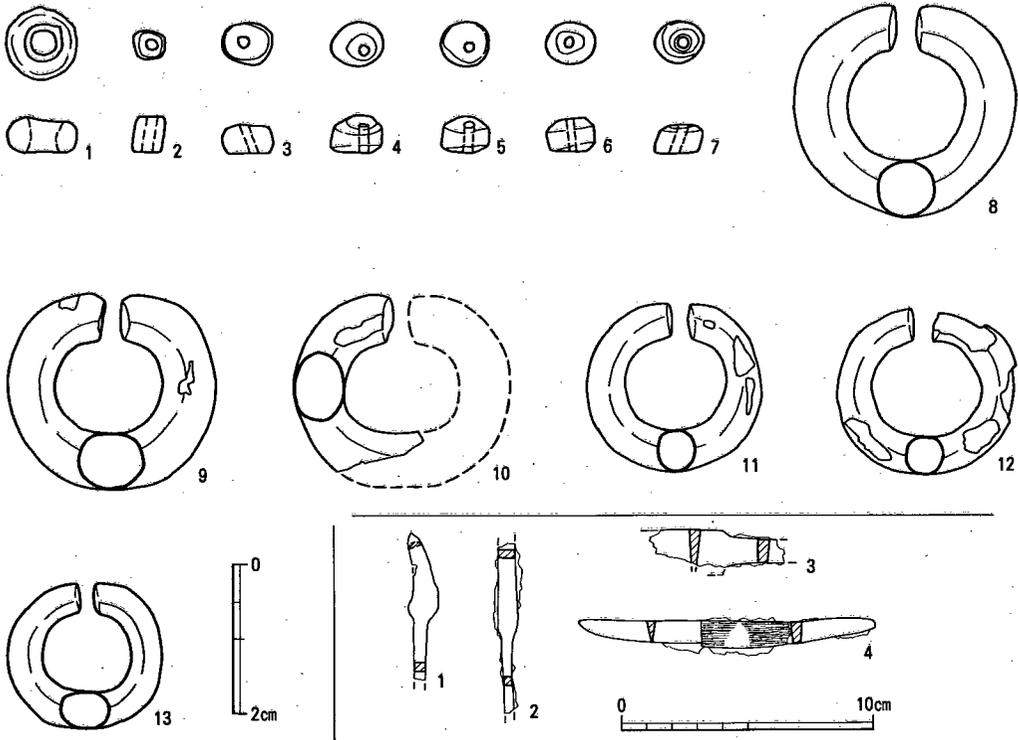
**玉類** (図版70、第67図)

7点出土する。1・2はガラス玉で、1は表面が風化する。おそらく本来は硬玉に近い発色をしていたものであろう。2はコバルトブルーに発色。3～7は土製の玉で、灰黒色を呈する。

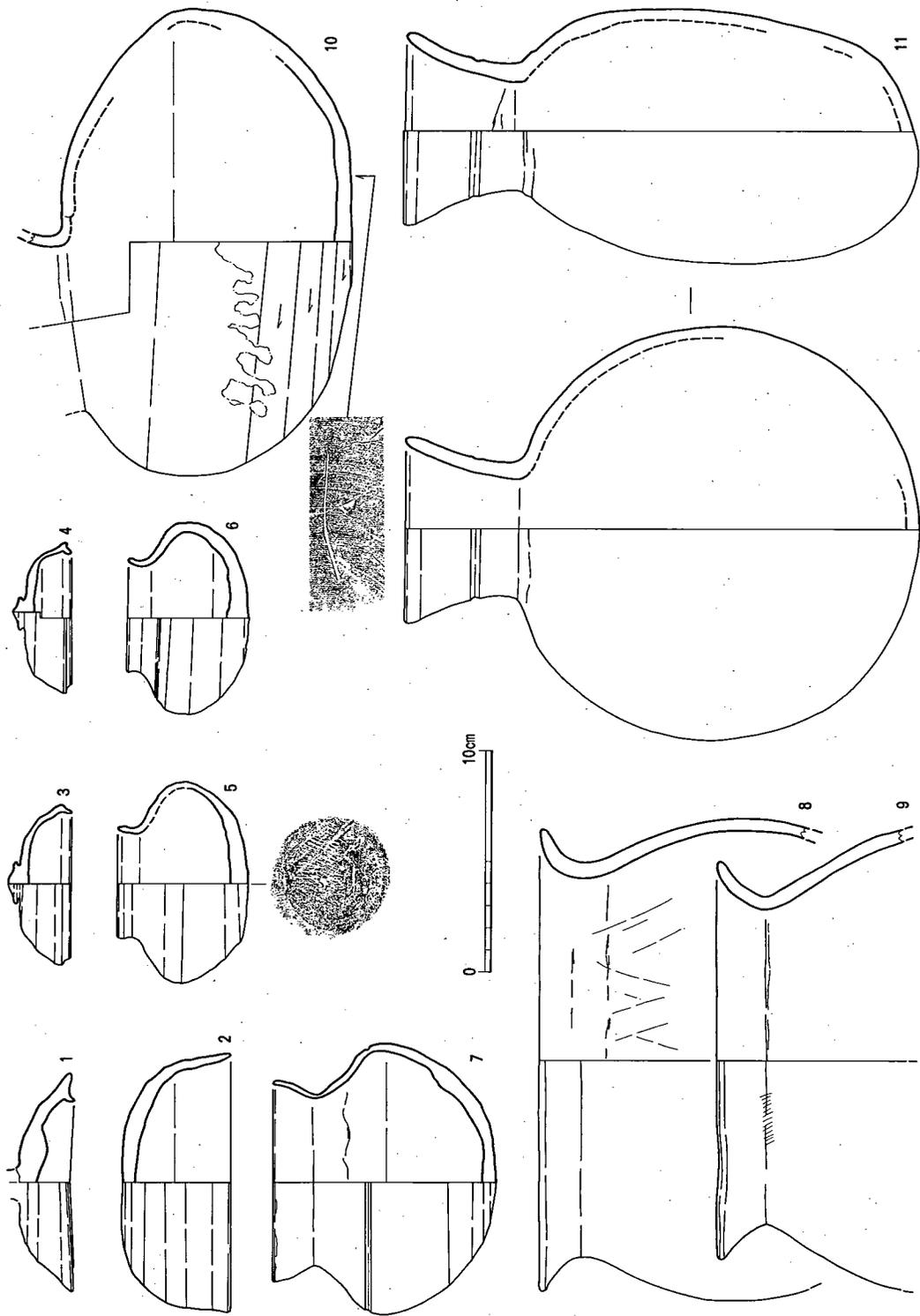
**金属器** (図版70、第67図)

9・10、11・12がそれぞれ1対になるものであろう。いずれも緑青が吹くが比較的金がよく残り、前2点が中空であるのに対して後2点は中実である。2・13も中実。これらに見合う耳環はない。8は全面に緑青が吹くが、金・銀が見えない。

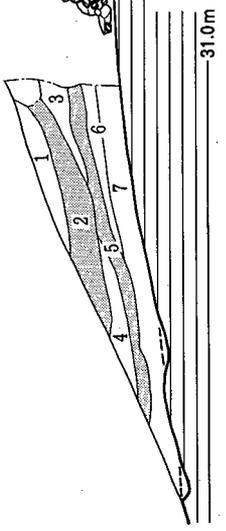
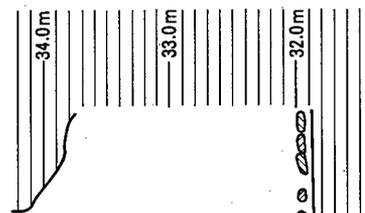
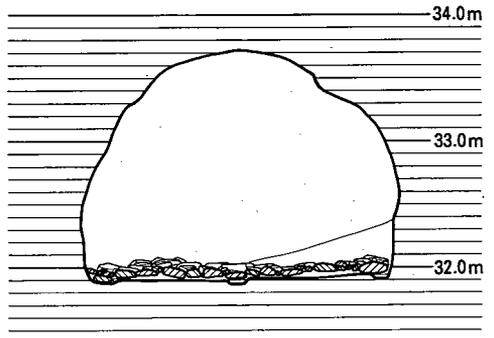
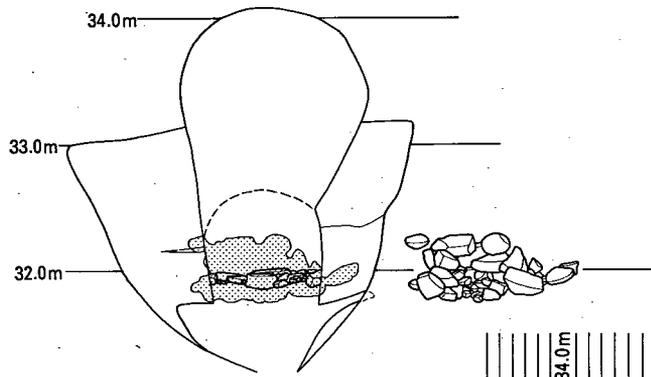
17は玄室出土、16は注記がないがおそらくこれも玄室出土であろう。17は全体が残り、全長約12cm、刃部長約5cmである。柄に比して刃部が短いのは使用による研ぎ減りであろう。目穴は見えない。14・15を含めた3点の鉄製品が墓道から出土したが、1点は茎の小片であり図示していない。15は関がはっきりしないが鉄鏃と思われる。14も錆のために膨らみ、折れ曲がる鉄鏃である。



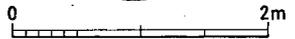
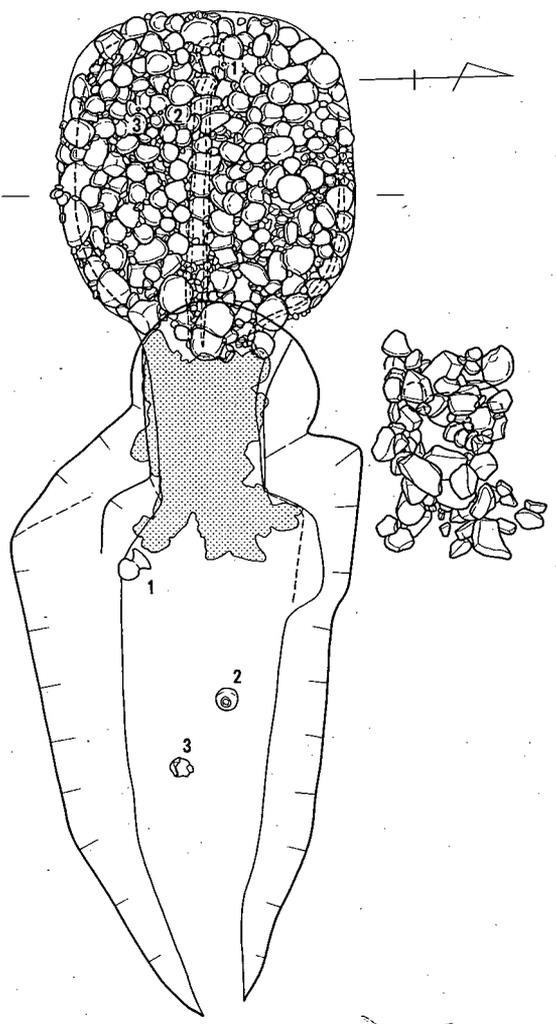
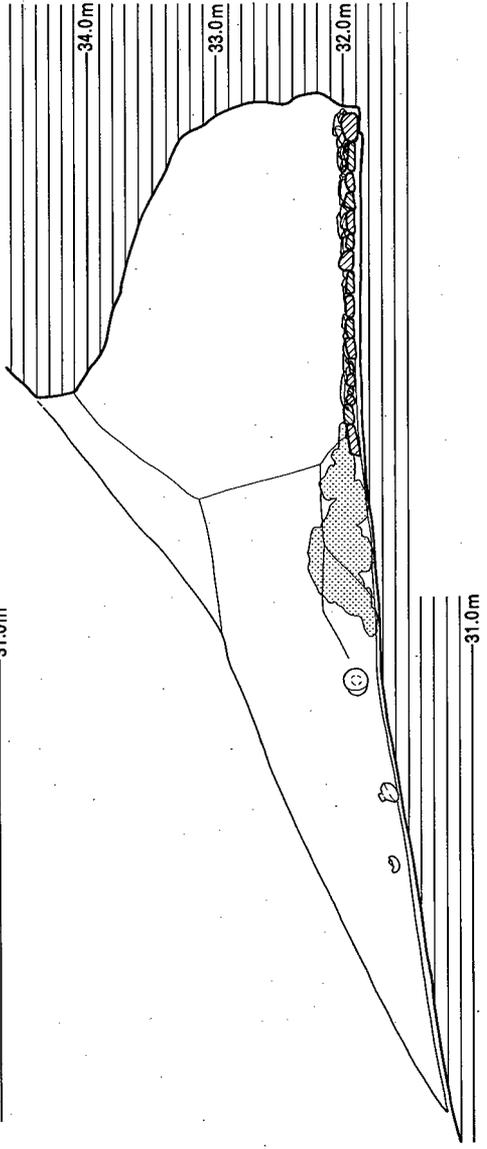
第67図 6号横穴出土玉類・鉄製品実測図 (1/1、1/3)



第68图 6号横穴出土器实测图 (1/3)



- 1 灰茶褐色土
- 2 灰黑色土
- 3 灰黄褐色土
- 4 = 3
- 5 淡灰黑色土
- 6 暗茶褐色土
- 7 灰黄色土 (炭小片を含む)



第69図 7号横穴実測図 (1/60)

## 土 器 (図版70、第68図)

いずれも墓道出土で、8・9は土師器、他は須恵器である。

1は口径7.5cm、最大径10cmの身受けの返りを有する蓋で、欠損するがつまみを有していた。それ以外はほぼ完存する。天井部は灰被りが顕著で調整手法は不明。2は壺の蓋であろう。口縁部は大部分を欠くが、他はほぼ完形で残る。胎土の特徴として熔融した黑色粒子を多く含む。天井部の回転篋削りは丁寧に施され、焼成は甘い。3・4は罎の蓋。3は口縁部の1/2を欠き、4は完形。扁平な宝珠つまみ、肩の張り、口縁部の形状など同様の形態となる。5・6もよく似た形状の罎であるが、5は酸化炎焼成となる。いずれも完形品で、体部最大径付近以下を回転篋削りで仕上げる。5の外底面には刷毛目状の工具痕が残る。7は一見古式の土師器を思わせる形態で、完形に近い。体部上半から口縁部にかけての器肉が薄く作られるが、全体に火膨れが著しい。肩部に沈線を1条巡らせる。10は体部がほぼ完存する平瓶。体部下半を丁寧な篋削りで仕上げ、外底面に篋記号が存する。11は腹部を撫でて、背部を丁寧な篋削りで仕上げる。なお、腹部には焼き台の痕跡が残る。8・9は相似た甕で、いずれも器表の風化が著しい。

## 7) 7号横穴 (図版37・38、第43・69図)

6号横穴の主軸に近い。羨道部天井が大きく落ち込み、既に一部が開口していた。

### 墓 道

羨門部から墓道にかけて床面幅が広がり、そこから先端までの長さは約4mであった。縦断土層は閉塞石に達していないが、観察した範囲では中層以上に黒色系土層が多い。

### 閉 塞

川原石を使用する大小の石材が羨道部の全面に及び、一部が墓道に落ちていた。現状での範囲は長さ2mに及ぶが、本来はその1/2ほどの規模で積み上げられていたものであろう。

### 主体部

これも他例に漏れず、天井部が大きく崩落するが、床面は非常に良好に遺存していた。玄室は長さ2.4m、幅2.3mの規模で、隅丸方形の平面プランとなる。現状の天井高は1.8m。敷石は玄室全面、そして一部羨道部まで、扁平な川原石と小石の組合せで施される。

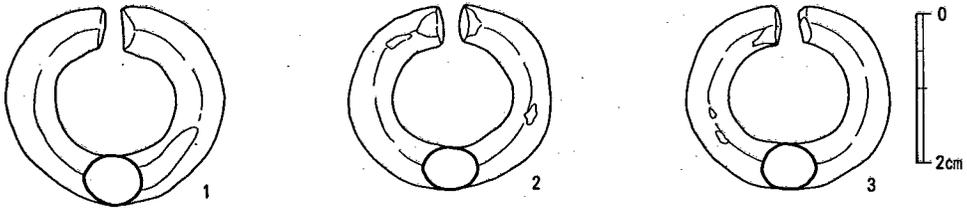
玄室中央部には主軸方向に、幅0.1m強の浅い排水溝が玄門部まで穿たれる。また、左右両側壁際では明瞭に確認できなかったが、床面が若干窪んでおり、排水溝が存在したものと思われる。

遺物

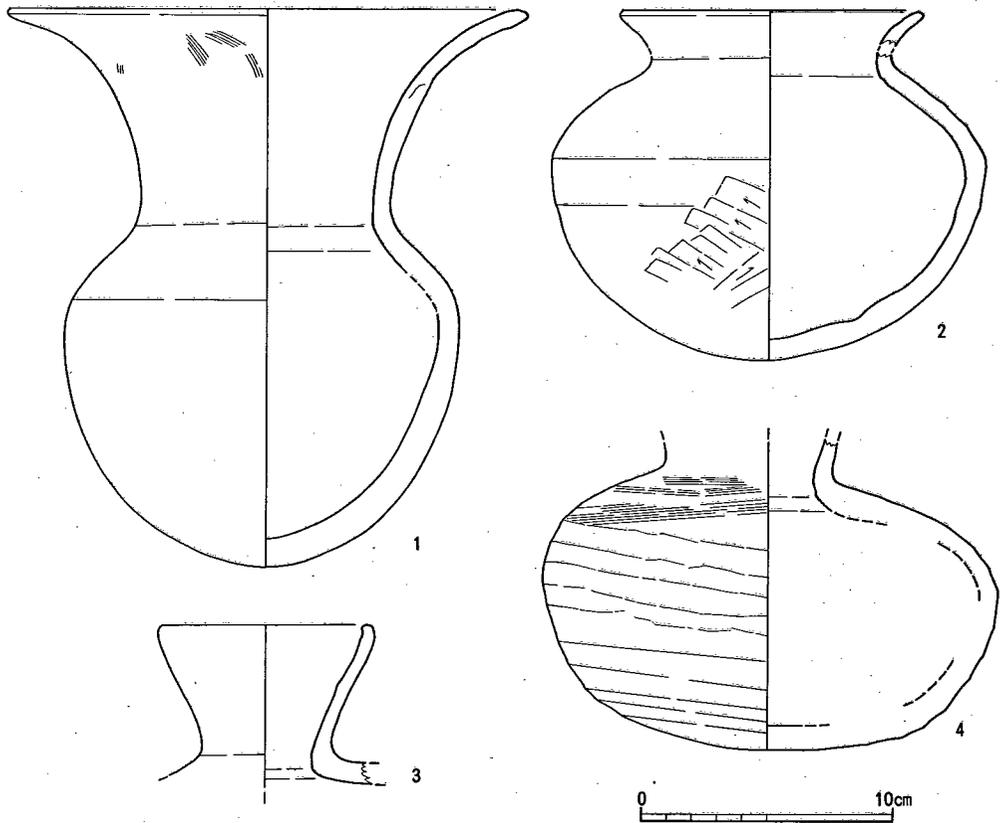
主体部内では玄室後半部で3点の耳環が検出されたのみで、玉類や鉄製品は全く発見できなかった。墓道では最下層に相当する埋土中から若干の土器が出土している。

金属器（図版71、第70図）

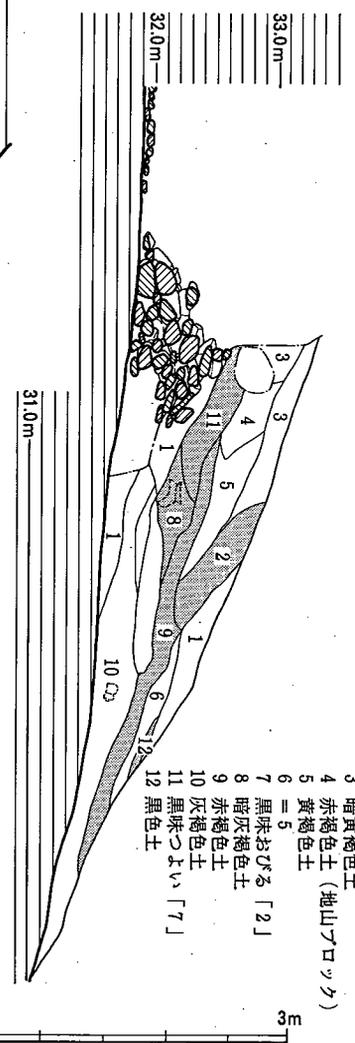
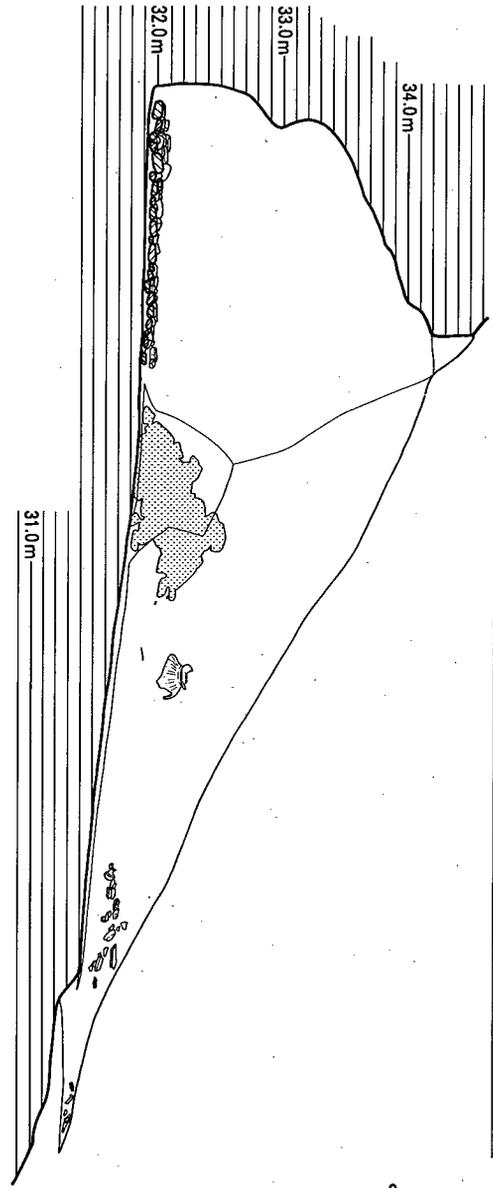
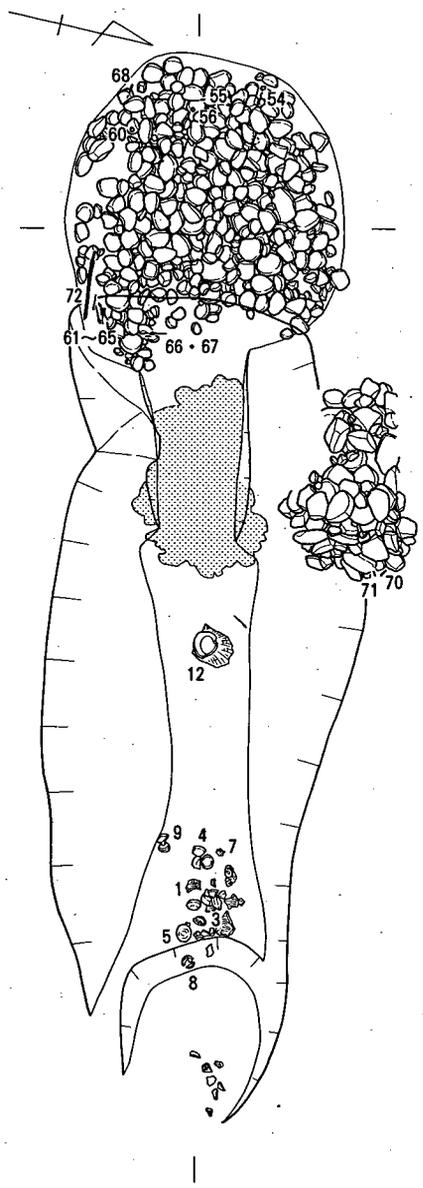
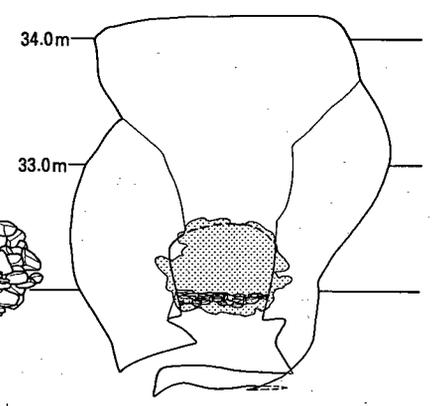
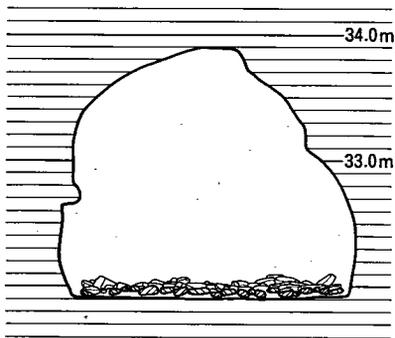
いずれも緑青を吹くが、よく金が見える耳環で、重量感があり、中実であろう。2・3は法量も同じであり、セットとなるものであろう。1はやや大きい。



第70図 7号横穴出土耳環実測図 (1/1)



第71図 7号横穴出土土器実測図 (1/3)



- 1 灰黄褐色土
- 2 淡灰黑色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 赤褐色土 (地山ブロッケ)
- 5 黄褐色土
- 6 = 5
- 7 黒味おびる「2」
- 8 暗灰褐色土
- 9 赤褐色土
- 10 灰褐色土
- 11 黒味つよい「7」
- 12 黒色土

第72図 8号横穴実測図 (1/60)

## 土器 (図版71、第71図)

1は土師器、他は須恵器である。1は口縁部の一部を欠き、酸化炎焼成で黄褐色に焼き上がる軟質の壺。器表は風化して調整痕がほとんど残らないが、口縁部下に刷毛目が微かに見える。器形が整っており、轆轤整形を行ったものであろう。2は小片の口縁部と略完形の体部が接合していないが図上復原を行ったもの。体部下半を不定方向の篋削りで仕上げる。生焼けである。3は約3/4が残る口縁部片。口端部を内側へ巻き込み、装飾を欠く。4は口縁部を欠く。体部中位以下を篋削りで調整するが、下端付近をその後に撫でている。

## 8) 8号横穴 (図版39~41、第43・72図)

これも羨道部が陥没し、一部開口していた。9~12号横穴が5・6号横穴と随分異なった主軸を有するのに対して、8号横穴は両者の中間に近い主軸方位をとり、かつ平面的にも等間を隔て、独立したような位置にある。

### 墓道

これも羨門部から墓道へ移行する部分で床面の幅が広がる。左右で若干長さが異なるが、およそ4.5m前後の規模である。

閉塞石を覆う土は分層可能なものの、いずれも地山の崩落土である。しかし、黒色系土層下端から閉塞石基底部に向かうラインが観察でき、これは追葬時の掘り込みを示すものかも知れない。

### 閉塞

これも羨道部の全面に及び、その長さは約1.5m、高さは0.7mである。しかし、断面形状を見ると、上半の石材は前面に流れており、本来は長さ1mほどの規模であったことが窺える。石材は玄室側に比較的大型のものを使用し、前面では小型の材を使用する。

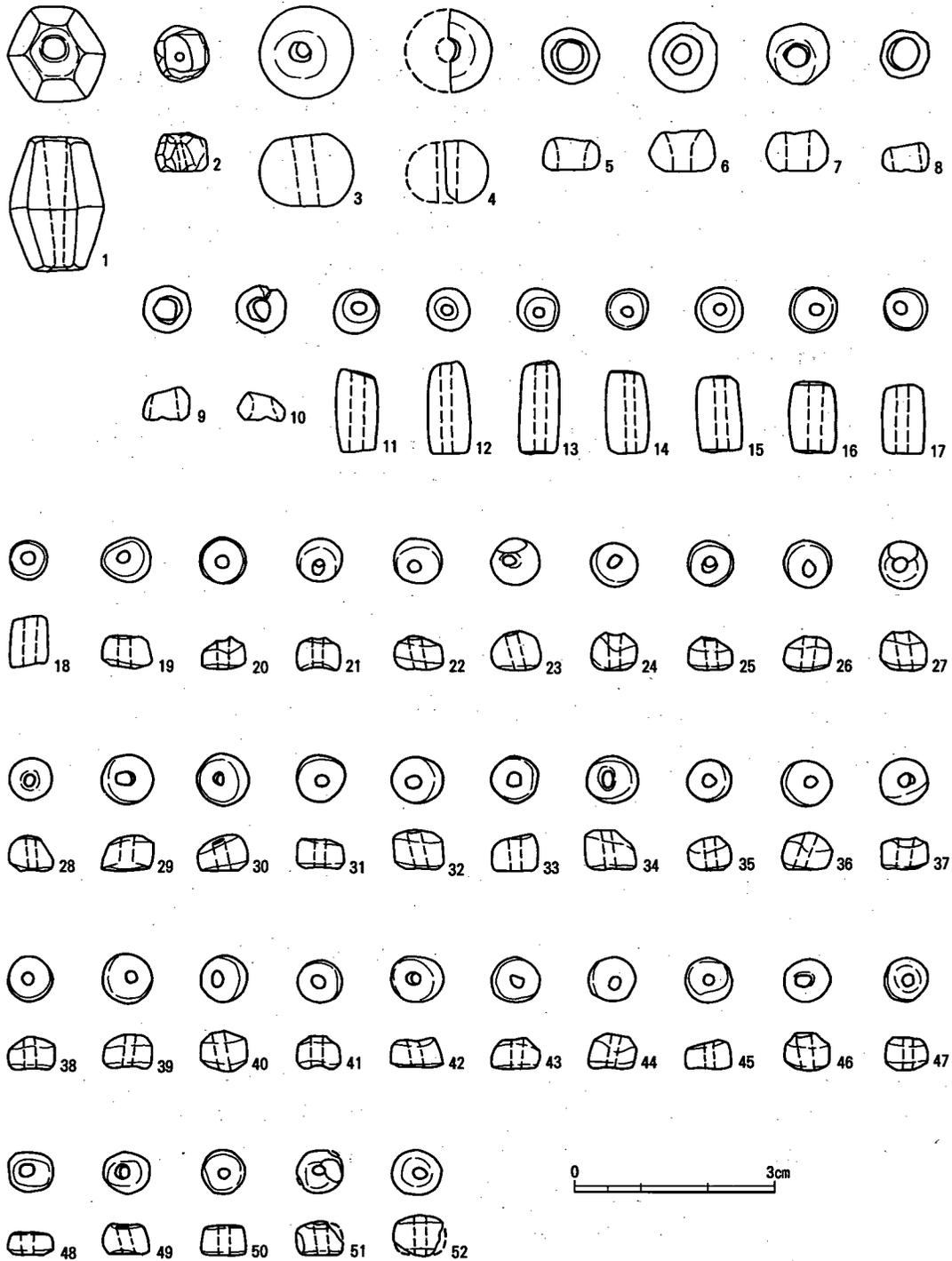
### 主体部

長さ2.5m、幅2.2mの円形に近い平面プランを有する。天井部は高さ1m付近まで比較的残存するが、以上は大きく崩落する。推定される天井の形態はドーム形である。

敷石は、他例に比して石材が小振りであり、小石も使用されており簡易な様子を見せる。床面が荒らされたようには見えなかったが、石材の配置等も粗雑である。

羨道部は長さ1.5m、幅0.6~0.8mの規模で、敷石は全く付されていない。

### 遺物



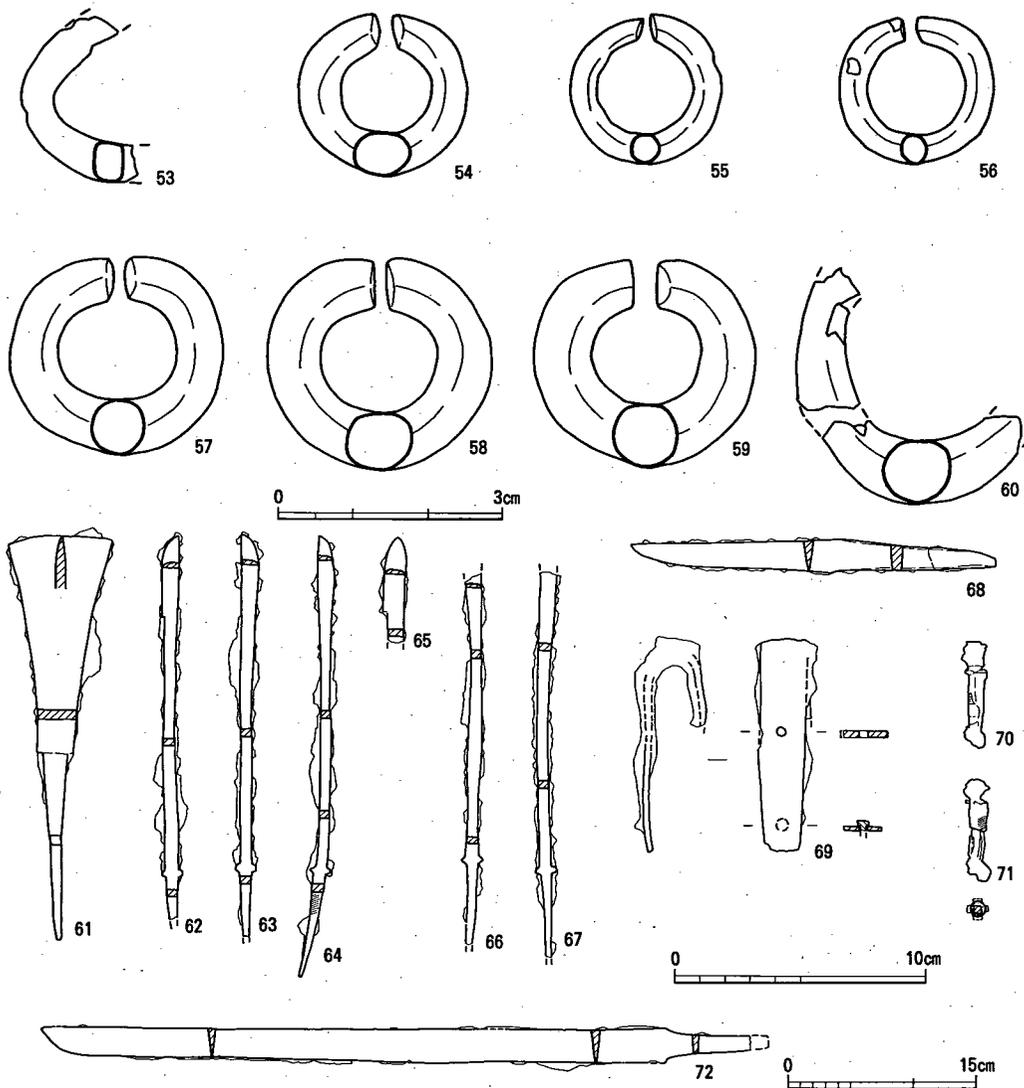
第73图 8号横穴出土玉類実測图 (1/1)

主体部では、玄室奥壁に添うような位置から4点の耳環が出土し、右奥壁近くで玉類が検出された。耳環は他にも4点出土しているが、敷石除去に際して発見されたもので地点を特定できていない。また、玄室左手前の隅付近で太刀を含む鉄製品が出土した。

墓道では、閉塞石付近で鉄製品（鏃）を、そして閉塞石前面の黒色系土層中で大甕片を出土するとともに、墓道前端付近の床面近くからまとまった土器群が出土した。

玉類（図版71、第73図）

1は水晶製切子玉。2はオレンジ色に近い瑪瑙製で、表面が荒れる。3から10はガラス玉。3のみは淡緑色～濃緑色の本来の発色を保つが、他は皆白色に風化する。11以下は土玉で、表

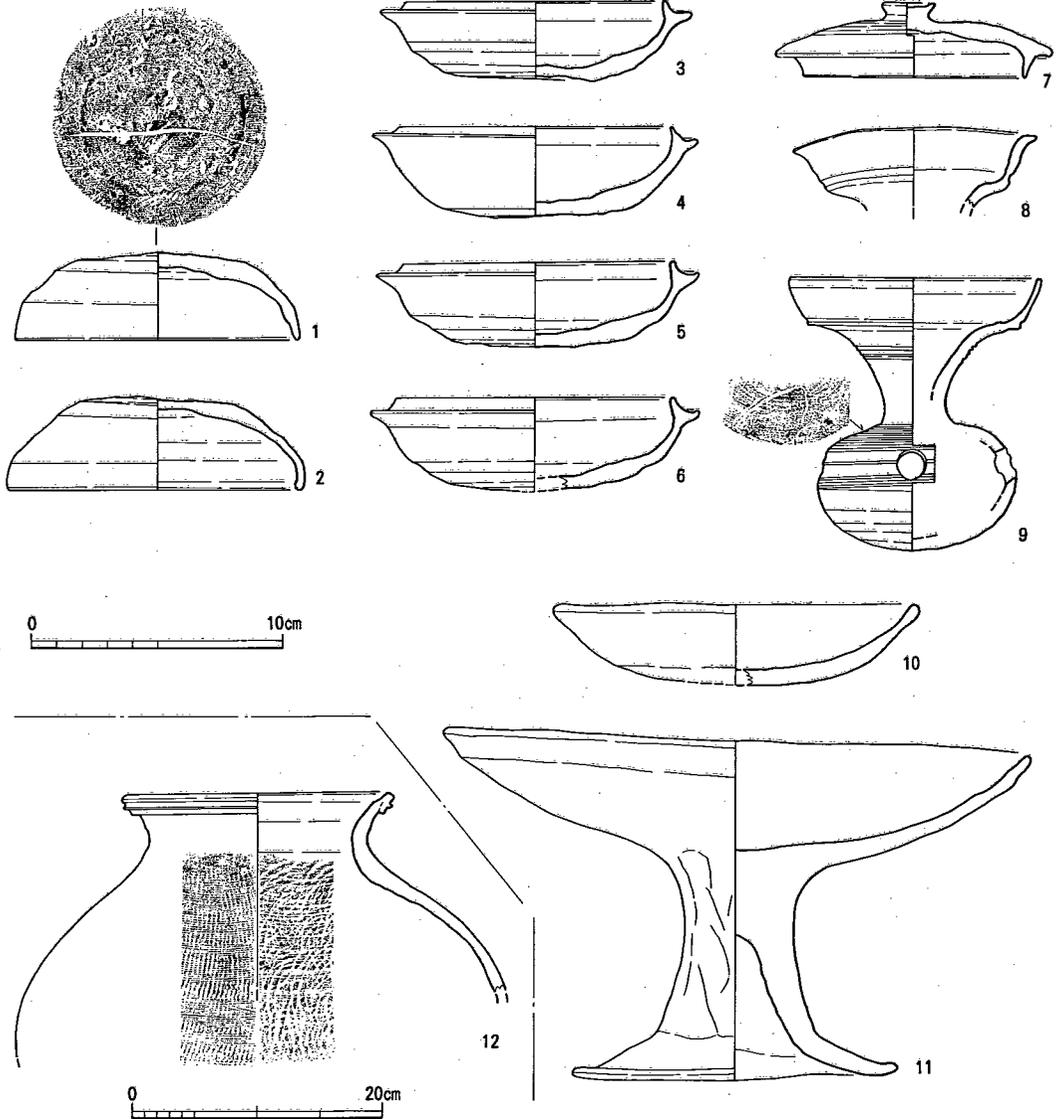


第74図 8号横穴出土鉄製品等実測図 (1/1、1/3、1/6)

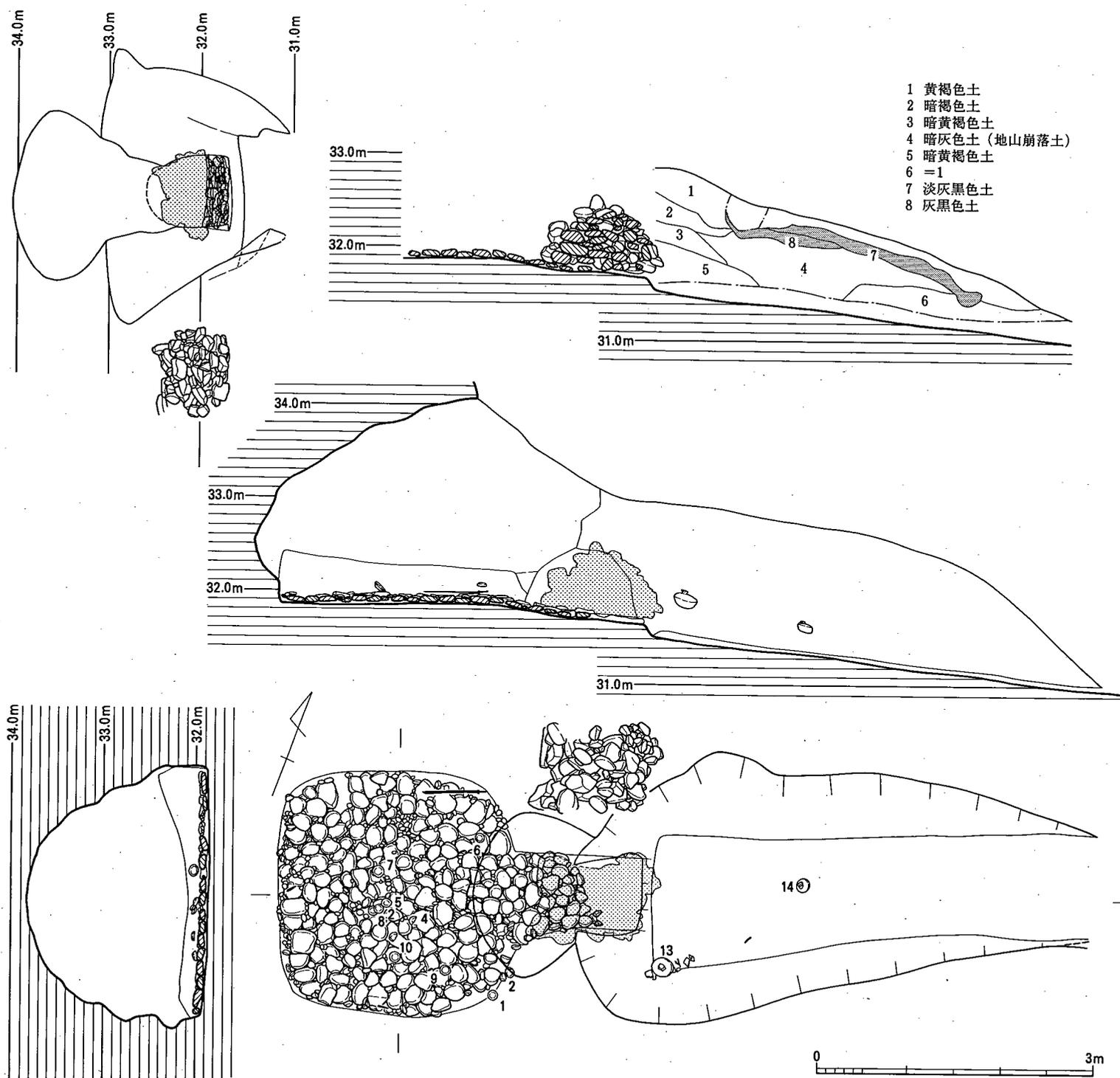
面は灰黒色を呈する。図示した以外にも残片化したものが数点分あり、中には土錘状の長い形を窺わせるものもある。

金属器 (図版71・72、第74図)

54は中実で、図背面の一部に金が見え、全体に緑青が吹く。セットとなる出土品がない。55・56はセットである。いずれも中実で、全体に緑青が吹くものの銀は全く見えない。全体に黒っぽく変色することから銀であろうか。57・58も中実で、金が一部に見える。59も同様であるが、軽いことから中空と思われる。60は残片で、中空であることなどから59とセットとなるのであ



第75図 8号横穴出土土器実測図 (1/3、1/6)



第76图 9号横穴实测图 (1/60)

ろう。53も残欠。鑄で表面が荒れてはつきりしないが、断面は方形に近いようで、黒紫色と表現してよいような色となる。錫製品であろうか。

61~67は太刀の横で出土した。61は鍔身が錆びて大きく膨らみ、関もはつきりしないが、中程にやや色の異なる部分があり、そこを関に想定している。62~65はやはり鑄のために関がはつきりしないが、63は関がないようである。68は玄室左奥出土の刀子。これも関ははつきりした段を有さず、わずかに屈曲するのみ。69は墓道前端出土の不明鉄器。鍔が2ヶ所に残り、一方の端部は生きるようである。弓矢具の一部であろうか。後世の混入の可能性もある。70・71は閉塞石直前で出土。71では断面方形の鉄棒に木を巻きつけた様子が窺える。両端部、木質の終わる付近に4枚の羽根状の鉄板が突起する。閉塞に破魔の弓を立てかけたものか。

72は全長57cm余の太刀で、柄先端が目釘穴部分で欠損する。刃部長50cm。

#### 土器 (図版72・73、第75図)

1・2は口径11cm強、器高3.5cmの杯蓋で、いずれも完形若しくはほぼ完形である。1は天井部に篋記号を存し、2は口縁部を内側へ巻き込むように造作する。天井部はやや雑な回転篋削りで処理する。3~6は口径10~11cm、器高3.5cm前後の杯身で、5を除き、いずれも一部欠損する。4は黒色粒子が溶融する特徴ある土器である。これも底部は蓋と同様に雑な回転篋削りで仕上げる。7は壺蓋の完形品で灰被りが著しい。8は焼歪みの著しい口縁部で、図示部分は完存する。9は口縁部の一部を欠く隠で、体部上半をカキ目、下半を篋削りで仕上げる。

10・11は土師器。10は略完形で、器表の磨滅が著しい。外底面では成形時の皺が顕著で、作りは雑である。口縁部付近と内底面が灰黒色となるほかは灰黄色を呈する。11は約1/2を欠く高杯で、脚部接地面の下面が黄褐色を呈する他は全体に赤褐色となる。器表は荒れており、杯部外面では粘土紐巻き上げ痕が一部観察できる。

### 9) 9号横穴 (図版42・43、第43・76図)

8号横穴とはやや距離を置くとともに、主軸方位も異なる。後述する10号横穴等、より南に位置する横穴群の主軸とほぼ揃っており、かつ位置的にも接近して掘削されている。

天井部前半が大きく崩落しており、これも一部が開口していた。

#### 墓道

墓道部との間に約0.1mの段差を有し、そこからの長さは約4.8mを測る。

墓道縦断土層の観察では、閉塞石を地山土によく似た土を用いて覆い、それ以外の埋土の多くは崩落した地山土のようであった。上層に近い部分に黒色系土層が入っている。

#### 閉塞

玄門やや前面から羨道部前端（段の部分）にかけて構築され、平面および断面形状から判断して、非常によく原状を留めていると思われる。径20～30cmの扁平な川原石を乱積みするが、他の横穴で見られたような大型の石材を下位に積むと入ったような使用法は見られない。規模は長さ約1.4m、高さ0.8mである。

### 主体部

玄室の天井部は大きく崩落し、旧状をほとんど残さないが、平面形は約2.6mの整った隅丸方形プランとなる。羨道部の平面プランはほぼ長方形で、幅0.8～0.9mと玄門部が若干幅広く、長さは1.4mである。また高さは閉塞石上端付近の壁面に剥離面が観察でき、その付近までは立ち上がっていたことが判る。

床面は径20cm前後の扁平な川原石を丁寧に敷き詰め、さらに小礫で間隙を充填するというものである。羨道部中程で敷石が途切れるが、玄室・羨道部ともに同様な石材・使用法を採る。

### 遺物

玄室内、中央左壁下で刀子（所在不明）、前半部右壁下で太刀を、そして図のような状態で散在して須恵器の蓋杯が出土している。いずれもほぼ床面上にある。玉類や耳環は出土してない。

墓道からは最奥部左隅で鉄鏃や平瓶が、またそれと離れたところでも鉄鏃や平瓶が出土するが、いずれも床面から30cm前後浮いた位置にあり、初葬時のものとは思えない。

### 金属器（図版73、第77・78図）

第77図はいずれも墓道出土の鉄鏃で発掘時に欠損する。羨門左隅に置かれていたものであろう。切先が残るものはいずれも関を確認できない。

第78図は太刀。全長68.5cmを測り、縁金具が残る。両関で目釘も残存。

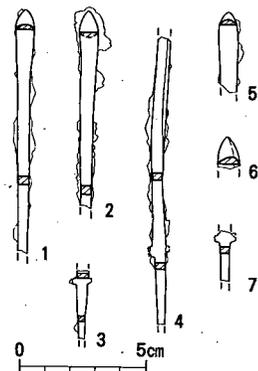
### 土器（図版73・74、第79図）

1～10の蓋杯が玄室内で、他は墓道出土である。

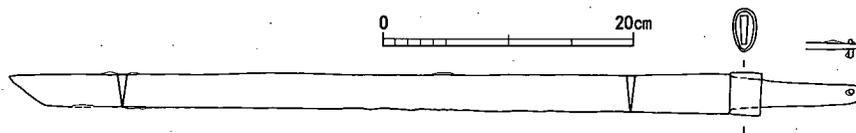
蓋は口径10cm強、器高3～4cm前後で、身は口径10cm内外、器高3cmほどの法量となる。身の立上がりは小さく、天井部あるいは外底面は多くが篋切りのまま未調整で粗雑な仕上げである。1・2、3・4

はそれぞれセットと思われるもの。特に3・4は瓦質で焼き上がる。

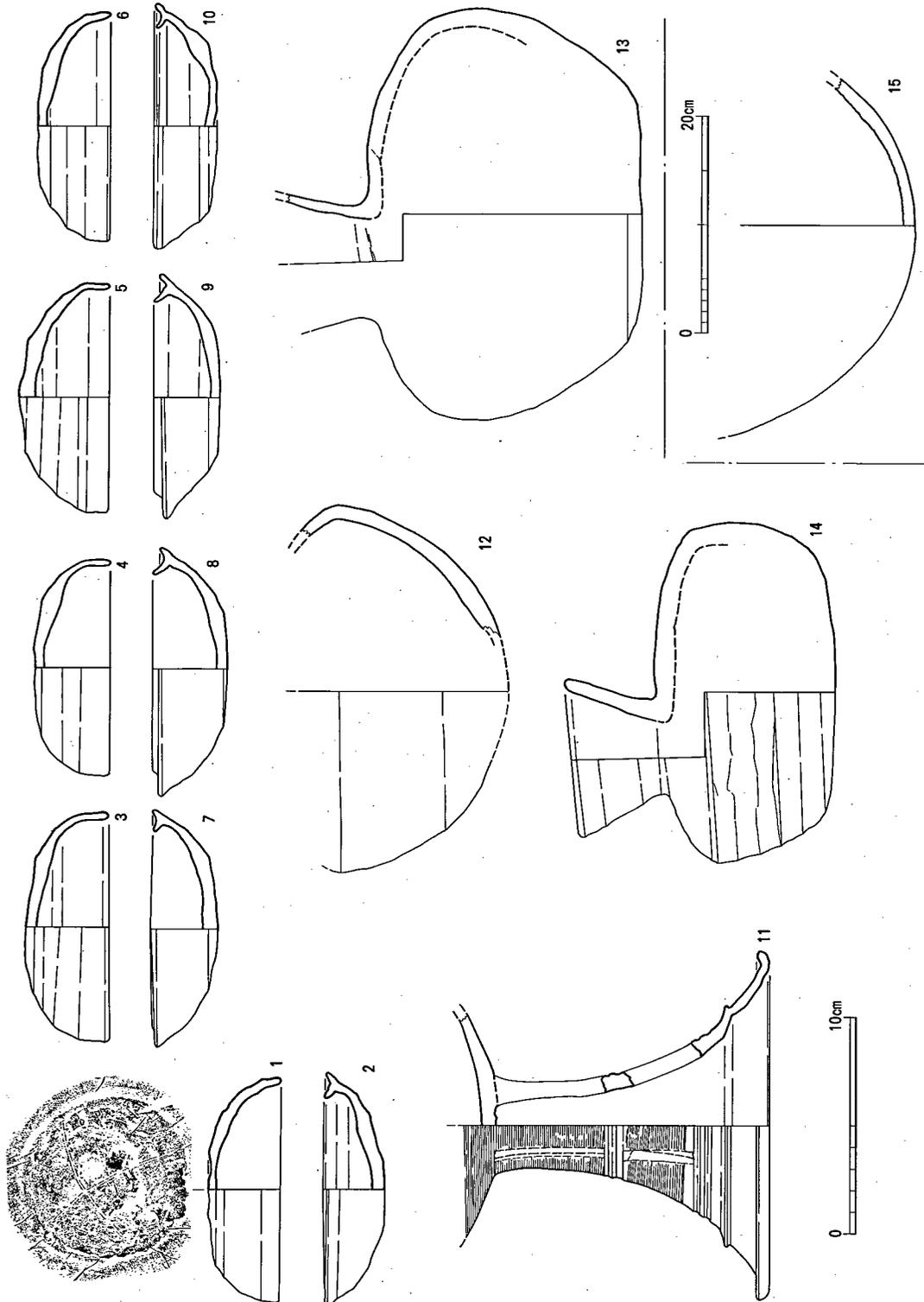
11は脚裾に段をもつ高杯で、3方2段に方形透孔を穿つ。細密なカ



第77図 9号横穴出土鉄製品実測図1 (1/3)



第78図 9号横穴出土鉄製品実測図2 (1/6)



第79图 9号横穴出土器实测图 (1/3、1/6)

キ目を多用する。12は酸化炎焼成で土師質に焼き上がる。器表が荒れており、調整痕を確認できない。13は口端部を欠くが、それ以外はほぼ完存する。体部最大径付近以下は篋削りの後に撫でている。14は口縁部の約1/2を欠く以外は完存する。器肉が厚く重量感があるが、全体に丁寧で作られている。体部中位以下を篋削りし、中位付近はその後に撫でている。15は大甕の底部片。

## 10) 10号横穴 (図版44・45、第43・80図)

9号横穴の南に並列する小型横穴。未盗掘である。

### 墓道

これも羨道部との間に0.1mの段があり、そこからの長さは約3.6mであった。

墓道の縦断土層は後半部で作成したのみである。その観察では、閉塞を覆うように砂を交えた締まりのある灰褐色土が床面から立ち上がり、以上も比較的混ざりのない地山系の土が堆積する。黒色系の土は閉塞を覆う土層の上のり、その先端の土層ラインは最掘削されたようにも見える形状となっている。

### 閉塞

他と同様、敷石の途切れる付近からほぼ羨道部一杯に川原石を用いて塊石積みされる。基底部に大型石材を横置きするが、上半は崩れるようである。本来は中央部の2石の上に積み上げられたものと思われる、その場合には長さ0.4mの規模となる。羨道部側壁の床上0.5mの位置に剥離面が観察でき、本来の高さは0.6m前後であったと思われる。

### 主体部

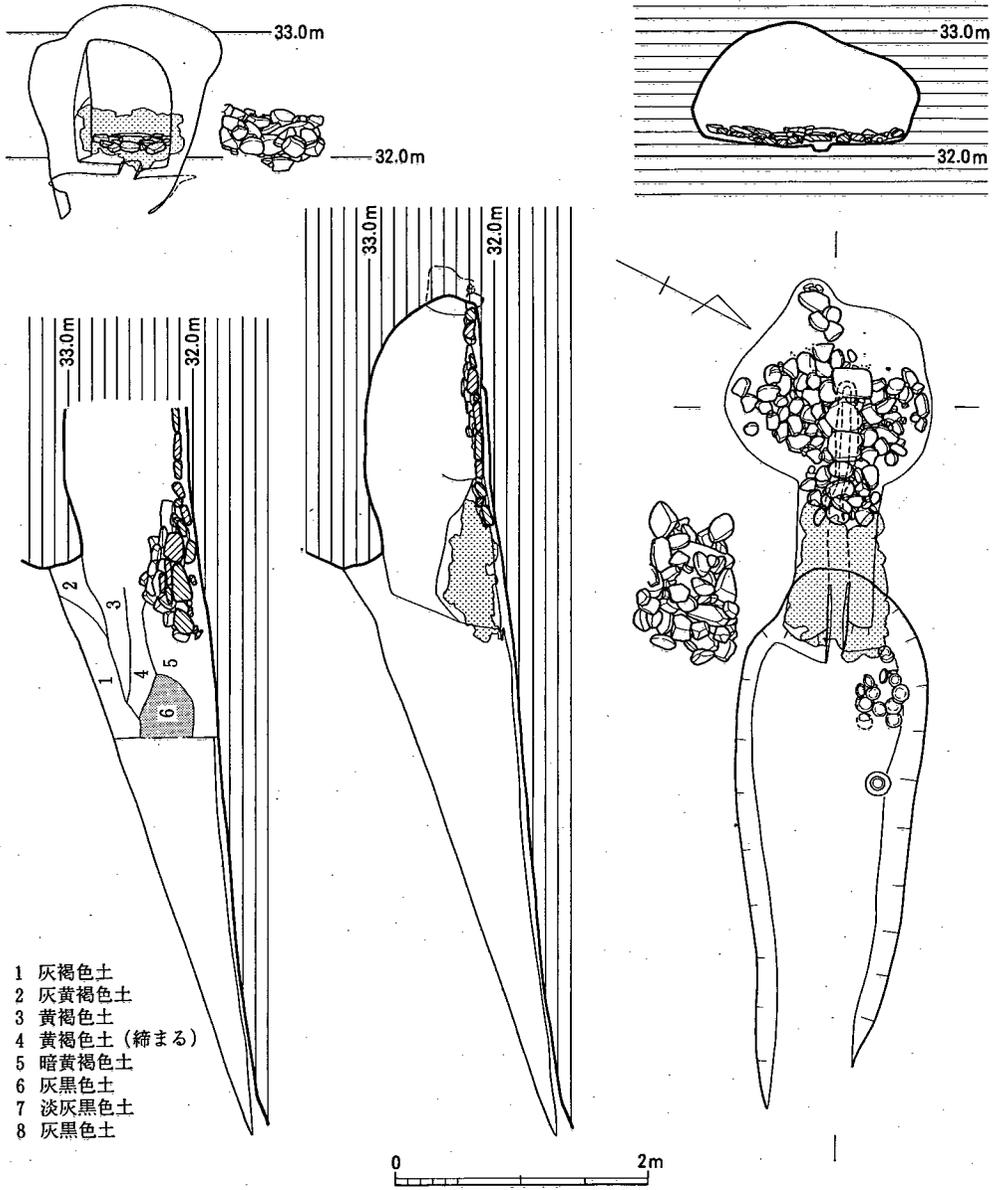
これも天井部のほとんどが剥落しており、旧状を留めていない。しかし、規模が小さいことから本来はドーム形を呈していたものと想定できる。平面形は不整形で、長さは1.4~1.6mを測り、崩落後の天井までの高さは0.9mである。奥壁に狸穴状の小穴があり、敷石が入っているが、これが当初から掘削されていたとの確証は得られていない。

床面にはやはり扁平な川原石を敷くが、空隙が多く、雑である。また、他例に比べて石材が小振りであり、小礫の使用が少ない。玄室床面のほぼ中央部から墓道に通じる幅0.2m、深さ0.1mに満たない排水溝が設置されるが、これを敷石で丁寧に覆う点は他と同様である。

羨道部は幅0.6m強、長さ1.3mの規模の略長方形プランである。

遺物

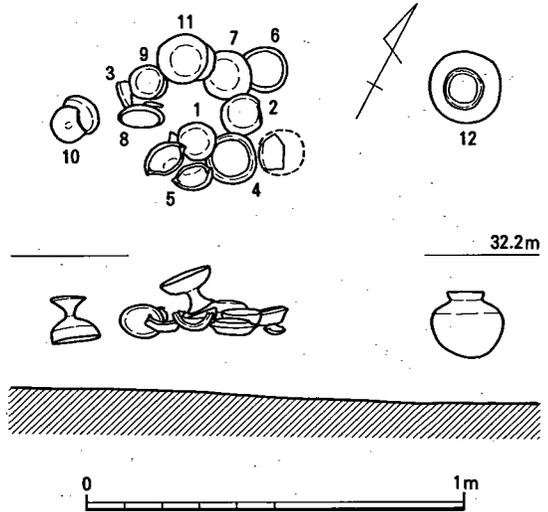
玄室内奥壁寄りの敷石のない部分で玉類・耳環が出土したが、一連のまとまりは希薄である。



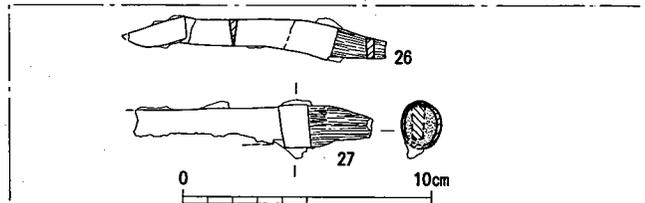
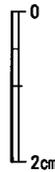
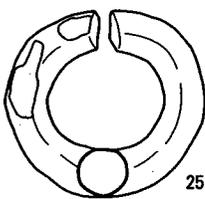
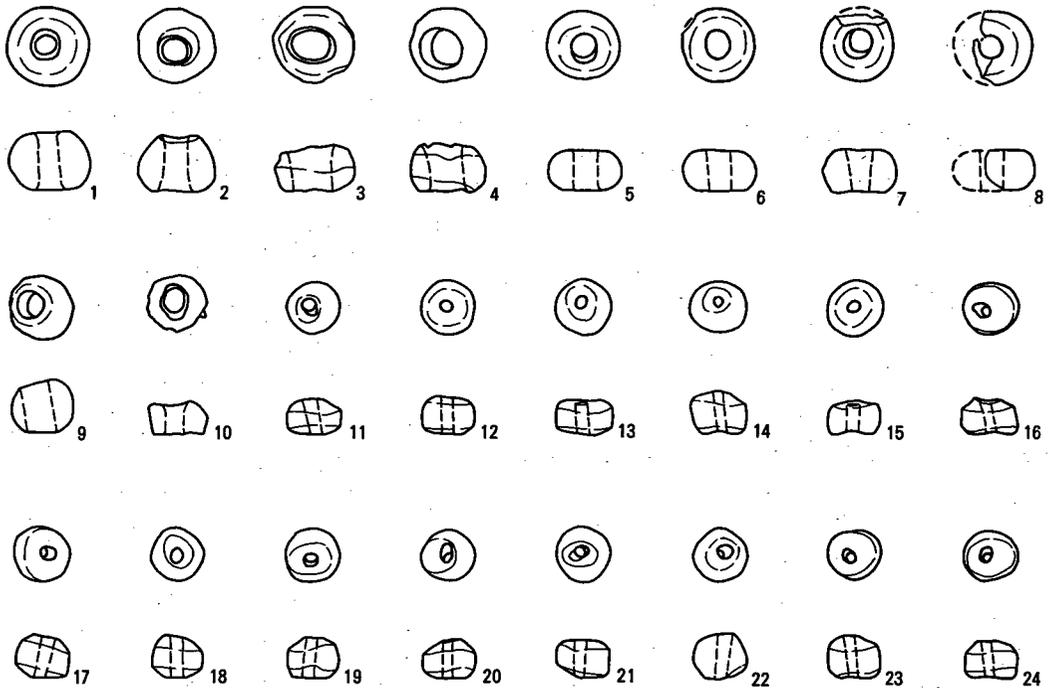
第80図 10号横穴実測図 (1/60)

また刀子2点も出土するが、敷石除去時に発見したために位置を記録していない。

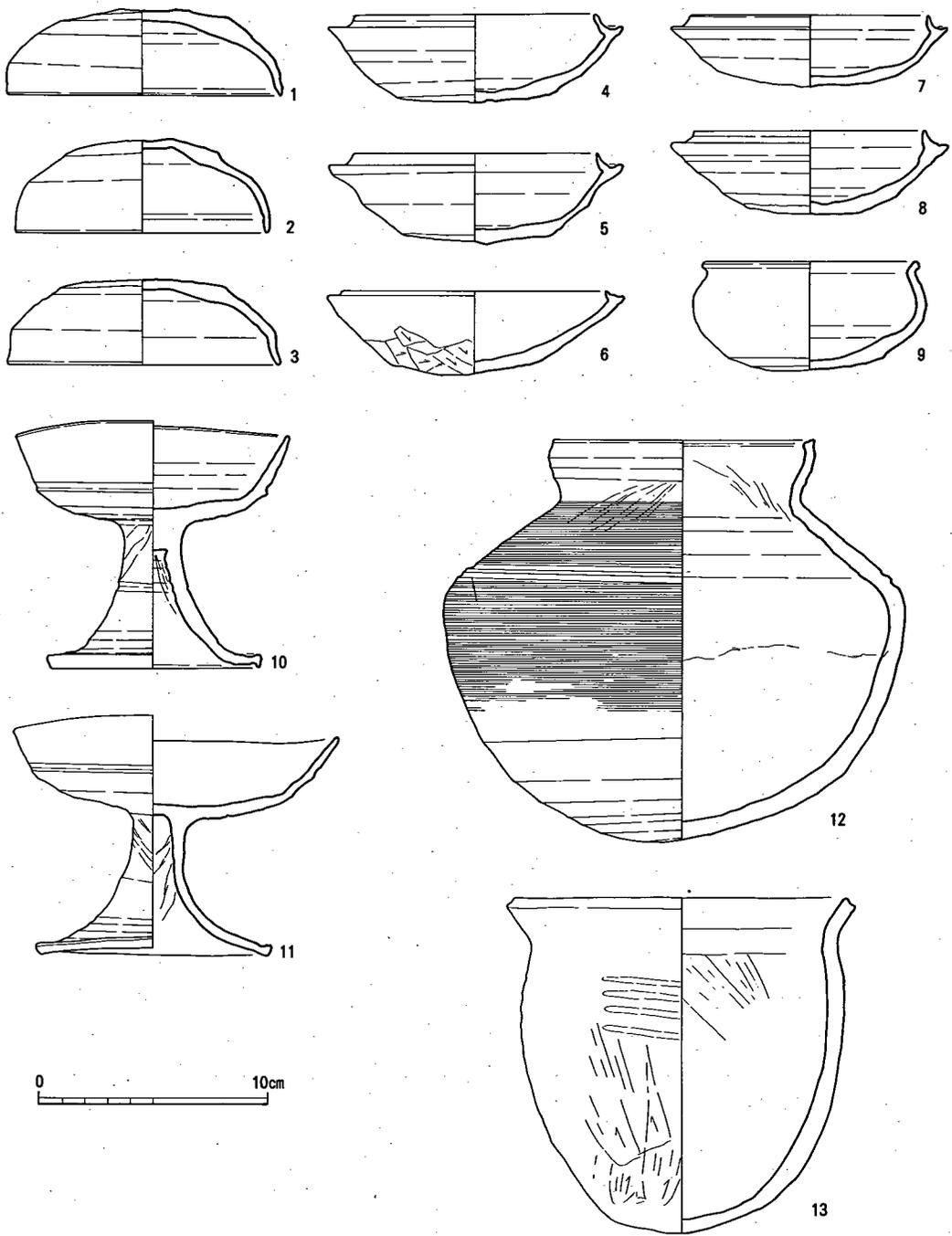
羨門前、墓道右奥で床面から15cmほど浮いた位置で土器群を一括して検出した。土器群の底部はほぼ水平なレベルにあり、土層の確認ができていないものの閉塞石を覆う土層の上に置かれたものと思われる。蓋杯蓋3点、同杯身5点、埴1点、高杯2点、壺1点の計13点の土器が正置あるいは倒置されて並んでいることから当時の状況をよく示していると思われる。



第81図 10号横穴墓道遺物出土状態 (1/20)



第82図 10号横穴出土玉類・鉄製品実測図 (1/1、1/3)



第83图 10号横穴出土土器实测图 (1/3)

### 玉 類 (図版74、第82図)

1～10はガラス玉で、4～8は風化して白色化し、他は濃い緑色を呈する。11～24はいわゆる土玉。暗灰色である。

### 金属器 (図版74、第82図)

25は中実の耳環で、全体に緑青が吹いているが、金がよく残る。26は切先が折れ曲がる刀子。関は確認できないが、柄の木質がよく残っており推定はできる。残存長7.5cm、刃部長8cm、脊厚0.3cmである。27は刃こぼれが著しい刀子。柄の木質とともに縁金具も残る。

### 土 器 (図版75、第83図)

1～3の蓋は口径11～12cm、器高4cm前後の大きさで、口縁形態に差異があるが天井部の仕上げは2が篋削りの後に撫でる他は比較的丁寧な篋切りを行って未調整のままである。1は酸化炎焼成で灰黄色を呈するが、6に図示した身がやはり同様な焼き上がりであり本来はセット関係にあったものと思われる。1は完形、2・3は口縁部の一部を欠く。杯身は6を除く4点が口径10.5cm前後、器高3～4cmの大きさで、外底面は丁寧に篋切りを行う。中で7は器高が低く、かつ酸化炎焼成土師質であり器表が剥離する。6も酸化炎で焼かれ、黄褐色を呈する。口径が11.5cmと大きく、受部立上りが短く内傾し、また外底面を不定方向の篋削りで仕上げる点も特異である。これらはいずれも完形である。出土状態実測図には南東端にもう1点が記されるが、これも土師質に焼き上がり、細片化して図化できていない。9も完形品で、体部下半を丁寧に篋削りしている。10は倒立した状態で出土した高杯で脚端部の一部を欠く。口縁部は若干歪み、沈線は甘いものである。11の高杯も焼け歪み、沈線は甘い。また全体に粗雑な仕上げである。12は肩部に2条の沈線を刻み、体部上半をカキ目で覆う。全体に火膨れが顕著な完形品。

13は横穴前面の斜面から出土した土器で、ほぼ完形である。体部外面の上半には叩きを確認でき、後にはほぼ全体を篋削りで仕上げ、内面を弱い刷毛目で仕上げる。弥生終末から古墳時代初頭に属するものようである。

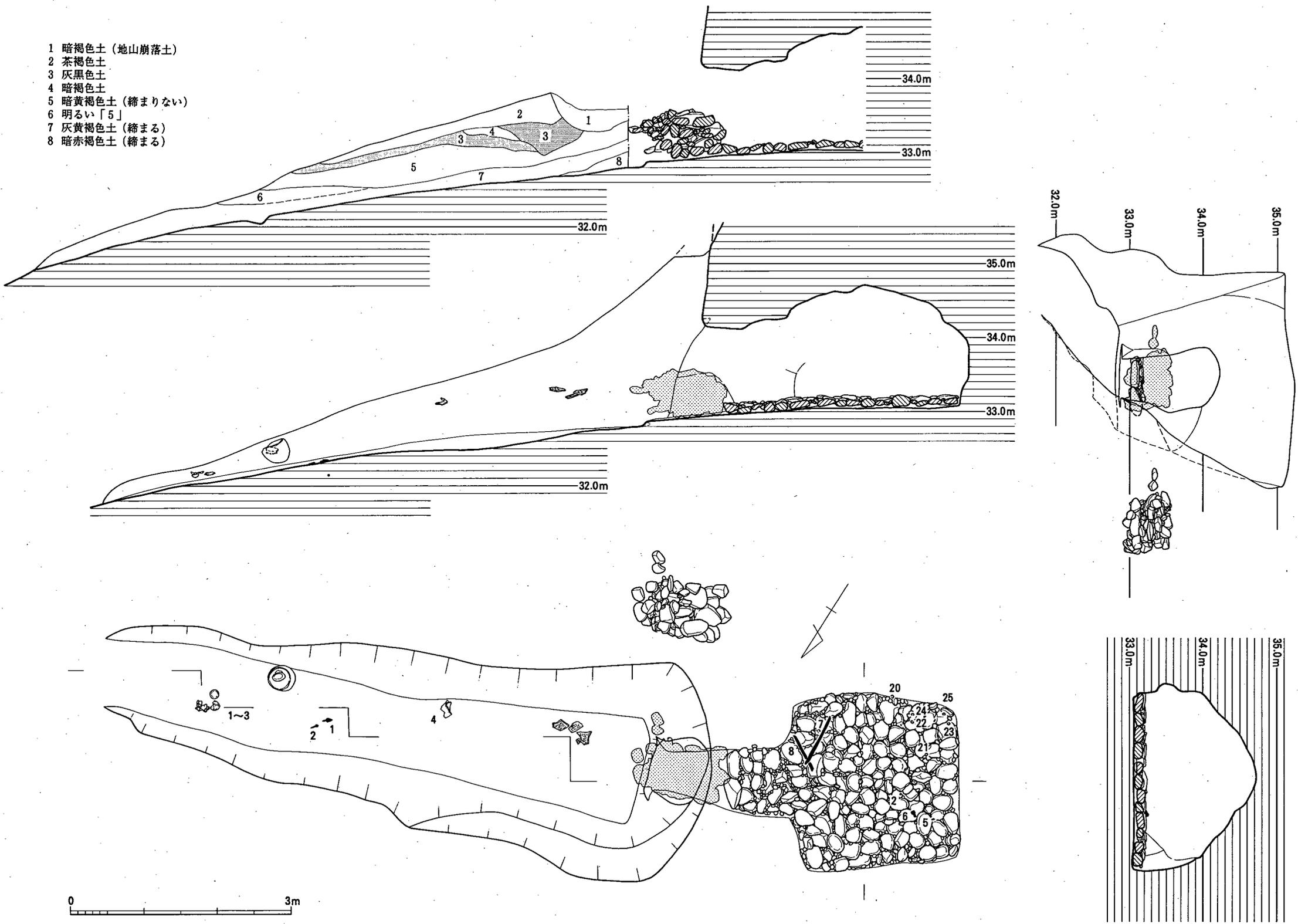
### 11) 11号横穴 (図版46～48、第43・84図)

墓道部分のみが工事範囲に含まれていた。しかし、工事中に主体部が露出した場合には壁体の補強工事によって破壊されるおそれがあることや、墓道部分のみの発掘では遺跡の評価を誤ることが予想されたこと等から、地権者の了解を得て主体部の発掘を併せて行った。

10号横穴とほぼ同じ方向で掘り込まれるが、規模は倍近い。後述する12号横穴とともに玄室平面プランが整った方形を呈する点で他と区別される。未盗掘である。

### 墓 道

- 1 暗褐色土 (地山崩落土)
- 2 茶褐色土
- 3 灰黒色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗黄褐色土 (締まりない)
- 6 明るい「5」
- 7 灰黄褐色土 (締まる)
- 8 暗赤褐色土 (締まる)



第84図 11号横穴実測図 (1/60)

羨道部との間に約0.1mの段差を有し、そこからの長さは約7.4mを測る。

墓道の縦断土層は閉塞直前部分を作成していないが、大体は窺える。最下層は他と同様、閉塞石の手前から積み上げられた土層が立ち上がり、おそらく閉塞石を覆っていたものと推測できる。さらに非黒色系土層が厚く堆積した後に、埋土中位付近に黒色系土層がサンドイッチ状に入っていた。ここでも墓道埋土を再掘削したような痕跡は確認できなかった。

### 閉塞

羨道部中程の敷石が途切れる部分から羨門まで、約1mの長さにわたって川原石を積み上げていたが、上方はすでに崩落している。崩れた石材は小型のものが多く、残存する状況から、玄室側や下位により大型石材を使用していたようである。

### 主体部

主体部はいずれも天井部が崩落するが、床面は良好な状態で残っていた。玄室は奥壁幅が若干短い、総じて整った方形プランを呈し、長さは2.2m、幅は2.1~2.4mを測る。床面には径20cm前後の川原石を隙間なく敷き詰め、さらに間隙に小礫を充填する。

羨道部は長さ2m、幅0.5~1mの規模で、玄門部が羨門部の倍の広さとなる。敷石は玄室から羨道まで連続的に敷設され、羨道中程に柵石を配して区画する。この柵石は、閉塞石と区別でき、かつ墓道に対して直角方向に大振りの石材2点を据えることから意識的に設置されたものと思われ、後述する12号横穴とともに今回調査中の異例である。

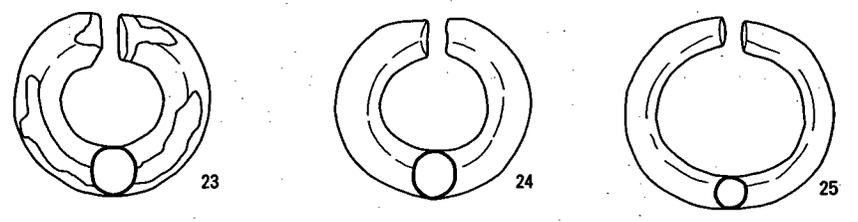
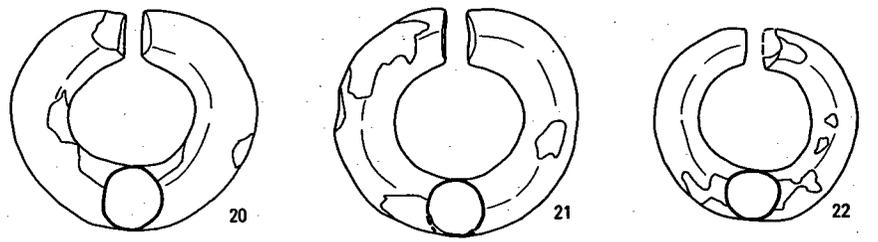
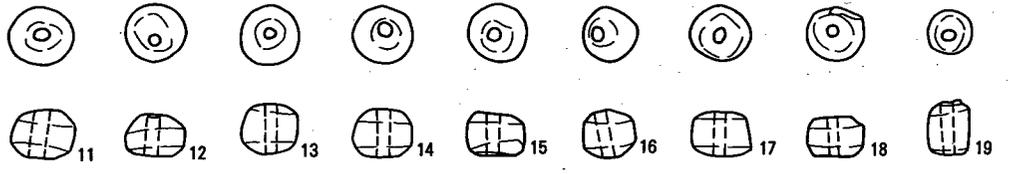
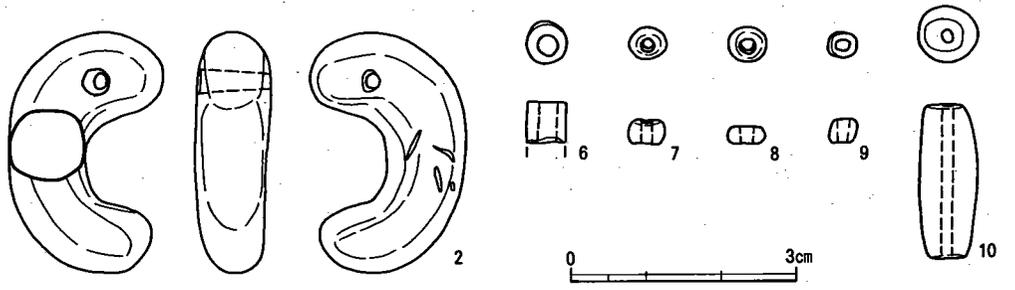
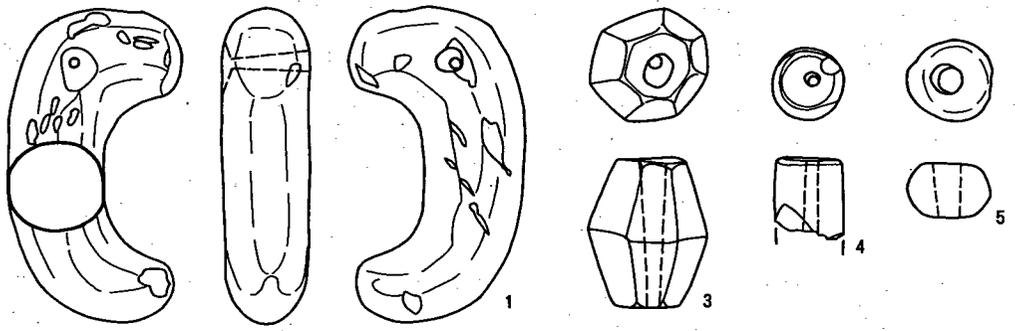
### 遺物

玄室では後半部分の敷石上あるいは敷石間に落ち込んだ状態で玉類が、そして特に左奥部には耳環が集中していた。また、玄門左では2本の太刀が重なった状態で出土した。

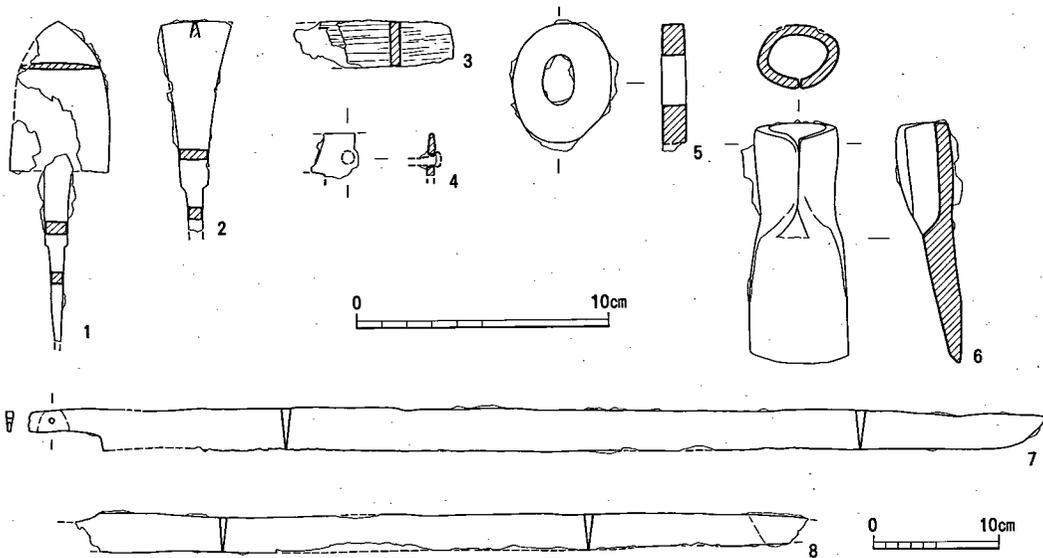
墓道では羨門直前、右奥部で刀子や土師器高杯が、墓道前端付近の床から鉄鏃や据えられたと思わせる須恵器甕、そしてやはり置かれたような状態で須恵器蓋杯などが出土している。

### 玉類 (図版76、第85図)

1はコ字形に近い勾玉で、孔の両面に整形時のものと思われる破損が見える。白濁する瑪瑙であるが赤褐色の短い筋が数条入る。玄室左奥隅付近出土。2は薄い鉛色の瑪瑙製。3は白濁する透明度の低い水晶製。管玉は碧玉製。小型品は色が薄い完形品で、大型品は深い緑色を呈し、古くに破損するようである。ガラス玉も大小がある。大きいものは風化が著しく白色化するが、本来は硬玉の様を呈していたようである。図示した以外にも数点の破損品がある。小玉は青系に発色する。10以下は土玉で、表面は灰黒色、破面は灰褐色で瓦質に近い。土錘状のものもある。



第85图 11号横穴出土玉器实测图 (1/1)



第86図 11号横穴出土鉄製品実測図 (1/3、1/6)

金属器 (図版76、第86図)

20・21、23・24の耳環はそれぞれセット関係にあると思われるが、出土位置から見れば別の個体と一緒に使われたものかも知れない。25は緑青を吹くが金・銀が全く見えない。22のみが中空で、他は中実。

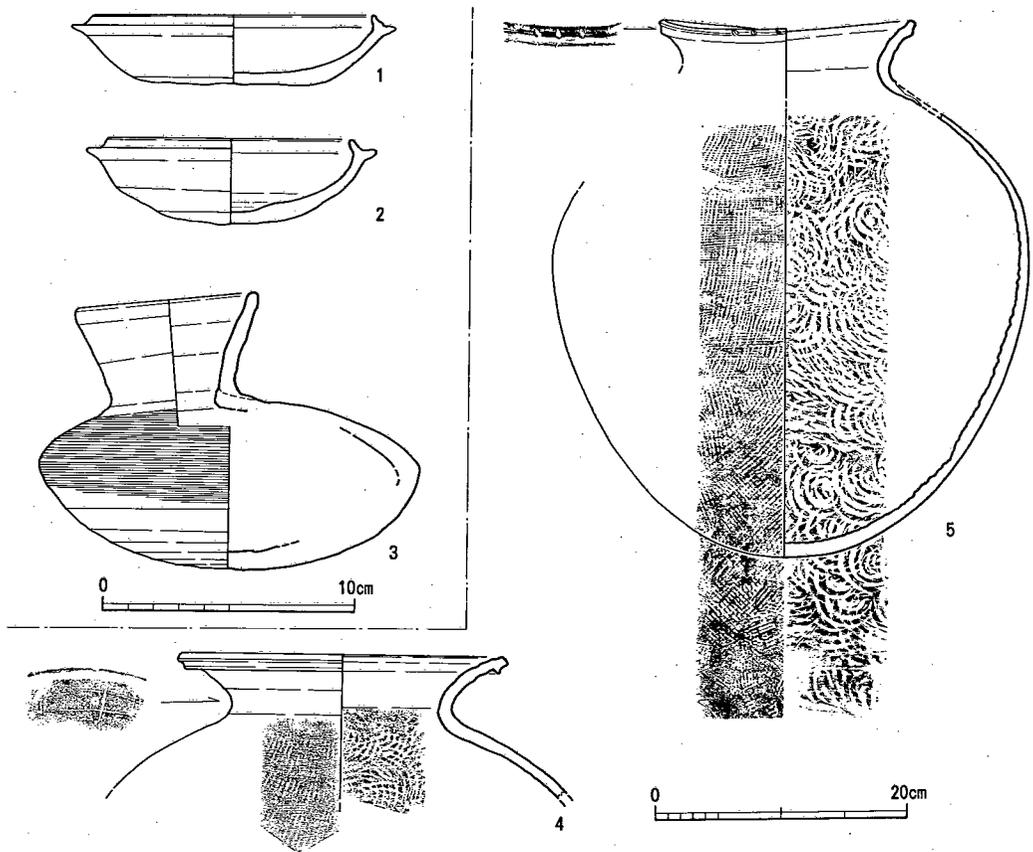
第86図1は発掘時に破損した大型品。2は錆のために細部で不明な点がある。この両者は墓道出土。3は刀子の柄であろう。木質が付着する。4は鉄製の金具小片で、鋸が見える。

5は鉄製鏝。錆が著しく膨らみ、層状に剥離しつつある。出土位置の特定ができていないが、太刀付近かと思われる。6は玄室奥壁よりの右側で発見された鉄斧。袋部の断面は丸い。

7は全長82cm弱の太刀で、刃部長は75.6cmを測る。関付近の刃部は非常に刃こぼれが多いが、いつ生じたものかは判断できない。目釘穴付近は厚味が薄くなる。8は柄の大部分と切先を欠くが、残存の刃部長が約57cmを測る。

土器 (図版77、第87図)

1～3はそれぞれ接して墓道前端から出土した。1・2は法量や形態がやや異なるが、外底面の調整はいずれも篋切り後未調整のままで終わる。作りは全体に丁寧。3は扁平な平瓶で、ほぼ完形。体部上半を粗いカキ目で覆い、下半ではカキ目の後に篋削りを施すようである。4は大甕で、頸部に篋記号がある。5は口頸部が体部に落ち込んで検出されたが、両者は接合しえない。意図的になされたと思われる圧痕が口端部に残る。



第87図 11号横穴出土土器実測図 (1/3、1/6)

## 12) 12号横穴 (図版49~52、第43・88図)

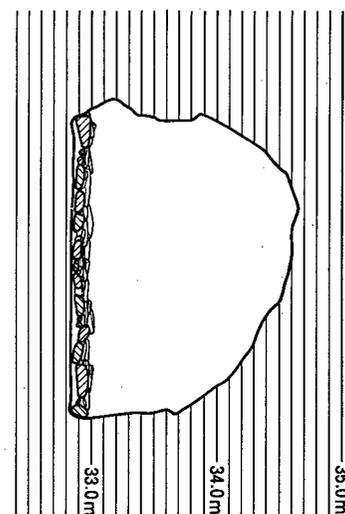
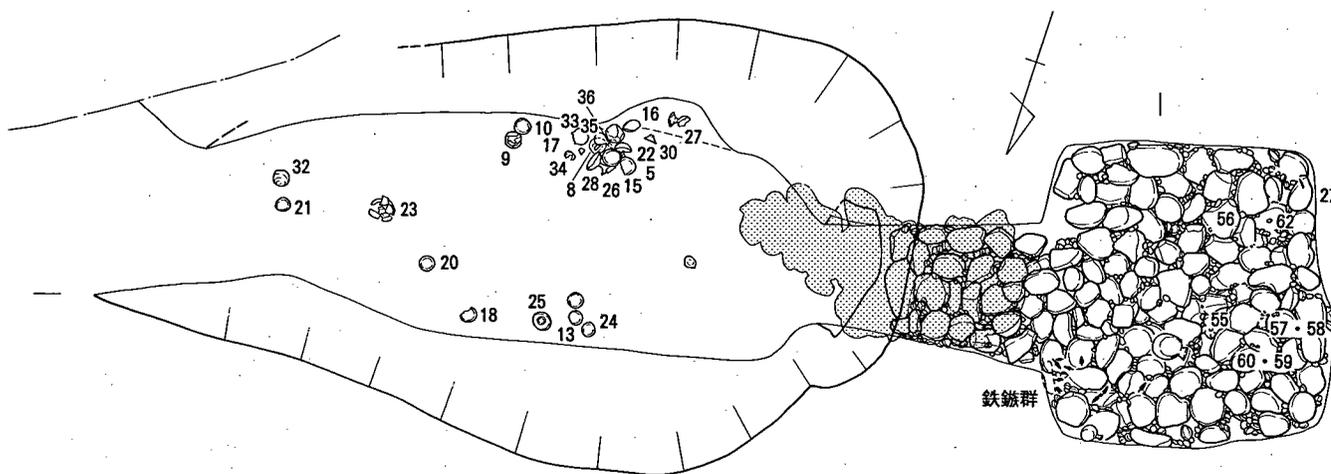
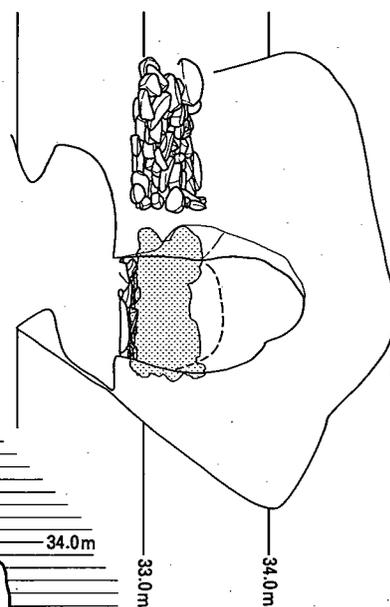
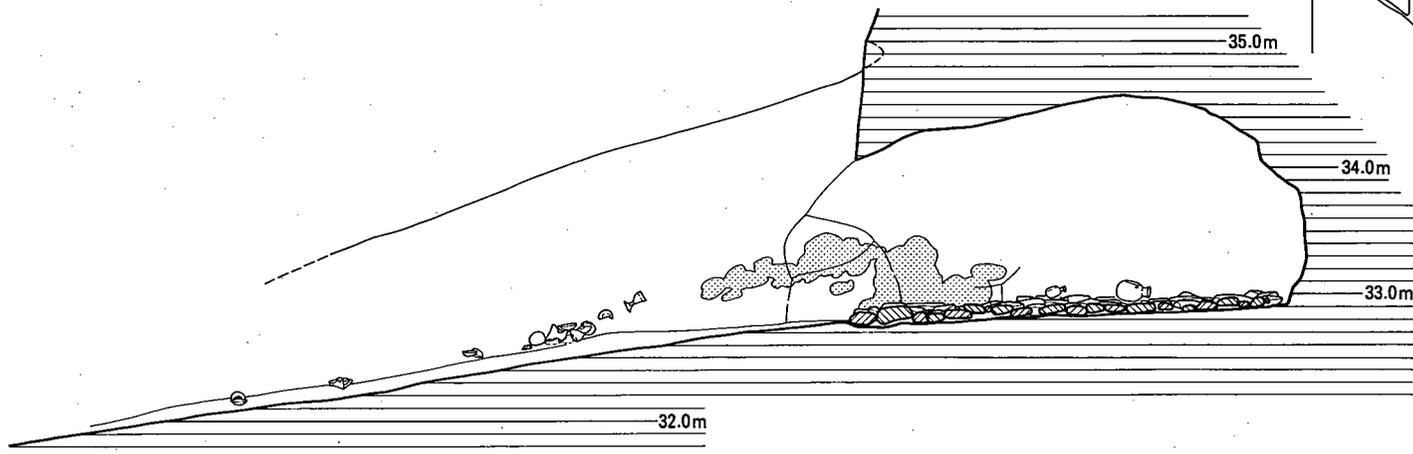
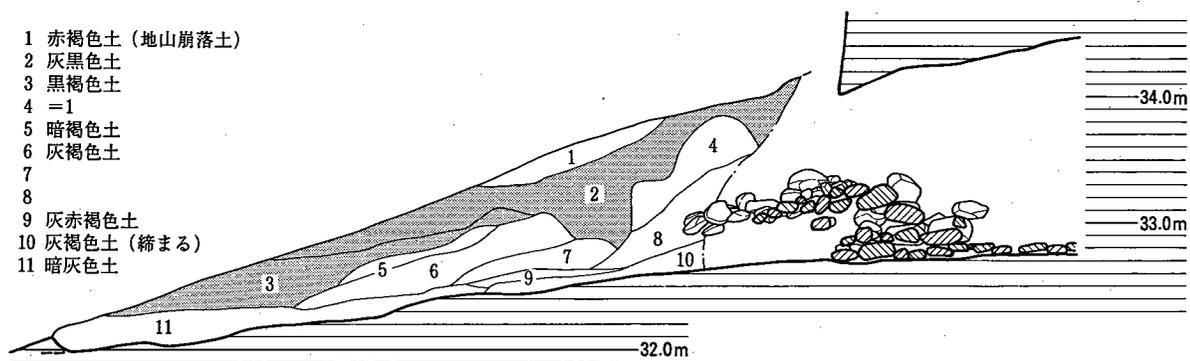
これも11号横穴同様、墓道のみが工事範囲となっていたものだが、主体部までの発掘を行った。主体部の形状等、11号横穴とよく似た構造であった。

### 墓道

羨門との間に段は見られないが、床面プランは明瞭に区分できる。それを元になると、墓道の長さは約5.7mとなり、また床面幅が他例に比して広い点で特徴的である。

縦断土層の観察では、閉塞付近の最下層に灰褐色の締まりのある土が見られるが、これは閉塞を包み込んだものと思われる。その上に堆積した土は概ね地山に近い土で、壁が崩落したものであろう。ここでは黒色系埋土は最上層に厚く堆積する。

- 1 赤褐色土 (地山崩落土)
- 2 灰黑色土
- 3 黒褐色土
- 4 =1
- 5 暗褐色土
- 6 灰褐色土
- 7
- 8
- 9 灰赤褐色土
- 10 灰褐色土 (締まる)
- 11 暗灰色土



0 3m

第88図 12号横穴実測図 (1/60)

## 閉塞

上半の多くが流れており、あるいは人為的になされたものかも知れない。断面の形状から見て、閉塞は玄門から敷石前端付近にかけての、長さ1mの範囲に川原石を積み上げていた。ここでも、より大型の石材を下位に置いていたことが想定される。

## 主体部

主体部はこれも他例に漏れず天井部が大きく崩落していたが、床面の状況は良好に遺存していた。玄室の平面プランは2.2×2.4mのほぼ正方形を呈する。床面はやはり扁平な川原石と小礫を使用し、ほぼ全面に敷き詰める。

羨道部は長さ1.8m、幅0.8～1.2mで、玄門部が幅広となる。この部分の敷石も玄室と同様に施され、その前端は柵石を意識したように、横長の石材を配置する。ただ、通常の柵石とは異なって、石材に厚みがなく、敷石と同レベルであった。

## 遺物

主体部では奥壁近くで耳環や玉類が発見された、特に右奥では6個の耳環や勾玉・切子玉などの玉類が集中していた。鉄製品は左奥付近に刀子が、そして右手前隅に鉄鏃がまとまって発見された。また、提瓶2点も供献されている。

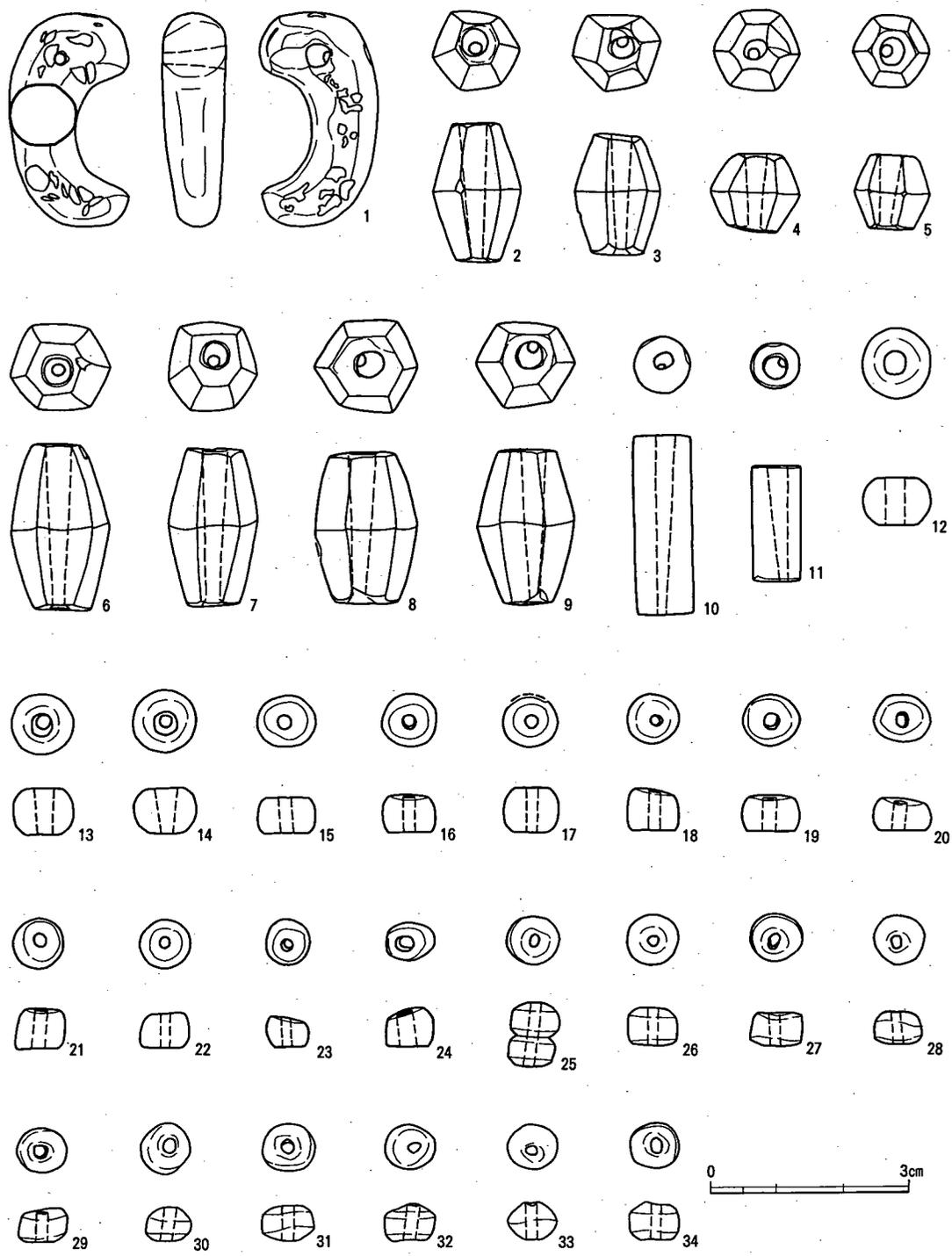
墓道では床面上あるいは床上20cmほどの位置で図示したように多くの土器が出土している。主体部に近い部分では間層が厚く、離れるほど床面に近くなるのは土層の堆積状況に対応しており、初葬時のものではなくある時期に供献されたものであろう。一部は7層上あるいは9層中で検出されている。

## 玉類 (図版77、第89・90図)

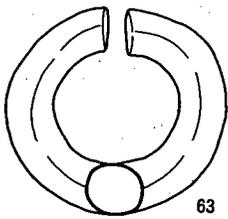
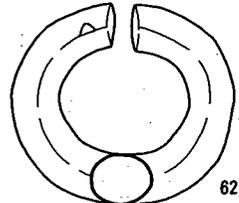
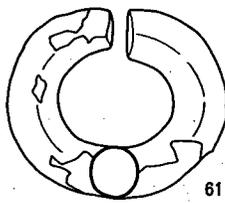
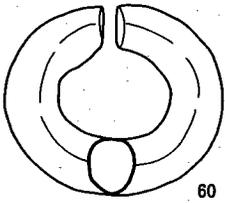
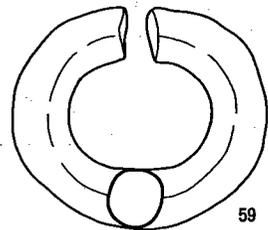
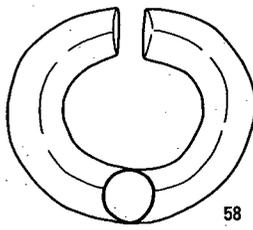
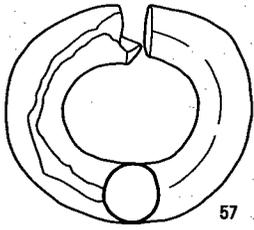
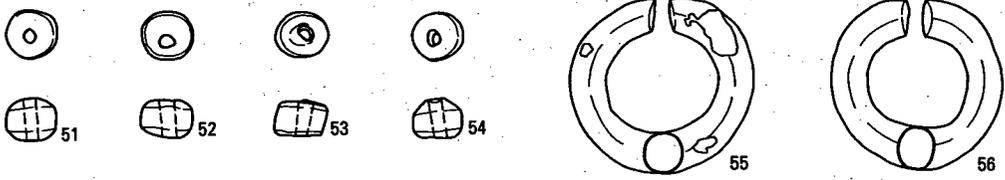
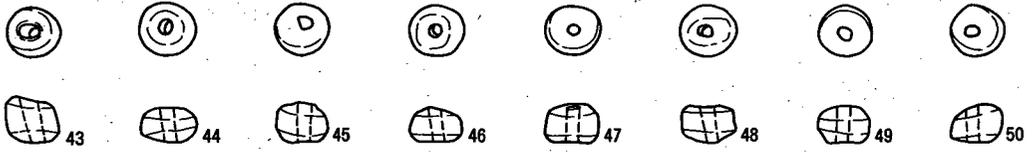
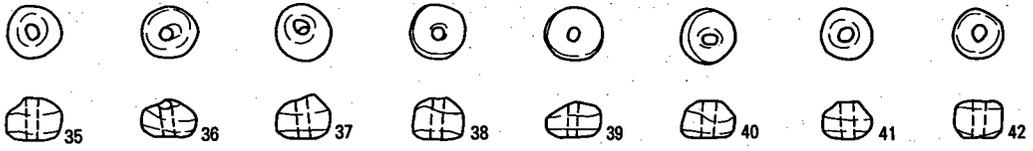
1はコ字形に近い勾玉で、全体に淡い色であるが頭部・尻部が鉛色に濃くなる。器面は荒れが目立つ。2～9は水晶製で、大きさは多様である。10・11は灰味を帯びる濃緑色を呈する良質の碧玉を用いた管玉。12～14は本来硬玉に似せて作られたガラス玉で、緑色が観察できるが風化して白色化する。15～24は濃青色ガラス玉、以下は灰黒色土玉である。

## 金属器 (図版77・78、第90・91図)

55・56、57・58、60・61、62・63がそれぞれセットであったと思われる。いずれも金環で、中実。出土状態は、57・58と59・60はそれぞれ接するような位置にあり、しかも前者の近くには玉類も集中するなど、再配置を思わせるものである。55・56の耳環が離れているのも片付け時の取りこぼしであろうか。61・62の耳環を付けた人物がおそらく最後の被葬者であろう。



第89图 12号横穴出土玉類実測图1 (1/1)



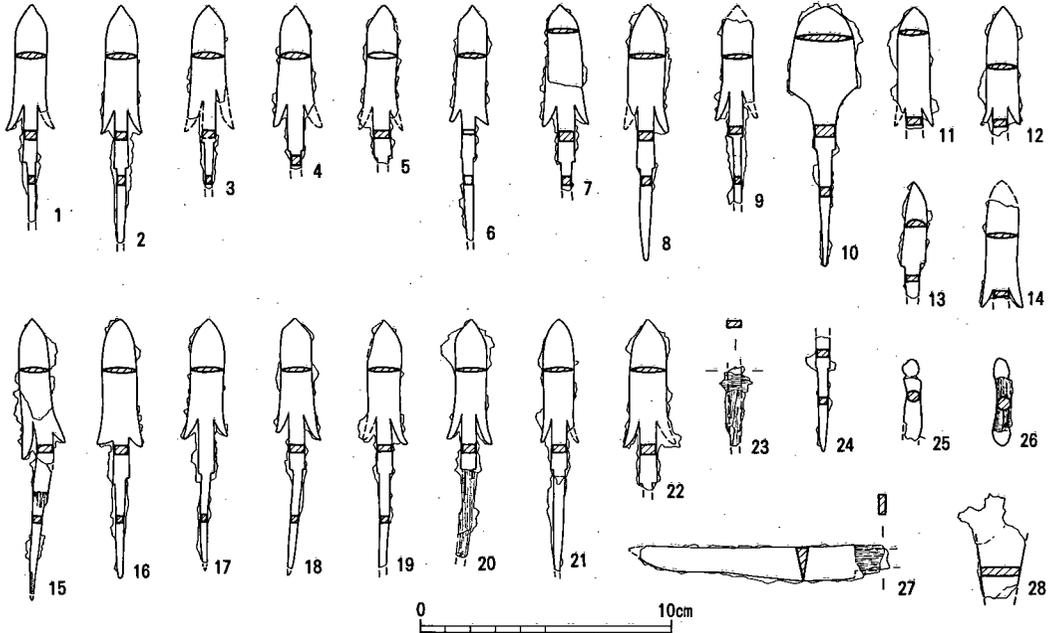
第90图 12号横穴出土玉類実測図2 (1/1)

1～9の鉄鏃はは玄室右手前隅から出土したもので、錆のために細部を確認できないものがあるがほぼ同一形式である。11～14は出土位置を確認できていないが、1～9と同じ位置で鉄鏃が数点図示されており、それに相当するものかも知れない。15～25は玄室左奥で出土したようであるが、他の横穴で鉄鏃が被葬者の身近に置かれた例がなく、確信が持てない。鉄鏃はやはり同一形式で、25は弓に装着された金具。26は墓道左側でまとまって出土した土器群とともに出土したものの。27の刀子は関の部分に錆のために判然としない。28は閉塞石中から出土した鉄鏃残片。

土器（図版78～81、第92～96図）

1・2は玄室内に堆積した土の表層で出土した。本来内部に副葬されていたものと思われる。1は口縁部の一部と脚部の約1/2を欠く。杯部外面の文様帯には櫛描刺突文を付し、脚部には細かいカキ目を付す。2は完形の甕で、底部付近は丁寧に不定方向の篋削りで仕上げる。3は床面出土の提瓶で、完存する。成形時の最大径部分のみ撫で、その他の体部全体にカキ目を施す。腹部ではカキ目原体による×印を刻む。4も床面出土で、耳を欠く他は完存。これも全体にカキ目を多用し、一部に撫でを使用する。

5～13は口径の大きさなどで3種に分けうる。5～8は口径約14cmの大型品で、器高は3.5～5.5cmとばらつきがあるが、いずれも天井部を回転篋削りあるいはその後撫でて丁寧に仕上げる。5は生焼け。9・10は口径13cm前後、器高4cm前後で、これも天井部は丁寧に削っている。11～13は口径12cm前後と最も小型で、天井部は篋削りのまま未調整である。13は酸化炎



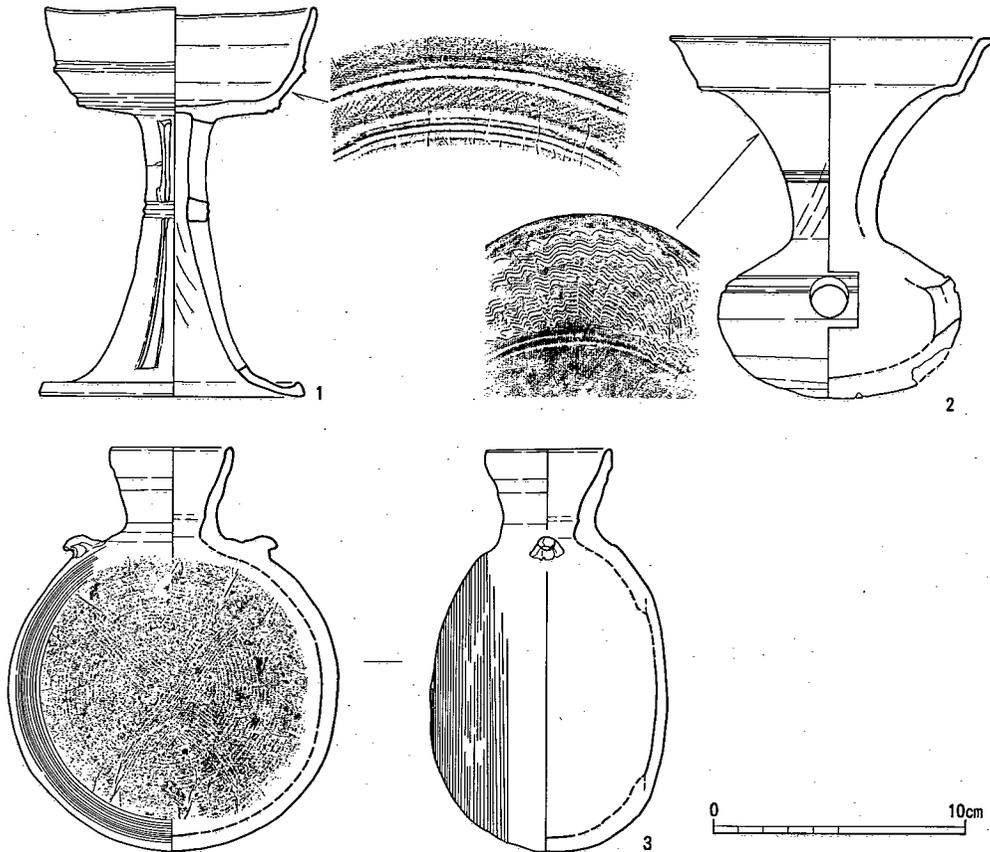
第91図 12号横穴出土鉄製品実測図 (1/3)

焼成土師質で、器表の遺存が悪い。

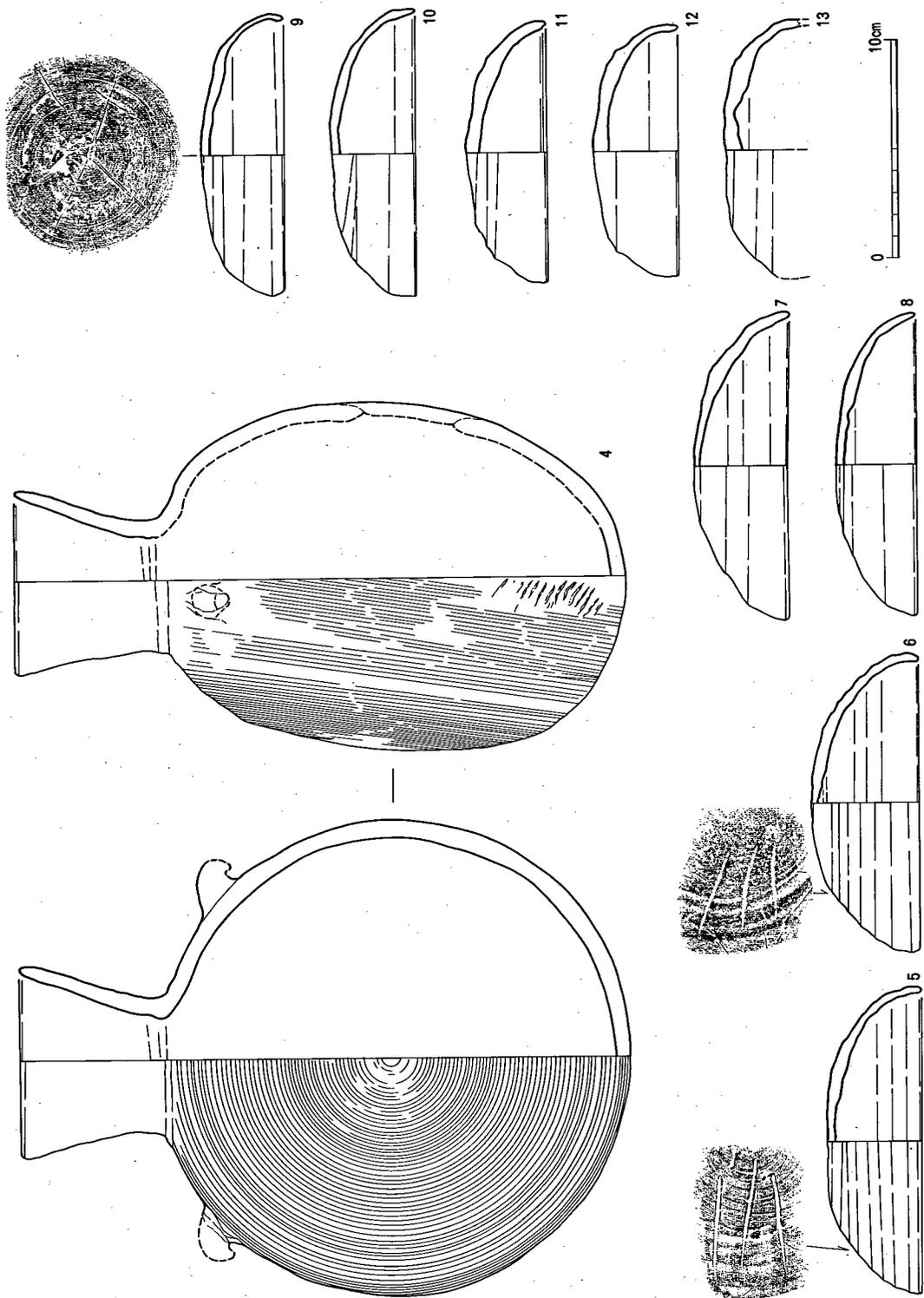
14~20は杯身。13は口径が14cmと最も大きい。全体の1/4ほどが残存するのみであるが、外底面に×印の篋記号が一部見える。15・16は口径が随分異なるが、いずれも底部を丁寧に回転篋削りで仕上げ、篋記号を付す。17~19は口径11cm前後となり、底部は篋削りの後に中心部付近を撫でている。10・17は組合わさって出土した。20は一層小型となるが、調整技法は先の3点と同様である。

21は特異な形の須恵器。底部付近は通常の杯身と同様であるが、立上りが非常に大きくコップ形となる。底部は丁寧に回転篋削りで仕上げ、体部~口縁部にかけてはカキ目が著しい。22はあるいは蓋であろうか。底部は篋削り後に撫で、沈線はシャープ。大きく焼け歪む。23は全体に雑な作りの脚杯壺。これも脚部は甗の口頸部によく似る。

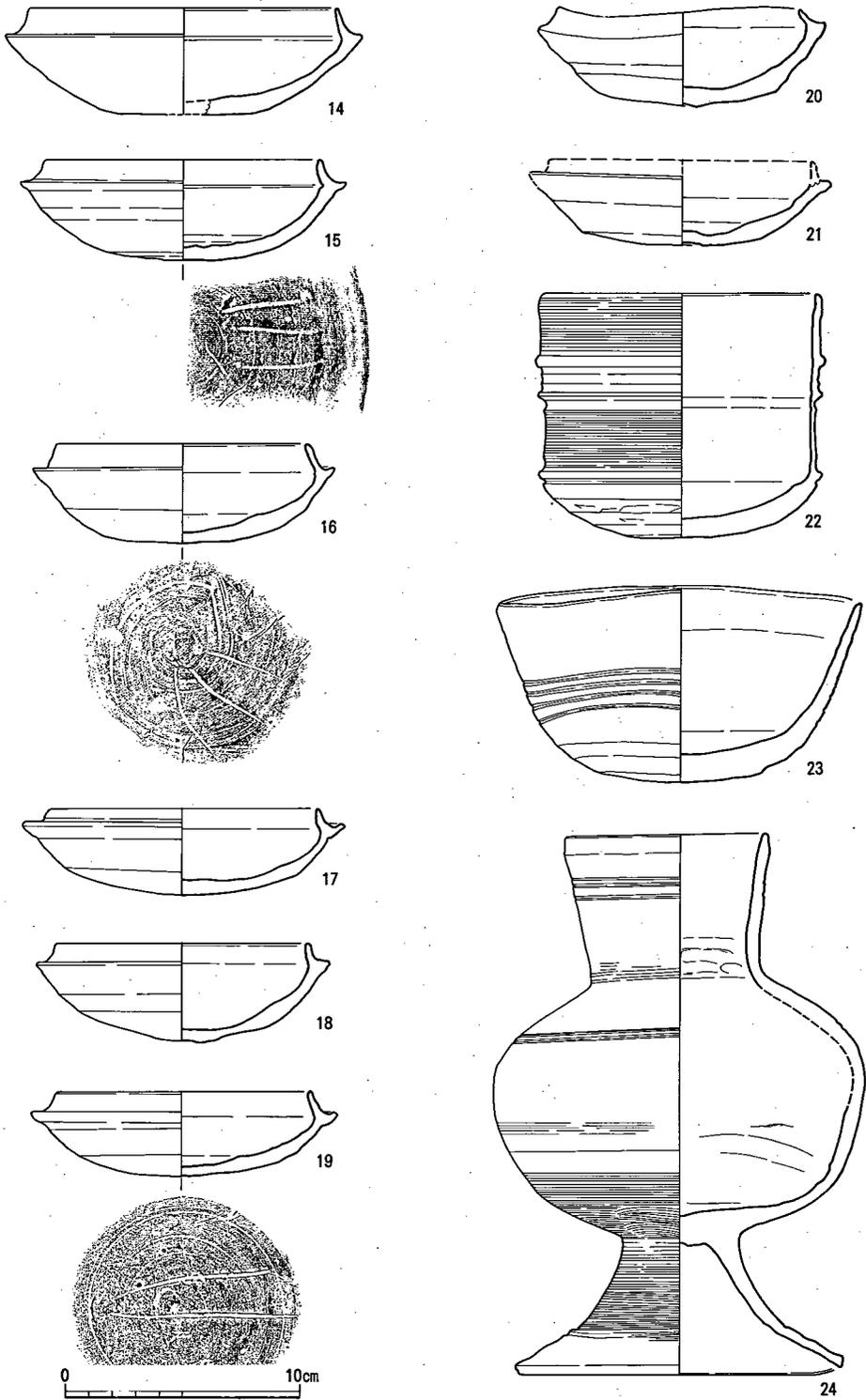
25・26もセットであろう。24は天井部を丁寧に篋削りし、口縁部上端に甘い沈線を巡らせる。26も作りが丁寧。27・28は2段2方向に長方形透孔を配置する高杯で、28は作りが粗雑である。29は無透孔で、これも雑な作りである。30・31はカキ目の使用が顕著で、同一個体であろう。



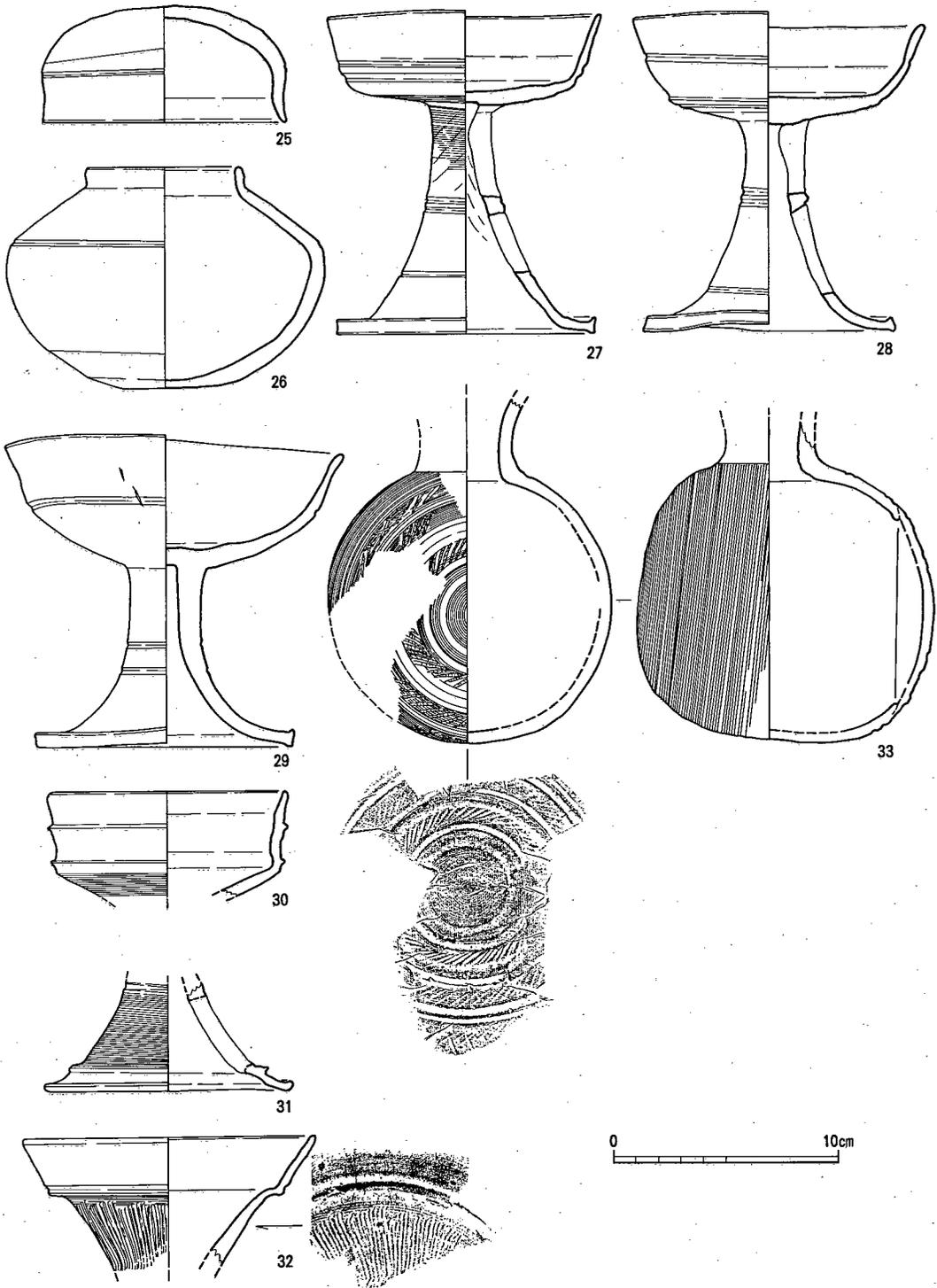
第92図 12号横穴出土土器実測図1 (1/3)



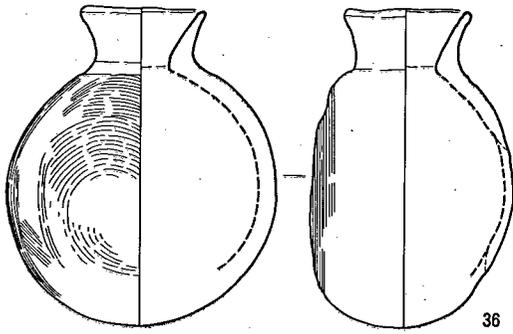
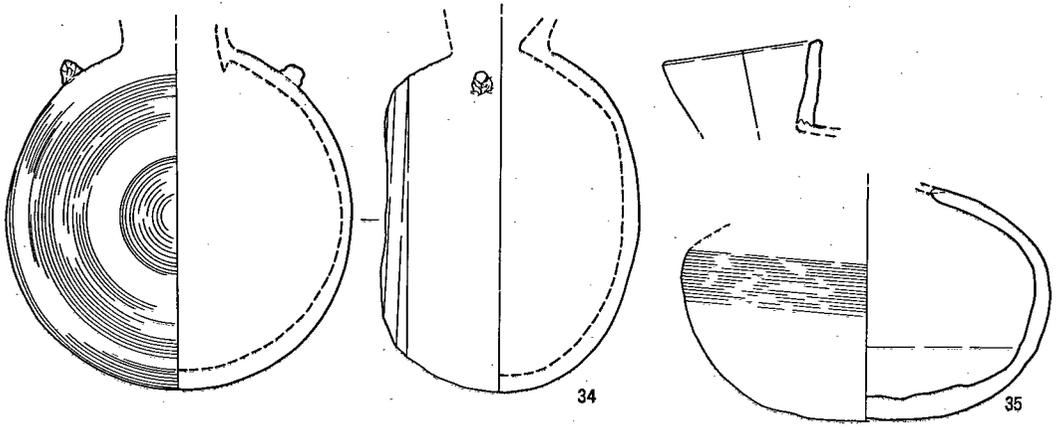
第93图 12号横穴出土器实测图2 (1/3)



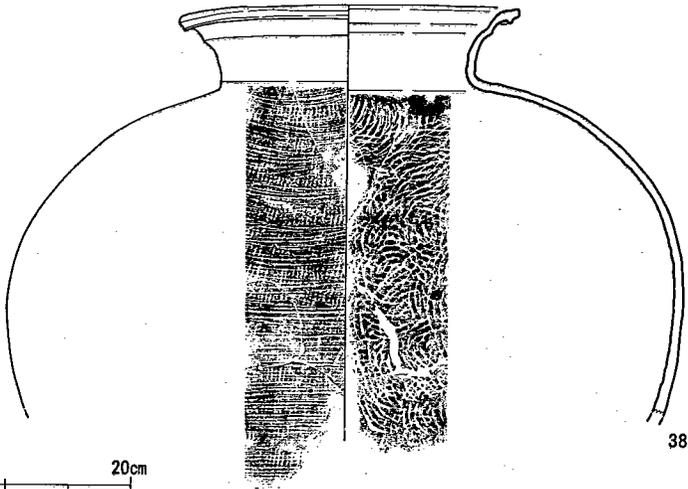
第94图 12号横穴出土土器实测图3 (1/3)



第95图 12号横穴出土土器实测图4 (1/3)



0 10cm



0 20cm

第96图 12号横穴出土土器实测图5 (1/3、1/6)

32は頸部をカキ目原体で縦方向に施文する。33は胴の幅が狭く、提瓶あるいは横瓶か判断しかねる。全体にカキ目を多用するが、背部には沈線で画した文様帯を配する。34の体部は完存。腹部は丁寧な篋削りで、他は細かいカキ目で覆う。35は接合しえない。体部の仕上げはごく丁寧であるが、焼成時にはじけた箇所が多い。36は完形。全体をカキ目調整するが雑である。37も同様である。

38は9・11号横穴の墓道出土品と接合したものである。図示部分の1/2強が残る。

### 13) 古墳・横穴周辺出土の土器 (第97図)

古墳・横穴周辺で出土するが、遺構に直接伴わない土器をここにまとめて紹介する。

1～5は号墳東の段丘肩に沿って走る里道状遺構から出土したものでいずれも小片である。

1は外底面を丁寧に篋削り調整し、×印の浅い篋記号が残る。

6・9～12は11・12号横穴前面の斜面から出土。ちょうど銅剣片の出土した付近である。6は外底面が未調整の須恵器杯身。9は残存部が少ないが、器形の全体が窺える土師器甕。外面は縦方向の削りに似た調整痕が微かに見え、内面は丁寧に撫でるようである。底部は丸底。10は器表が非常に荒れるが、脚部が発達する高杯であろう。11は底部が円盤を貼り付けたような形となる甕で、内面は全体に剥離するようである。12も高杯の脚部であろう。

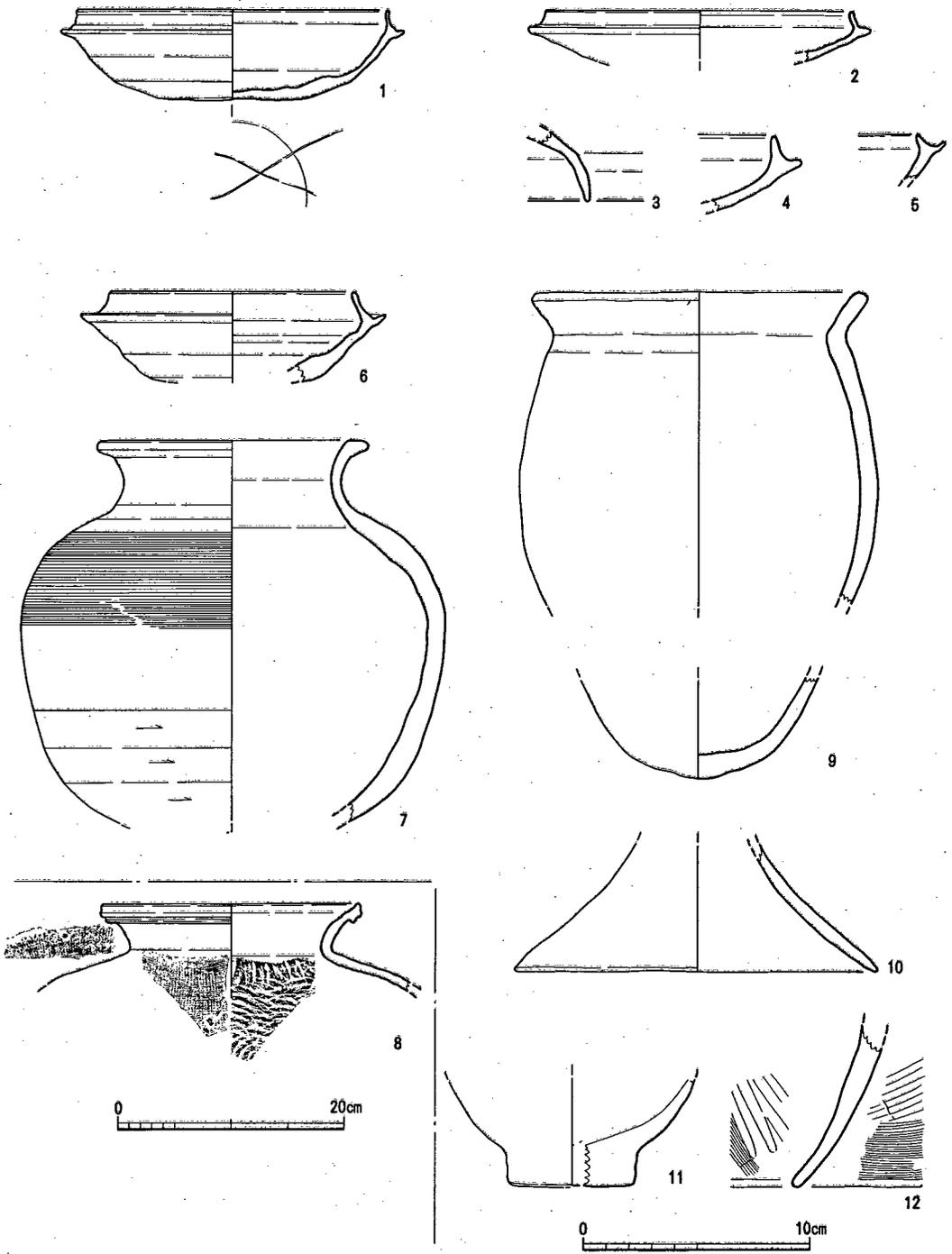
7は表土掘削時に重機で引っかけた須恵器。口縁部と体部が接合しえないが、図上復原した。位置的には横穴群の北半部であったと記憶するが、4号横穴の祭祀テラスの位置が高いことからそれに供献されていた可能性がある。8も表土掘削時のものようである。頸部に縦方向の刷毛目状の浅い擦痕が観察できる。

以上の中、土師器の一群は弥生終末頃に位置付けてよいかと考えるが、該期の遺構として調査区内では20余基の(石蓋)土壙墓群と竪穴式住居跡1軒が発見されている。墓地と生活跡が接近して同時存在することは特殊な例を考えなければならないが、終末頃という時間幅の中で想定してもよい。先の遺構形成時に崖下に投棄されたものであろう。

### 14) 小 結

発掘調査を行った12基の横穴の内容は以上のようなものである。横穴群は北には延びないが、南では明瞭にその痕跡をたどることができ、少なくとも7基が確認できる。北の4・5号墳下方の谷および古墳群南端を限るかと思われる小規模な谷によって区画されるようである。

軟弱な地盤に掘削されるために遺構あるいは人骨の遺存状況が悪く、対岸の上ノ原遺跡のような大きな知見は得られなかったが、高塚墳との関係においては多くの示唆を与えるように思



第97図 古墳・横穴周辺出土土器実測図 (1/3、1/6)

われる。

横穴の構造はすべてがドーム形の玄室を有していたと想定され、1墓道1玄室であった。床面や閉塞の様子が高塚墳と共通する点は興味深く、築造時基・位置関係からみて非常に近い造墓集団の手になると考えてよかろう。

横穴墓の造営時期は、小田富士雄氏のいうⅢB様式に開始され、V様式まで続くようである。すなわち、ⅢB様式には4・5、12号横穴の造営が始まり、ⅣA様式には1・(2)・8・10・11号横穴、ⅣB様式に9号横穴が、そしてV様式の6号横穴の造営をもって新たな横穴掘削は終わるようである。以上の変遷は量的に過不足のある須恵器蓋杯を用いて行ったもので、細部については明確にしえないあるいは不確実な部分もあるが、おおよそその変遷は辿れるものと考えている。なお、出土土器からみて明らかに追葬と思われる現象を捉ええたものは4・12号横穴のみである。その他の横穴においても耳環の数から複数埋葬が確認されるものもあるが、この追葬が蓋杯の変化に反映しない時間でおさまるものか、あるいはそれ以外の年代差を捉え難い器種が用いられたものであろう。

横穴群の群構成を考える上で、規模や副葬品（鉄製品）が一つの重要な指標となる。

規模の面でいえば、5号横穴は全長の規模、前壁の雄大さで最も大規模なものであるが、玄室規模を見ればぬきんでたものではなく、むしろ小型の類に属する。しかし横穴中で唯一馬具（鐙）を副葬し、一部銀装の太刀を有するといった内容を合わせ持つ。また、11号横穴は全長規模・前壁の壮大さは5号横穴におよばないが、玄室規模は勝り、また太刀2口を副葬するなど、内容的にはそれに匹敵するものであった。各横穴の説明において一部で小規模なグループを示したが、巨視的に見れば、1～7号横穴、そして9～12号横穴はまとまりをもっているような配列をとり、かつ須恵器の各様式に属する横穴1～3基が存在する。先の2基の横穴の内容と考え併せるならば、各グループの盟主的な被葬者の横穴、そして卑近な集団の墓地であったといえよう。

これら横穴群の頭上に営まれた古墳との具体的な関係については、築造時期がほぼ並行することから非常に興味ある問題であるが、古墳の内容がほとんど不明なためにはっきりしない。ただ、金銅装の馬具を有する2号墳の内容は、古墳規模に比して豊富なものであり、これを強調すれば横穴群との差は明らかである。しかし、2号墳出土の馬具類は、該期の古墳が多く調査されているにも拘わらず、近隣ではまれにみる出土品であり、特異なものであるかも知れない。古墳と横穴の関係については今少し資料を纏める必要があり、またの機会に譲りたい。



第98図 西方古墳周辺地籍図 (1/2,000)

### 3 西方古墳 (図版82~84、第98・99図)

金居塚遺跡調査中、周辺を踏査して気付いたもので、1976 (昭和51) 年刊行の『福岡県遺跡等分布地図』豊前市・築上郡編にはこの地点の古墳は掲載されておらず、新たに発見されたものである。当初、古墳であることはすぐに判ったが、前方部で斜めに地境が設定されており、西側は大型落葉樹が疎に、そして地境に灌木が密生して視界を遮り、東では栗(?)が栽培されているといった風に植生が異なっていて、前方後円墳との確信は測量調査が進展するまで持てない状況であった。

測量調査の結果、当時、山国川下流域ではじめて確認された前方後円墳であり、かつ、後円部が大きく破壊される他は概ね遺存状況も良好で、古式の形態を保つことから研究者の間では話題を呼んだ。年刊行の『前方後円墳集成』でも「金居塚前方後円墳」として紹介したが、この場を借りて再度紹介したい。なお、細部についての前掲書との異同については、本記述をもって正式なものとする。

#### 立地

下唐原集落から西へ、大平村役場へと通ずる道が段丘を上る途中、北へ入る農道があり、その先にこの古墳は位置する。この坂が通称「さいほう坂」と呼ばれる。

古墳は段丘肩に接して築造され、周辺は畑地あるいは植林がなされるなどして林となっている。この立地は、先の金居塚古墳群の古墳と同様で、築造時は現唐原集落はもとより、遠く大分県中津平野からも視認できたことであろう。

今一つ重要と思われる点は、「さいほう坂」が開削されるに至る谷状地形の存在である。卑近な位置では金居塚古墳群の南端に比較的大きな谷が入り、北端にもわずかな谷状地形が認められる。そしてこの西方古墳の南に「さいほう坂」の谷が入り、北方では旧宇島鉄道 (現在段丘下を走る道) 路線が段丘を下る部分に、さらに北は県道吉富耶馬溪線が開削される部分に谷が入っている。この旧宇島鉄道路と県道間の段丘上に夔鳳鏡・四獣鏡等を出土したやはり前期前方後円墳である能満寺3号墳が立地し、両者を隔てる距離は約500mである。両前方後円墳は、谷状地形で区画される段丘の縁に位置するのである。

#### 墳丘

先にも記したように段丘肩に接して位置し、後円部北は大部分が植林された檜、一部が雑木



第99圖 西方古墳地形測量圖 (1/400)

林で、後円部西から前方部前面は畑となり開けている。墳丘上は東半が概ね低木の雑木林、西半には高木の雑木が植栽される。また、後円部東には金比羅神の小祠がまつられる。

### 周溝

背面が大きく削られるが、これは檜植林の際に土取りを行ったものという。それと関連すると思われる直径5m前後の大きな窪みが周辺で観察できる。等高線は周溝状のくびれる線を描くが、現状では周溝を思わせる地形変換点は全く見えない。しかし、盛土に使用した土の採取場所が当然存在するであろうことを前提とすると、後円部背面のくびれる等高線、そしてそれが地境の畦畔を変換点とすること、後円部の盛土のかかなりの部分が植林に際して削り取られたことなどから本来はこの部分に周溝があった可能性がある。その場合の規模は畦畔を重視すれば幅10mほどの規模となるであろう。

墳丘西半部も畑に開墾されていて周溝の痕跡は視認できない。ただ、前方部先端と農道が一部で平行して走ることから、ここが周溝の痕跡を残すとすればここでの幅は約14mほどとなる。現状では前方部前端から12m強の付近で開墾されて大きな段が生じており、この10~14mという数値が意味を持つように思える。

### 後円部

背面を削られているが、盛土の東西長は現状で31mを測る。また、旧地形が東へ下降するために、比高は東西で若干異なるが、ほぼ4m強となる。

採土の破壊は墳頂部におよぶため、当初の形状は不明な点があるが、現状で頂部には平坦面が見られ、その範囲は径10mを越えるようである。また、頂部には幅4m強、深さ0.5m弱の盗掘の痕跡と思われる窪みがある。背面の破壊面の表面観察では石材等は見えず、主体部は木棺と粘土を使用したものであろうと予想している。

### 前方部

先端部で開削がなされるが、等高線を見る限りはかなり良好に残存していると思われる。残存する最大幅は16m、高さは2.5m強。全体的に後円部から前方部にかけて地形が下降するために、後円部との比高は3mとなる。

くびれ部は幅11m、高さ2m弱で、締まりが強い。

### まとめ

以上をまとめると、全長56mほどの規模の前方後円墳となり、形態は古式で、前期古墳に属するとしてよからう。墳丘に比較的大型（小児頭大）の葺石が観察できるが、段築は観察でき

ない。しかし、能満寺3号墳の例から見てなされていたと考えている。埴輪を確認していないが、使用の有無については判らない。主体部は竪穴系に属するものを想定できる。

先に調査・報告を行った能満寺3号墳の前方部形態が特異なために、両古墳の関係を直接比較することは、困難である。しかし、能満寺3号墳では先行する古墳が存在し、しかもその内容が非常に古層を示すことから、この西方古墳を能満寺3号墳に後出するものとする方が妥当と考えている。

#### 4 金居塚古墳群 (図版85~87、第100図)

「福岡県遺跡等分布地図(豊前市・築上郡編)」には「カネツカ古墳群」として6基の古墳が登録されている。しかし、実際には非常に大型のものから小規模なものまで、より多くの多様な古墳が密集していることがすぐに判った。バイパス建設に先立って5基の古墳・12基の横穴を調査したが、それらに対する評価も周囲の古墳を全く無視しては的外れなものとなりかねない。したがって今回の調査中、植林がなされていて調査が可能な範囲について地権者の了解を得て測量調査を実施したので、ここに紹介する。

ここに示した古墳群の南にもなお数基の古墳が存在するが、足を入れることができないほどの草木が繁茂しており、測量を実施できなかったことを付記しておく。

##### 古 墳

発掘調査を実施したものを含めて16基の群集を確認しているが、若干離れた畑の中にも1基の横穴式石室墳が存在し、未調査のものを含めて20基以上からなるものと思われる。最大規模のものは10号墳で、周溝を含めた直径35m前後の大円墳である。石室は大破するようだが、南東側にはテラスが明瞭に認められ、段築がなされているようである。それに次ぐのが直径30m弱の7号墳で、これにも同様の段築が認められる。

以上の2大円墳の次には直径15~20mの古墳が存在する。未発掘墳はおそらく周溝が埋没していて、若干大きくなることが予想され、1~3、8、11、14、15号墳等がこの中に入るであろう。

そして小規模墳として直径10m前後の一群が指摘できる。

##### 横 穴

横穴は地表観察ではさらに南へ続き、7基まで確認できる。さらに南へ続くかどうか確信はないが、コンターを入れた範囲に限れば19号横穴で途切れるようである。



第100図 金居塚古墳群地形測量図 (1/400)

### 金居塚古墳群の性格

この山国川左岸の段丘上や、さらに西方の丘陵地帯にどれだけの古墳が存在するのか、未だはっきりしたことは判っていないが、過去に行った分布調査の結果が1986年に刊行された『大平村誌』にまとめられており、その記述を元にこの古墳群の位置付けを考えてみたい。

同書には次のような古墳群が記載されている。

向原古墳群（土佐井）…………… 2基	鳴向山古墳群（土佐井）…………… 3基
平山古墳（東下）…………… 2基	小池古墳群（下唐原）…………… 5基
下野地古墳群（下唐原）…………… 3基	能満寺古墳群（下唐原）…………… 3基
ガサメキ古墳群（下唐原）…………… 11基	穴ヶ葉山古墳群（下唐原）…………… 11基
上の熊古墳群（下唐原）…………… 15基	カネツカ古墳群（下唐原）…………… 11基
皿山古墳群（下唐原）…………… 7基	小山田池古墳群（上唐原）…………… 2基
四塚山古墳（上唐原）…………… 2基	薬丸古墳群（上唐原）…………… 4基

以上の内、向原古墳は圃場整備事業に伴い発掘調査がなされた土佐井地区古墳群（8基）かと思われ、能満寺古墳群は前期に属する古墳であることが発掘調査の結果判明した。また、下野地古墳群の1基は豊前バイパスに、穴ヶ葉山古墳群の4基（穴ヶ葉山南古墳群）は埋め立て処分造成工事に、さらに1基は民間工場用地造成工事に先立ってそれぞれ発掘調査がなされて消滅している。また、ここに記載されていない古墳群として通称大池の西岸に存在した5基の小型墳（恵良古墳群）がキャンプ場造成に伴い調査され、さらに3基以上の古墳が隣接する小丘陵および大池水中で確認されている。

横穴としては凝灰岩に掘り込まれた百留横穴群（村指定史跡、46基）、上唐原横穴群（4基）、荒平横穴群（原井、6基）の存在が知られるが、今回の調査結果を引き合いに出すまでもなく、更なる横穴が埋もれていることは容易に想像できよう。

上記の分布調査はもちろん村内のすべての古墳を網羅しているのではないけれども、大方の分布傾向を示すとして、また、過去の調査例からみて多くが6世紀後半から7世紀にかけて築造された後期古墳であることが予想されており、そうした仮定を前提として以下を続ける。

まず、指摘できる点は分布の片寄りである。すなわち、河岸段丘に特徴付けられる上・下唐原地区から百留、その延長の山岳である原井（旧唐原村域）に遺跡が密であり、地形が複雑な旧西友枝村域では概して疎である。ただ、旧西友枝村を貫流する友枝川の両岸では、村域をはずれた新吉富村域にかけて数百基の古墳群が存在したといわれ、豊前バイパスの調査で破壊され、畦畔下に埋もれた宇野代古墳群を発見し、かつての古墳群を髣髴とさせた。

また、これはすべての古墳群の調査あるいは測量がなされたわけではないので、多分に推測を多く含んでいるが、群集形態に中規模墳が散在するタイプ、基数の差はあるが小規模墳の密

集、そして金居塚古墳群のように大型古墳を含む10数基から20基前後の古墳が集中する3様が存在するようである。ここでは特に後者の点について少し考えてみたい。

#### 散在型

先に記載された穴ヶ葉山古墳群は現在使用する「穴ヶ葉山古墳群」4基、かつて調査されて記録（1基は移築）保存となった「穴ヶ葉山南古墳群」4基を包括している。それでも古墳数が整合しないが、周辺はかなり以前から開墾が進んでいることもあって現在では確認できないか、確認困難な古墳の数が含まれているようである。丘陵南東斜面に位置する穴ヶ葉山南古墳では約700m四方の範囲に4基の古墳がほぼ等間に位置しており、各古墳は直径16m前後の規模の円墳と報告される。石室は長さ6～7mの単室横穴式石室で、盗掘が甚だしいが副葬品には金銅製の弭・留金具、銅製の留金具・鞆尻金具などが出土した。このうち、3号墳には線刻が施され、先の遺物はそれ以外の古墳から出土したものである。また、以前はさらに多くの古墳が存在したというが、分布の状態は判らない。

穴ヶ葉山古墳群は1号墳が線刻装飾古墳として国指定史跡となっていて著名であるが、3号墳にもやはり線刻が施されている。やはり丘陵東斜面の150m四方の範囲に4基の円墳が所在する。これらの北はすでに大きく掘削されていて未知の古墳が存在した可能性があるが、南は谷が入って同南古墳群の尾根に続き、西および東には更なる古墳はなからう。このうち、1号墳は近年の環境整備に伴う確認調査で、30mを越える雄大な墳丘が現れたが、石室内は徹底して盗掘を受けており、遺物は乏しかった。反面、墳丘上や墓道からは特異な器台多数を含む多くの土器が出土しており、有力者の墳墓であることは間違いない。2～4号墳は直径14～19mの規模を現状で確認できるが、発掘を実施すればいずれも一回り大きくなるものであろう。出土遺物は乏しい。

以上の両古墳群はいずれも6世紀後半（末葉）から7世紀前半頃に築造とされる。

#### 小規模墳群集型

1994年度に調査を行った恵良古墳群が好例であろう。5基の古墳からなるが、直径10m前後の2基、同6m前後の3基の小規模墳がほぼ直線的に配列する。7世紀代に道営されたものであろう。この古墳の北にある小丘陵上にも同様の形態と思われる数基の古墳が所在する。また、これはすべての調査を行ったものではないが、新吉富村山田古墳群・照日古墳群は一連の同一尾根線上に10基に満たない古墳が並ぶように配置し、墳丘規模も10m前後の小規模円墳からなるようである。ただし、この古墳群の位置する山麓には旧上毛郡の一大須恵器窯跡群が所在し、山田古墳は線刻を有する村指定壁画古墳であるという点できわ立つ。

また、かつて数百基の古墳が存在したといわれる友枝川左岸では、豊前バイパス建設に先立って小規模墳の群集が確認されている。宇野代遺跡では、水田下の40×70mの範囲で19基の小型横穴式石室を検出し、さらに路線外へ続くと考えられている。主体部は川原石積みの単室で、

墳丘は最大のもので周溝を含めた直径約13m、多くが10mに満たない規模で、また周溝が重複して築造されている。出土遺物は乏しく、若干の土器、鉄製品（鏃・刀子）、玉などである。古墳群の配置は金居塚古墳群に似るが、この調査範囲で大型墳がみられず、その存否は今後の課題である。やはりバイパスに伴う調査で、同川右岸で巨石を使用した古墳の残骸を発見しており、ここでは川を挟んで古墳間に格差が表されていたものかも知れない。

#### 大小古墳密集型

金居塚古墳群を代表とする密集型群集墳で、近くではすぐ南の支丘に位置する上の熊古墳群が同様の形態をとるようである。筆者自身、分布調査をしたものではなく、また資料作成が進んでいないことから他にも同様の形態の古墳群が存在する可能性はあるが、先の村誌の記述から推してもその数は限られるものと思われる。

以上の3形態の後期古墳群に葬られた人物がどのような人々であったのか、横穴式石室という構造上、ほぼすべてが盗掘を受けているために評価は困難である。しかし、投入された労働力を最も反映する墳丘規模をみれば、直径30mを越える円墳は大規模なもので、例えば豊国国造の墓所かともいわれる7世紀前半頃の京都郡勝山町橋塚・綾塚両古墳は長軸40mほどであり、金居塚10号墳の規模はそれらに近い。

また、2号墳は直径15mほどのどこにでもあるような円墳であるが、金銅製の馬具を副葬品として有していたことは、階層の低からぬことを窺わせている。この地域の小規模墳から出土する遺物は一般的に横穴群から出土したものと同様で、耳環を除く金銅製品は希有であり、刀子・鉄鏃・鉄製馬具等が通有である。根拠とする資料に乏しいが、金居塚古墳群の造営者たちが地域の支配者的な地位にあったことはほぼ間違いなからう。

先の小規模墳密集型の古墳は出土品の内容から階層的に金居塚古墳群の下位にある。また、散在型の古墳は内容的に豊かであり、比較的上位の階層に属すると思われる。金居塚古墳群との比較からいえば、穴ヶ葉山南古墳群では金銅製弭や銅製留金具の出土をみており、一概に優劣をいえないが、強いていえば、金居塚古墳群を造営した集団は支配者の周辺に官僚的な人々が密接な関係を保って存在しており、穴ヶ葉山古墳群の場合には支配者の権力がより卓越し、官僚との間に一層支配・被支配の関係が確立されたものであろう。

村内の後期古墳について思いつきを記してきたが、基礎資料である古墳の分布状況からしてあやふやなものであり、ほとんど根拠のない私見である。旧上毛郡域で現在知られる古墳は、ほとんどが山国川流域に集中し、やがて垂水廃寺が建立される。弥生時代以来のこの地域の歴史的展開は非常に興味深く、今後の資料の充実、研究の進展に期待したい。

第2表 金居塚遺跡古墳・横穴一覽表

墳丘規模 径、高(m)	周溝	石室全長 (m)	墓道規模 (長さ:m)	女室		排水溝	主体部出土遺物			墓道出土遺物		時期	備考
				規模(長×幅)	平面形		玉類	金屬器	土器	金屬器	土器		
1号墳	20、0.5以上	有	6.4	15	長方形	有	ガラス玉	耳環、鉄釘、 鍬具、刀装 具、鉄鏝	須惠器壺、 須惠器高杯、 瓦器	土器 土師器高杯、壺、須惠器 壺杯、高杯、 提瓶、長頸壺、 壺	ⅢB ~ⅣA		
2号墳	16、1.2以上	有	2.1以上	24		有	水晶製切子玉、 瑪瑙製丸玉、 ガラス玉	耳環	須惠器壺	須惠器壺杯、高杯、 提瓶	ⅣA	石室大破、ほとんどの 遺物が掻き出される	
3号墳	18、3	有	5.9	16	長方形	無	ガラス玉	鉄鏝、木刀、 馬具片等	須惠器高杯	須惠器壺杯	ⅢB	墳丘上に祭祀土器(須 惠器)	
4号墳	10	有	3.7	4.2	正方形	無		耳環		須惠器壺蓋?・壺			
5号墳	15	有	4.8	8.8	長方形	有	硬玉製勾玉、 瑪瑙製丸玉、 水晶製切子	耳環、刀子、 鉄鏝、鉄斧	須惠器壺、 須惠器提瓶	須惠器壺杯、 提瓶	ⅢB	周溝から須惠器	
6号墳	10、1~1.5	未確認											
7号墳	28~32.4~6	有											
8号墳	15、1~2	未確認											
9号墳	10、1	未確認											
10号墳	34、3~6	有											7-11-12号墳を切るか
11号墳	15、3~3.5	未確認											
12号墳	8、1	未確認											
13号墳	7~10、1	未確認											
14号墳	12、1~1.5	未確認											
15号墳	13、1.5~2.5	有											14号墳を切るか
16号墳	7、1	未確認											

【墳丘規模】の内、括弧は周溝を含む、高さは最低値と最高値。

全長 (m)	羨道規模 (長×幅)	女室 規模(長×幅)	排水溝	主体部出土遺物		時期	備考
				玉類	金屬器		
1号横穴	7.8	1.2×0.6~0.8	有	耳環1	須惠器壺杯、高杯、 提瓶	ⅣA	土器の一部は祭祀用 テラス上に配置
2号横穴	8.7	1.7×0.7~0.9	有	耳環3、刀子	須惠器高杯、平瓶	(ⅣA)	
3号横穴	6.6	1.0×0.7~0.9	無	不明銅製品	土師器壺、須惠器壺	ⅢB~	祭祀用テラス付設、墓 道に大量の磁碎土器
4号横穴	9.0	2.1×0.6~1.0	無	耳環3、刀子、 木刀、鏝	須惠器壺杯、高杯、 提瓶	ⅢB	
5号横穴	12.9	3.0×0.6~1.2	有	硬玉製勾玉、ガラス玉	須惠器壺、有蓋柑、 壺、平瓶	V	
6号横穴	9.7	1.7×0.6~1.0	無	ガラス玉、土玉	提瓶、土師器壺		
7号横穴	8.0	1.4×0.8~1.2	有	耳環3	土師器壺、須惠器壺、 平瓶	ⅣA	
8号横穴	8.6	1.5×0.6~0.8	無	水晶製切子玉、瑪瑙製丸玉、 ガラス玉、土玉	須惠器壺杯、 提瓶、高杯	ⅣA	
9号横穴	8.8	1.4×0.8~0.9	無	ガラス玉、土玉	須惠器壺杯、平瓶、 壺	ⅣB	
10号横穴	6.6	1.2×0.6~0.7	有	ガラス玉、土玉	須惠器壺杯、高杯、 柑、壺	ⅣA	
11号横穴	11.7	2.0×0.5~1.0	無	瑪瑙製勾玉、水晶製切子玉、 碧玉製管玉、ガラス	刀子、鉄鏝	ⅣA	
12号横穴	10.0	1.8×0.8~1.2	無	硬玉製管玉、ガラス	須惠器壺杯、 提瓶、高杯、 壺、柑、壺	ⅢB~	

第3表 金居塚遺跡・出土玉類一覧表

No	径	孔径	厚さ	重量	色	材質	備考
古墳							
1-1	8.5	3.0~4.0	4.0~4.5	0.3	白色(風化)	ガラス	
2	3.5~4.0	1.0~1.5	3.0		青色	ガラス	
2-1	13.5~15.5	2.0~4.5	25.5	6.9	白色透明	水晶	
2	12.0~12.5	2.0	9.5~11.5	2.3	赤色~乳白色	瑪瑙	
3	12.5~13.0	3.0~3.5	10.5~11.0	0.9	緑黄色透明	ガラス	
4	10.5	3.0~4.0	5.0~5.5	0.9	淡緑色(風化)	ガラス	
5			5.5		淡緑色(風化)	ガラス	
6	11.5~12.0	2.0~3.0	7.0~8.5	1.7	コバルトブルー	ガラス	
7	11.0	3.0~3.5	9.0	1.3	コバルトブルー	ガラス	
8	11.0	3.5	9.0	1.3	コバルトブルー	ガラス	
9	11.0	3.5	8.5	1.4	コバルトブルー	ガラス	
10	11.0	3.5~4.0	8.5	1.1	コバルトブルー	ガラス	
11	10.0	3.0~3.5	8.0~8.5	1.1	コバルトブルー	ガラス	
12	11.0	3.0~4.0	8.5	1.4	濃青色~紺色	ガラス	
13	12.0	3.0~3.5	9.5~10.5	1.8	コバルトブルー	ガラス	
14	12.5	2.5	8.5	2.1	コバルトブルー	ガラス	
15	10.5	3.0~4.0	8.0~8.5	1.2	コバルトブルー	ガラス	
16	11.0	3.0~4.0	9.0	1.5	コバルトブルー	ガラス	
17	11.0	3.0	8.0	1.2	コバルトブルー	ガラス	
18	10.5	3.0~3.5	8.0	1.2	コバルトブルー	ガラス	
19	10.0~11.5	1.5~2.0	5.5~8.0	1.3	コバルトブルー	ガラス	
20	8.5~9.5	1.5~2.0	4.0~5.0	0.6	コバルトブルー	ガラス	
21	9.0	2.0~2.5	5.0~5.5	0.7	コバルトブルー	ガラス	
22	8.5~9.5	1.5~2.0	5.5~6.0	0.7	コバルトブルー	ガラス	
23	7.5~8.5	1.5~2.0	5.5	0.6	コバルトブルー	ガラス	
24	8.5	1.5	5.5	0.6	コバルトブルー	ガラス	
25	8.0~8.5	1.5	5.5~6.0	0.6	コバルトブルー	ガラス	
26	7.5~8.5	2.0	5.0~6.0	0.6	コバルトブルー	ガラス	
27	7.5~8.5	2.0	5.0~5.5	0.5	コバルトブルー	ガラス	
28	7.5~9.0	1.5	5.0~5.5	0.6	コバルトブルー	ガラス	
29	7.5~8.0	2.0	4.0	0.4	コバルトブルー	ガラス	
30	7.5~8.5	2.0	5.0~5.5	0.5	コバルトブルー	ガラス	
31	7.0~8.5	1.0~1.5	5.5~6.0	0.6	コバルトブルー	ガラス	
32	7.0~7.5	1.5	5.0~6.0	0.5	コバルトブルー	ガラス	
33	7.5~8.5	2.0	6.0~7.0	0.7	コバルトブルー	ガラス	
34	6.5~7.0	2.0~3.0	4.0~4.5	0.3	コバルトブルー	ガラス	
35	6.0~7.0	1.5~2.0	5.5	0.4	コバルトブルー	ガラス	
36	6.0~6.5	2.0~2.5	2.0~3.5	0.2	コバルトブルー	ガラス	
37	6.5	1.5	4.0	0.3	青色透明	ガラス	
38	7.0~7.5	1.5	3.0~3.5	0.3	青色透明	ガラス	
39	6.5	2.0	3.5~4.0	0.3	青色透明	ガラス	
40	6.5	2.0	3.5~4.0	0.3	青色透明	ガラス	
41	4.5	1.0	2.5~3.0		コバルトブルー	ガラス	
42	4.0~4.5	1.0	2.5~3.0		コバルトブルー	ガラス	
43	4.0~4.5	1.0~1.5	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
44	3.5~4.0	1.0	2.5		コバルトブルー	ガラス	
45	3.5~4.0	1.5	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
46	3.5	1.0	2.5	0.1	コバルトブルー	ガラス	
47	3.5~4.0	1.0	2.5~3.0		コバルトブルー	ガラス	

48	3.5	1.0	2.5		コバルトブルー	ガラス	
49	3.5~4.0	1.0	2.0		コバルトブルー	ガラス	
50	4.0	1.0	2.5		コバルトブルー	ガラス	
51	3.5~4.0	1.5	1.5~2.0		コバルトブルー	ガラス	
52	4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
53	4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
54	4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
55	4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	一部欠
56	4.0	1.0	1.5~2.0		コバルトブルー	ガラス	
57	3.5~4.0	1.0~1.5	2.5		コバルトブルー	ガラス	
58	3.5~4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
59	3.5	1.0	3.0		コバルトブルー	ガラス	
60	4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
61	4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
62	3.5~4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
63	3.5~4.0	1.0	2.5		コバルトブルー	ガラス	
64	4.0	1.5	2.0		コバルトブルー	ガラス	
65	3.5	1.0	2.0~3.0		コバルトブルー	ガラス	
66	3.5	1.5	2.0		コバルトブルー	ガラス	
67	3.5~4.0	1.0	2.0		コバルトブルー	ガラス	
68	3.5	1.0	1.5~2.0		コバルトブルー	ガラス	
69	3.5	1.0	2.0		コバルトブルー	ガラス	
70	3.5~4.0	1.0	2.0~2.5		コバルトブルー	ガラス	
71	3.5~4.0	1.0~1.5	2.0		コバルトブルー	ガラス	
72	3.0	1.0	1.5		コバルトブルー	ガラス	
73	3.5	1.0	1.5~2.0		紺色	ガラス	
74	3.5	1.0	2.0~2.5		紺色	ガラス	
75	3.0	1.0	1.5~2.0		紺色	ガラス	
76	3.0	1.0	2.0		紺色	ガラス	
77	3.0	1.0	1.5~2.0		紺色	ガラス	
78	3.0	1.0	1.5~2.0		紺色	ガラス	
79	3.0	1.0	1.5		紺色	ガラス	
80	3.0	1.0	1.5~2.0		紺色	ガラス	
81	3.0	1.0	1.5~2.0		紺色	ガラス	
82	3.0	1.0	1.5		紺色	ガラス	
83	3.0~3.5	1.0	2.0		紺青色	ガラス	
84	3.5~4.0	1.0	2.5		紺青色	ガラス	
85	3.5~4.0	1.0	2.5		濃紺色	ガラス	
86	3.5	1.0	2.0		濃紺~黒色	ガラス	
87	3.0	1.0	2.0		濃紺~黒色	ガラス	
88	3.5~4.0	1.0	2.5		濃紺~黒色	ガラス	
89	3.5	1.0	2.0~2.5		濃紺~黒色	ガラス	
90	5.0~5.5	1.5~2.0	3.0~3.5		青色	ガラス	
91	5.0~5.5	1.5~2.0	3.0		青色	ガラス	
92	5.5	2.0	2.5~3.0		青色	ガラス	一部欠
93	5.0~5.5	1.5	3.0~3.5		青色	ガラス	
94	5.5	2.0	2.5~3.0		水色~青色	ガラス	
95	5.0	1.5~2.0	3.5		青色	ガラス	
96	5.0~6.0	2.0~3.0	2.5~4.0		青色	ガラス	
97	4.5~5.0	1.5	2.5~3.0		青色	ガラス	
98	5.0~5.5	1.5	2.5~3.0		水色~青色	ガラス	

99	4.0~4.5	1.5	2.5~3.5		水色~青色	ガラス	
100	4.0~4.5	1.5	2.5~3.0		水色~青色	ガラス	
101	4.0~4.5	1.0	2.0		水色~青色	ガラス	
102	4.5	1.5	2.0~2.5		青色	ガラス	
103	4.0	1.0~1.5	2.0~2.5		青色	ガラス	
104	5.0	1.0	2.5~3.0		青色透明	ガラス	
105	3.5	1.0	2.5~3.5		青色	ガラス	
106	4.0~4.5	1.5	2.5~3.0		青色	ガラス	
107	4.0	1.0	2.0~2.5		青色透明	ガラス	
108	3.5	1.5	2.5		青色	ガラス	
109	4.0~4.5	1.0	5.0	0.1	青色透明	ガラス	
110	3.5~4.0	1.5	1.0~1.5		水色	ガラス	
111	4.0~4.5	1.5	2.0		水色透明	ガラス	
112	3.5~4.0	1.5	1.0~1.5		水色透明	ガラス	
113	3.5~4.0	1.5	1.5~2.5		水色透明	ガラス	
114	4.0	1.0	2.0		水色透明	ガラス	
115	3.0~3.5	1.0	2.5		水色透明	ガラス	
116	3.5	1.0	1.0~1.5		水色透明	ガラス	
117	3.5	1.0	1.5		水色透明	ガラス	
118	3.5	1.0	2.0		水色透明	ガラス	
119	2.5~3.0	1.0	1.5		水色透明	ガラス	
120	3.0	1.0	2.0		水色透明	ガラス	
121	5.0~5.5	2.0~2.5	3.0~3.5		青緑色	ガラス	
122	4.5~5.5	2.0	5.0		青緑色	ガラス	
123	5.0~6.5	1.5	3.0~4.0		青緑色	ガラス	
124	5.5~6.0	1.5	4.0~4.5		青緑色	ガラス	
125	4.5~5.5	1.5	3.5~4.5		青緑色	ガラス	
126	4.5~5.0	2.0	3.0~4.0		青緑色	ガラス	
127	6.0~6.5	2.0~2.5	3.0~3.5		青緑色	ガラス	
128	5.5~5.5	2.0~2.5	3.5~4.0		青緑色	ガラス	
129	5.0~5.5	2.0	2.5~3.5		青緑色	ガラス	
130	4.5	1.5	2.5~3.0		青緑色	ガラス	
131	3.5~4.0	1.0	2.0		青緑色	ガラス	
132	5.0	3.0	2.5~3.0		青緑色	ガラス	
133	5.0~5.5	1.5	3.0		青緑色透明	ガラス	
134	4.5	1.5	2.5		青緑色透明	ガラス	
135	4.0	1.5	2.5~3.0		青緑色	ガラス	
136	3.0	1.0	2.0		青緑色	ガラス	
137	2.5~3.0	1.0	2.5~3.0		青緑色透明	ガラス	
138	5.0	1.5	2.5~3.0		緑色	ガラス	
139	4.5~5.0	1.5	3.0		緑色	ガラス	
140	4.5	1.0	3.0~3.5		緑色	ガラス	
141	4.0~4.5	1.0	3.0		緑色	ガラス	
142	4.5	1.0	3.0~3.5		緑色	ガラス	
143	4.0~4.5	1.0	3.0~3.5		緑色	ガラス	
144	4.5	1.0	2.5		緑色	ガラス	
145	4.0	1.0~1.5	2.5~3.0		緑色	ガラス	
146	4.0	1.0~1.5	2.0~3.0		緑色	ガラス	
147	3.5~4.0	1.0	2.0		緑色	ガラス	
148	4.0~4.5	1.0	2.0		緑色	ガラス	
149	4.0~4.5	1.0~1.5	3.0		緑色	ガラス	

150	2.5	0.5	2.5		緑色半透明	ガラス		
151	4.0	1.5	2.5~3.0		黄緑色	ガラス		
152	3.0~3.5	1.0	2.5~3.0		黄緑色	ガラス	砂粒含	
153	4.0	1.0	2.0~2.5		黄緑色	ガラス		
154	3.5~4.0	1.0	2.5~3.0		黄緑色	ガラス		
155	3.0~3.5	1.0	1.0		黄緑色	ガラス		
156	4.5~5.0	1.0	3.5~4.0		黄色	ガラス		
157	5.0	1.0	2.5~3.0		黄色	ガラス		
158	4.5~5.0	1.0~1.5	2.5		黄色	ガラス		
159	4.5	1.0	3.0~3.5		黄色	ガラス		
160	4.5	1.0	2.5~3.0		黄色	ガラス		
161	4.5	1.5	3.0		黄色	ガラス		
162	3.5~4.0	1.0~1.5	2.0		黄色	ガラス		
163	3.0	1.0	2.5~3.0		黄色	ガラス		
3-1	8.0~9.0	2.0~3.0	5.5~8.0	0.8	コバルトブルー	ガラス		
2	8.0~8.5	2.0	5.5~7.0	0.7	コバルトブルー	ガラス		
3	7.0~8.5	1.5~2.0	4.5~5.5	0.5	コバルトブルー	ガラス		
4	7.5~8.5	2.0	5.0~6.5	0.6	コバルトブルー	ガラス		
5	7.5~8.0	2.0	6.5~7.0	0.7	コバルトブルー	ガラス		
6	8.5~9.5	2.0~2.5	5.5~6.0	0.8	コバルトブルー	ガラス		
7	7.5~8.0	2.0~3.0	5.0	0.4	コバルトブルー	ガラス		
8	7.0~8.0	1.5	3.5	0.4	コバルトブルー透	ガラス		
9	6.0~6.5	1.5	3.5~4.0	0.2	コバルトブルー透	ガラス		
10	5.5	2.0	3.0~3.5	0.2	コバルトブルー	ガラス		
11	5.0~5.5	1.5~2.0	2.5~2.0	0.1	コバルトブルー透	ガラス		
No.	長さ	孔径	最大幅	最大厚	重量	色	材質	備考
5-1	34.5	2.0~4.0			15.8	白緑色斑	硬玉	
No.	径	孔径	厚さ	重量		色	材質	備考
5-2	14.5~15.5	2.0~2.5	14.5	4.6			瑪瑙	
3	15.0~16.0	1.5~4.5	24.0	7.4		白色透明	水晶	
4	14.0~16.0	2.0~4.5	25.5	7.3		白色透明	水晶	
5	11.5	3.5~4.5	8.0	2.2		緑色透明	ガラス	半風化
6			8.5			緑色透明	ガラス	半欠損
7	13.0~14.0	4.0~7.0	10.0	4.6		白~黄褐色(風化)	ガラス	
8	11.5~13.0	4.5~5.5	9.5	3.1		白~黄褐色(風化)	ガラス	
9	12.0~12.5	5.0~7.0	7.5	2.7		白~黄褐色(風化)	ガラス	
10	9.0~9.5	2.0~4.5	5.0~6.0	1.0		白~黄褐色(風化)	ガラス	
11	9.0	4.0~4.5	4.5~5.5	0.9		白~黄褐色(風化)	ガラス	
12	7.5~8.5	3.0~4.5	4.0~5.5	0.5		白~黄褐色(風化)	ガラス	
横穴								
2-1	12.0~13.0	1.5~3.0	18.0	4.0		白色透明	水晶	
2	12.5~13.0	4.0~5.5	8.5~9.0	3.3		白色(風化)	ガラス	
3	12.0	2.0~3.0	9.0	2.8		灰褐色(風化)	ガラス	半剥離
4	10.0~10.5	1.5~3.0	8.5~9.0	2.4		緑色透明	ガラス	表風化
5			7.5			緑色透明	ガラス	表風化
6			7.5			緑色透明	ガラス	表風化

3-1	10.5	1.5	9.0	1.3	赤色	瑪瑙	一部欠	
2	6.5~7.0	1.5	4.5	0.3	コバルトブルー	ガラス		
3	6.5~7.0	2.5~3.0	3.0	0.2	コバルトブルー	ガラス		
4	5.0~6.0	1.5	3.0	0.1	コバルトブルー	ガラス		
5	5.0~5.5	1.5	3.5	0.1	コバルトブルー	ガラス		
No	長さ	孔径	最大幅	最大厚	重量	色	材質	備考
5-1	39.0	2.5~4.5	15.5	15.5	22.6	白~淡緑 緑斑	硬玉	
No	径	孔径	厚さ	重量	色	材質	備考	
5-2	5.5~6.0	1.5	4.5	0.2	朱色に赤縞	瑪瑙		
3	12.0	2.5	11.0	2.2	緑色透明	ガラス		
4	6.5~7.0	1.5	6.0	0.4	コバルトブルー	ガラス		
5	5.5~6.0	1.5~2.0	3.5~4.0	0.2	コバルトブルー	ガラス		
6	5.5~6.0	1.5	3.5~4.0	0.2	コバルトブルー	ガラス		
7	5.0~5.5	1.5	4.5~5.0	0.2	コバルトブルー	ガラス		
8	5.0	2.0	4.5~5.0	0.2	濃コバルトブルー	ガラス		
9	5.5~6.0	2.0	4.5~5.0	0.3	コバルトブルー	ガラス		
10	4.5~5.0	1.5~2.0	4.0	0.2	コバルトブルー	ガラス		
11	5.0	1.5~2.0	4.0~5.0	0.2	濃コバルトブルー	ガラス		
12	4.0~4.5	1.5	3.5~4.0	0.1	濃コバルトブルー	ガラス		
13	4.5~5.0	1.0~2.0	2.5	0.1	青色	ガラス		
14	5.5	2.0	2.5~3.0	0.1	青色透明	ガラス		
15	3.0~3.5	1.0	2.5		青緑色	ガラス		
6-1	9.5	3.5~5.0	4.0~4.5	0.8	白褐色(風化)	ガラス		
2	4.0	1.5	4.5~5.0	0.1	コバルトブルー	ガラス		
3	5.5~7.0	1.0	3.5~4.0	0.2	黒灰色 両端褐色	土製		
4	6.0~6.5	1.0	3.5~4.5	0.2	黒灰色 両端褐色	土製		
5	6.0	1.0	4.0~4.5	0.2	黒灰色 両端褐色	土製		
6	5.5~6.5	1.0	4.5	0.2	黒灰色 両端褐色	土製		
7	5.5~6.0	1.5	4.0	0.2	黒灰色 両端褐色	土製		
8-1	20.0	13.5~15.5	1.5~3.5	5.7	白色透明	水晶		
2	8.0~8.5	1.0	5.0~5.5	0.6	朱橙色	瑪瑙		
3	13.5	3.0	10.0~11.0	5.1	濃緑色	ガラス	半風化	
4	12.5	(3.0)	9.0		濃緑色	ガラス	風化	
5	8.0~8.5	4.0~6.0	4.5	0.6	濃緑色	ガラス	風化	
6	10.0~10.5	2.5~3.0	5.0~6.0	1.8	白色(風化)	ガラス		
7	9.0	3.0~3.5	5.5	0.8	白色(風化)	ガラス		
8	7.0	2.5~3.0	3.5~4.0	0.3	白色(風化)	ガラス		
9	7.0	4.5~5.0	4.0~5.0	0.3	白色(風化)	ガラス		
10	6.5~7.0	3.0~4.5	4.0	0.4	白色(風化)	ガラス		
11	6.0~6.5	3.0~4.5	11.0~12.0	0.6	暗灰色 両端淡褐	土製		
12	6.5	1.5	13.0~13.5	0.6	暗灰色 両端淡褐	土製		
13	6.5	1.5	13.5	0.7	暗灰色 両端淡褐	土製		
14	6.5	1.5	12.0	0.6	暗灰色 両端淡褐	土製		
15	6.5~7.0	1.5	11.0	0.7	暗灰色 両端淡褐	土製	一部欠	
16	7.0	2.0	10.5~11.0	0.7	暗灰色 両端淡褐	土製		
17	6.0~6.5	2.0	10.0	0.5	暗灰色 両端淡褐	土製		
18	5.5	2.0	7.0~7.5	0.3	暗灰色 両端淡褐	土製		
19	6.5~7.5	1.5~2.0	4.0~4.5	0.2	暗灰色 両端灰色	土製		

20	6.5	2.0	4.5~5.0	0.3	暗灰色	両端淡褐	土製	
21	6.5~7.0	1.5~2.0	5.0	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	
22	6.5~7.0	2.0	4.5~5.0	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	
23	7.0~7.5	1.5	5.0~5.5	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	一部欠
24	6.5~7.0	1.5~2.0	5.0	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	
25	6.5	2.0~2.5	4.5	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	
26	6.5	2.0	5.0~5.5	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	
27	6.5	2.0	5.5	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	一部欠
28	6.0~6.5	1.5	4.5~5.0	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	
29	7.0	2.0	5.0~5.5	0.3	暗灰色	両端淡褐	土製	
30	7.5	2.0	4.0~5.0	0.3	暗灰色	両端淡褐	土製	
31	6.5~7.5	1.5	4.5	0.3	暗灰色	両端淡褐	土製	
32	7.0	2.0	5.0~5.5	0.3	暗灰色	両端淡褐	土製	
33	7.0	2.0	4.5~5.5	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
34	7.0	2.0	6.0	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
35	6.5	2.0	4.5~5.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
36	7.0	2.0	5.0~6.0	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
37	6.5~7.0	2.0	4.5	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
38	7.0	1.5	4.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
39	7.0~7.5	1.5	5.0	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
40	7.0	1.5~2.0	5.5~6.0	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
41	6.5	2.0	4.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
42	7.0~7.5	2.0	4.0~4.5	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
43	7.0	2.0	4.0~4.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
44	6.5~7.0	2.0	4.5~5.0	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
45	6.5~7.0	1.5	3.0~4.0	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
46	6.0~6.5	1.5~2.0	4.5~5.5	0.2	暗灰色		土製	
47	6.0~6.5	1.5	4.0~4.5	0.2	暗灰色		土製	
48	6.0~7.0	2.0	3.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
49	6.0~6.5	2.0	4.0~4.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
50	6.5	1.5	4.5~5.0	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
51	6.5~7.0	1.5~2.0	4.0~4.5	0.2	暗灰色	両端淡褐	土製	一部欠
52	6.0~7.0	1.5	6.0	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	一部欠
10-1	10.5~11.0	2.5	7.0~7.5	2.2	濃緑色		ガラス	風化
2	10.0~10.5	3.0~4.0	6.0~7.0	1.5	濃緑色		ガラス	風化
3	10.0~11.0	4.0~6.0	4.5~6.0	0.9	濃緑色		ガラス	風化
4	10.0	5.0~6.0	6.0~6.5	1.3	白褐色(風化)		ガラス	
5	9.5	3.5	5.0~5.5	1.0	白色(風化)		ガラス	
6	9.5	3.0~3.5	5.5	0.4	緑白色(風化)		ガラス	
7	9.5	2.5~3.5	5.5	0.4	緑白色(風化)		ガラス	一部欠
8	10.0	3.0	5.5		緑白色(風化)		ガラス	半欠失
9	8.0~8.5	3.5	5.5~6.5	0.9	濃緑色		ガラス	風化
10	7.5	2.5~3.0	4.0~4.5	0.4	緑色		ガラス	風化
11	6.5~7.0	1.5~2.0	4.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
12	7.0	1.5	4.5~5.0	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
13	7.0	1.5	4.5	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
14	6.5~7.5	1.5	5.0~5.5	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
15	7.5	1.5	4.0~4.5	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	
16	7.0	1.5	4.5~5.0	0.2	暗灰色	両端灰色	土製	
17	7.0	1.5	5.5~6.0	0.3	暗灰色	両端灰色	土製	

No.	径	孔径	厚さ	重量	色	材質	備考	
18	7.0	1.5~2.0	5.0~5.5	0.3	暗灰色 両端灰色	土製		
19	7.0	1.5	5.5	0.3	暗灰色 両端灰色	土製		
20	6.5~7.0	1.0~2.0	4.5~5.0	0.3	暗灰色 両端灰色	土製		
21	7.5	1.5	4.5~5.0	0.3	暗灰色 両端灰色	土製		
22	7.0	1.5~2.0	5.5	0.3	暗灰色	土製		
23	6.5~7.0	1.5	5.0~5.5	0.3	暗灰色	土製		
24	6.5~7.0	1.5	1.5	0.2	灰色	土製		
No.	長さ	孔径	最大幅	最大厚	重量	色	材質	備考
11-1	41.5	10~3.0	15.0	11.5	14.2	黄白色 一部茶色	瑪瑙	
2	32.0	2.0~3.0	12.0	9.5	7.9	黄茶色 一部茶色	瑪瑙	
No.	径	孔径	厚さ	重量	色	材質	備考	
11-3	15.0~16.0	1.5~4.0	20.5	7.0	白色透明	水晶	七角形	
4	9.0	1.5~2.0	10.5が残		濃緑色	碧玉		
5	10.5~11.0	3.0~4.0	7.5	2.2	濃緑色	ガラス	風化	
6	5.0	2.5	5.5が残		緑青色	碧玉か	欠失	
7	4.0~4.5	1.5	3.0	0.1	コバルトブルー	ガラス		
8	4.5~5.0	2.0	2.0	0.1	水色透明	ガラス		
9	3.0~3.5	1.5~2.0	3.0		水色	ガラス		
10	7.5	1.5	20.5	0.5	黒灰色 両端灰褐	土製		
11	8.0~8.5	1.5	6.5	0.5	黒灰色 両端灰色	土製		
12	7.5~8.0	1.5	5.0~5.5	0.4	黒灰色 両端灰色	土製		
13	7.5	1.5	6.0	0.5	黒灰色 両端灰色	土製		
14	7.5	1.5	6.0	0.4	黒灰色 両端灰褐	土製		
15	7.5	1.5	5.5	0.4	黒灰色 両端灰色	土製		
16	7.0	2.0	6.5	0.4	黒灰色	土製		
17	7.0~8.0	1.5	5.5	0.4	黒灰色 両端灰色	土製		
18	7.0~7.5	1.5	5.0~5.5	0.3	黒灰色 両端灰褐	土製		
19	6.0	1.5	7.0~7.5	0.3	黒灰色	土製		
No.	長さ	孔径	最大幅	最大厚	重量	色	材質	備考
12-1	32.5	1.5~3.5	11.5	9.5	6.9	黄褐色 両端茶色	瑪瑙	
No.	径	孔径	厚さ	重量	色	材質	備考	
12-2	12.0~13.5	1.5~4.0	21.0	4.2	白色透明	水晶		
3	11.5~13.5	1.5~3.0	18.5	3.6	白色透明	水晶		
4	12.0~13.0	1.5~3.0	12.0	2.4	白色透明	水晶		
5	11.0~11.5	1.5~4.0	11.0	1.8	白色透明	水晶		
6	13.0~14.5	1.5~4.0	25.5	6.9	白色透明	水晶		
7	13.5~14.5	1.5~4.0	24.5	6.1	白色透明	水晶		
8	14.0~15.0	2.0~4.0	23.5	7.0	白色透明	水晶		
9	13.0~15.0	1.5~4.0	23.5	5.9	白色透明	水晶		
10	8.5~9.0	1.0~3.0	27.5	4.1	濃緑色	碧玉		
11	7.0~7.5	1.0~3.0	18.0	1.9	濃緑色	碧玉		
12	10.5	3.0	7.5	2.1	緑色透明	ガラス	風化	
13	9.0~9.5	2.5~3.0	7.0	1.5	緑色透明	ガラス	風化	
14	9.5	2.0~3.5	7.0	1.7	緑色透明	ガラス	風化	
15	8.0~9.0	2.0	5.5	0.6	コバルトブルー	ガラス		
16	8.0~8.5	2.0	5.5	0.6	コバルトブルー	ガラス		
17	8.5	1.5	7.0		コバルトブルー	ガラス		
18	7.5~8.0	1.5~2.0	5.5~6.5	0.6	コバルトブルー	ガラス		

19	7.5~8.5	2.0~2.5	5.0~5.5	0.6	コバルトブルー	ガラス	
20	7.5~8.5	1.5~2.0	4.0~5.0	0.5	コバルトブルー	ガラス	
21	7.0~7.5	2.0	6.0	0.5	コバルトブルー	ガラス	
22	7.5	1.5	5.0~5.5	0.5	コバルトブルー	ガラス	
23	6.5	1.5	4.0~4.5	0.3	コバルトブルー	ガラス	
24	6.0~7.0	2.5	4.5~6.0	0.3	コバルトブルー	ガラス	
25	7.0~7.5	1.5~2.0	9.5	0.6	黒灰色 両端灰色	土製	連玉
26	7.5	1.5	5.5	0.4	暗灰色 両端褐色	土製	
27	7.5~8.5	1.5~2.0	4.5~5.0	0.3	暗灰色 両端灰色	土製	
28	7.5	1.5	5.5	0.3	暗灰色 両端灰色	土製	
29	7.0~7.5	2.0	5.0	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
30	7.5~8.0	2.0	5.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
31	7.5~8.0	2.0	5.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
32	7.0~7.5	1.5~2.0	5.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
33	7.0~7.5	1.5	6.0	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
34	7.0~7.5	1.5	5.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
35	7.0~7.5	1.5	5.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
36	7.0~7.5	1.5	5.0	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
37	7.5	2.0	5.5	0.3	暗灰色 両端灰色	土製	
38	7.0	1.5	5.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
39	7.0~7.5	1.5	4.5	0.2	黒灰色 両端灰色	土製	
40	7.0~7.5	1.5~2.0	5.0	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
41	6.5	1.5~2.0	5.0	0.2	黒灰色 両端灰色	土製	
42	6.5	1.5~2.0	5.0	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
43	6.5~7.0	2.0~2.5	5.5~6.0	0.3	暗灰色 両端灰色	土製	
44	7.0~7.5	2.0	4.5	0.2	暗灰色 両端灰色	土製	
45	7.0~7.5	2.0	5.5	0.3	暗灰色 両端灰色	土製	
46	6.5~7.0	1.5	4.5	0.2	暗灰色 両端灰色	土製	
47	6.5~7.0	1.5	5.0	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
48	7.0~7.5	1.5~2.0	4.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
49	7.0	2.0	4.5	0.3	黒灰色 両端灰色	土製	
50	7.0	1.5	5.5	0.2	黒灰色 両端灰色	土製	
51	6.5	1.5~2.0	5.5	0.3	暗灰色 両端灰色	土製	
52	6.5	2.0	5.0	5.0	暗灰色 両端灰色	土製	
53	6.0~6.5	1.5~2.0	4.5	0.2	黒灰色 両端灰色	土製	
54	6.5	2.0	5.0	0.2	黒灰色 両端灰色	土製	
土壌							
2-1	11.5	1.5~2.0	9.0	1.8	橙色	瑪瑙	
2	15.0	2.5~3.0	11.0	3.6	緑褐色透明	ガラス	
3	14.5~15.0	2.5~3.0	11.0	3.5	緑褐色透明	ガラス	
4	14.5	2.0~3.0	10.0~11.5	3.3	緑褐色透明	ガラス	
5	8.5	2.0	15.5	1.6	緑白色	ガラス	連玉

# 圖 版



3号墳周辺現況  
(北東上空から)



調査後古墳周辺  
(北西上空から)



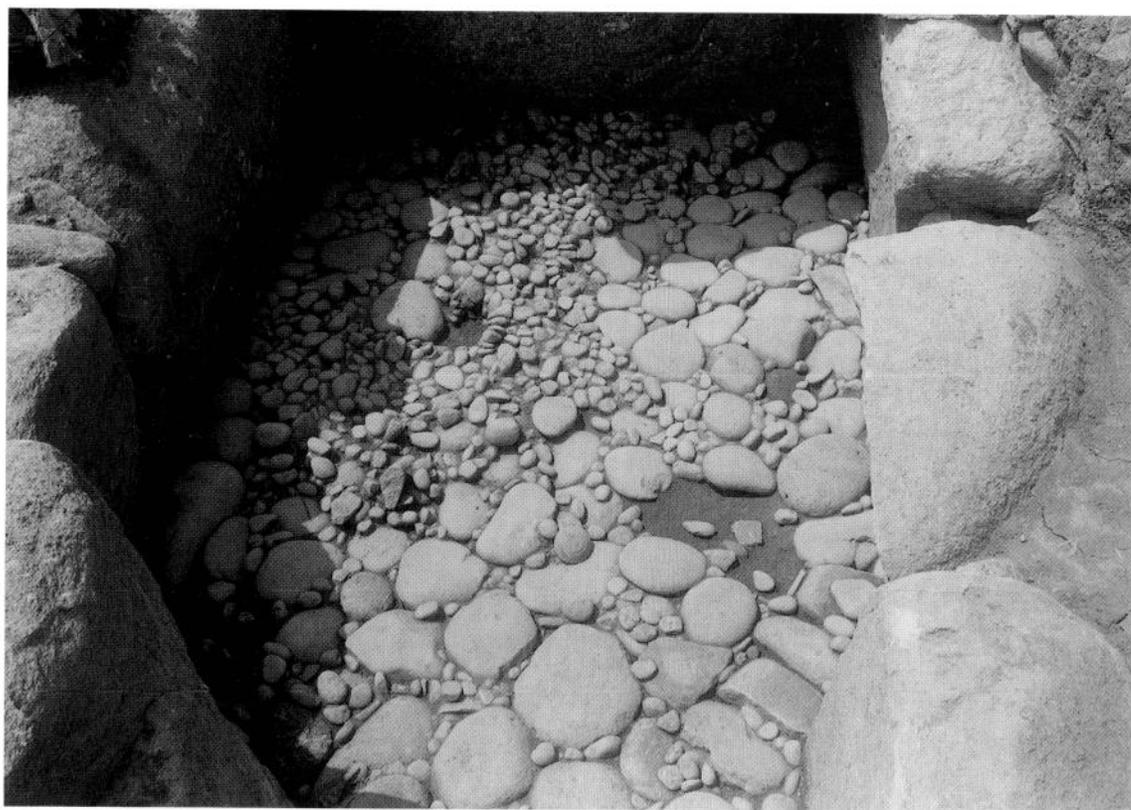
調査後古墳周辺  
(西上空から)



調査後古墳周辺  
(上空から)



1号墳現況 (東から)



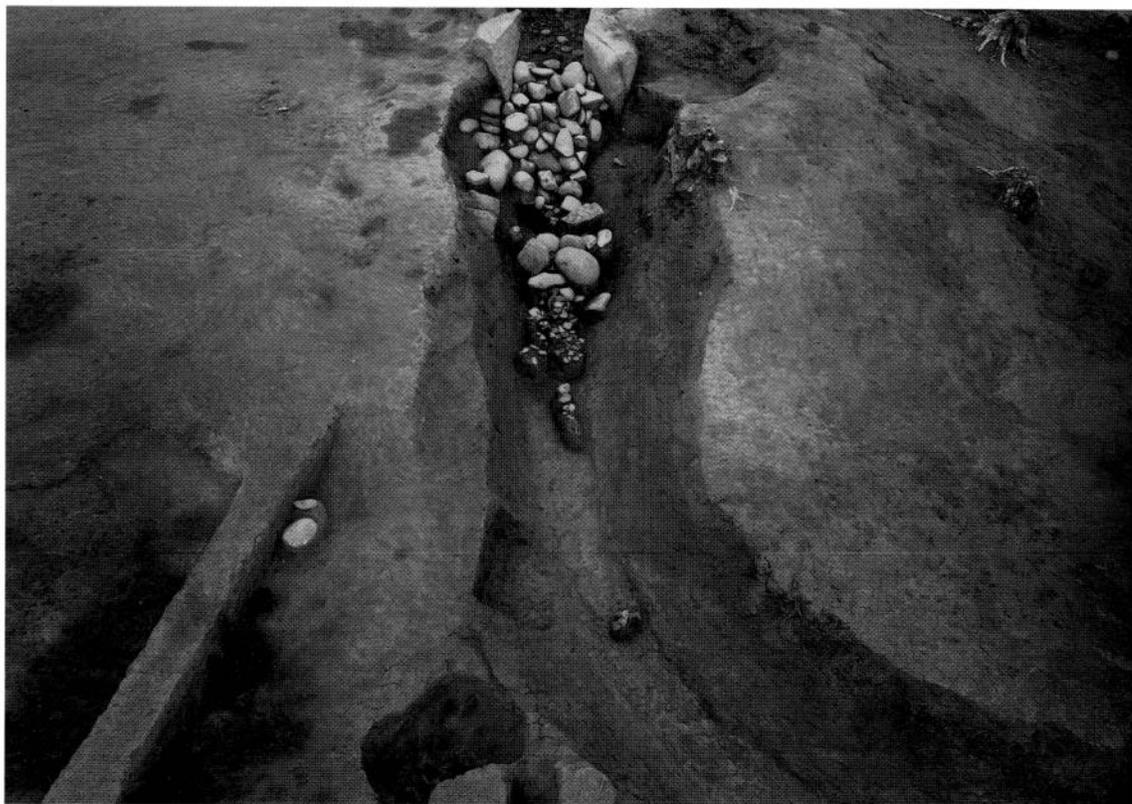
同主体部内 (南東から)



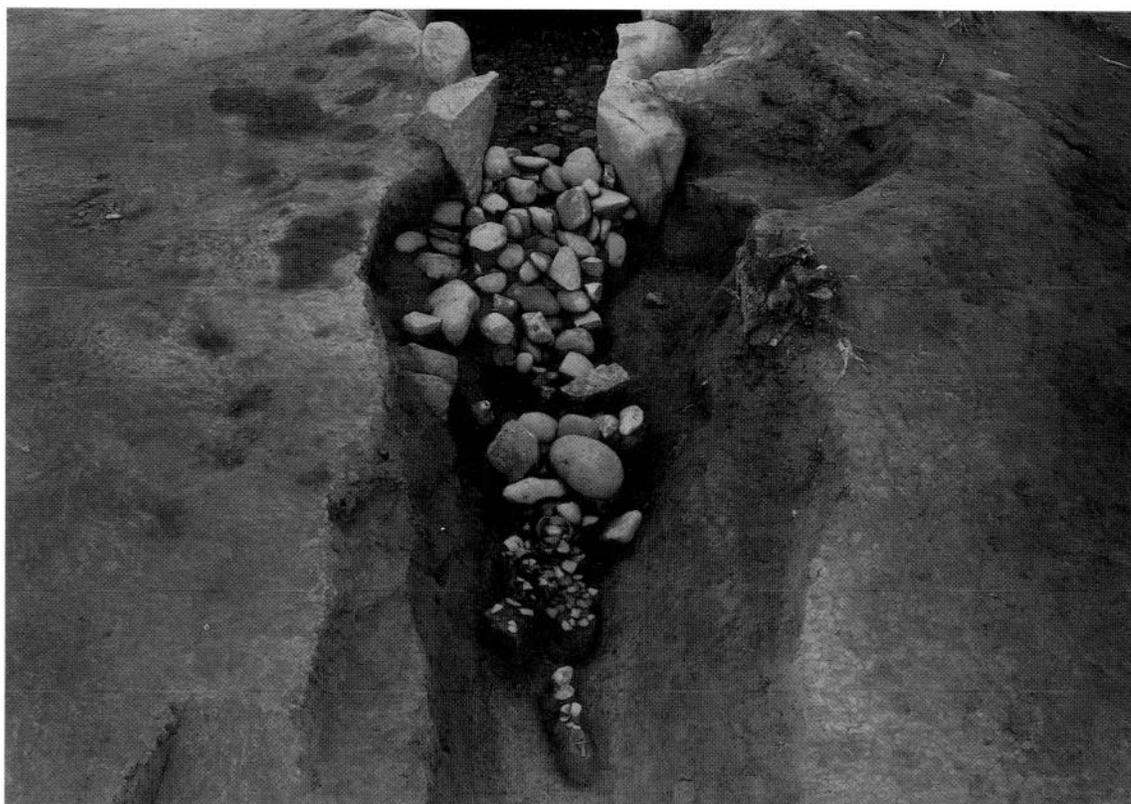
1号墳主体部全景（南東から）



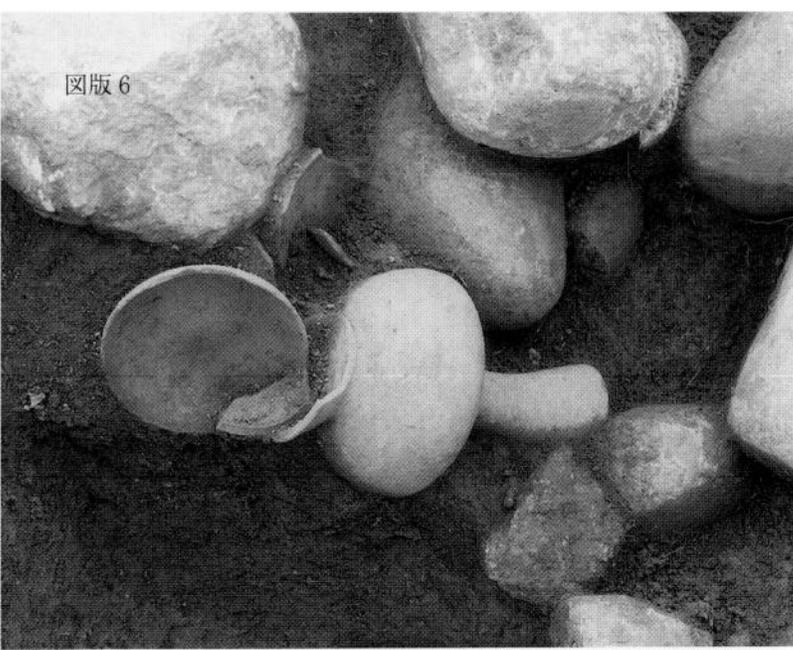
同敷石除去後（南東から）



1号墳墓道（南東から）



同閉塞状況（南東から）



1号墳墓道遺物出土状況（南東から）



同（南西から）



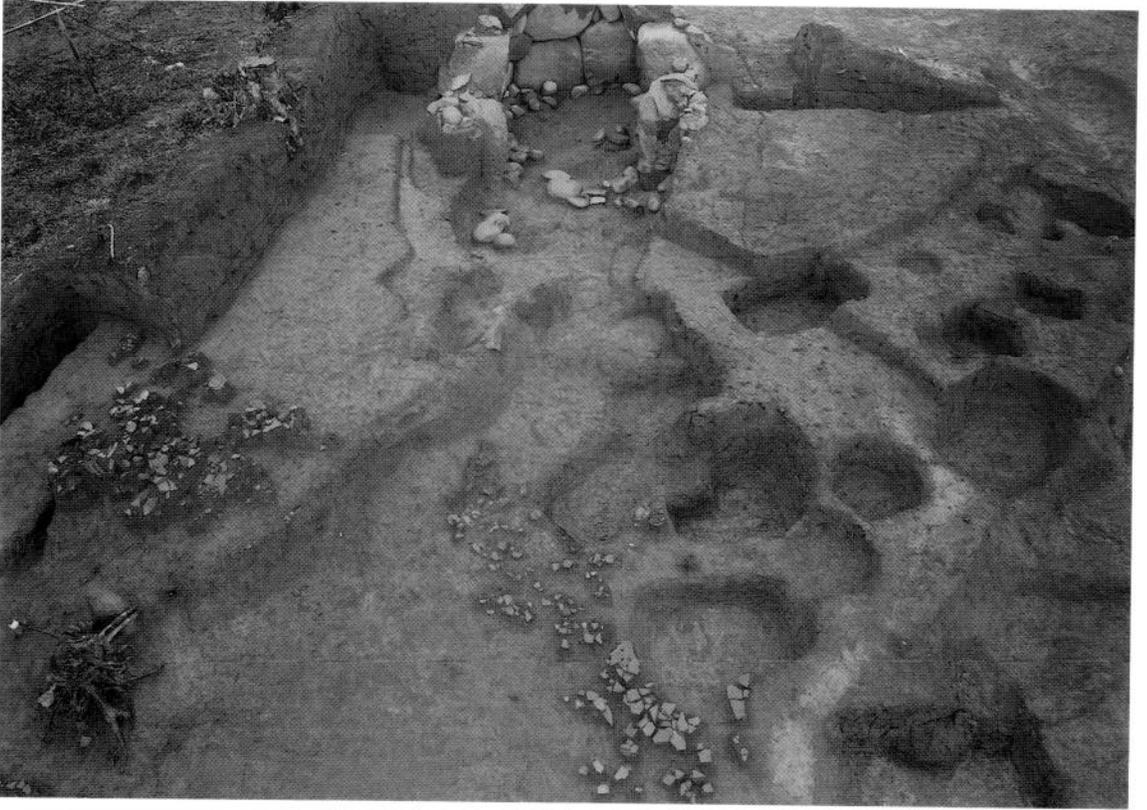
同（南西から）



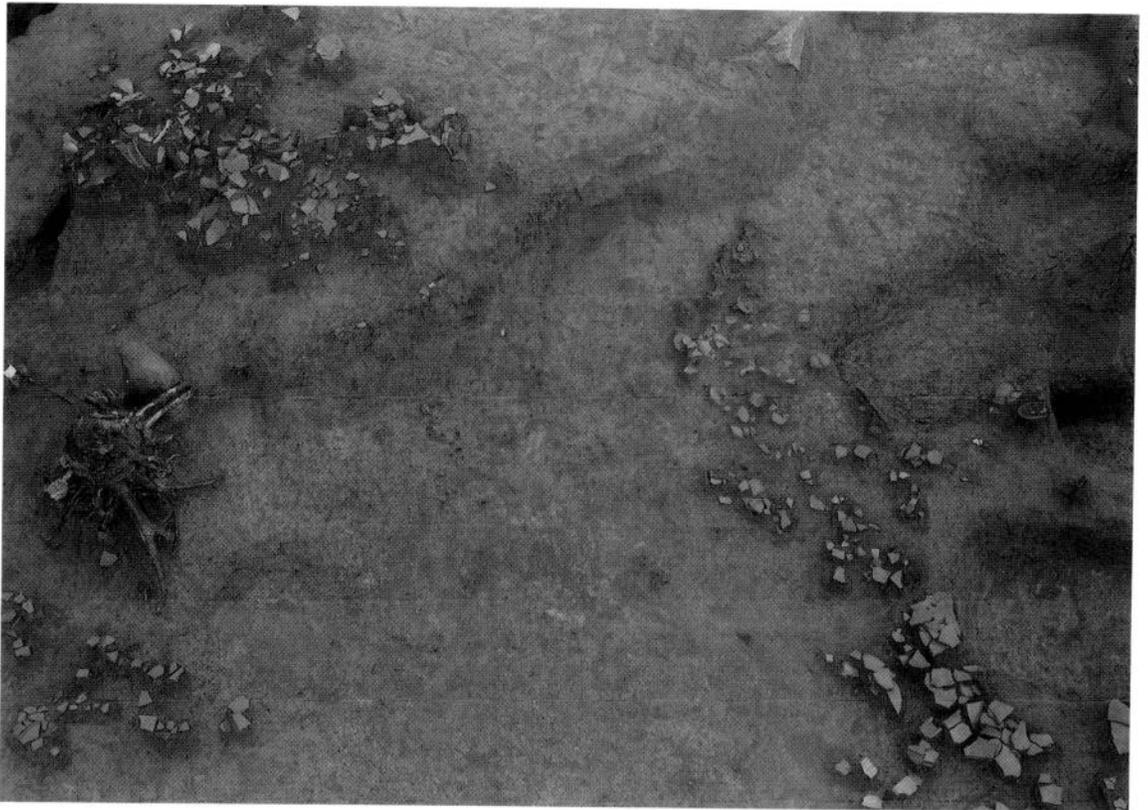
2号墳現況 (東から)



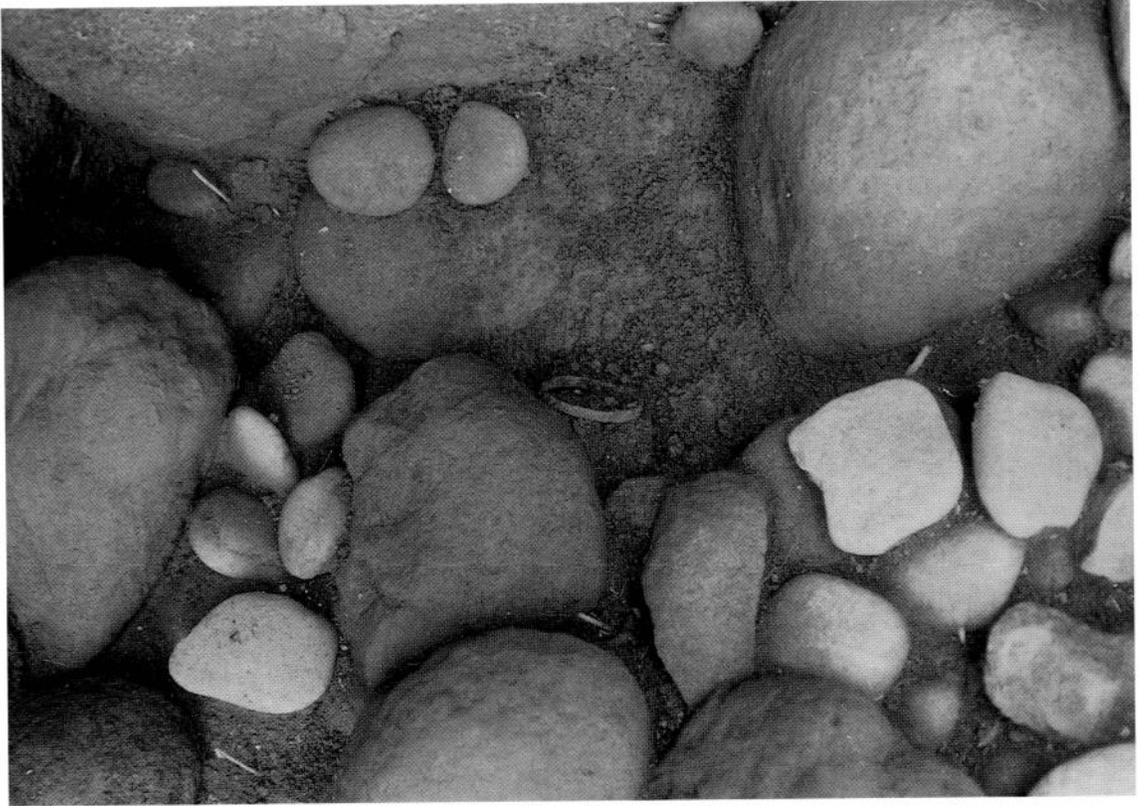
同敷石検出状況 (東から)



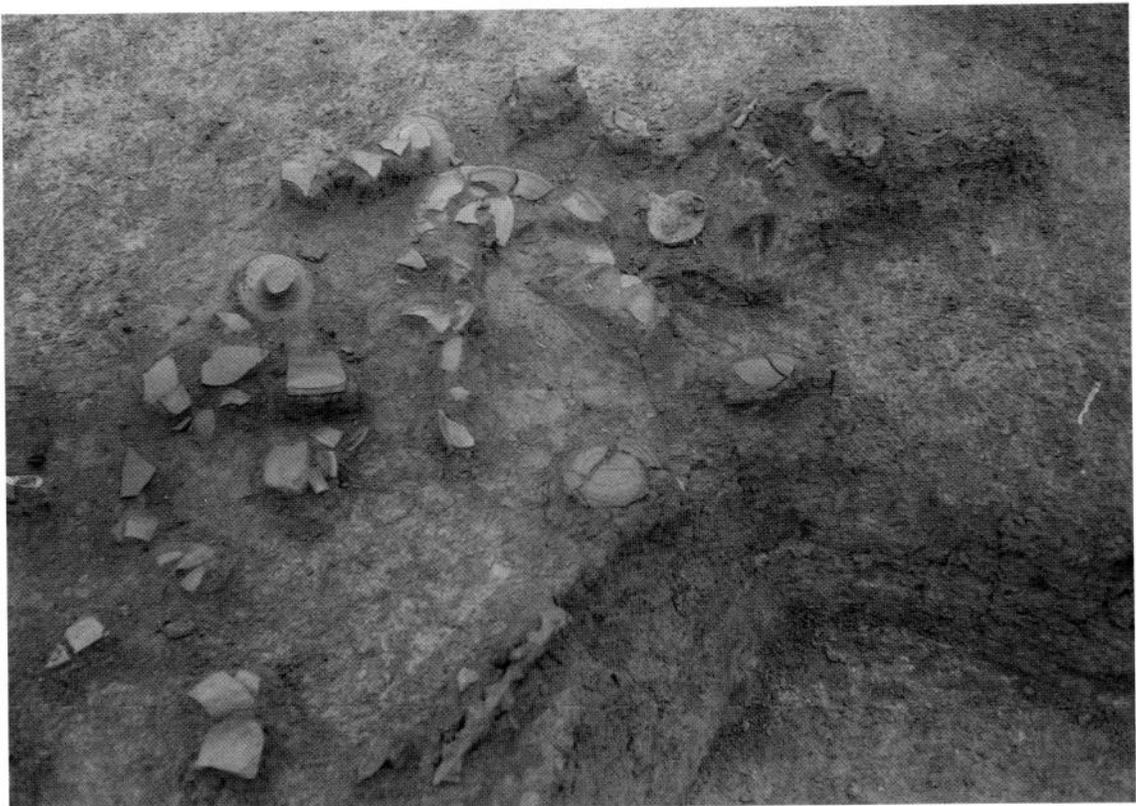
2号墳墓道周辺遺物出土状況（東から）



同墓道周辺遺物出土状況（北から）



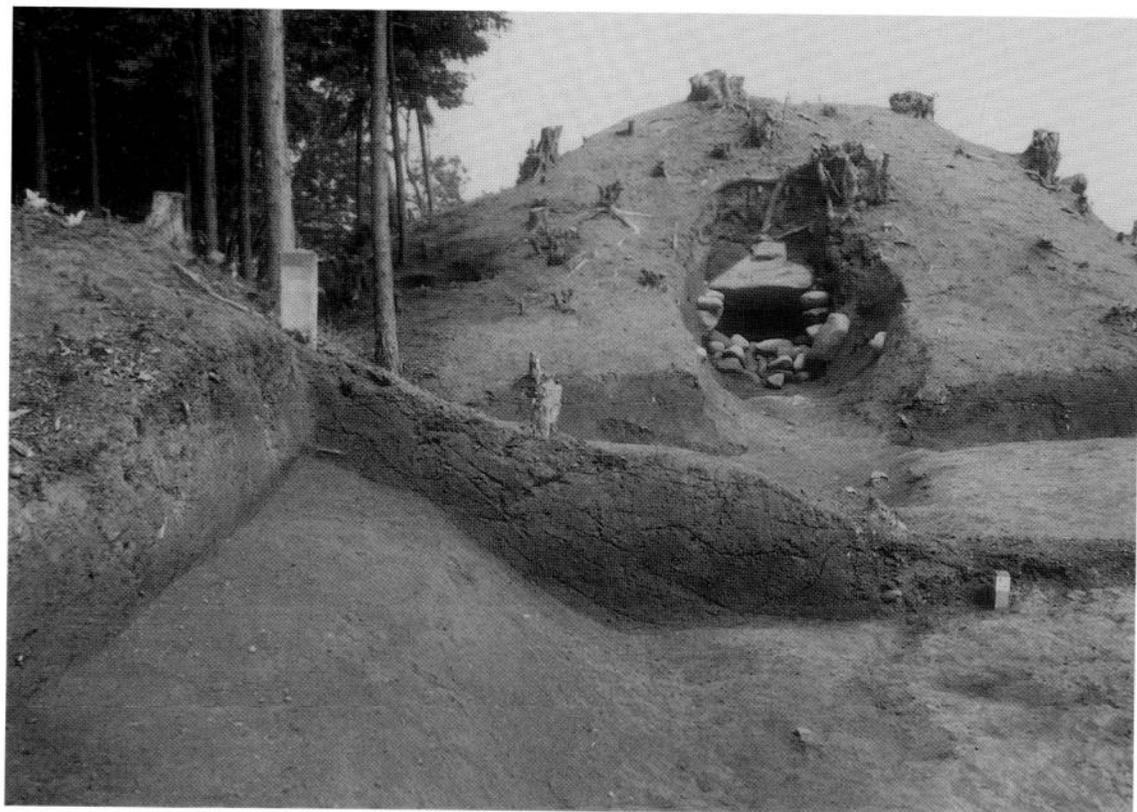
2号墳銅劔出土状況（東から）



同馬具等出土状況（北東から）



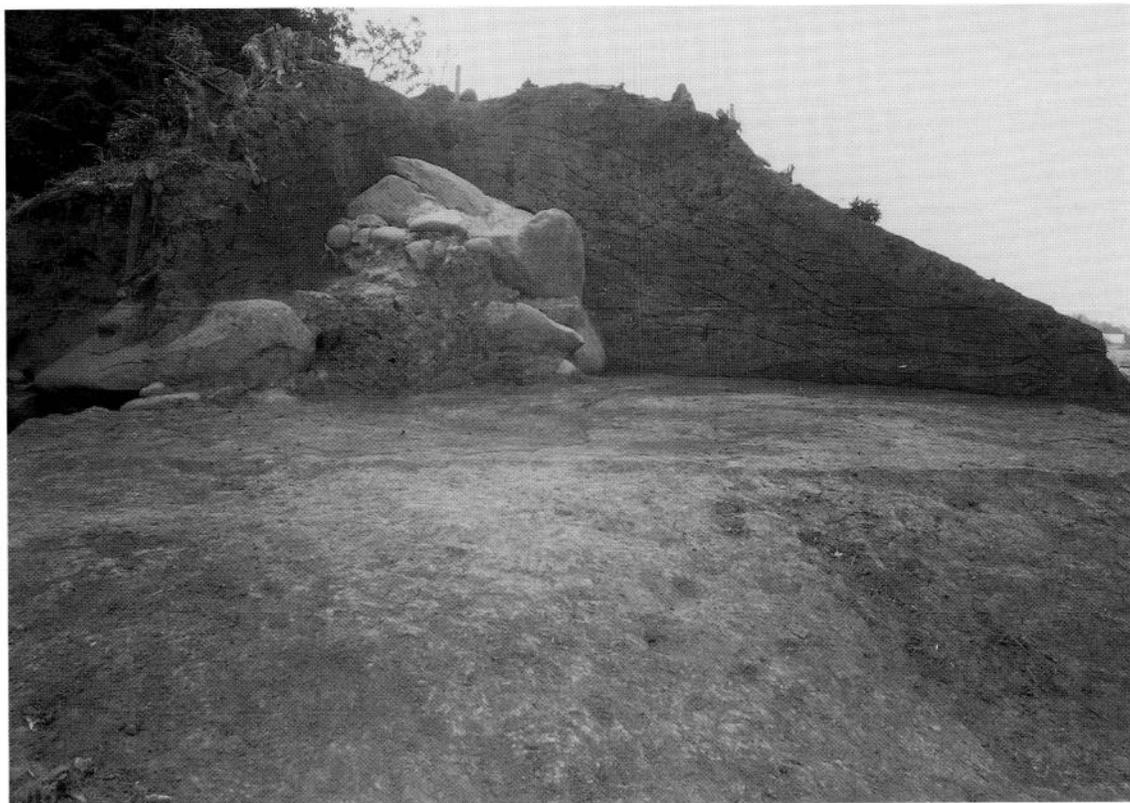
3号墳現況（南東から）



同墓道発掘後（南東から）



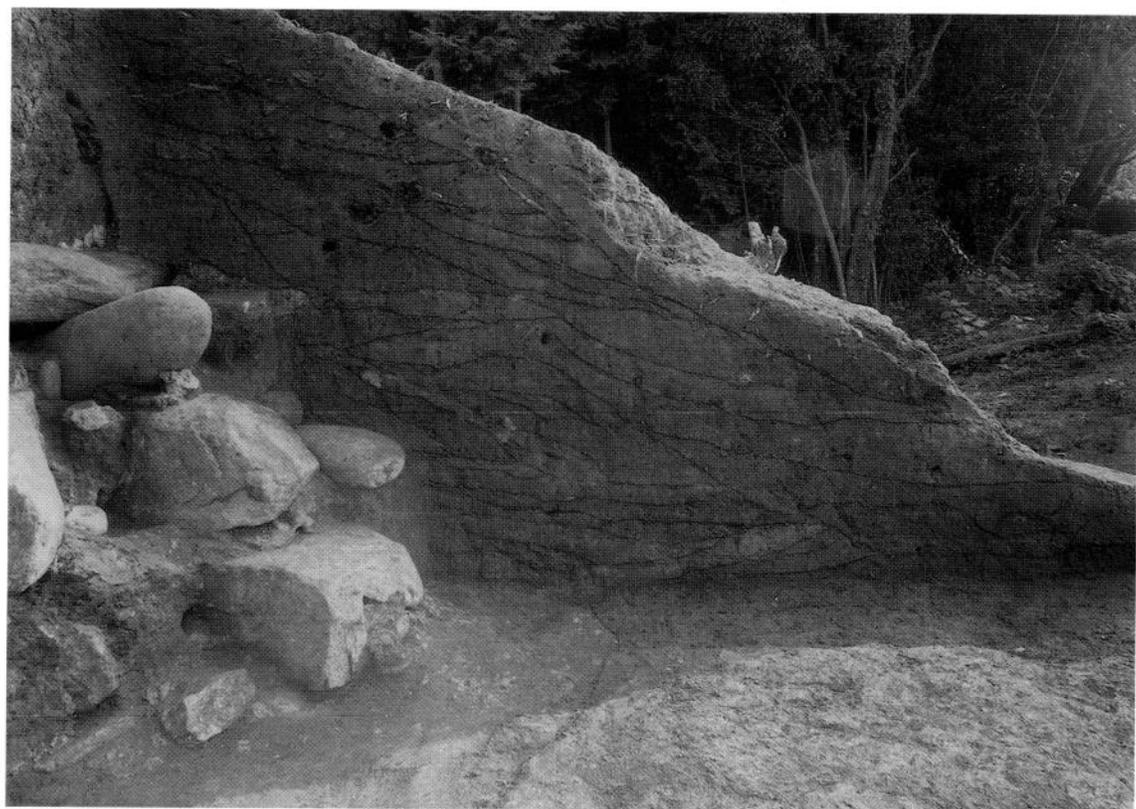
3号墳横断土層（南東から）



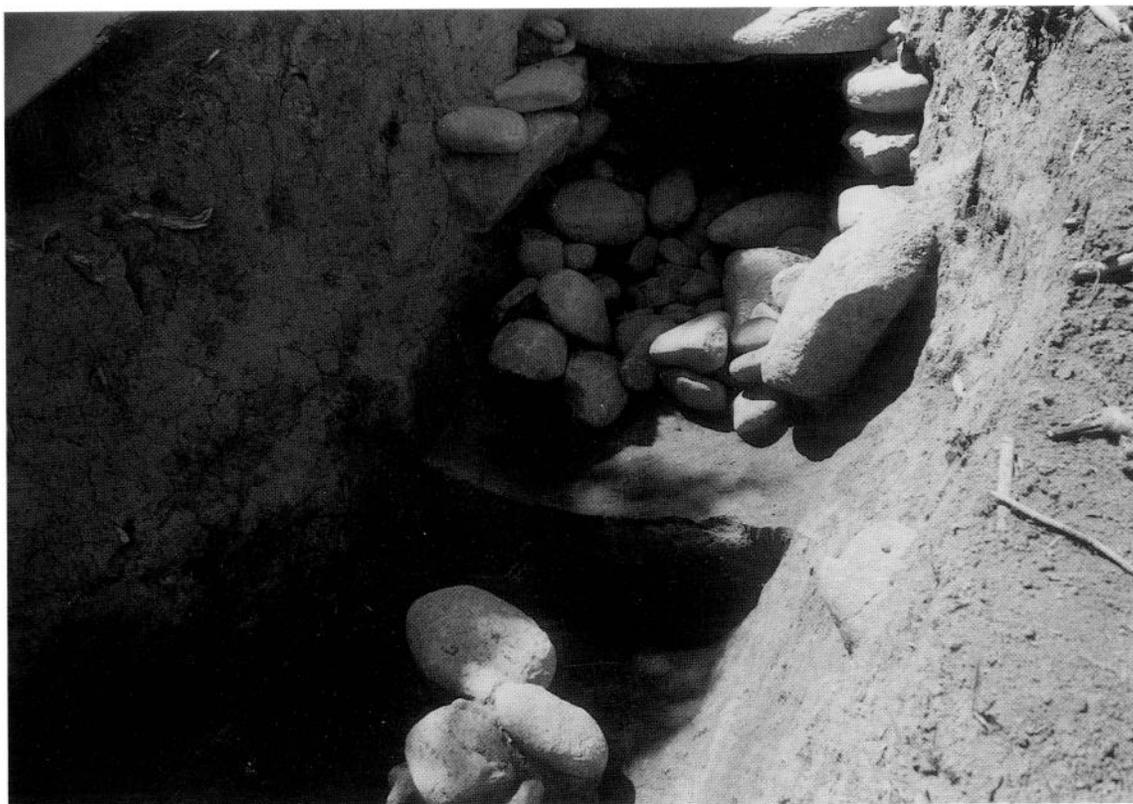
同土層（東から）



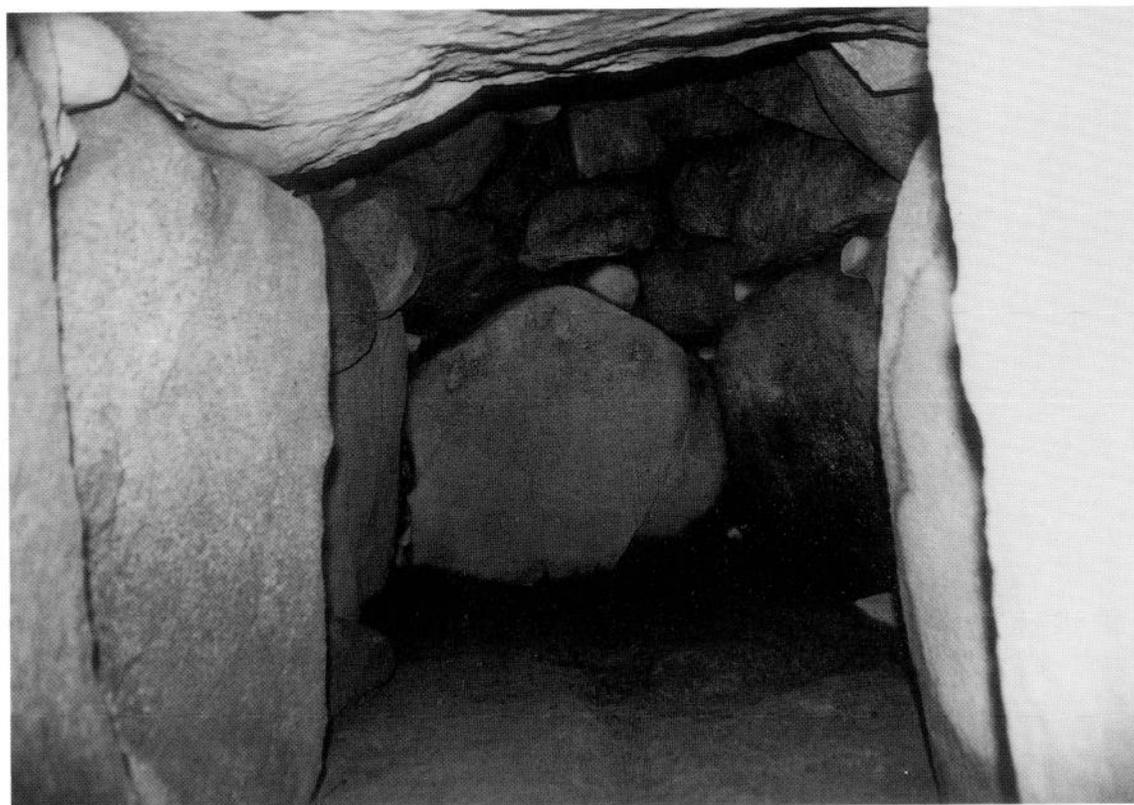
3号墳土層（南東から）



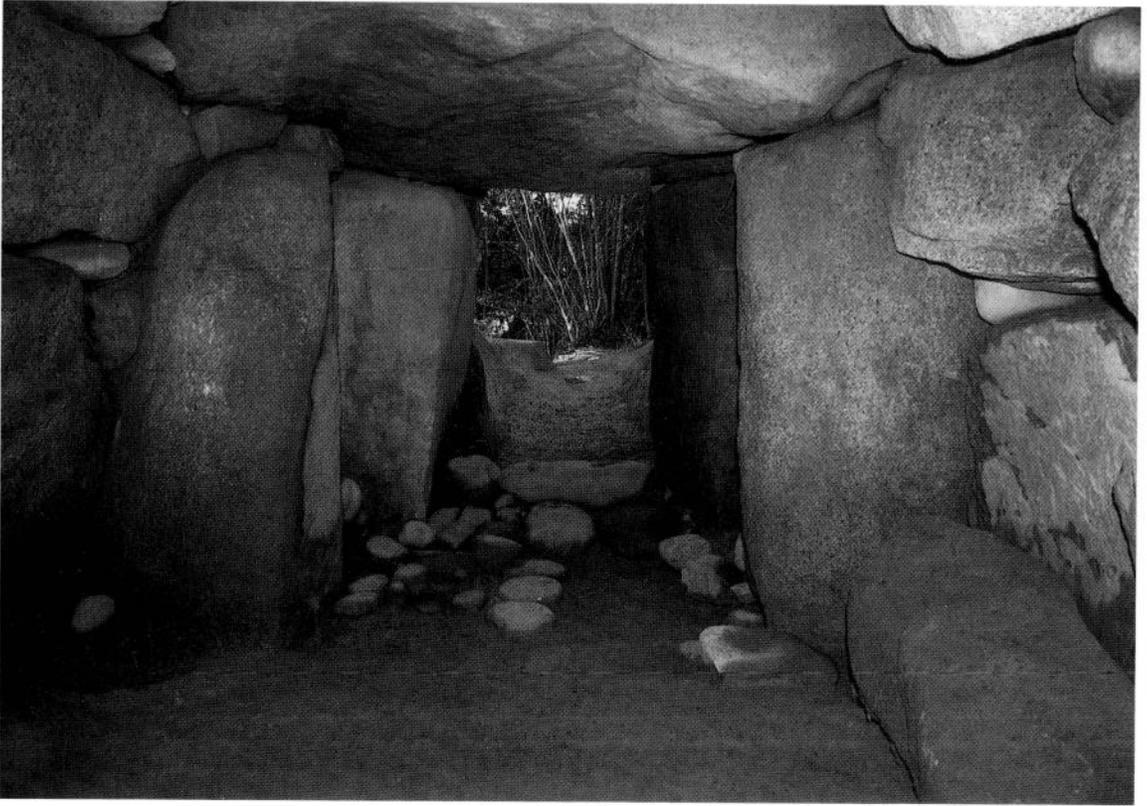
同土層（北東から）



3号墳閉塞状況（北東から）



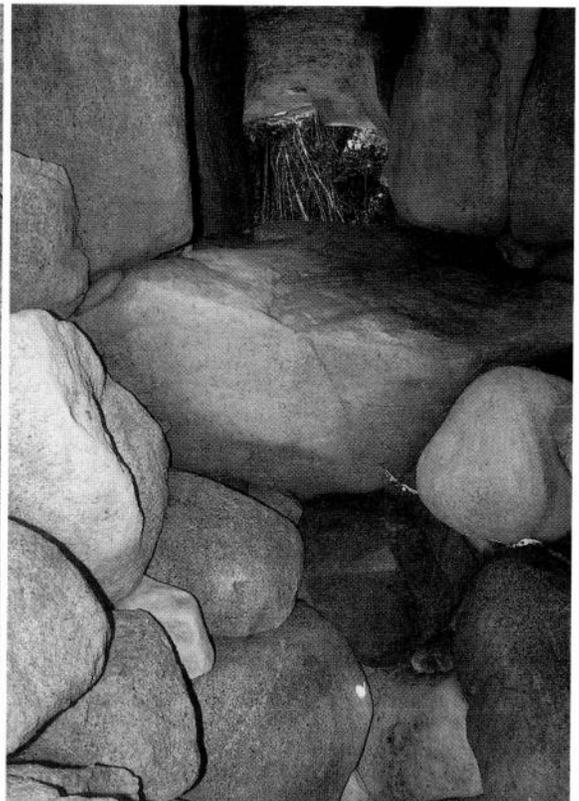
同石室（南東から）



3号墳石室（北西から）



同（南東から）



同（北東から）



3号墳祭祀土器出土状況（南東から）



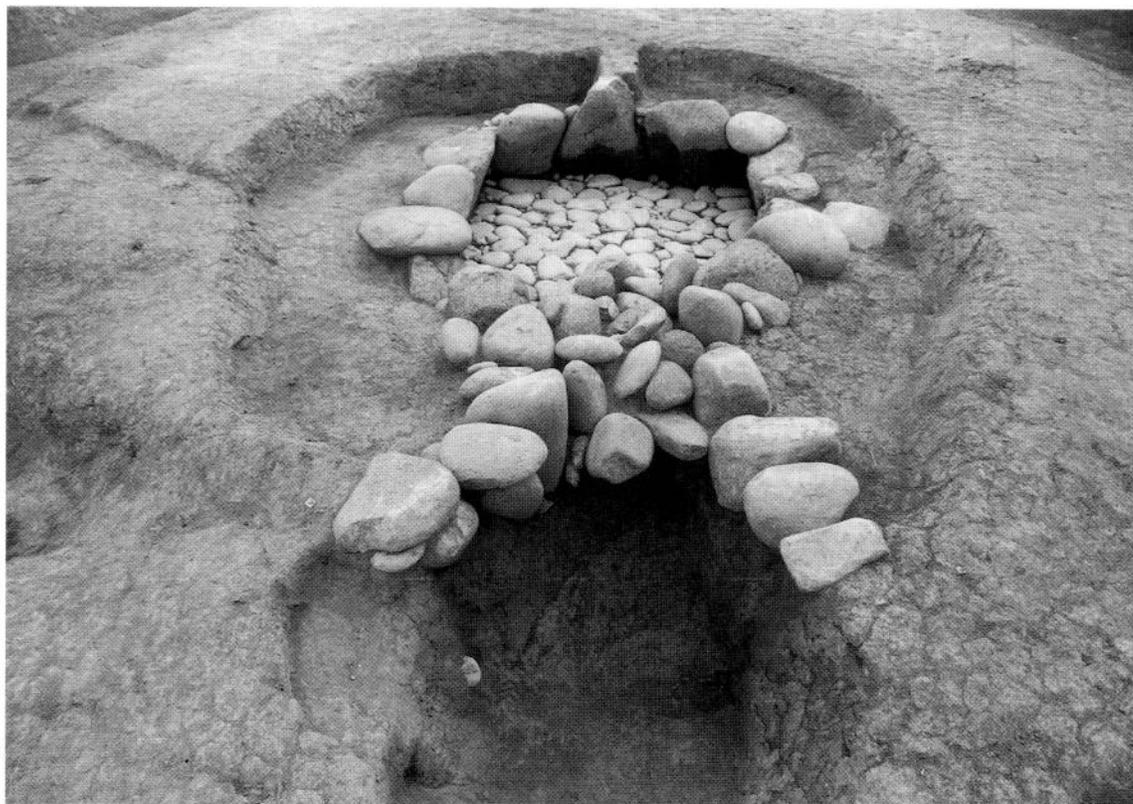
同（南から）



3号墳祭祀土器出土状況（東から）



同（東から）



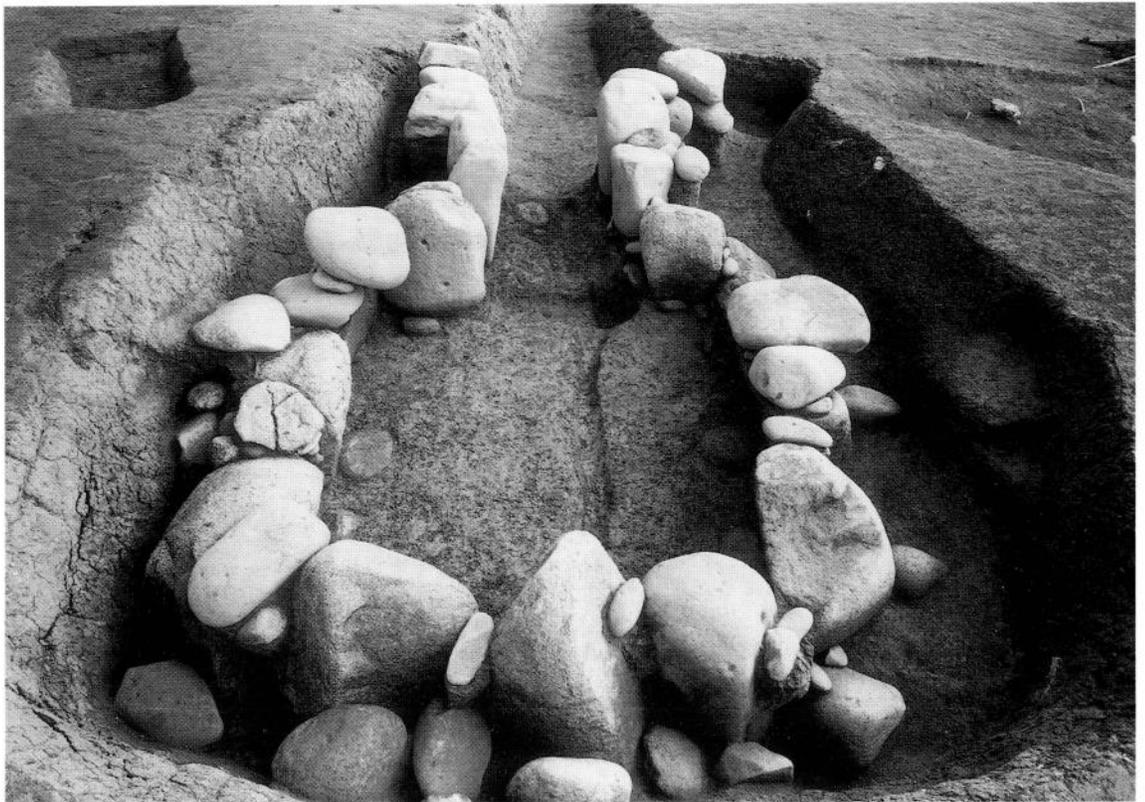
4号墳閉塞状況（南東から）



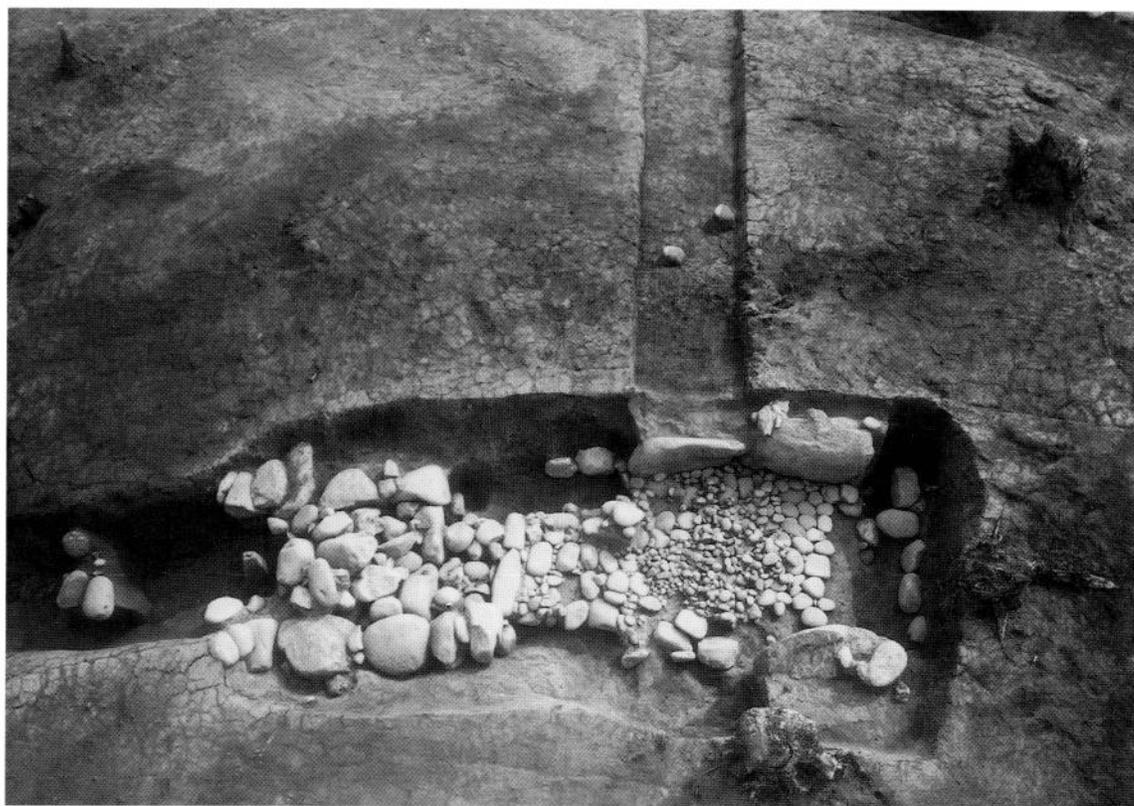
同主体部（南西から）



4号墳全景（北西から）



同敷石除去後（北西から）



5号墳検出状況（北東から）



同敷石検出状況（北西から）



5号墳敷石除去後（南東から）



同閉塞付近遺物出土状況（南西から）



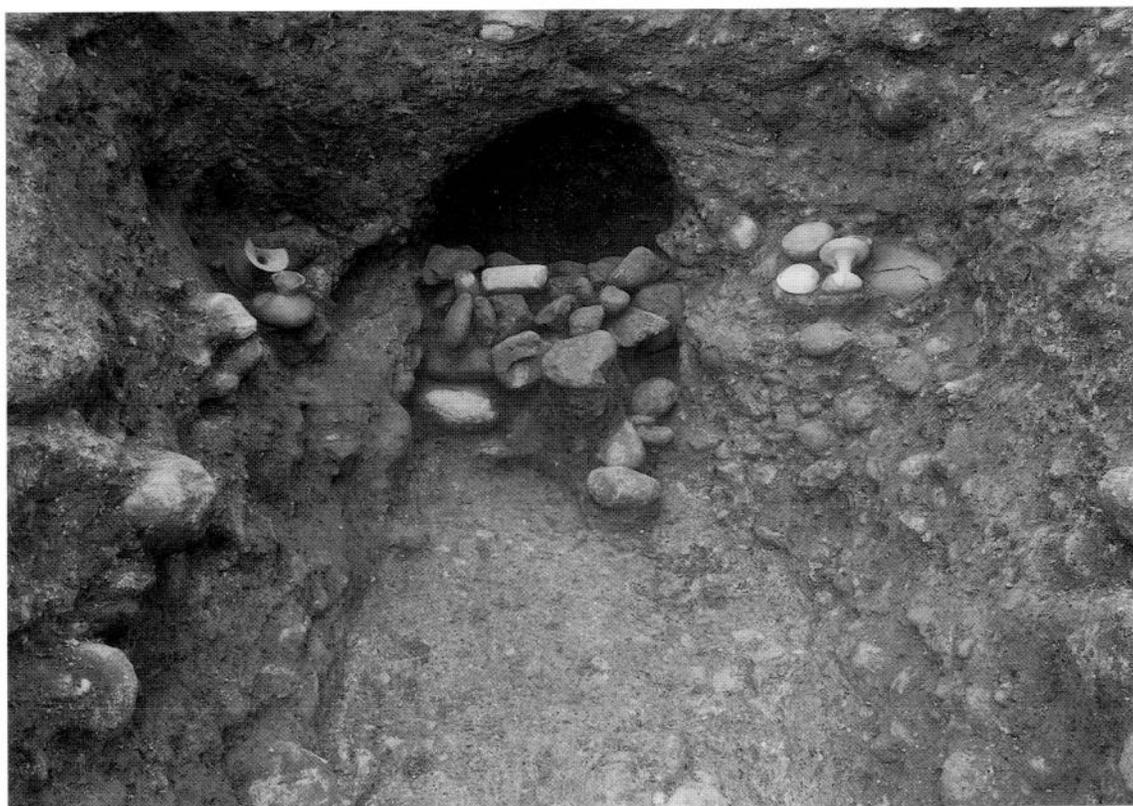
横穴墓群遠景（東から）



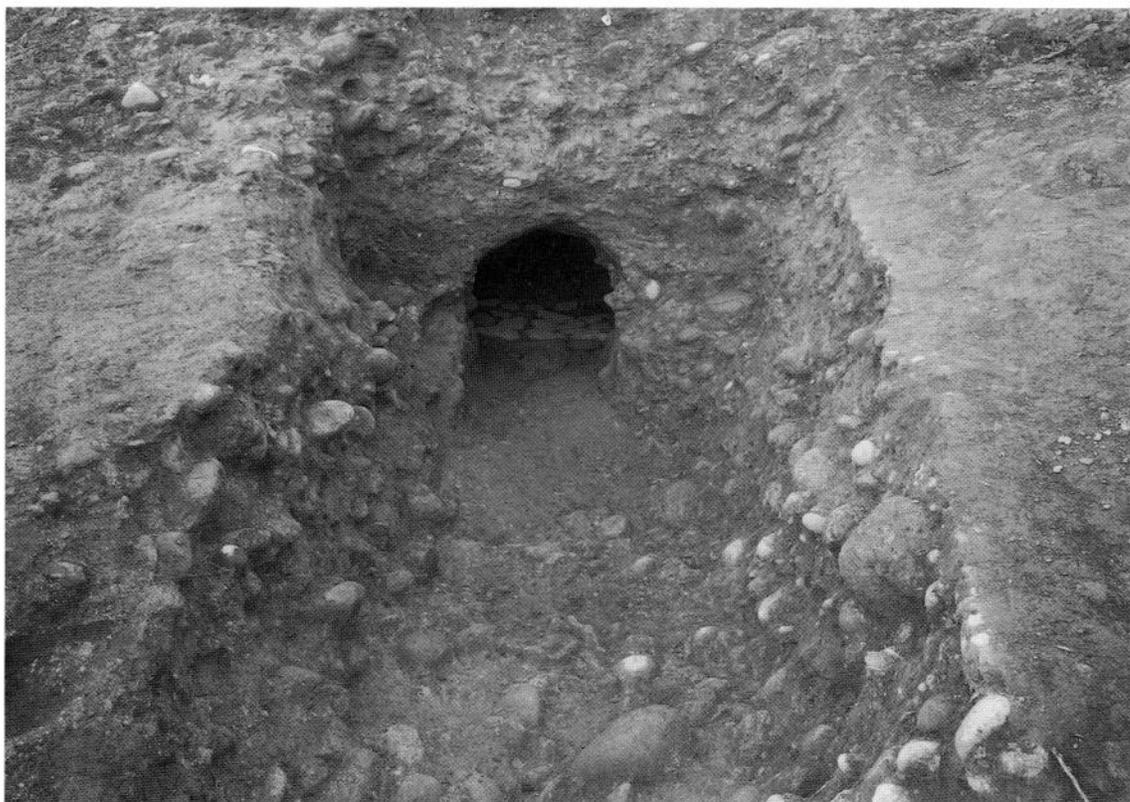
横穴墓群近景（東から）



1号横穴墓道土層（南東から）



1号横穴閉塞状況（北東から）



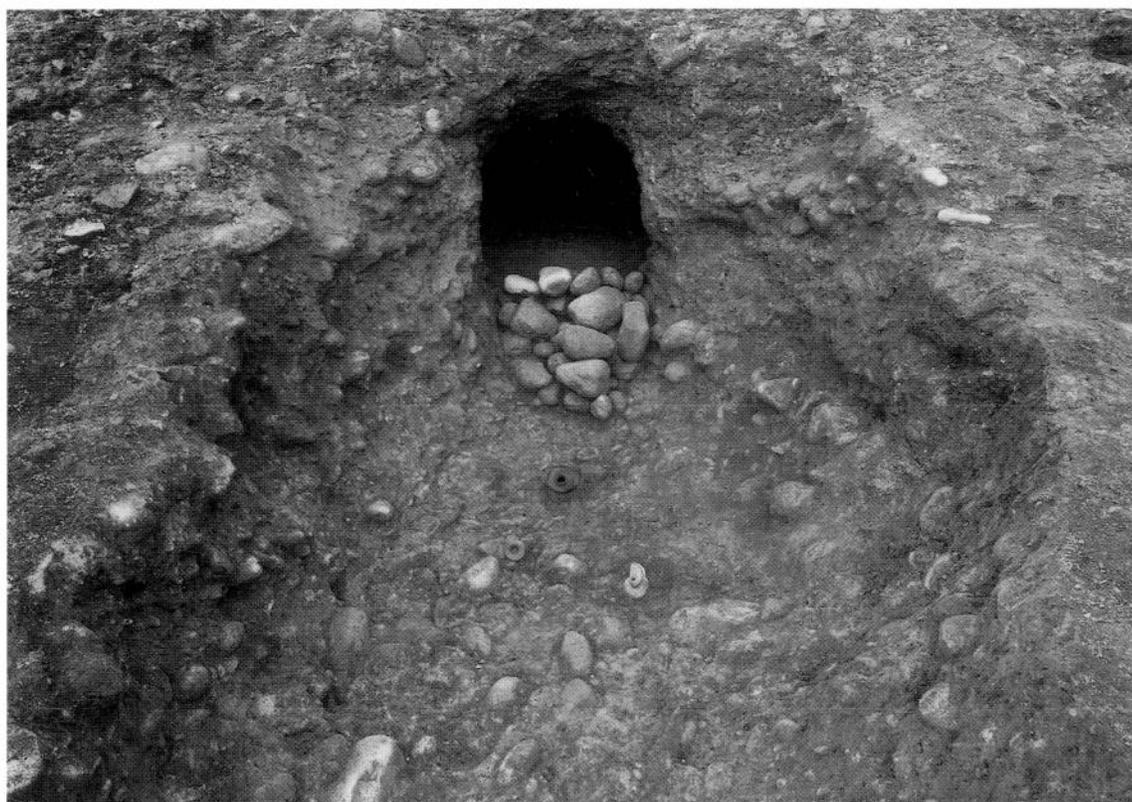
1号横穴全景（北東から）



1号横穴玄室（北東から）



2号横穴墓道土層（南東から）



2号横穴閉塞状況（東から）



2号横穴全景（東から）



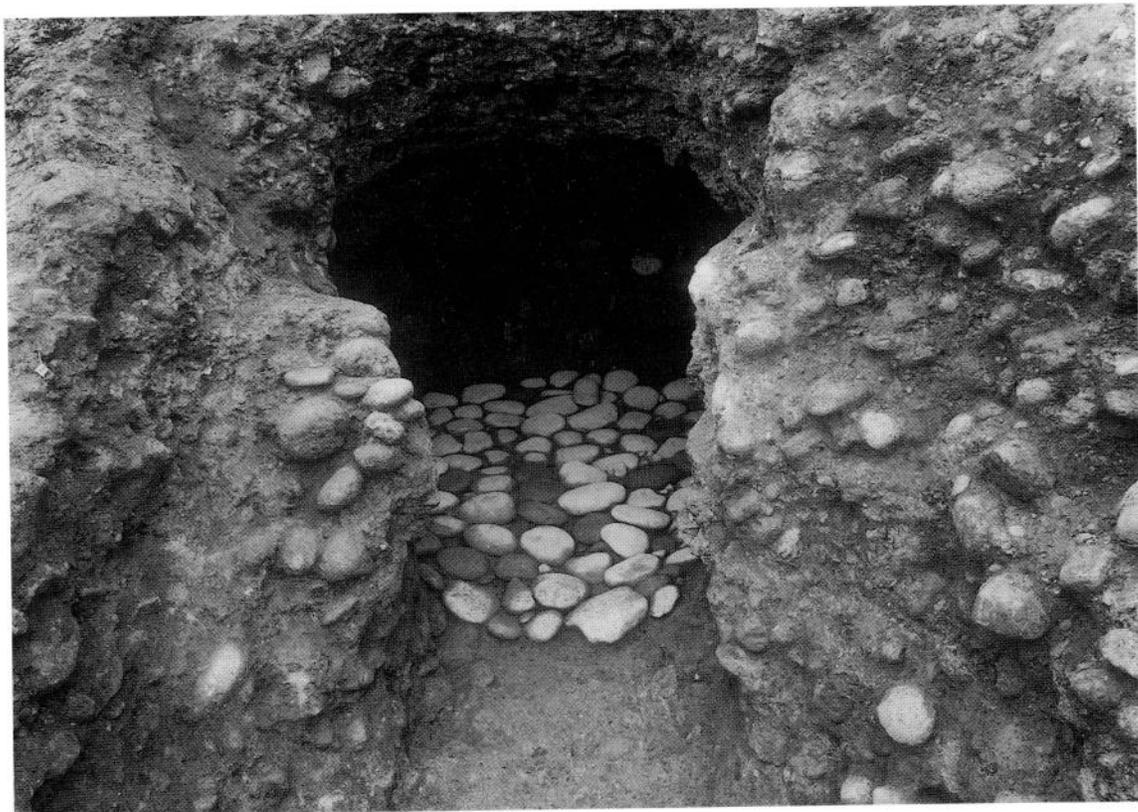
2号横穴玄室（東から）



3号横穴墓道土層（北から）



同閉塞状況（北東から）



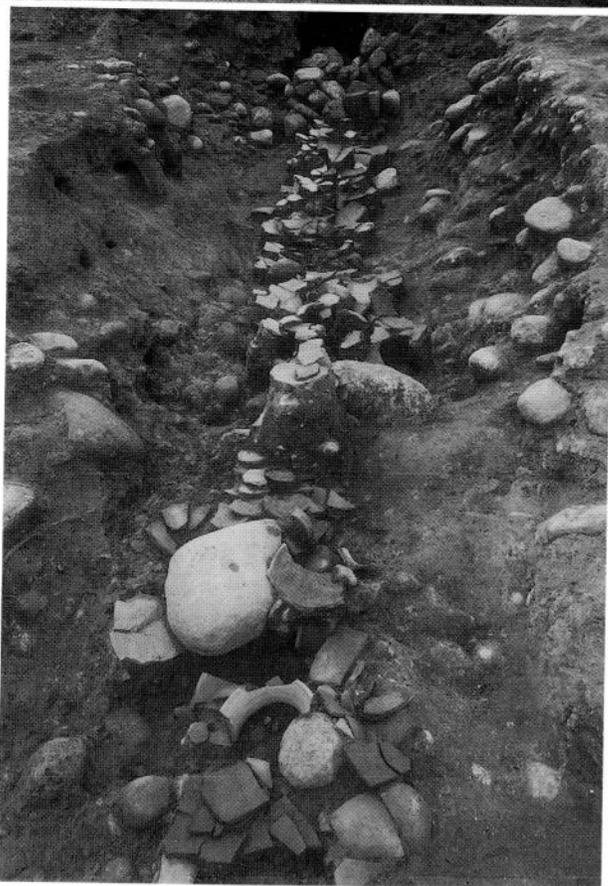
3号横穴主体部（北東から）



同玄室（北東から）



4号横穴墓道土層（南東から）



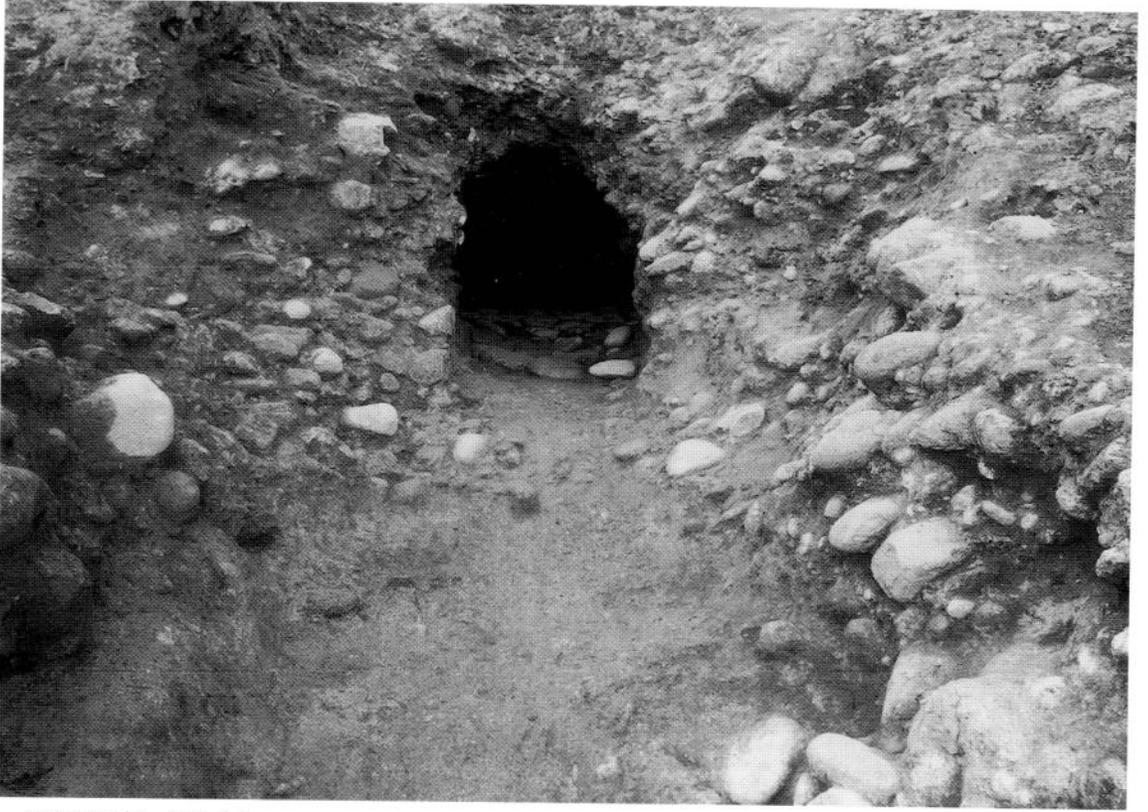
同墓道遺物出土状況（東から）



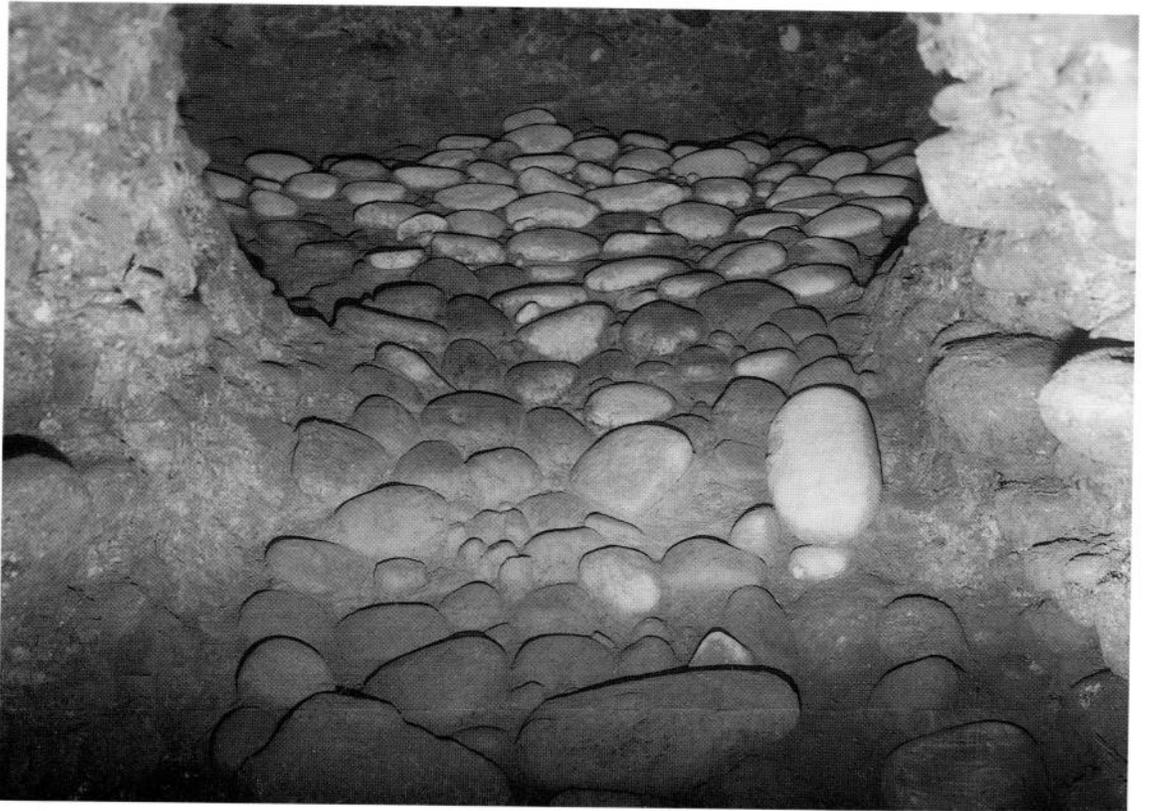
4号横穴墓道遺物出土状況（南東から）



同閉塞状況（東から）



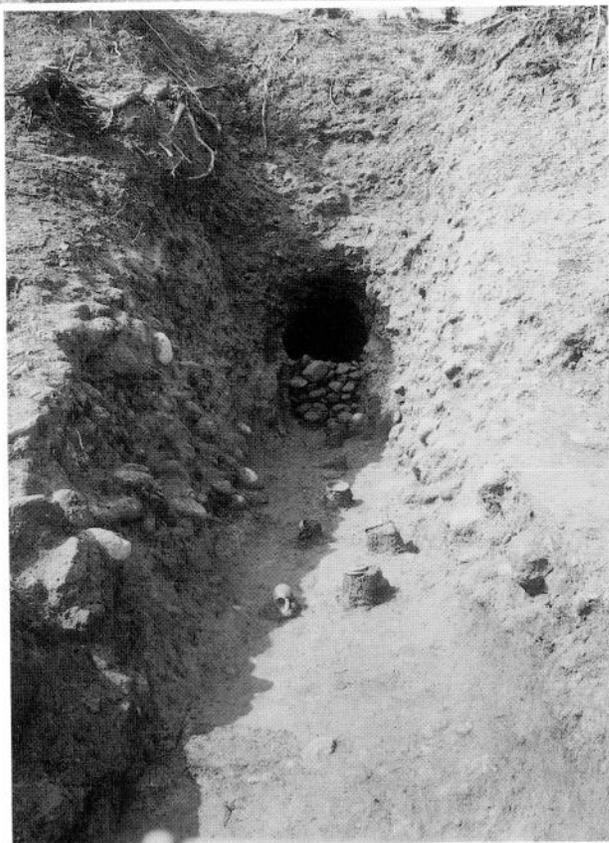
4号横穴全景（東から）



同女室（東から）



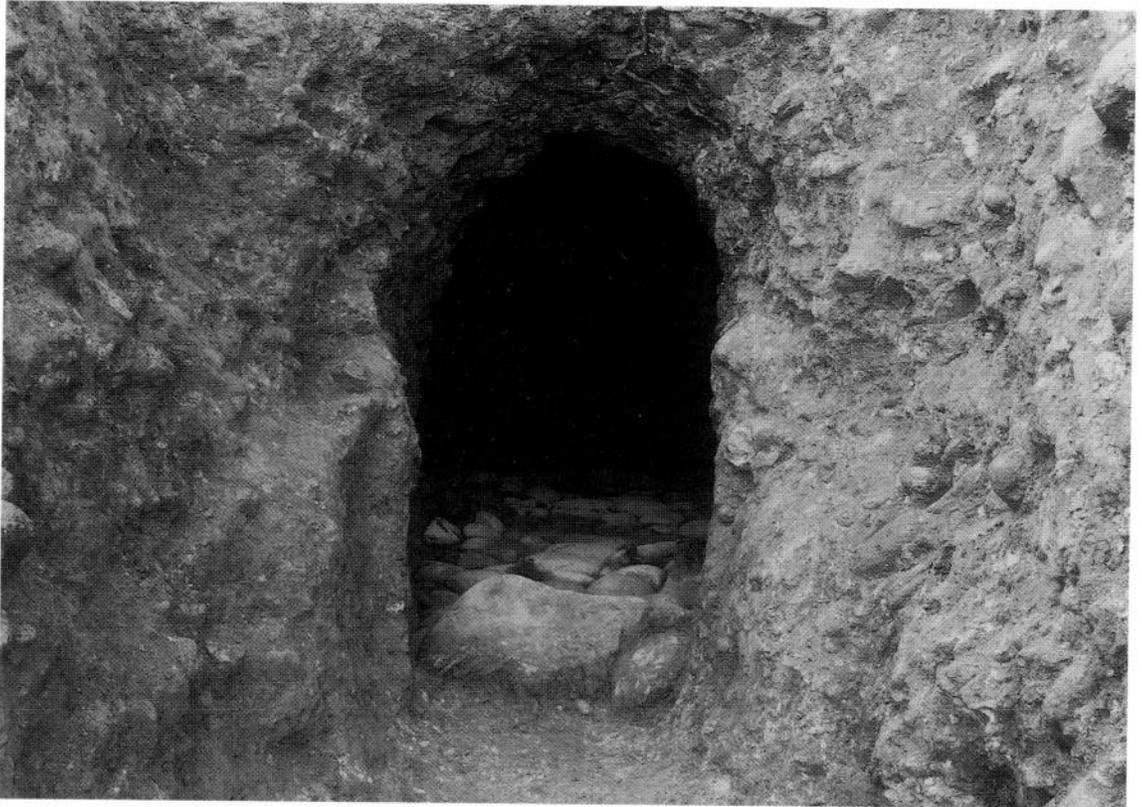
5号横穴墓道土層（東から）



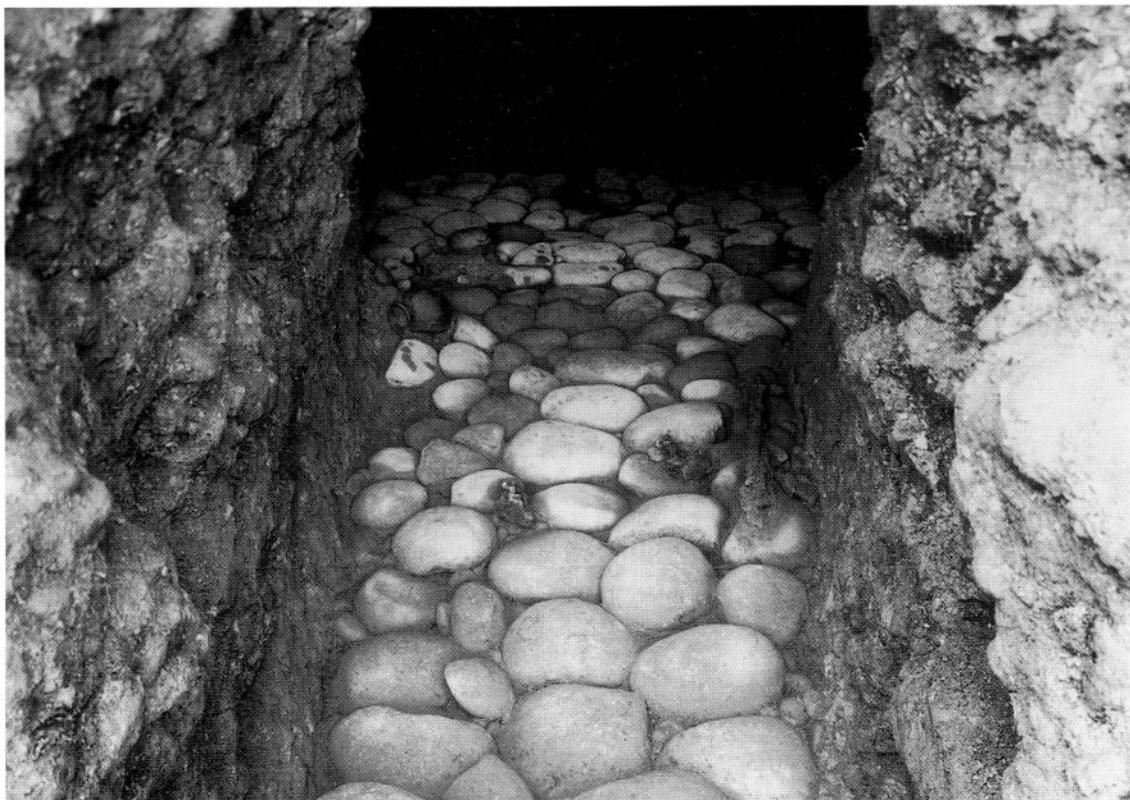
同全景（北東から）



5号横穴墓道遺物出土状況（北東から）



同羨門（北東から）



5号横穴羨道部遺物出土状況（北東から）



同（南西から）



5号横穴玄室遺物出土状況（北から）



同玄室敷石除去後（北東から）



6号横穴墓道土層（南東から）



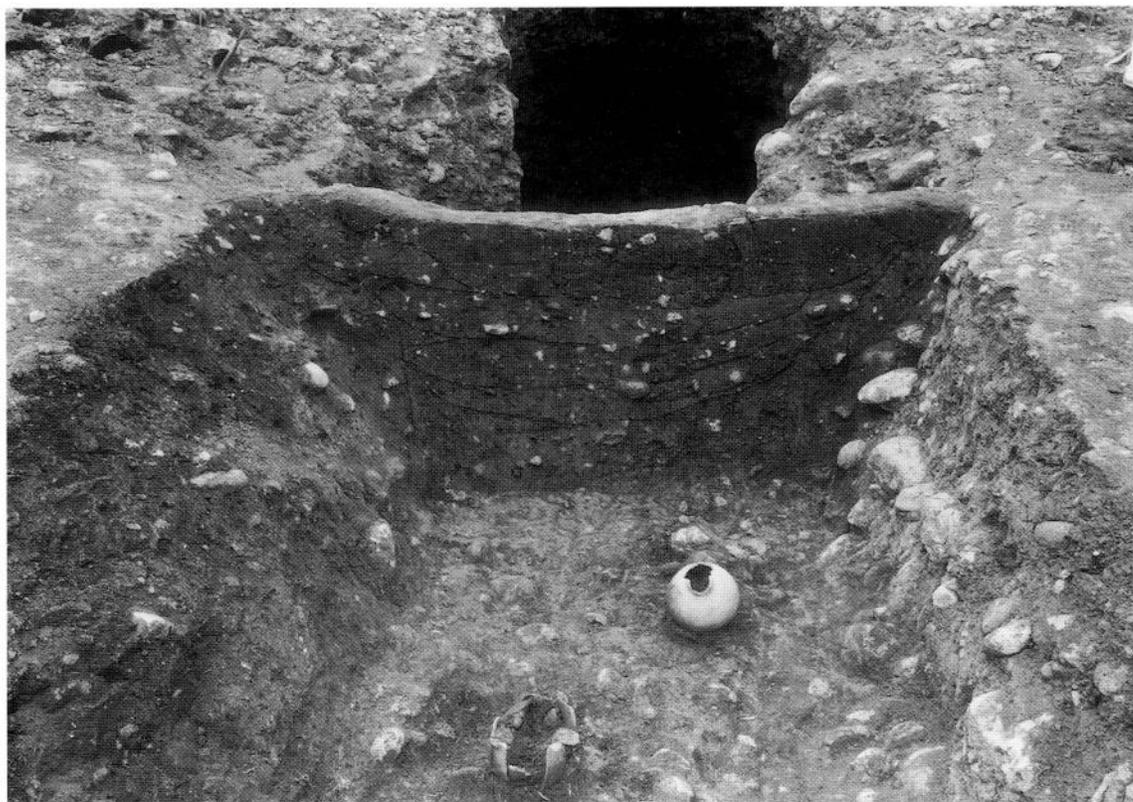
同閉塞状況（東から）



6号横穴主体部（東から）



同玄室（東から）



7号横穴墓道土層（東から）



同閉塞状況（東から）



7号横穴主体部（東から）



同玄室（東から）



8号横穴墓道土層（東から）



同墓道遺物出土状況（東から）



8号横穴閉塞状況（南から）



同主体部（東から）



8号横穴主体部（東から）



同玄室遺物出土状況（北から）



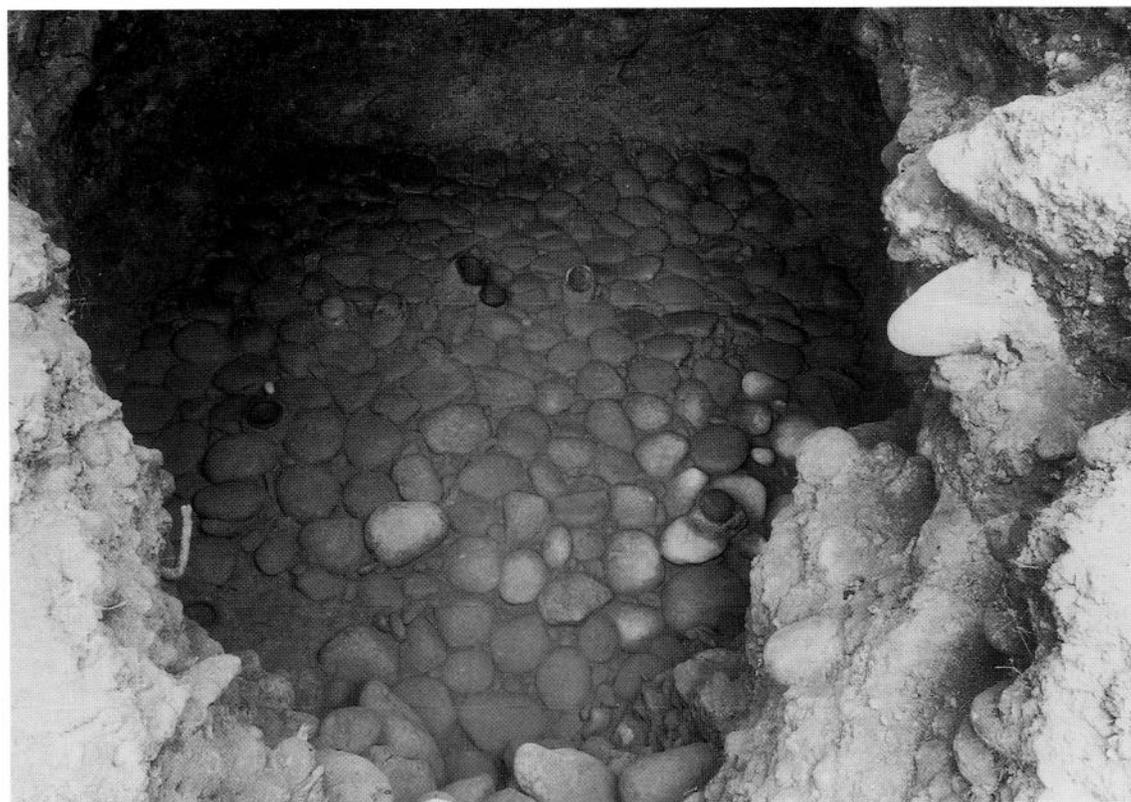
9号横穴閉塞状況（北東から）



同閉塞状況（北東から）



9号横穴主体部（北東から）



同玄室（北東から）



10号横穴墓道土層（北西から）



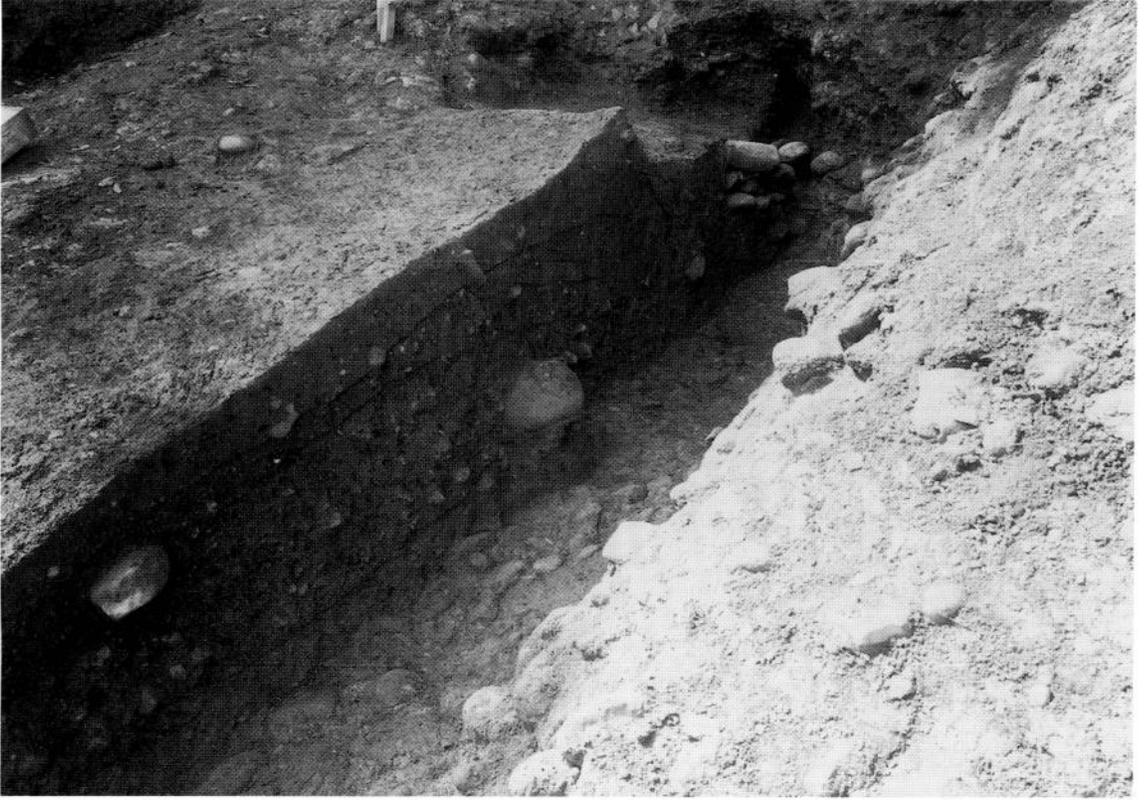
同閉塞状況（北東から）



10号横穴主体部（北東から）



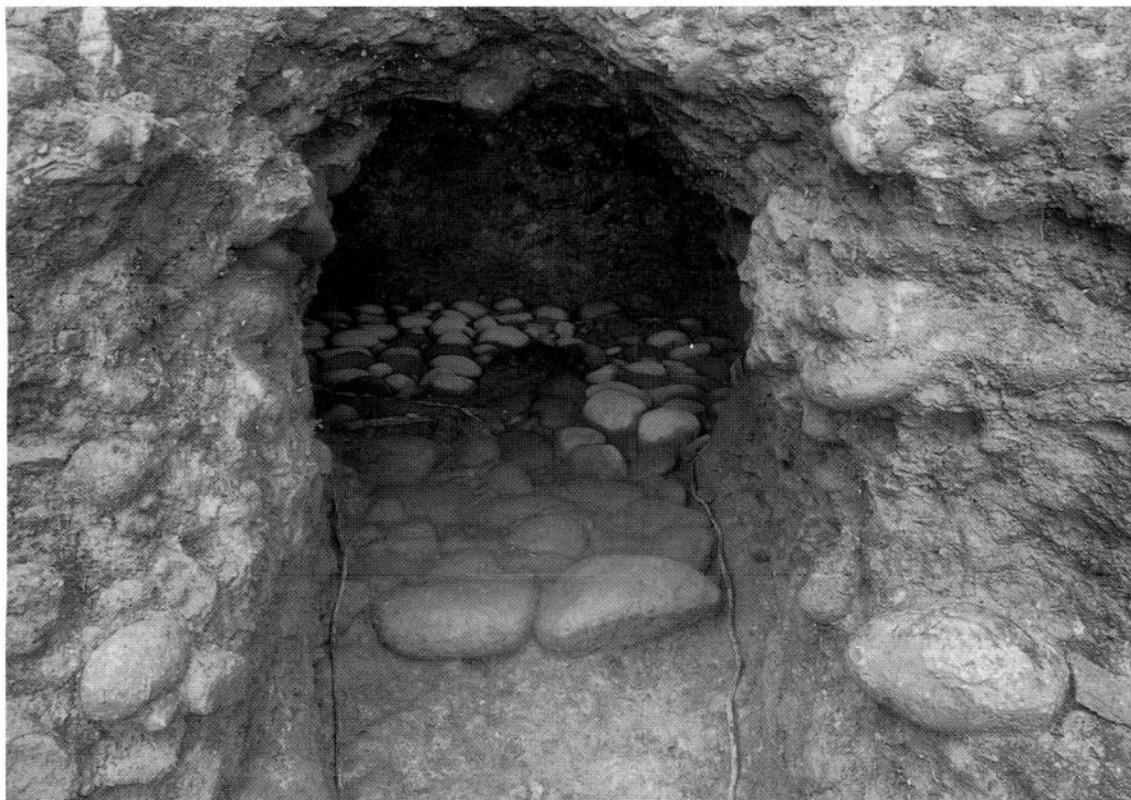
同玄室（北東から）



11号横穴墓道土層（北から）



同全景（北東から）



11号横穴主体部（北東から）



同玄室（北東から）



11号横穴玄室遺物出土状況（北西から）



同玄室遺物出土状況（北東から）



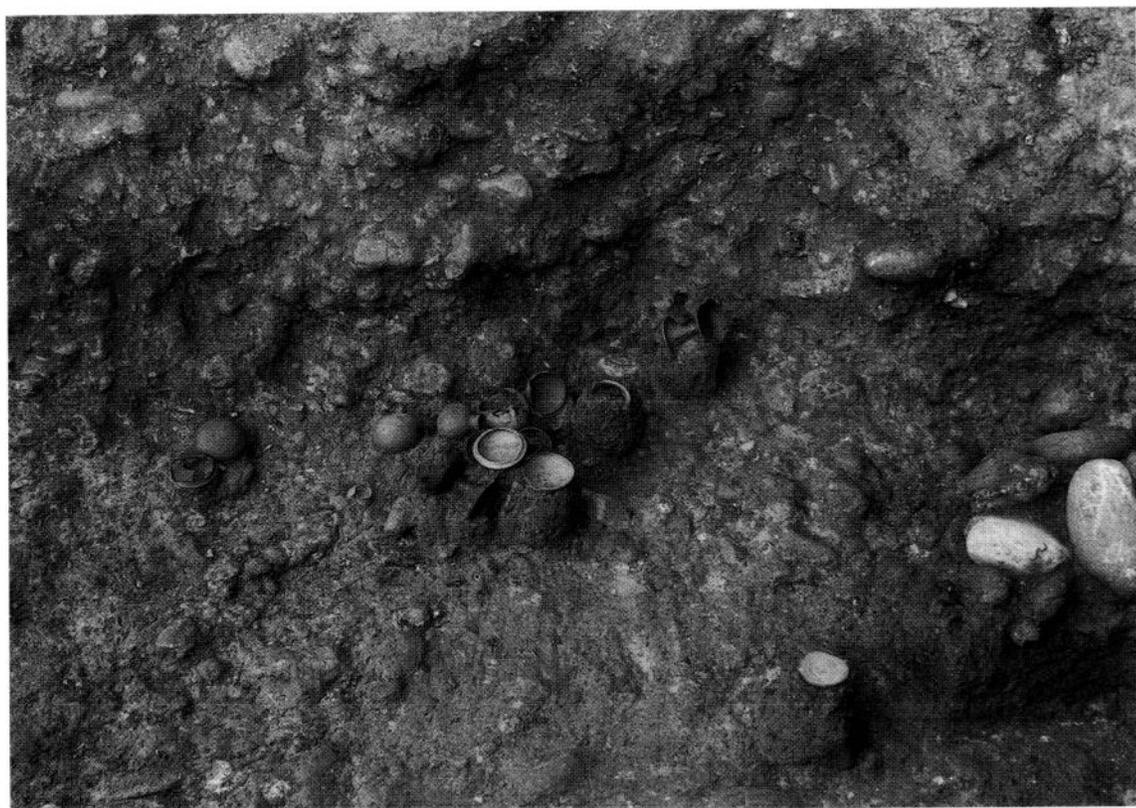
12号横穴墓道土層（北から）



同墓道遺物出土状況（北東から）



12号横穴墓道遺物出土状況（北から）



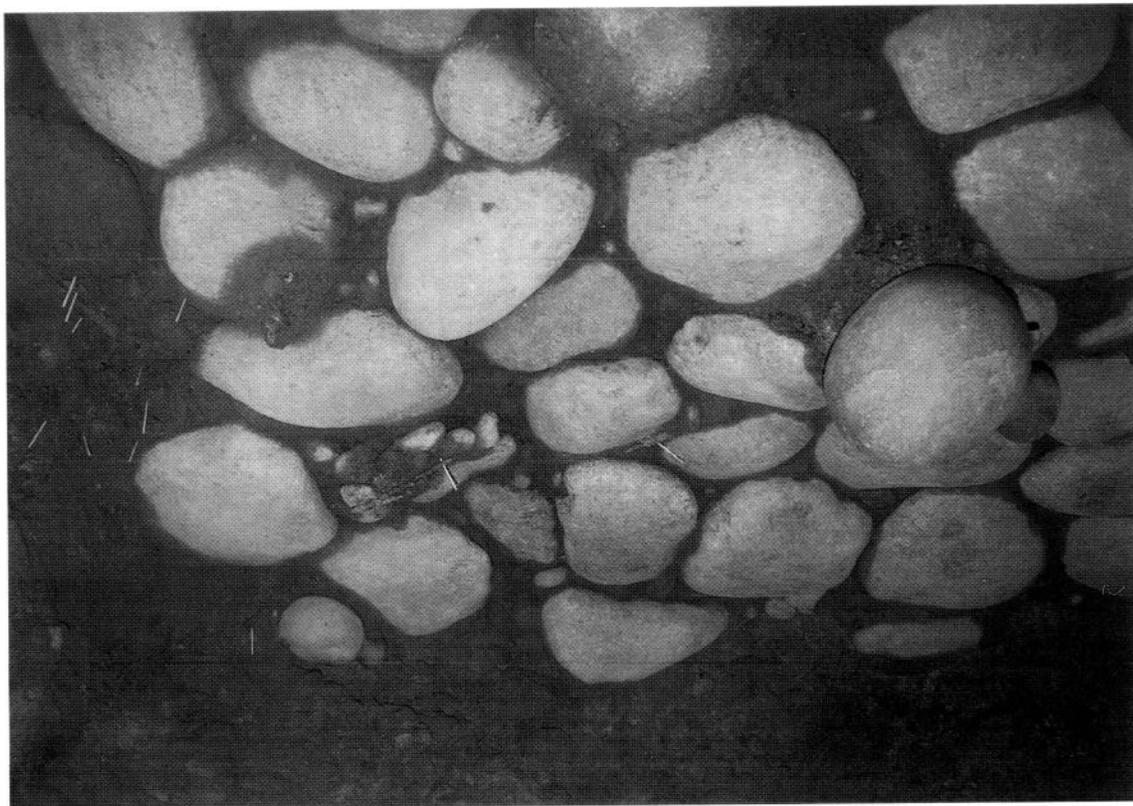
同墓道遺物出土状況（北から）



12号横穴主体部（北東から）



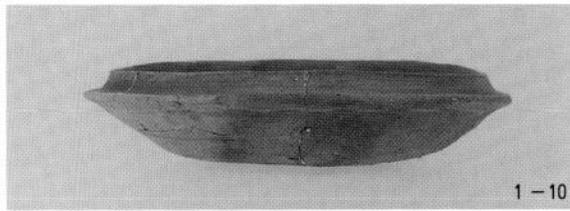
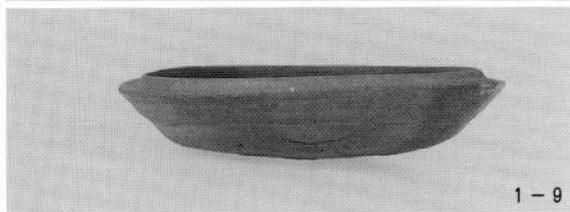
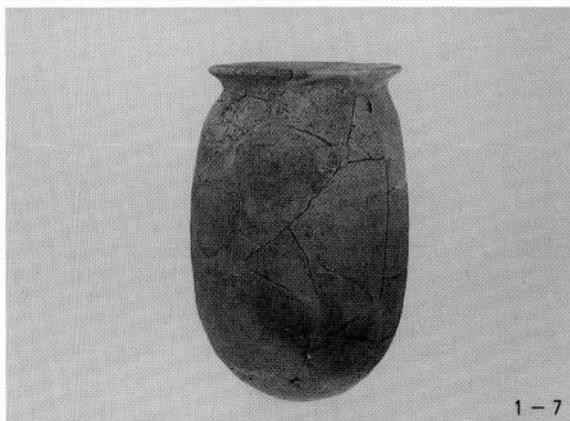
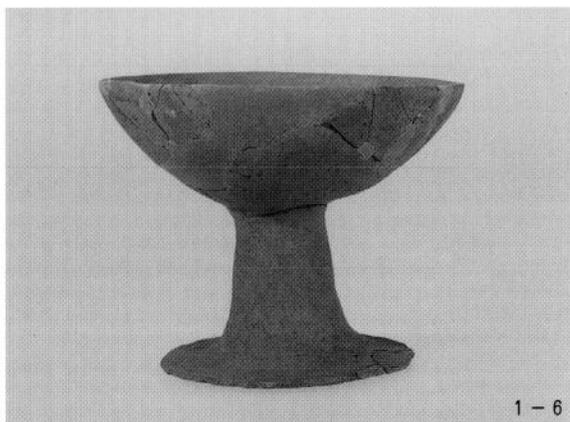
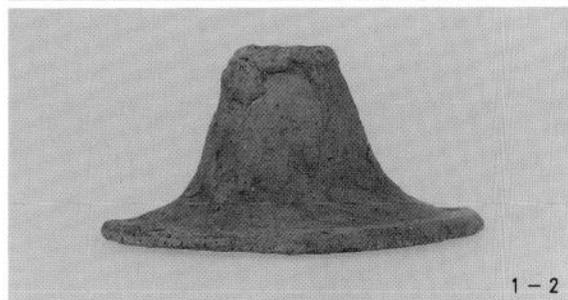
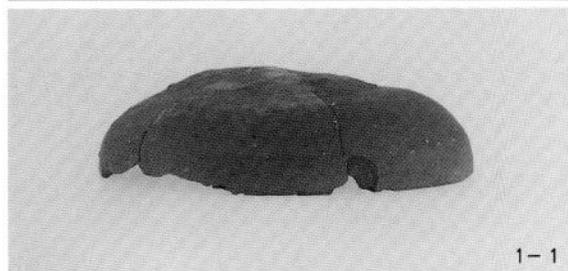
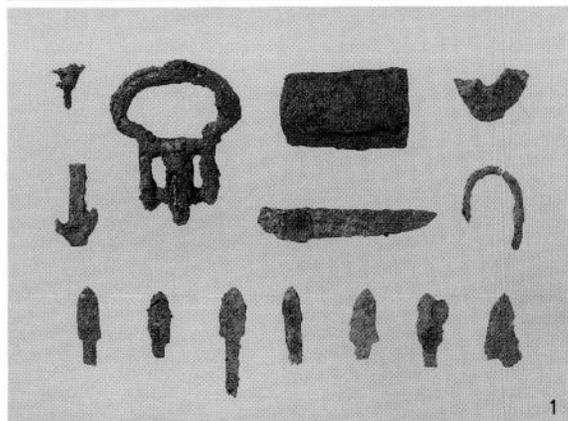
同玄室（北東から）



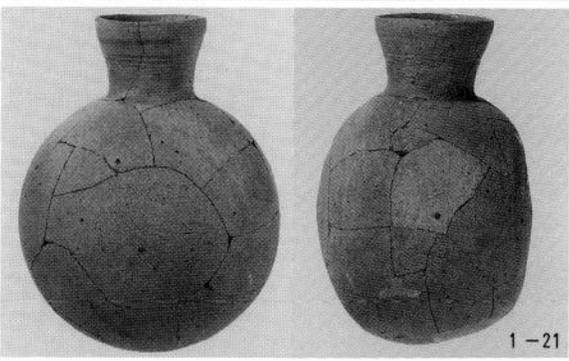
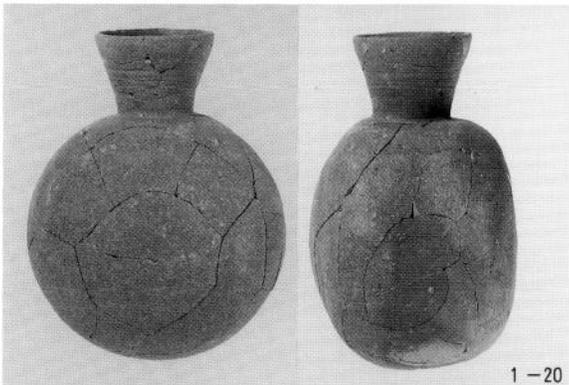
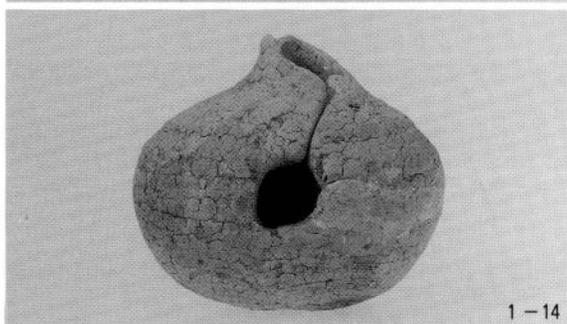
12号横穴玄室遺物出土状況（南から）



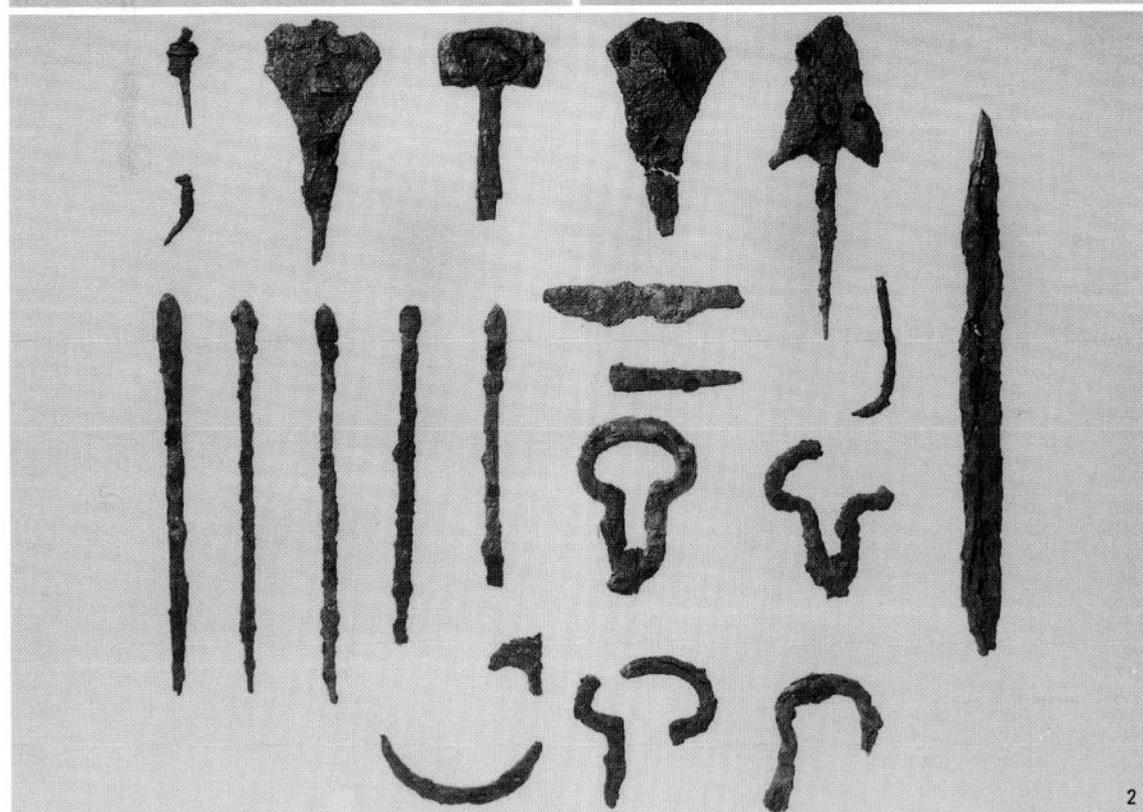
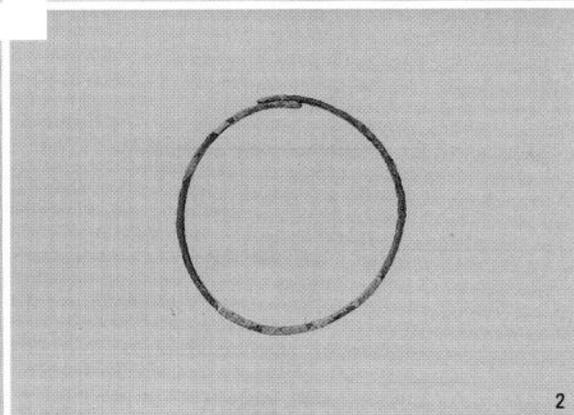
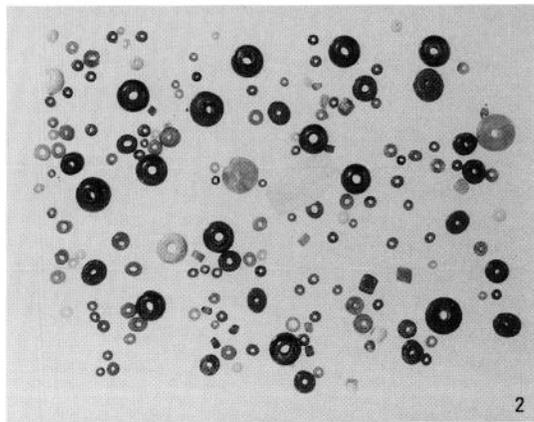
同玄室遺物出土状況（北から）



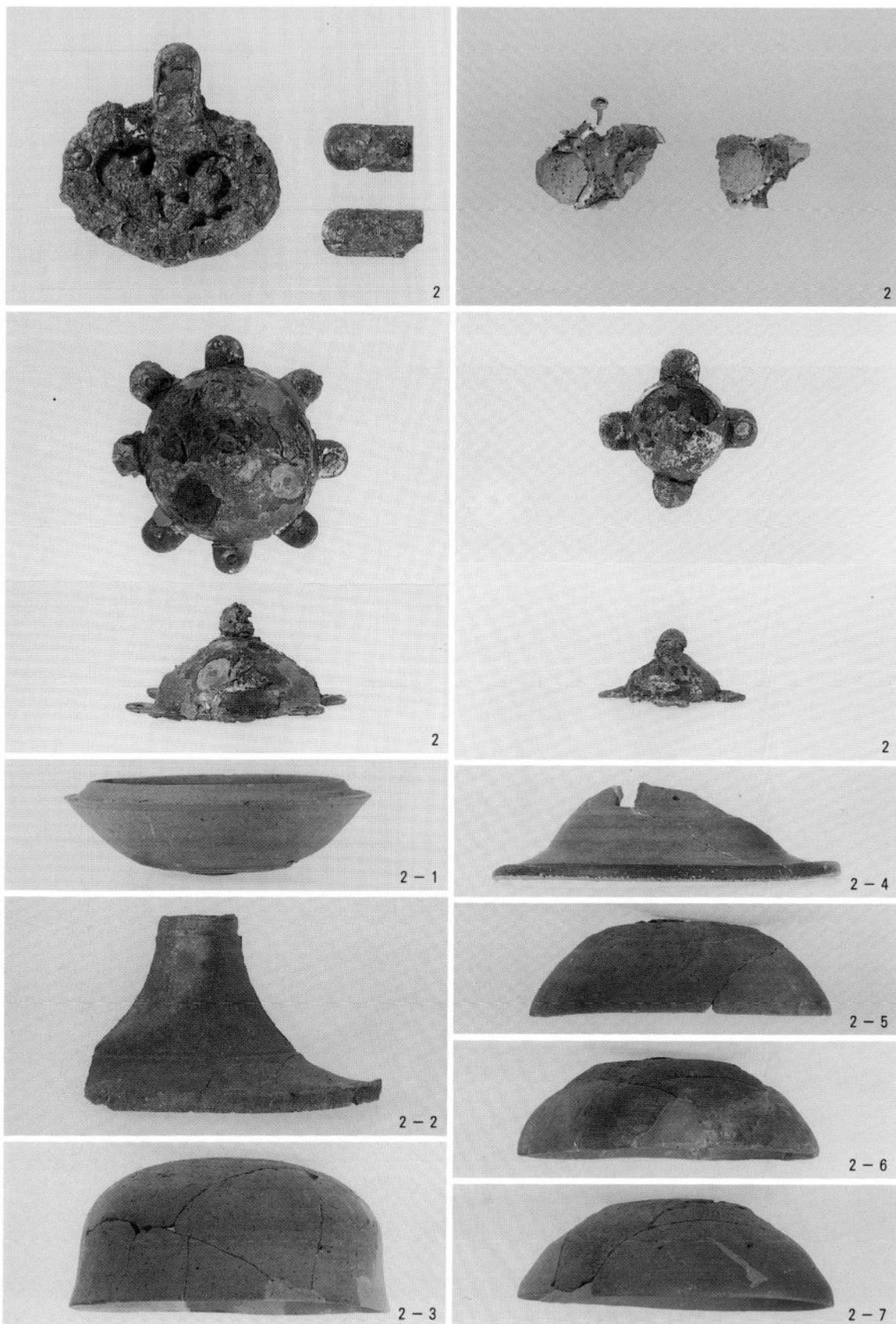
古墳出土遺物1 (1号墳1)



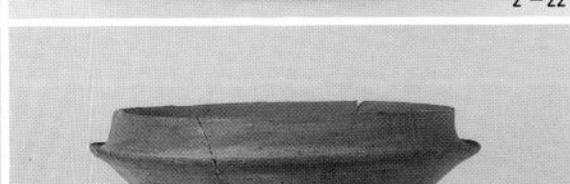
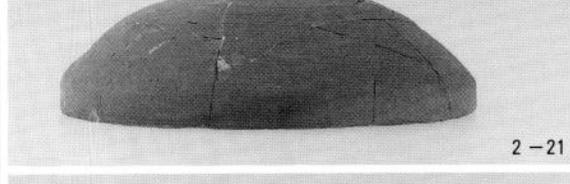
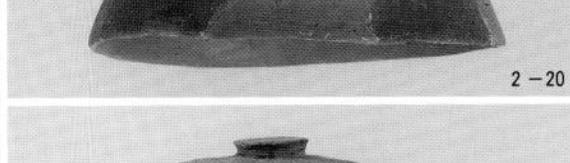
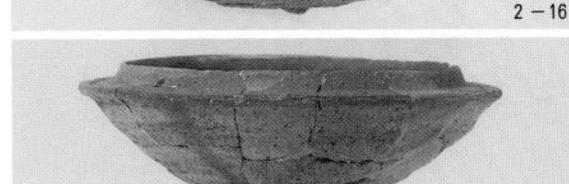
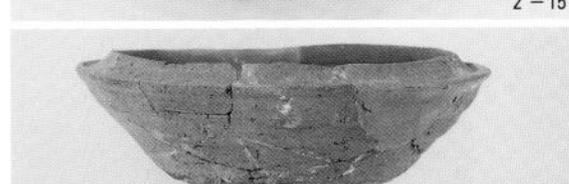
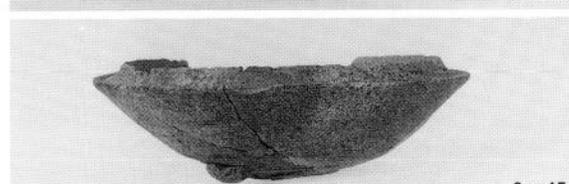
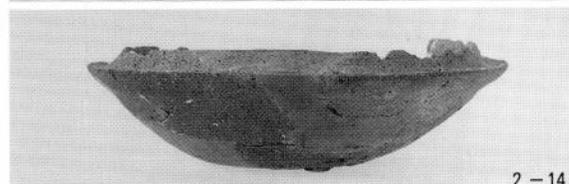
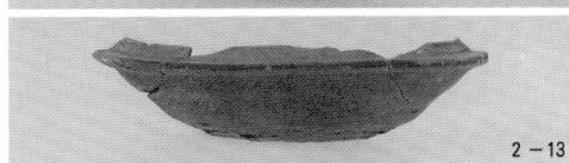
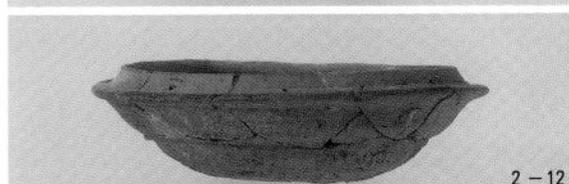
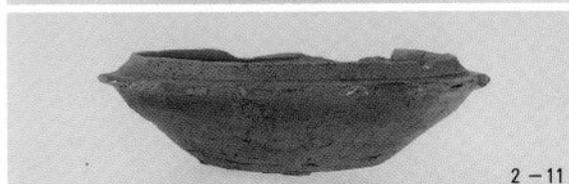
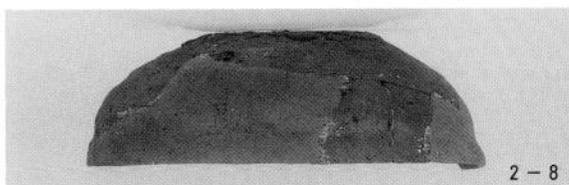
古墳出土遺物 2 (1号墳 2)



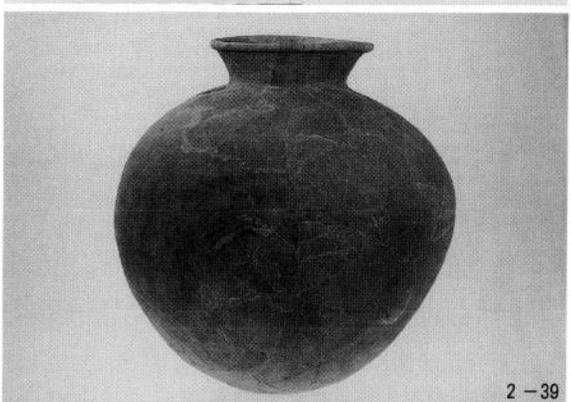
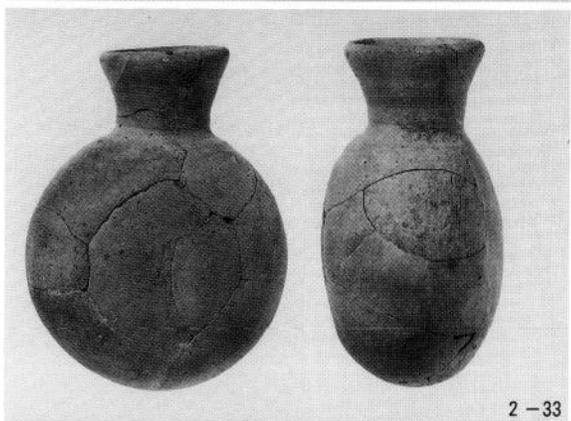
古墳出土遺物3 (1号墳3、2号墳1)



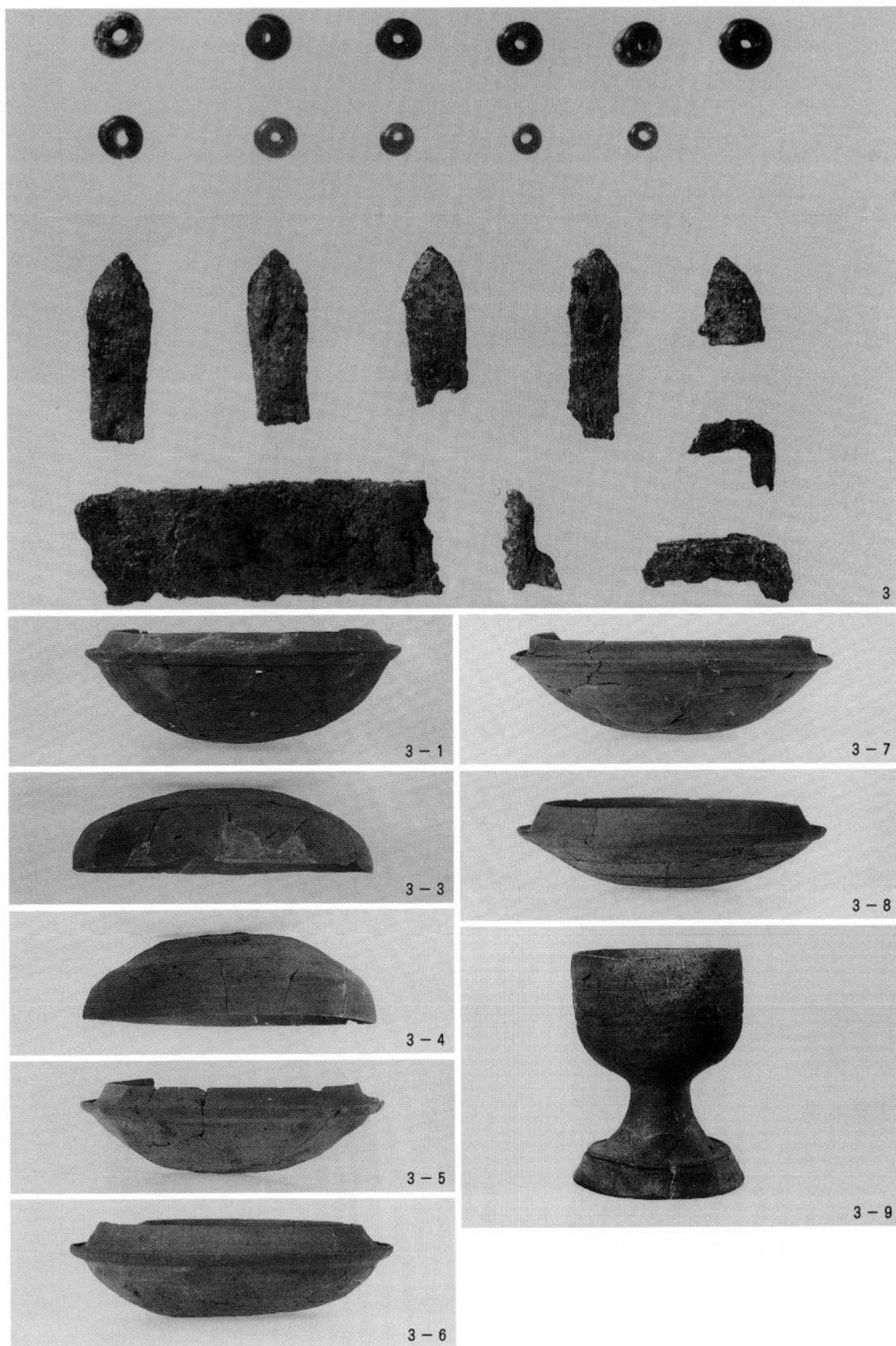
古墳出土遺物4 (2号墳2)



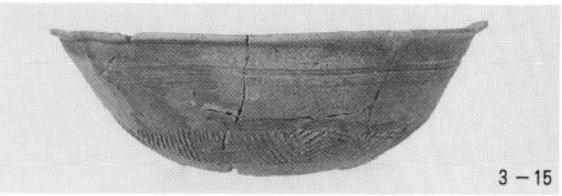
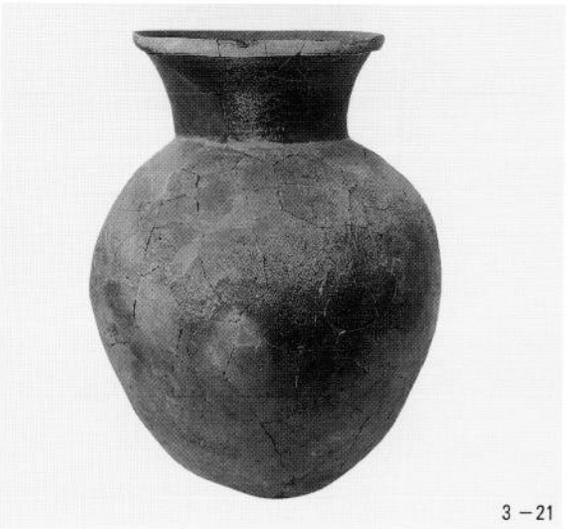
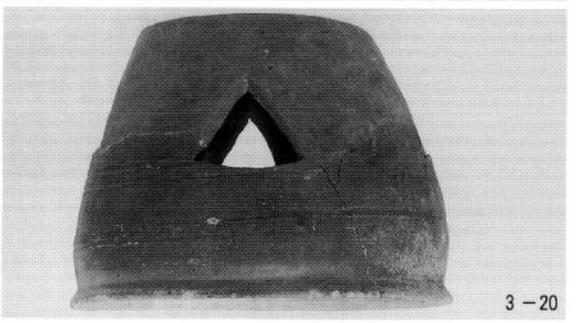
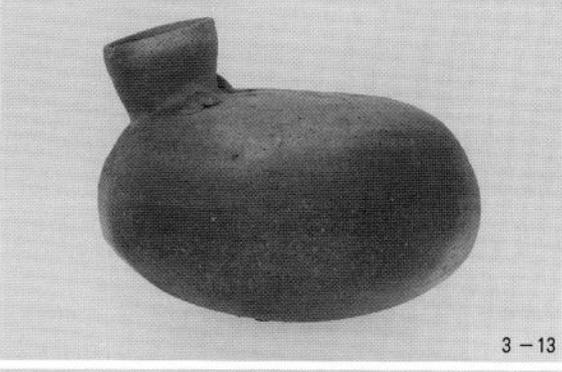
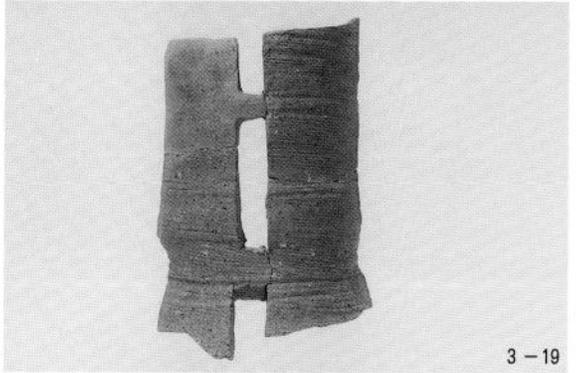
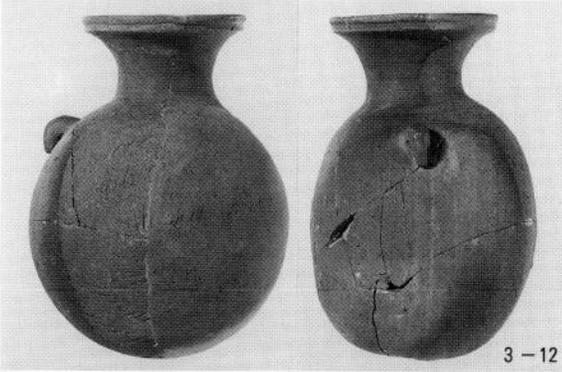
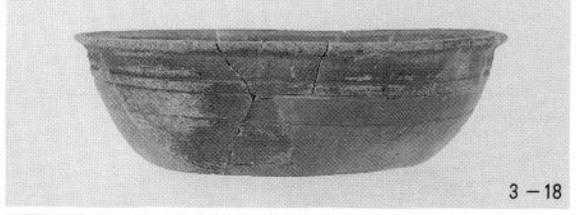
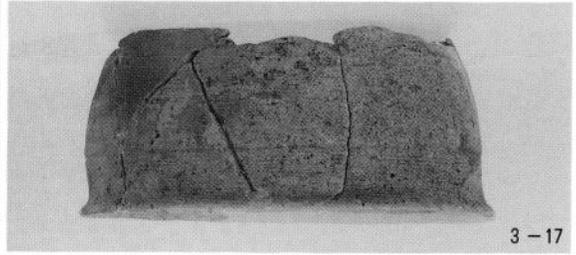
古墳出土遺物 5 (2号墳3)



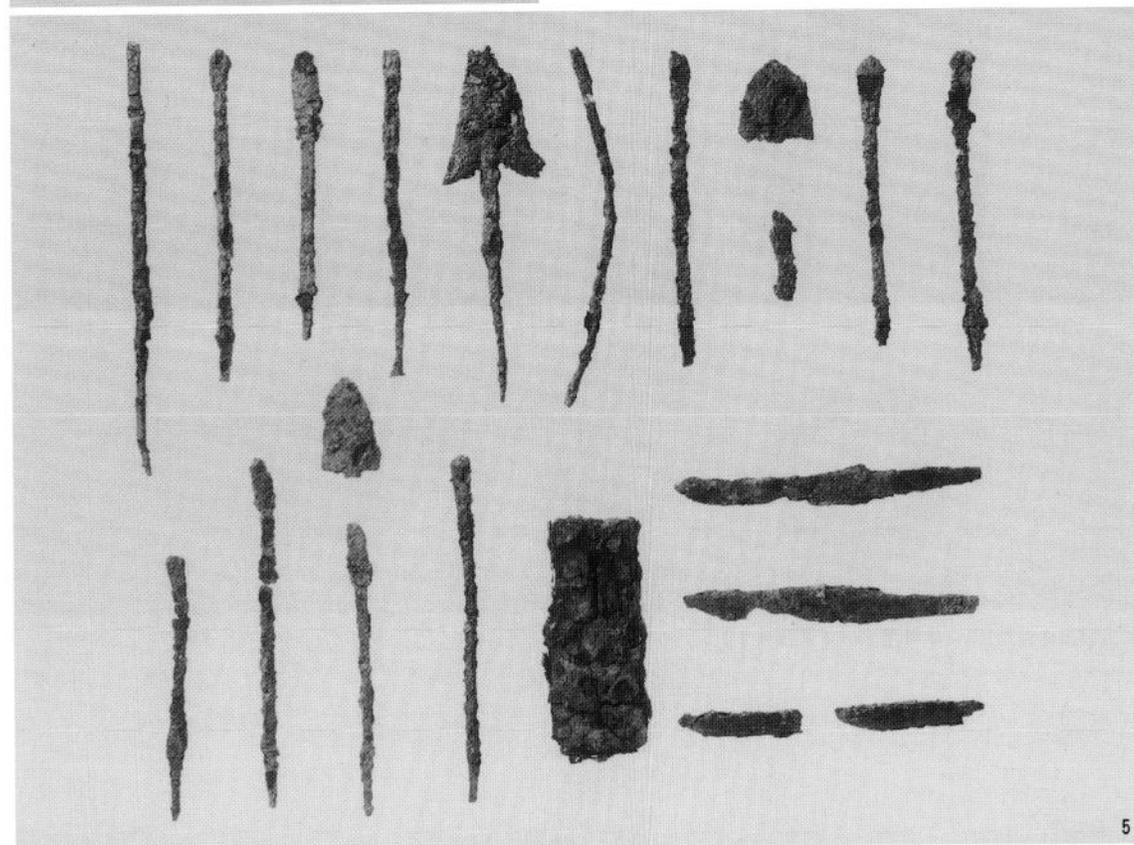
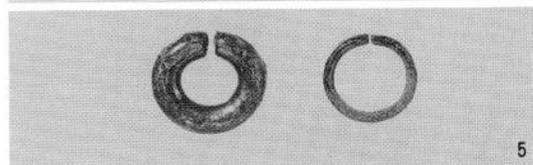
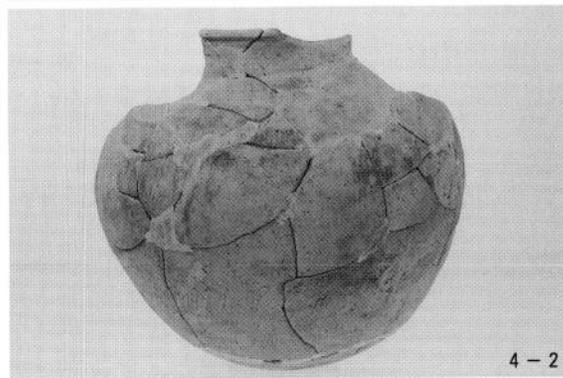
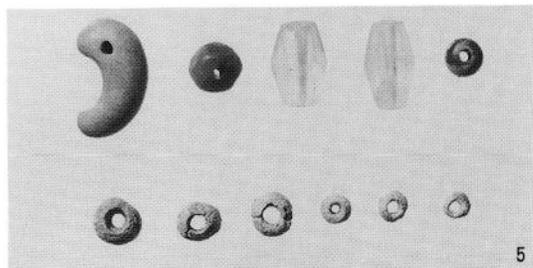
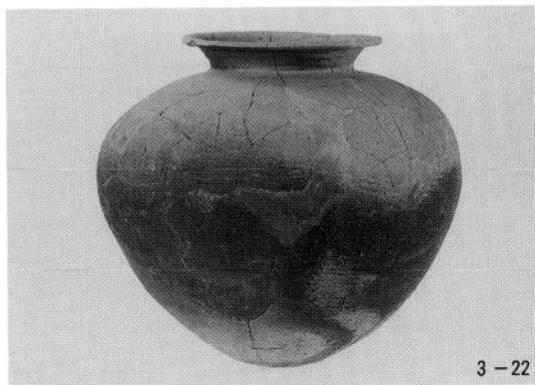
古墳出土遺物6 (2号墳4)



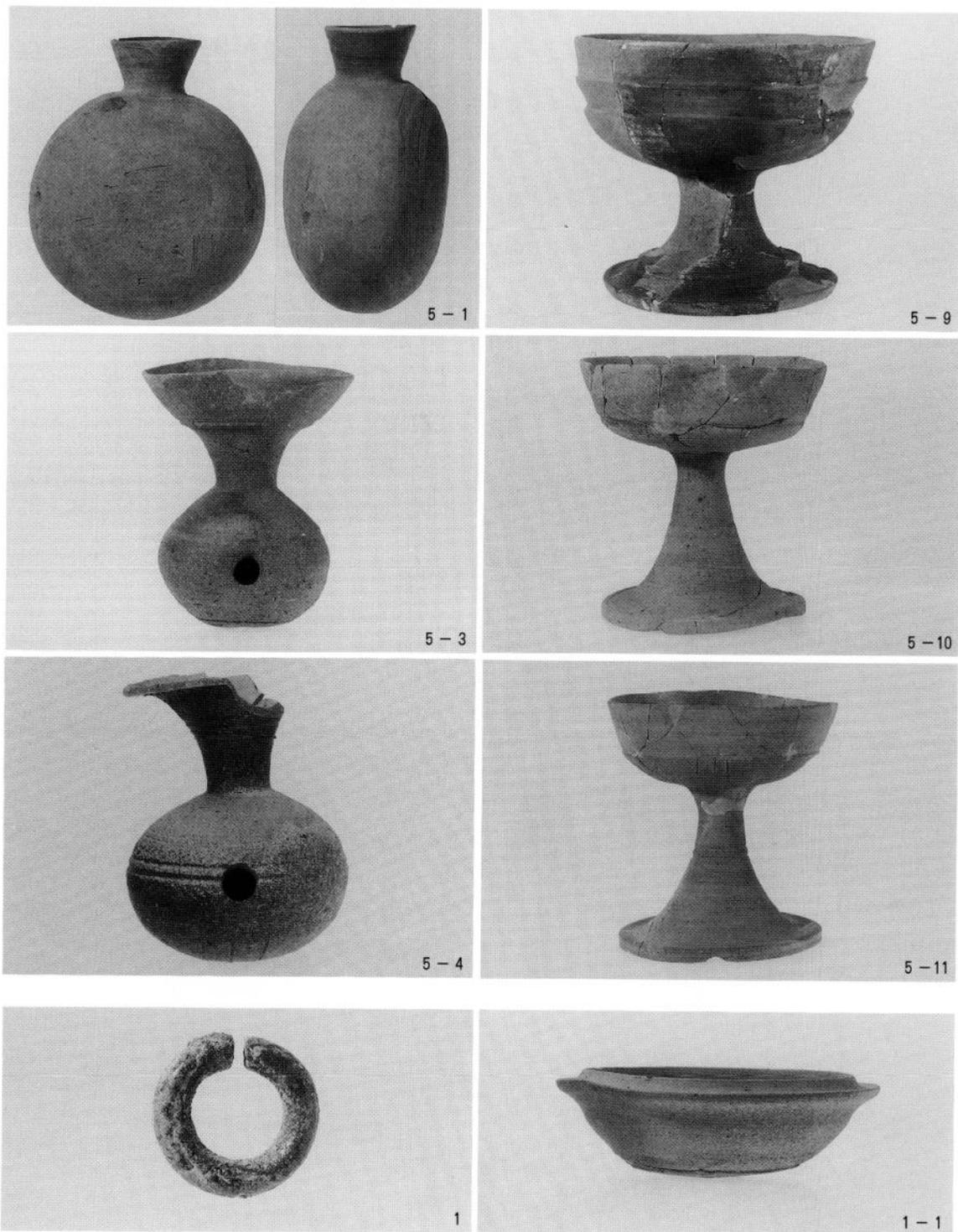
古墳出土遺物7 (3号墳1)



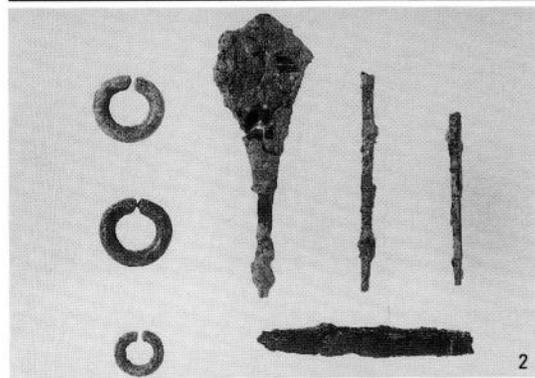
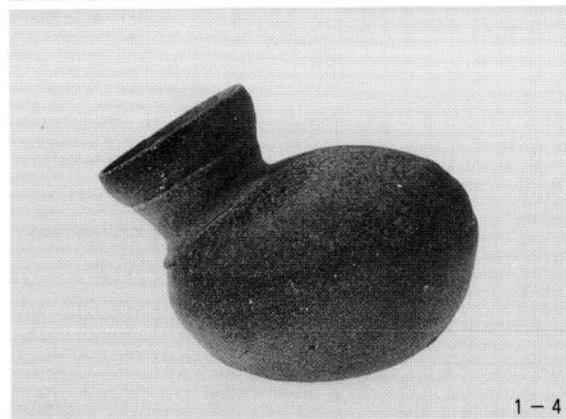
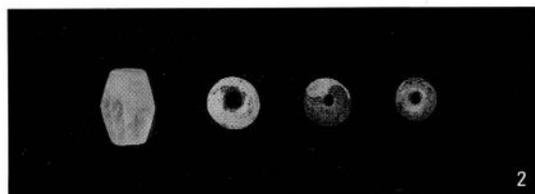
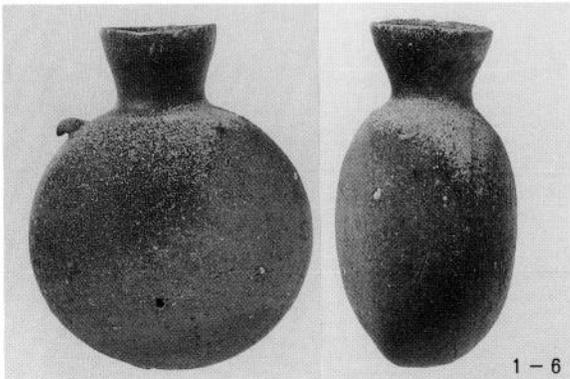
古墳出土遺物 8 (3号墳 2)



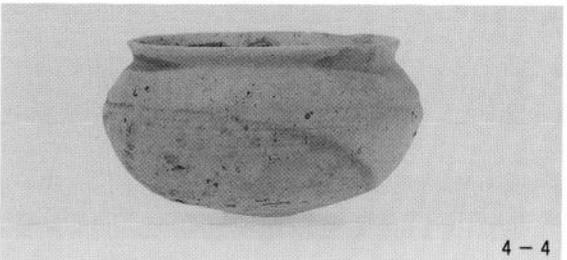
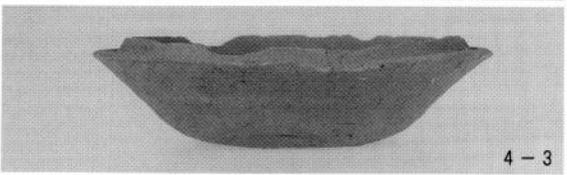
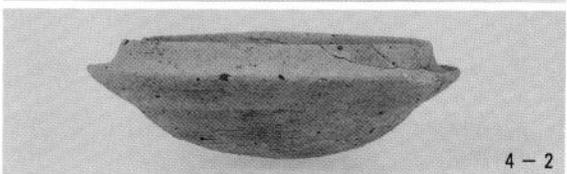
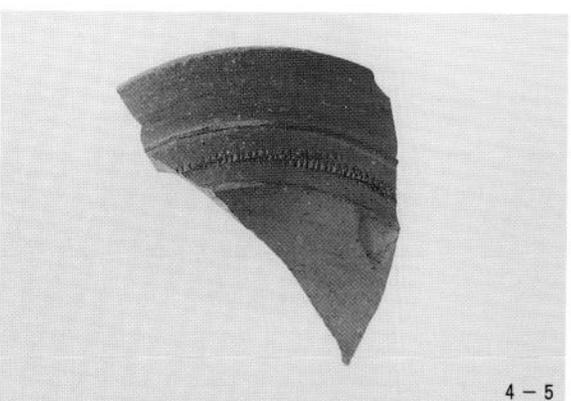
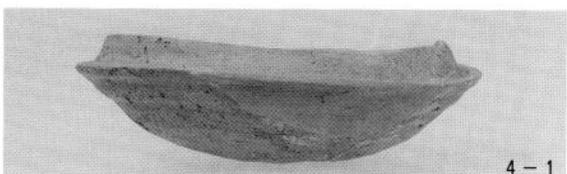
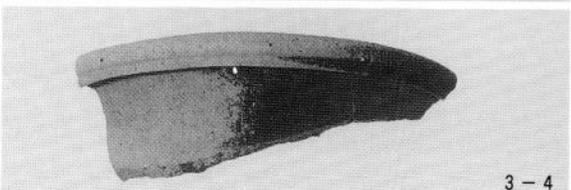
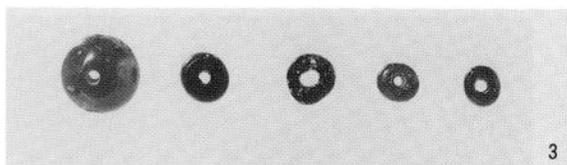
古墳出土遺物9 (3号墳3、4号墳、5号墳1)



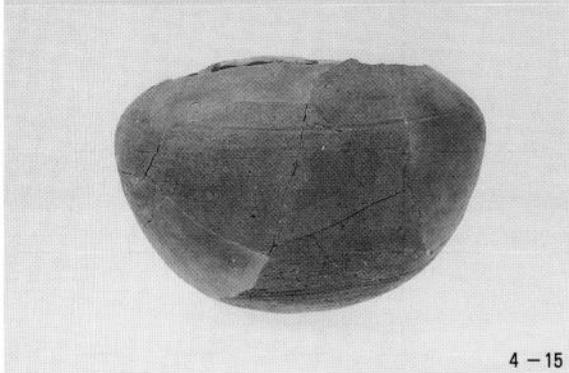
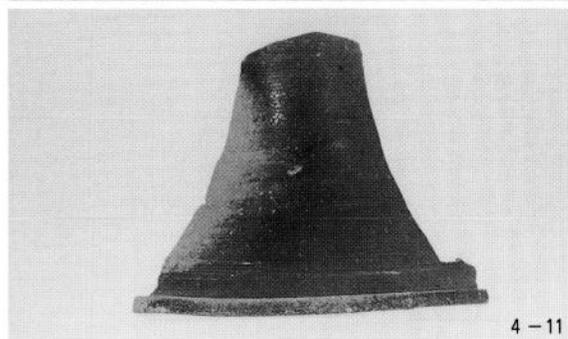
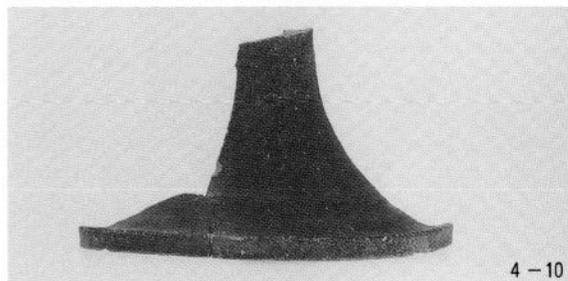
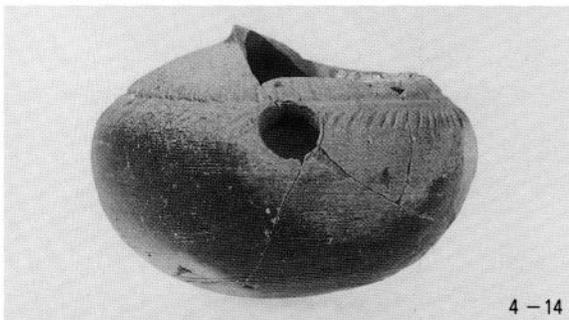
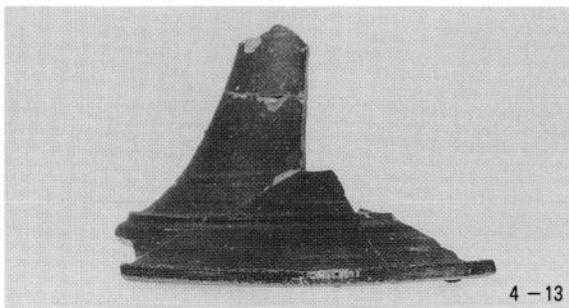
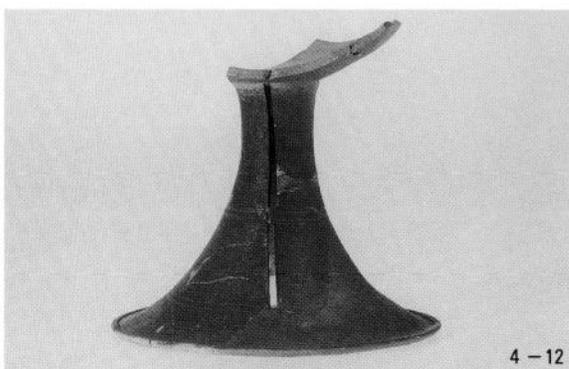
古墳出土遺物10（5号墳2、1号横穴1）



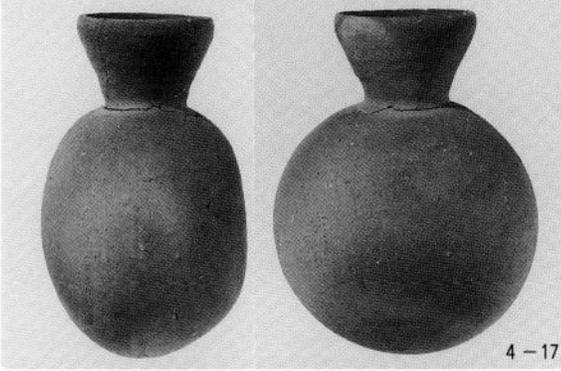
古墳出土遺物11 (1号横穴2、2号横穴1)



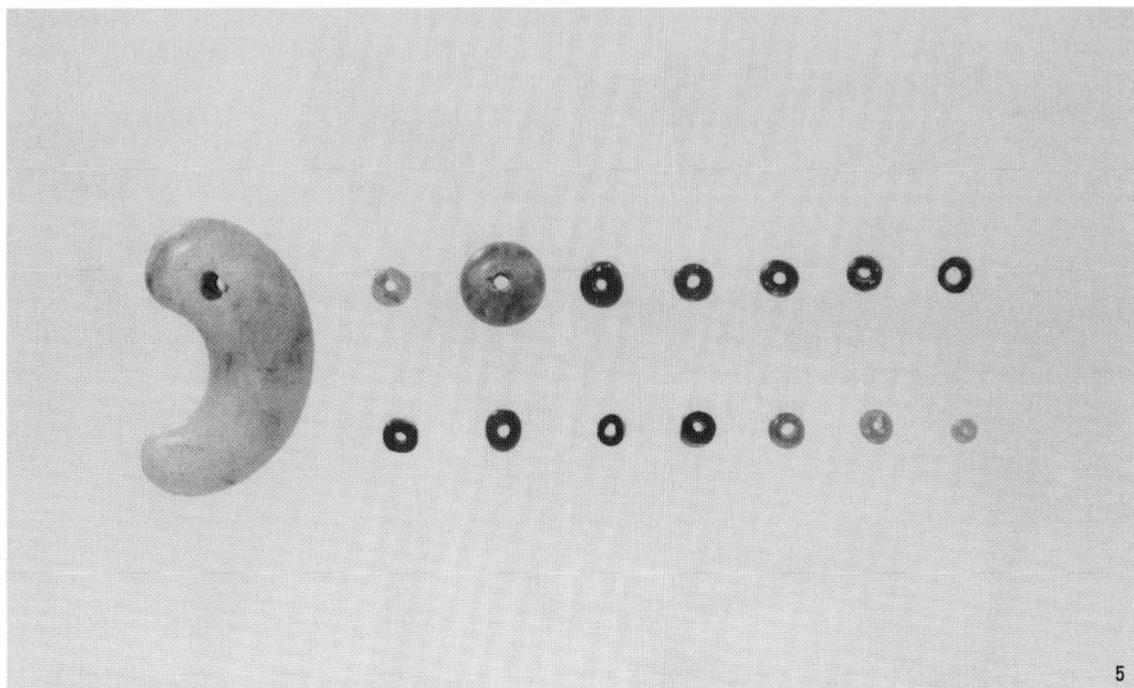
古墳出土遺物12 (2号横穴2、3号横穴、4号横穴1)



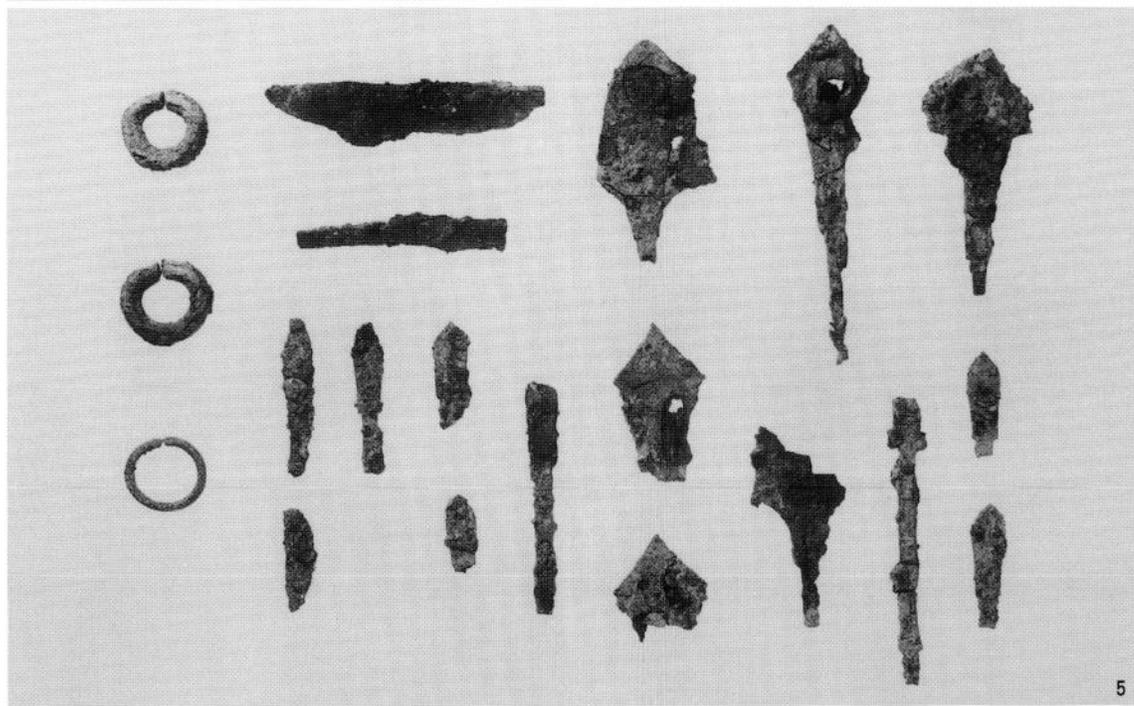
古墳出土遺物13 (4号横穴2)



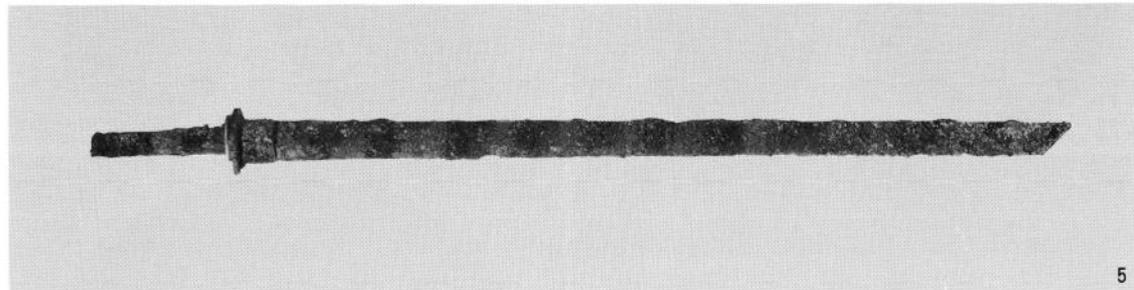
古墳出土遺物14 (4号横穴3)



5



5



5

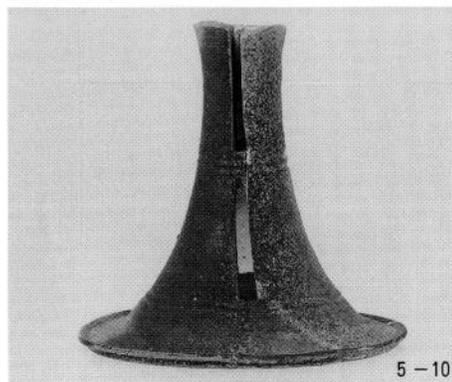
古墳出土遺物15 (5号横穴1)



古墳出土遺物16 (5号横穴2)



5-7



5-10



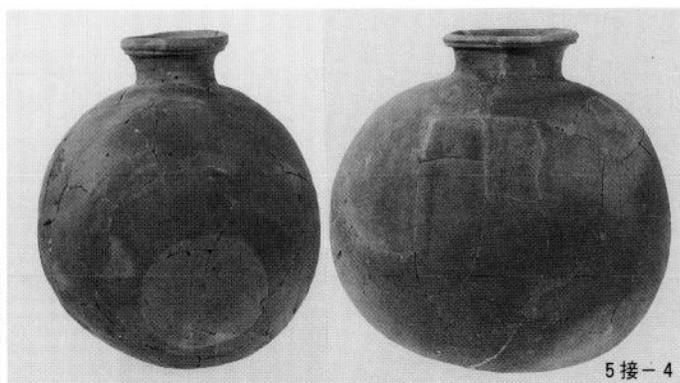
5-11



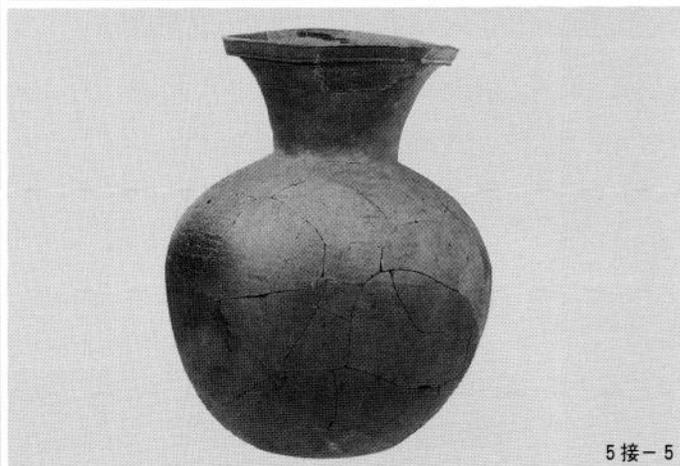
5接-2



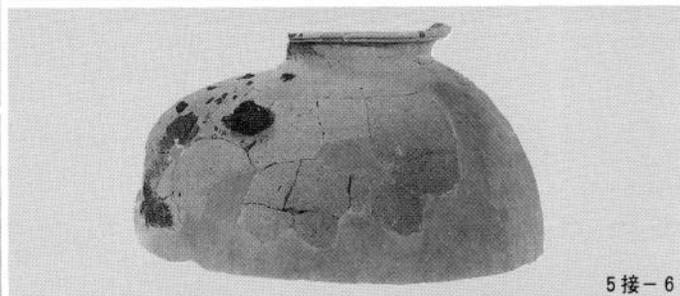
5接-2



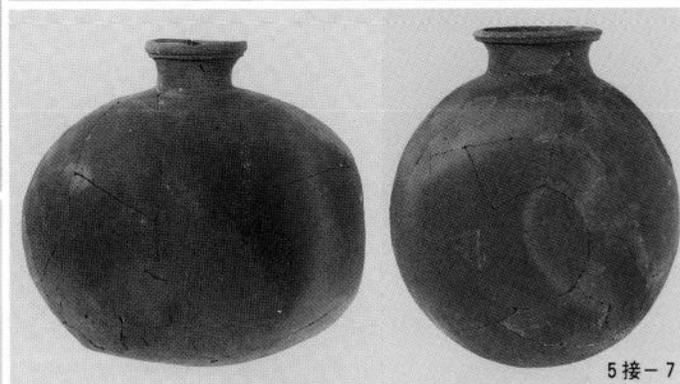
5接-4



5接-5



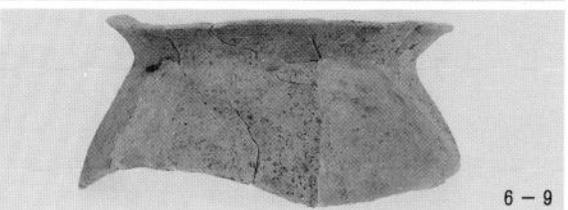
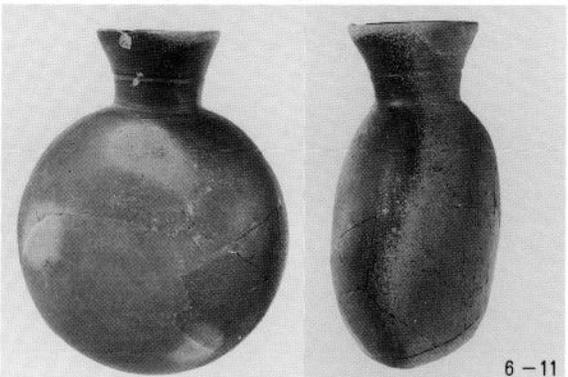
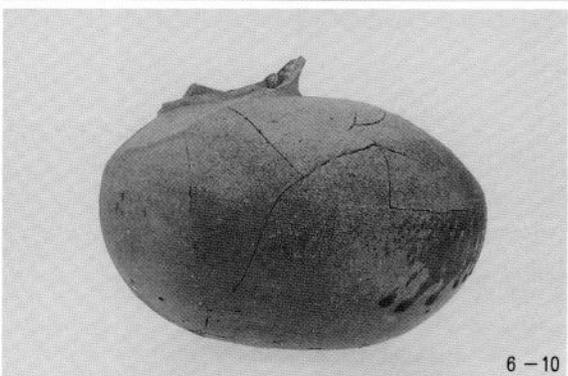
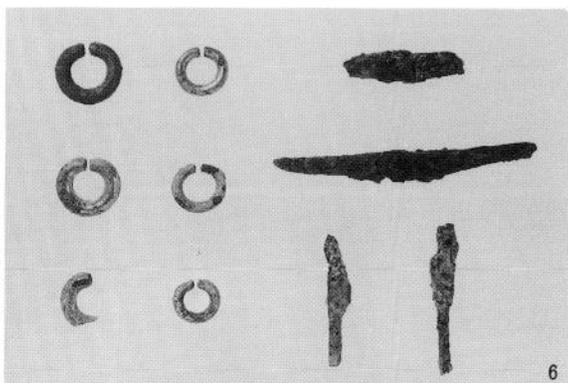
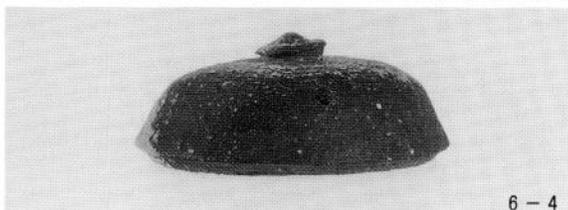
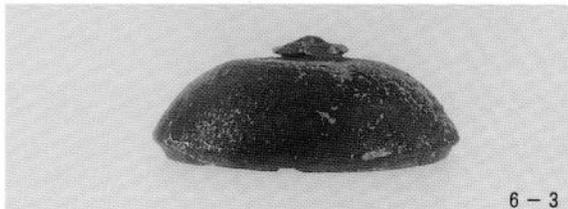
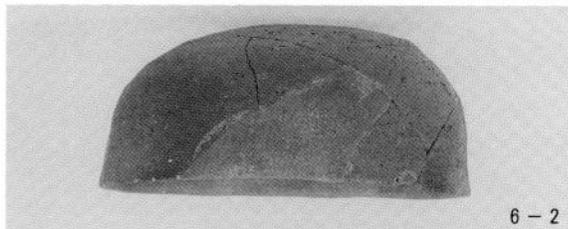
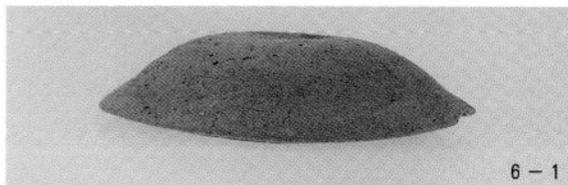
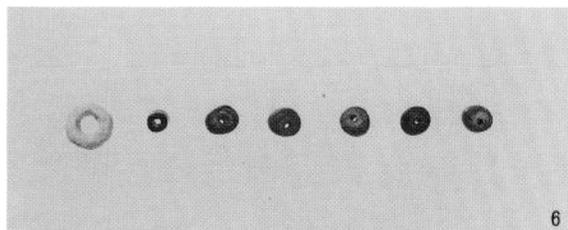
5接-6



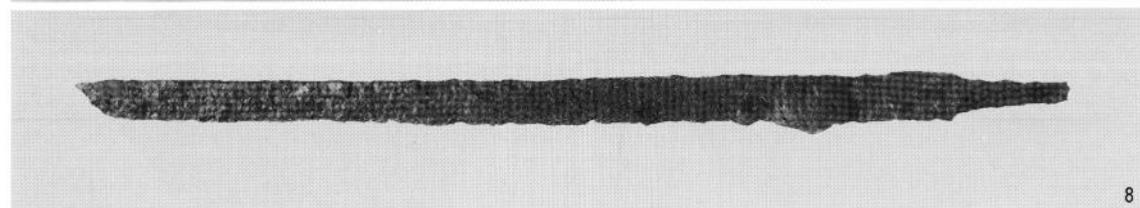
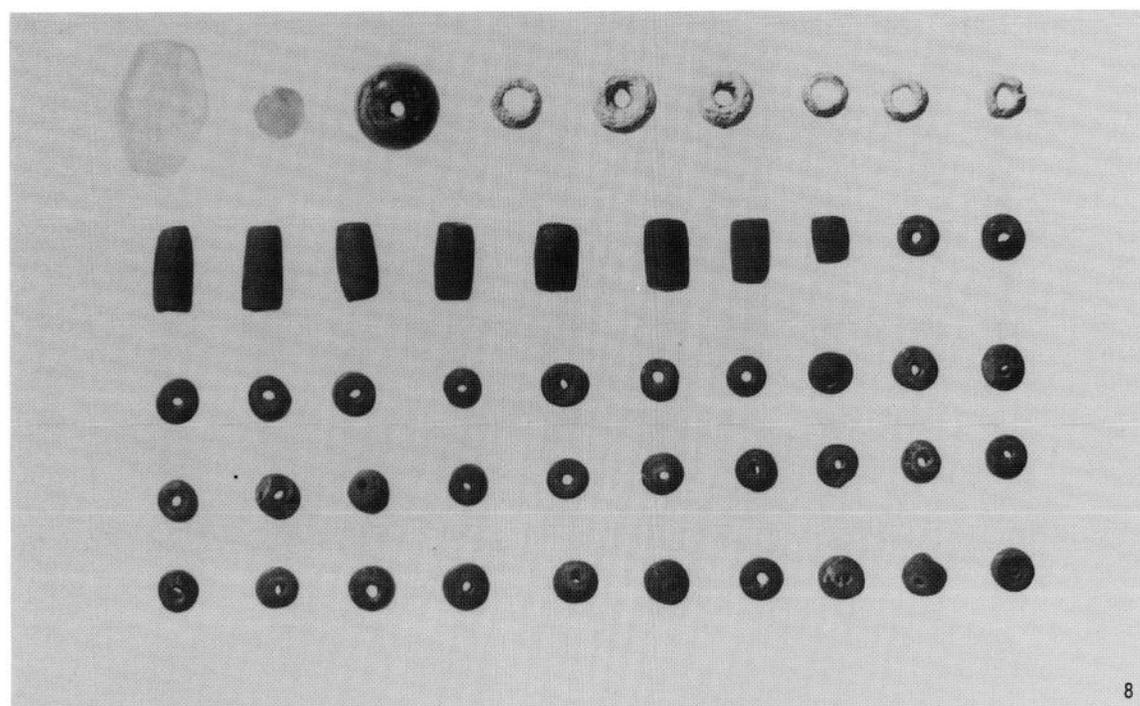
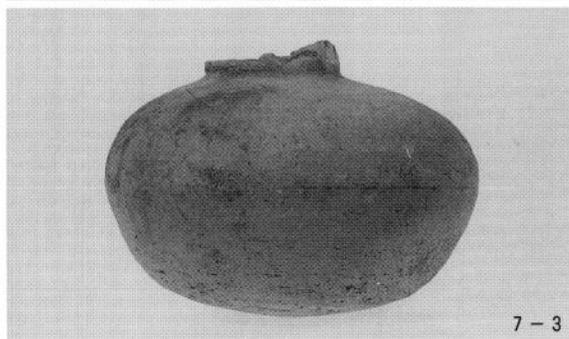
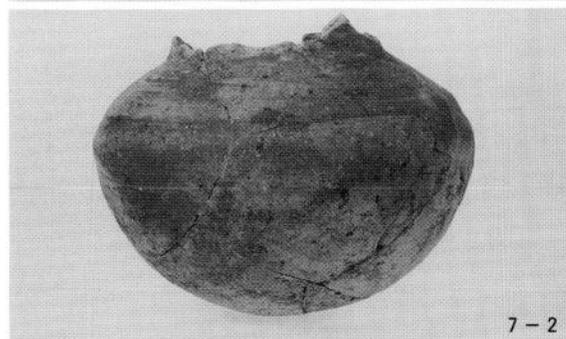
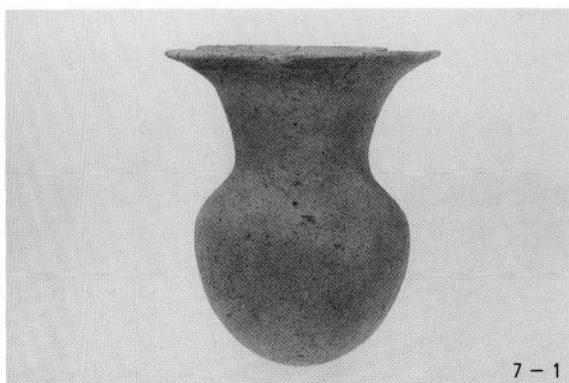
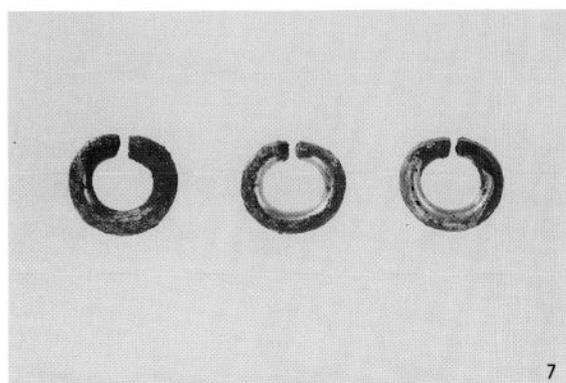
5接-7



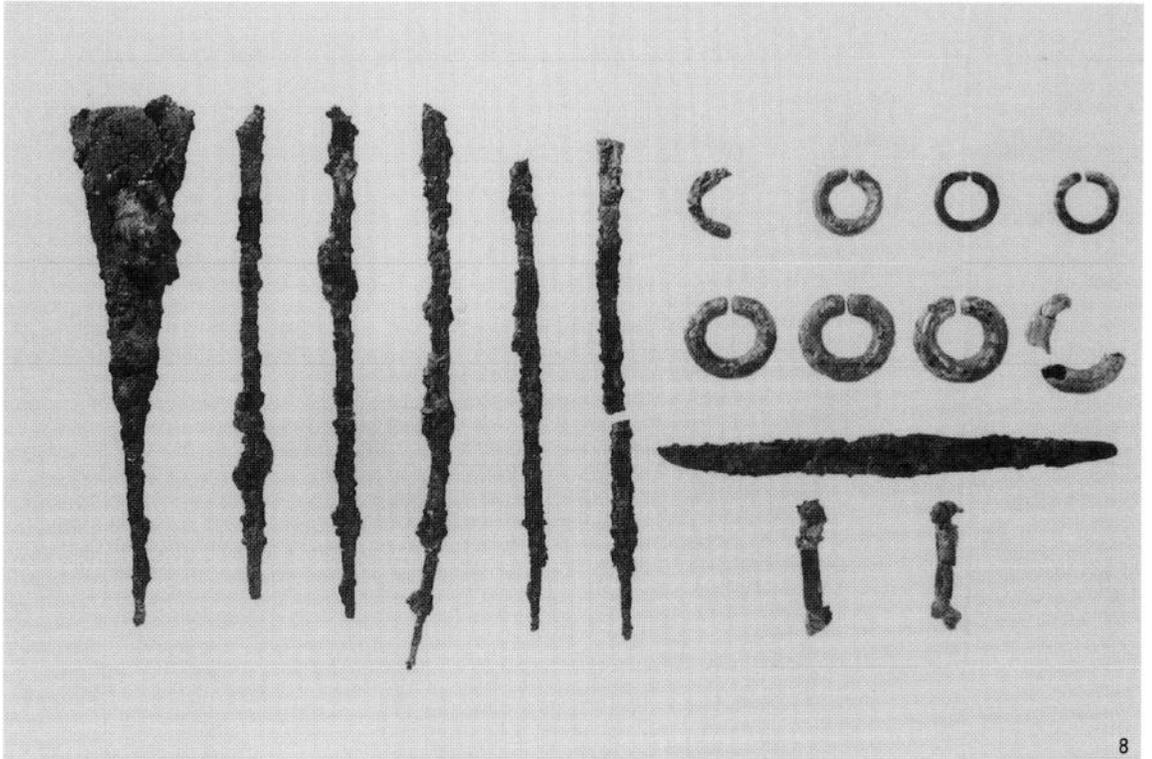
5接-8



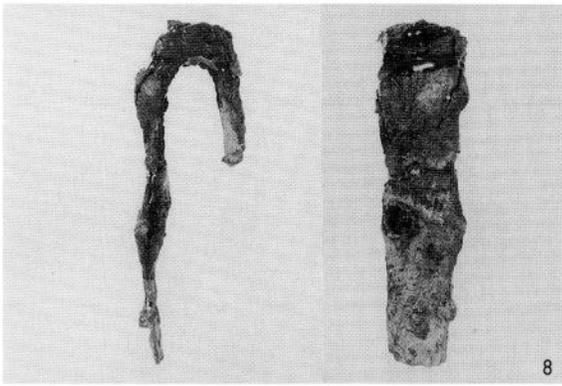
古墳出土遺物18 (6号横穴)



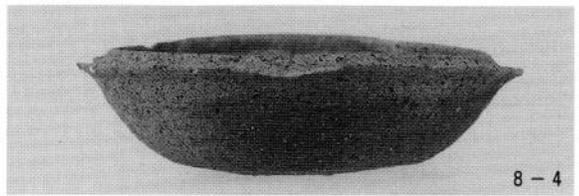
古墳出土遺物19 (7号横穴、8号横穴1)



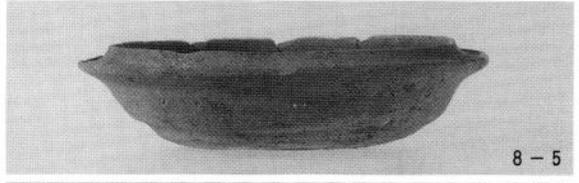
8



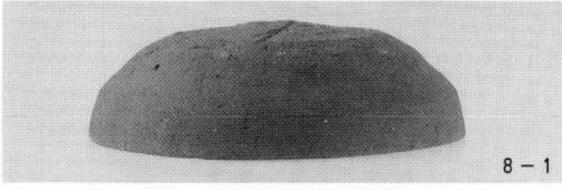
8



8-4



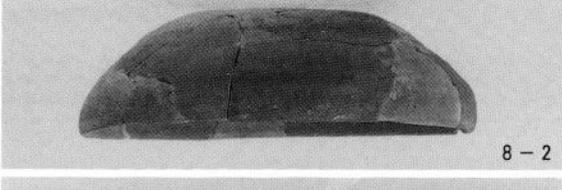
8-5



8-1



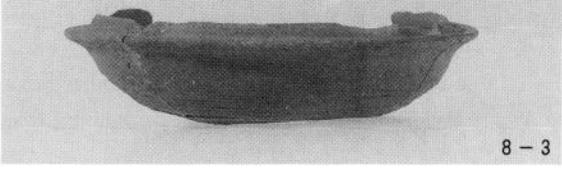
8-6



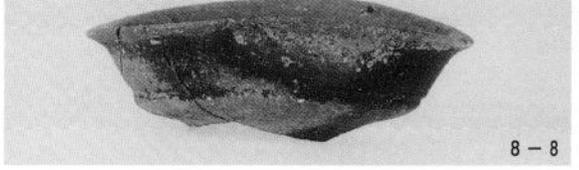
8-2



8-7

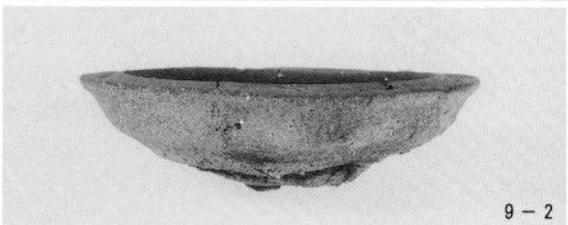
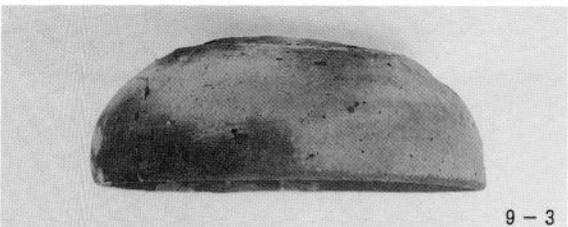
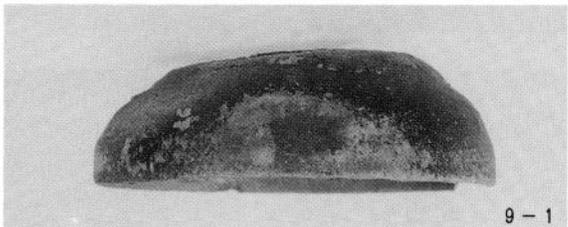
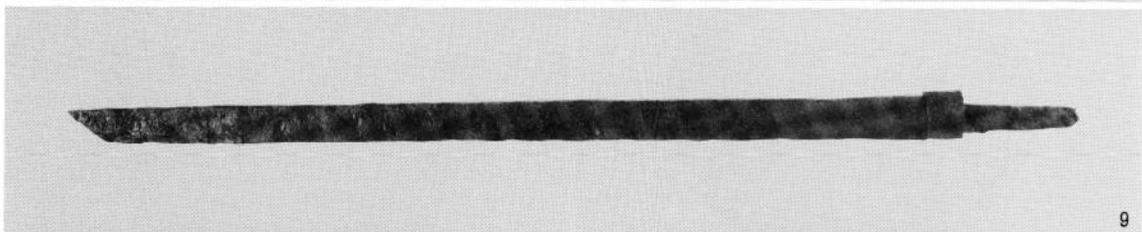
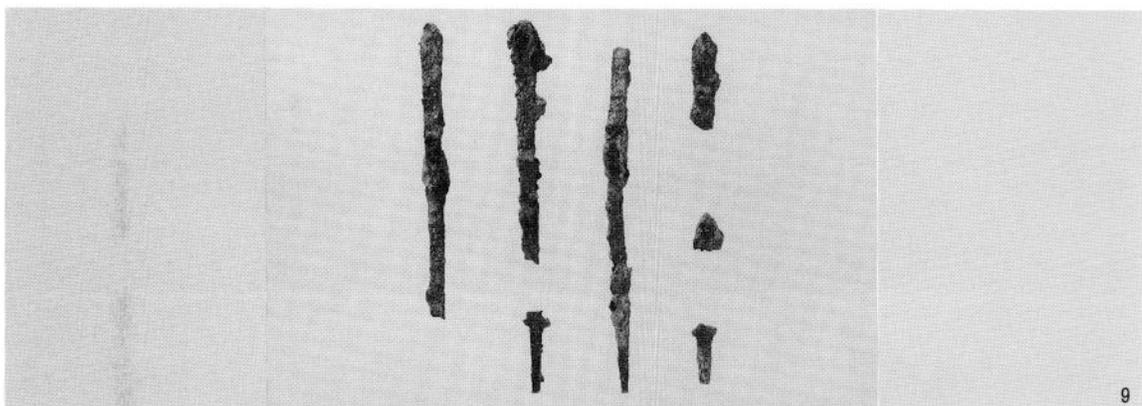
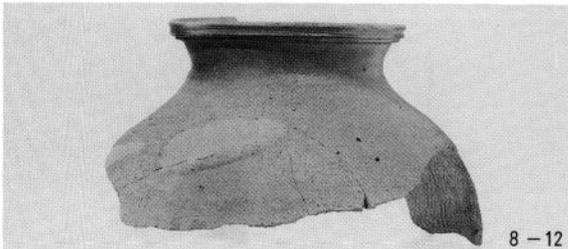
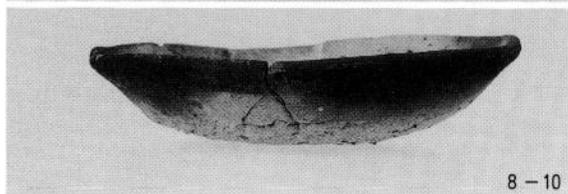


8-3

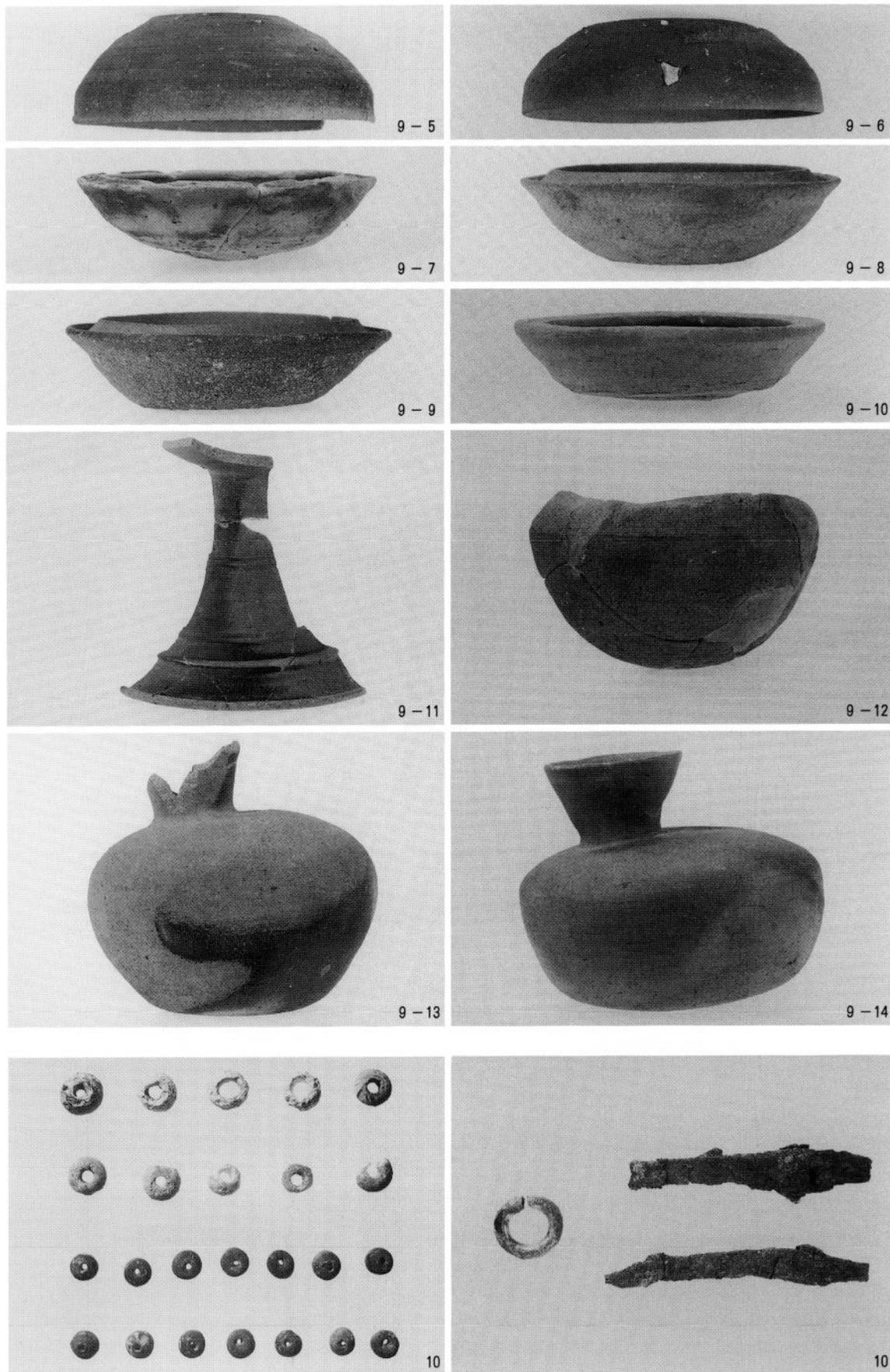


8-8

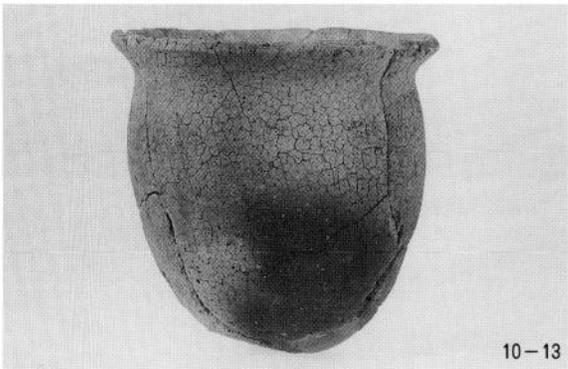
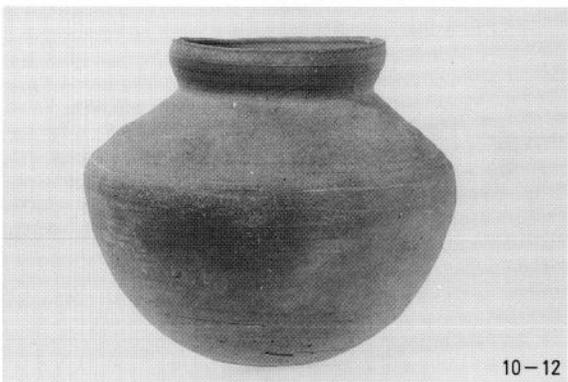
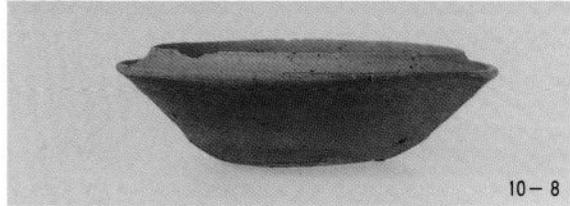
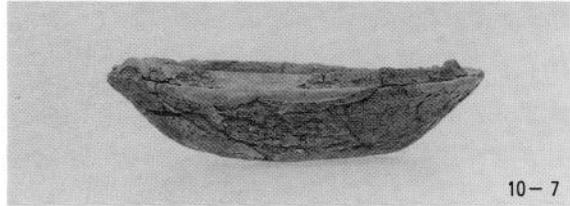
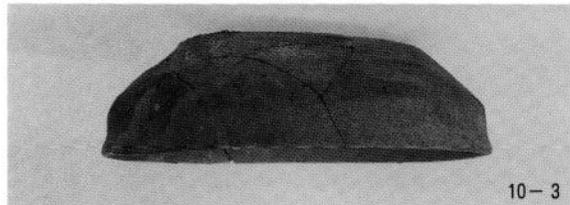
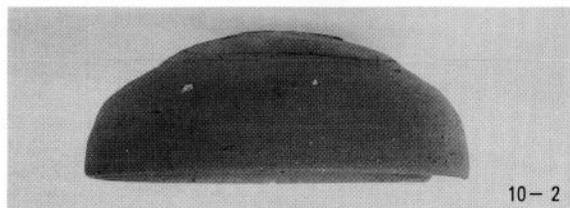
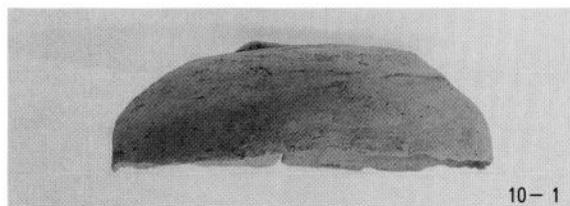
古墳出土遺物20 (8号横穴2)



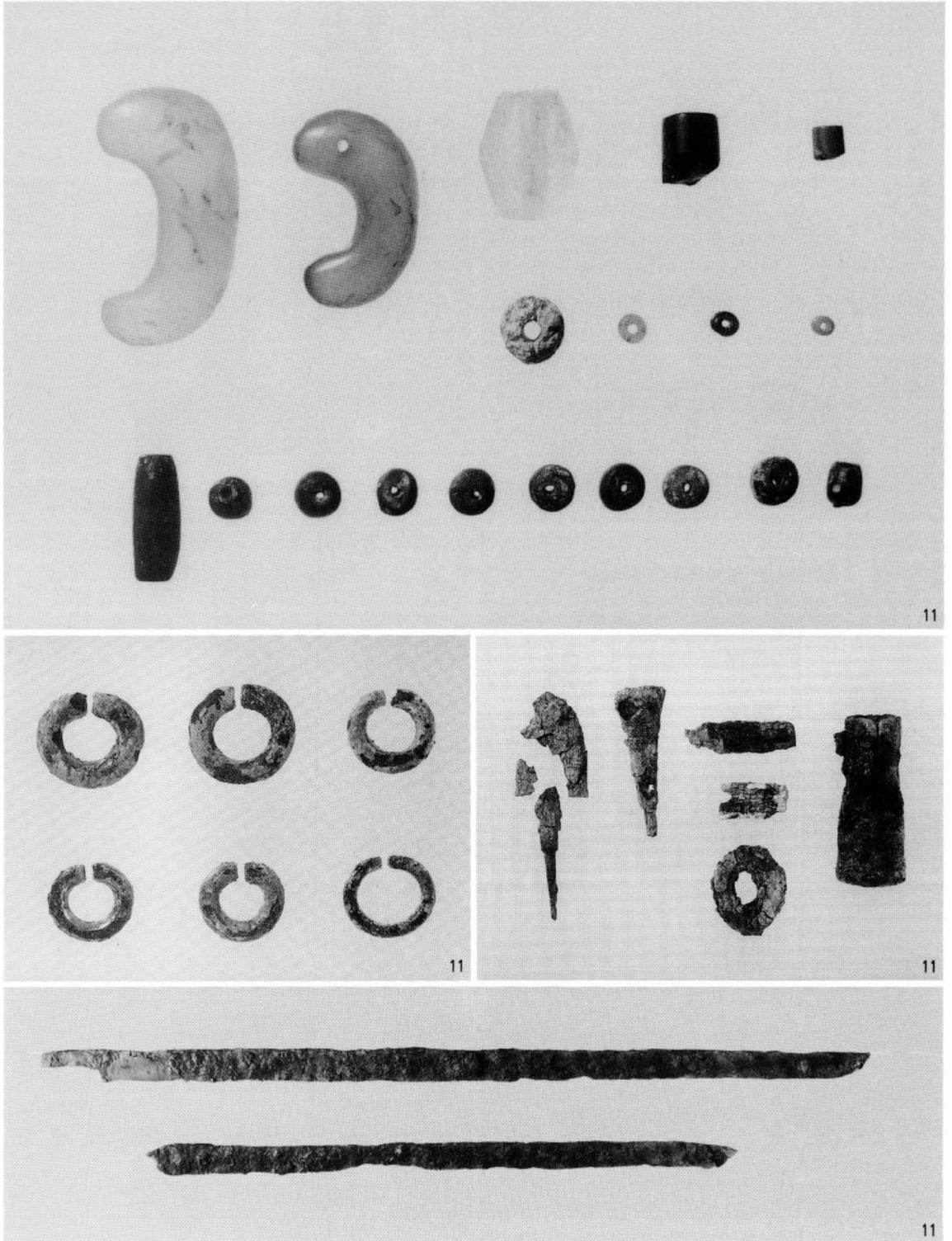
古墳出土遺物21 (8号横穴3、9号横穴)



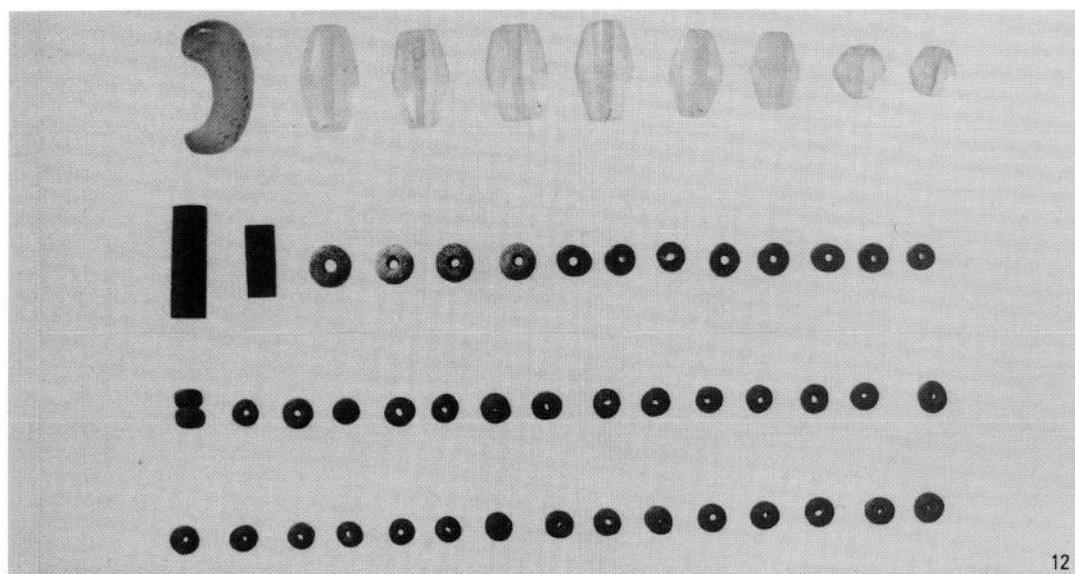
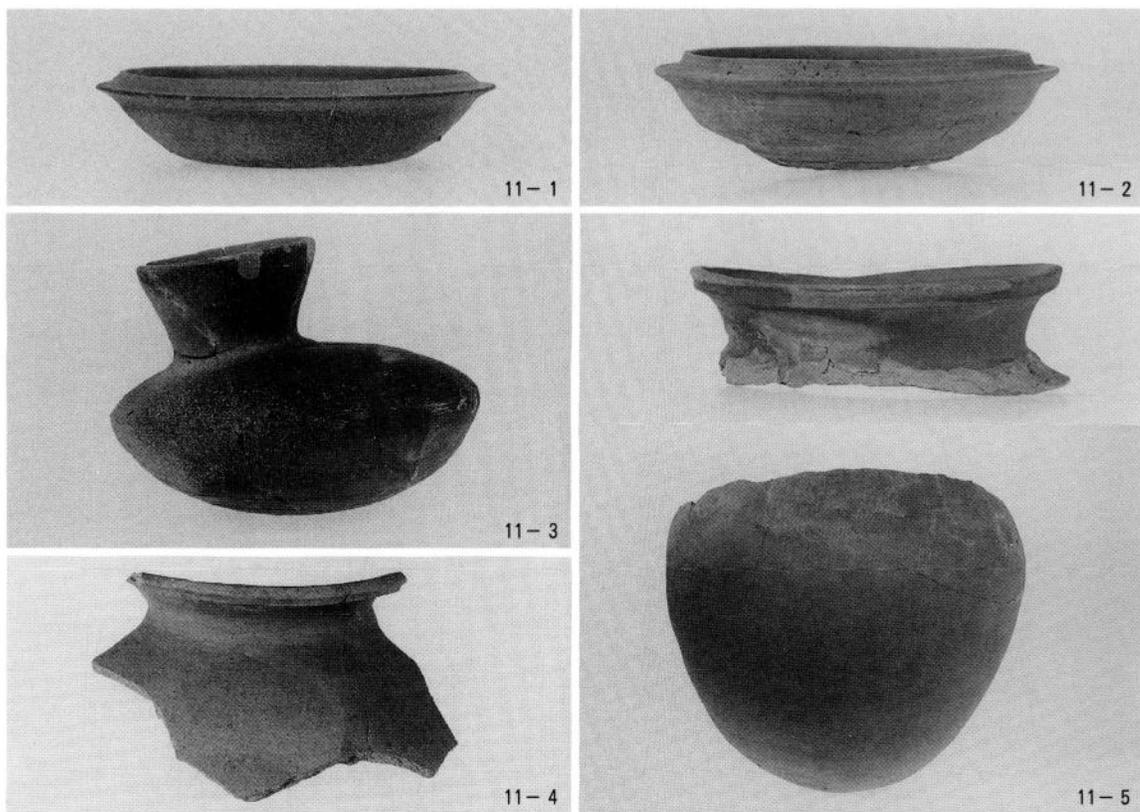
古墳出土遺物22 (9号横穴2、10号横穴1)



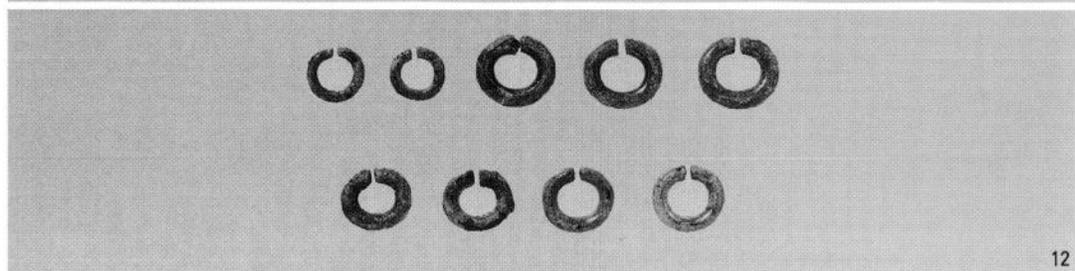
古墳出土遺物23 (10号横穴2)



古墳出土遺物24 (11号横穴)

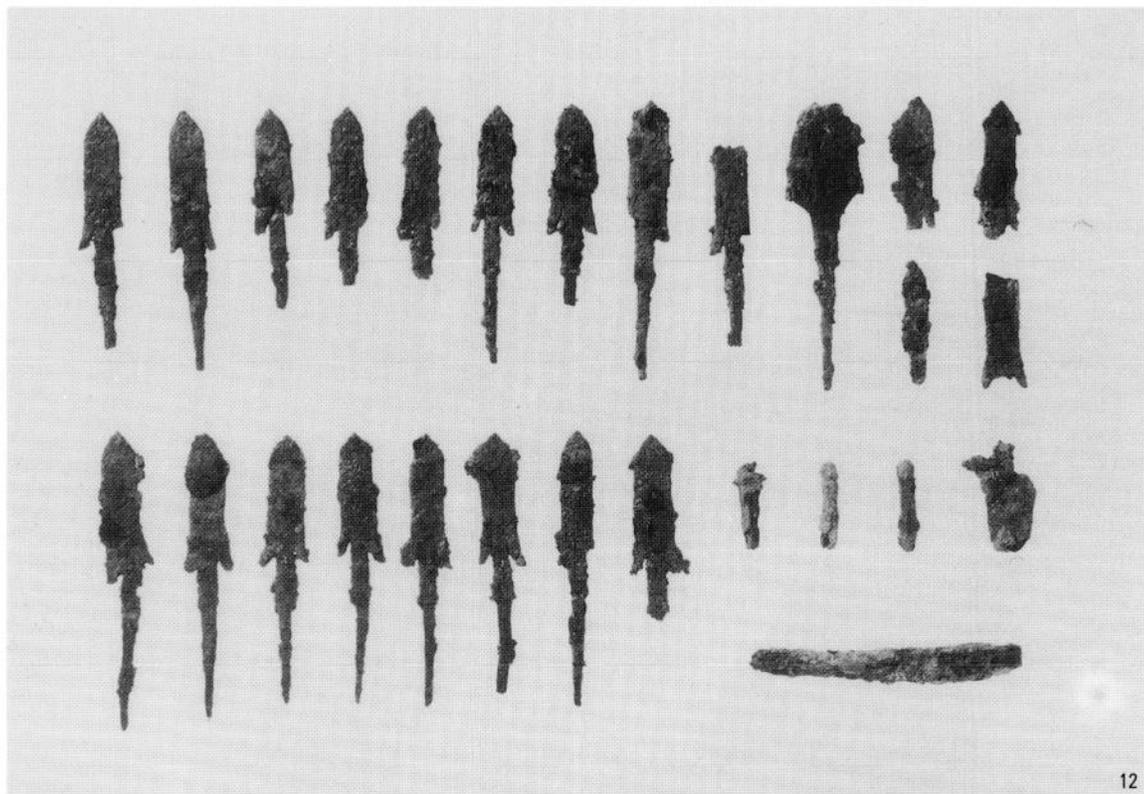


12



12

古墳出土遺物25 (11号横穴2、12号横穴1)



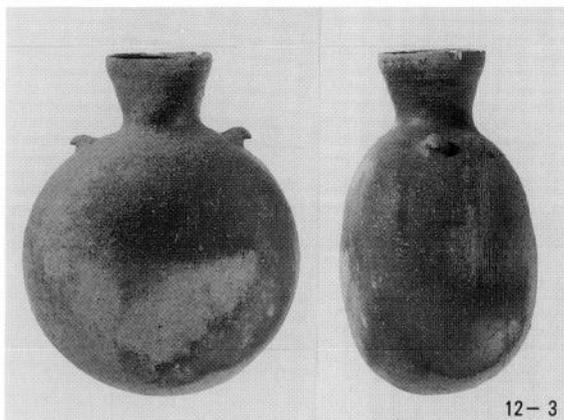
12



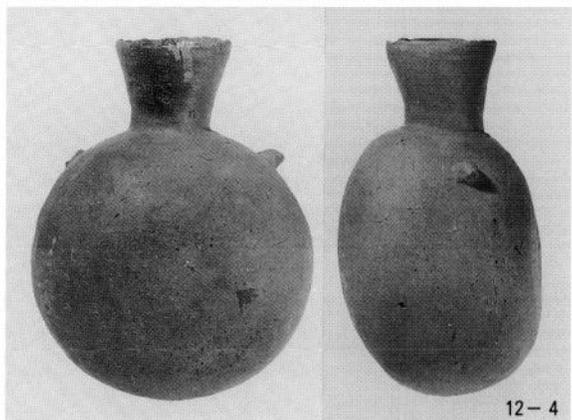
12-1



12-2

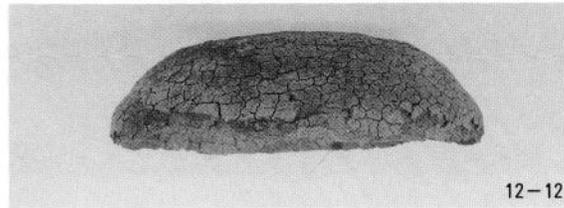
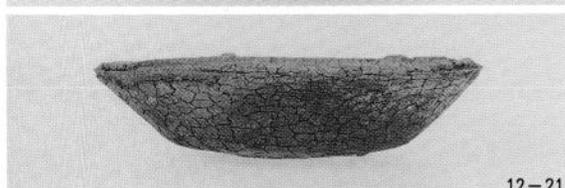
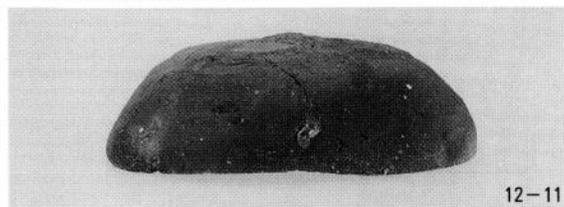
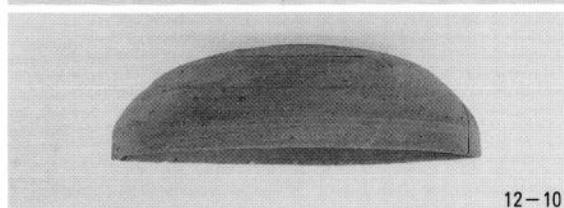
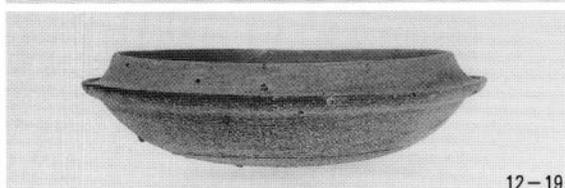
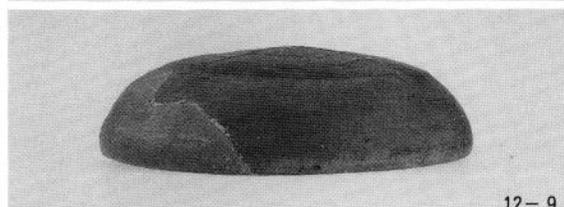
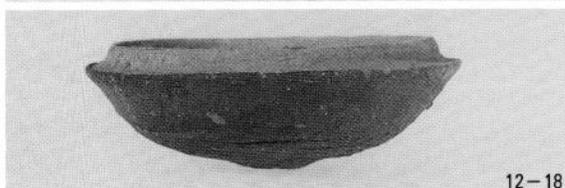
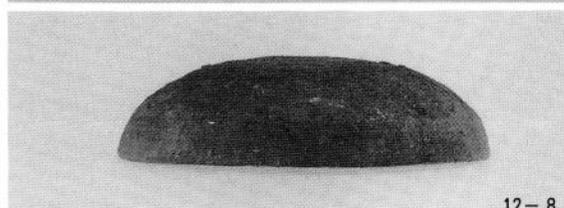
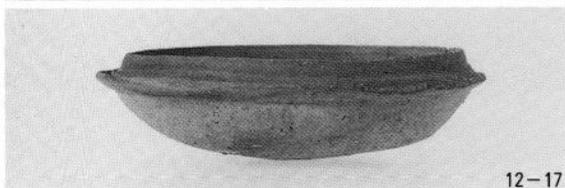
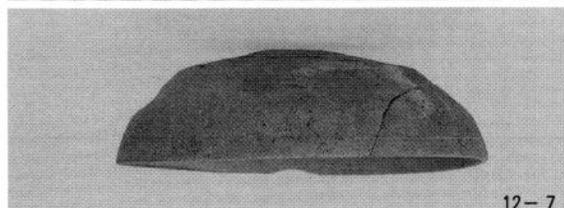
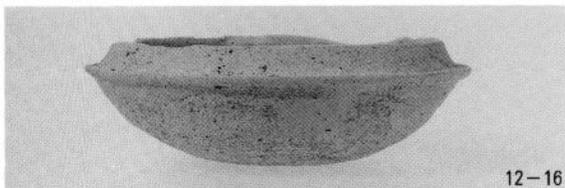
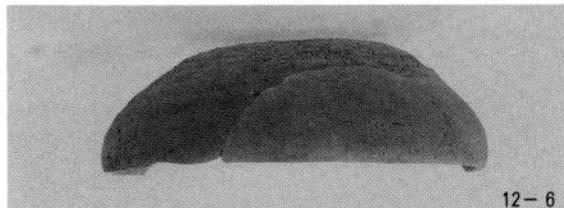
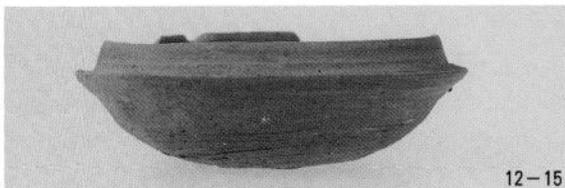
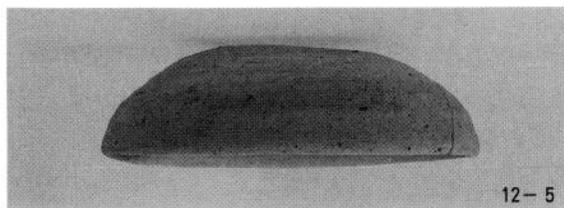


12-3



12-4

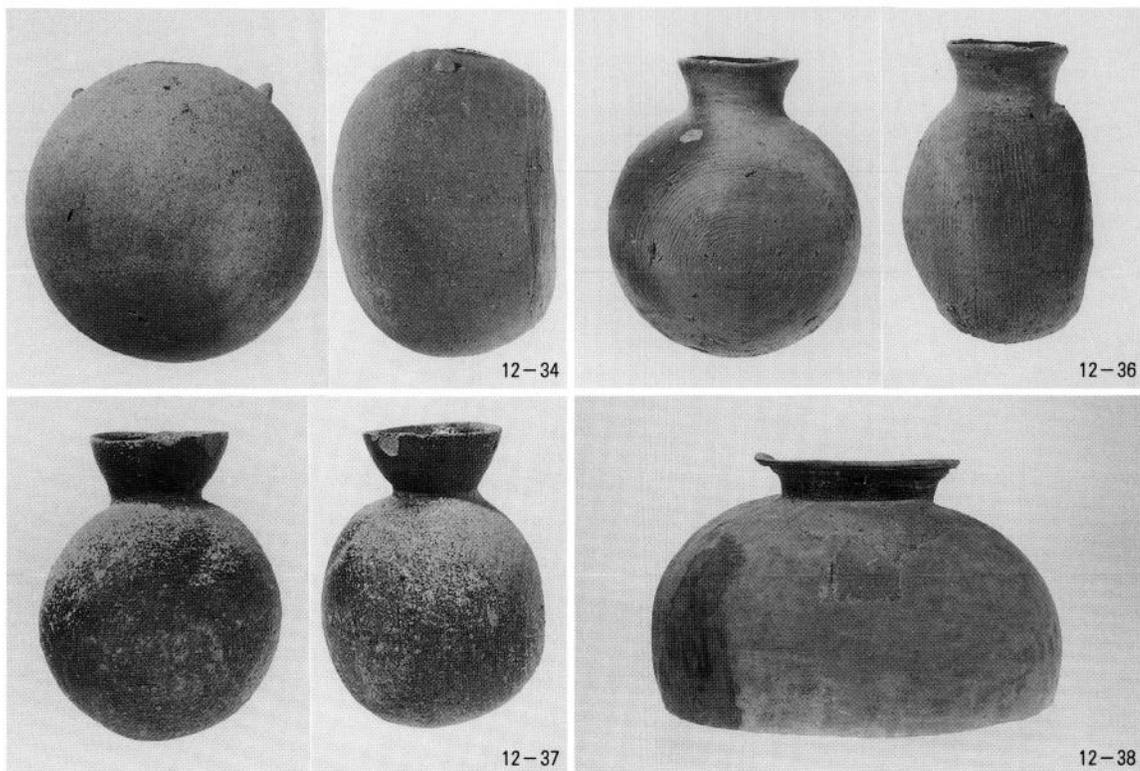
古墳出土遺物26 (12号横穴2)



古墳出土遺物27 (12号横穴3)



古墳出土遺物28 (12号横穴4)



古墳出土遺物29 (12号横穴5)



西方古墳全景  
(西上空から)



西方古墳全景 (西から)



西方古墳後円部（西から）



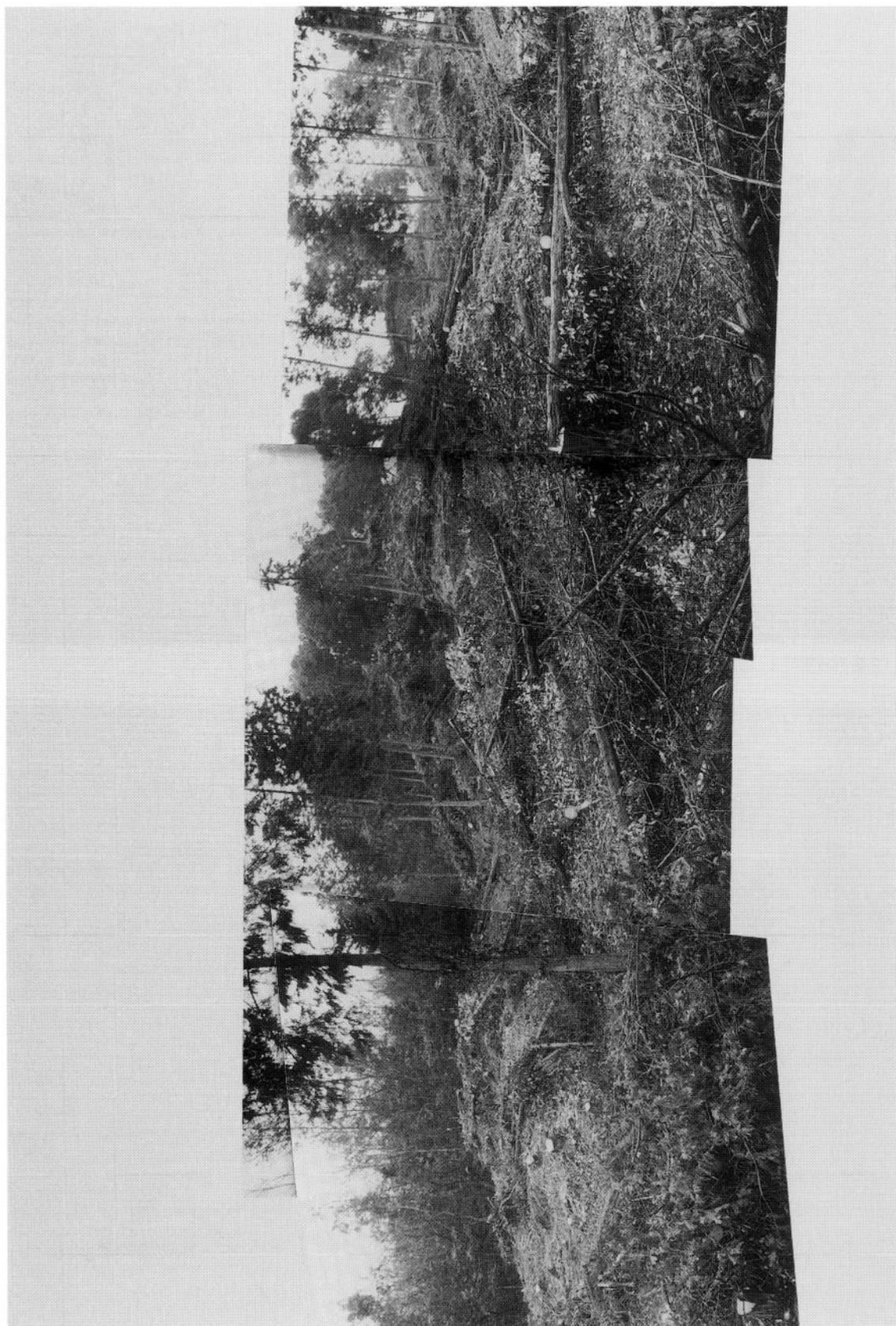
西方古墳後円部（南西から）



西方古墳後円部北側（北西から）



西方古墳西半（北から）



金居塚古墳群全景（東から）



金居塚古墳群 7(左)・10号墳 (南西から)



同7(右)・10号墳 (北から)



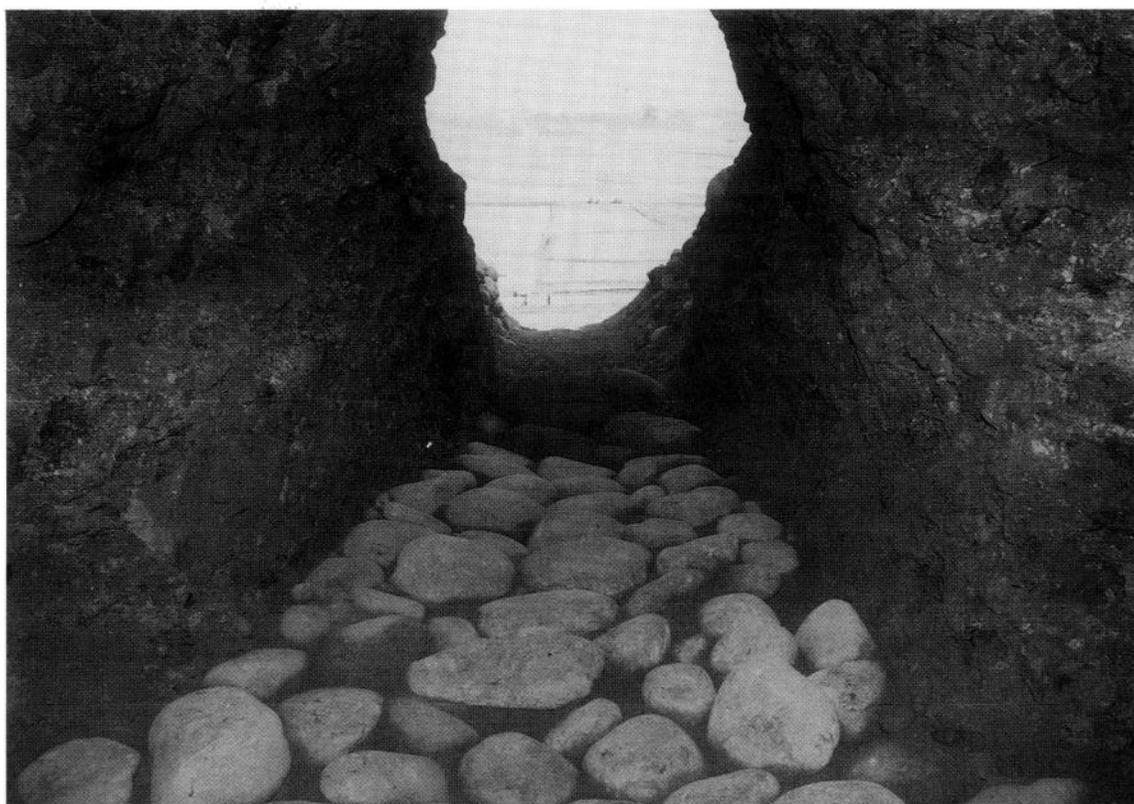
金居塚古墳群畑中の古墳（北東から）



同石室（東から）



調査風景（3号墳頂から北西をみる）



5号横穴内部から下唐原をみる

# 報告書抄録

ふりがな	かないづかいせき							
書名	金居塚遺跡							
巻次	I							
シリーズ名	一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第4集							
編集者名	飛野博文							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	☎812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 ☎092-651-1111							
発行年月日	西暦1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かないづか 金居塚	ふくおかけんちゆうぐん 福岡県築上郡 たいへいむら 大平村 おおあざしもとうぼる 大字下唐原	40645	960087 ~960092	33度 33分 30秒	131度 10分 45秒	1990.05.14 ~1991.04.30	約13,000㎡	道路 (豊前バイパス) 建設
さいほう 西方	ふくおかけんちゆうぐん 福岡県築上郡 たいへいむら 大平村 おおあざしもとうぼる 大字下唐原	40645		33度 33分 40秒	131度 10分 45秒	1991.02.08 ~04.30		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
金居塚遺跡	散布地	縄文時代以前	石組炉1、 落とし穴状土坑		打製石斧、有舌尖頭器、 石鏃等		旧石器から 縄文時代	
	集落	弥生時代	竪穴式住居跡1		土器		2群に分かれる	
	墓地	弥生時代	(石蓋)土墳墓25		鉄鏃、鈍			
	墓地	古墳時代	円墳5、横穴12		玉、銅釧、鉄製品(太刀、 鉄鏃、鎧)、金銅製品(耳環、 馬具)、土器		蔵骨器を含む	
金居塚遺跡	墓地	近世	火葬墓・土墳墓約186		鉄製品、土器			
	集落	不明	掘立柱建物跡2					
	その他	近世か	焼土坑、溝					
西方	古墳	古墳時代	前方後円墳				山国川流域最大 規模の前期古墳、 葺石有 測量調査のみ	

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 14

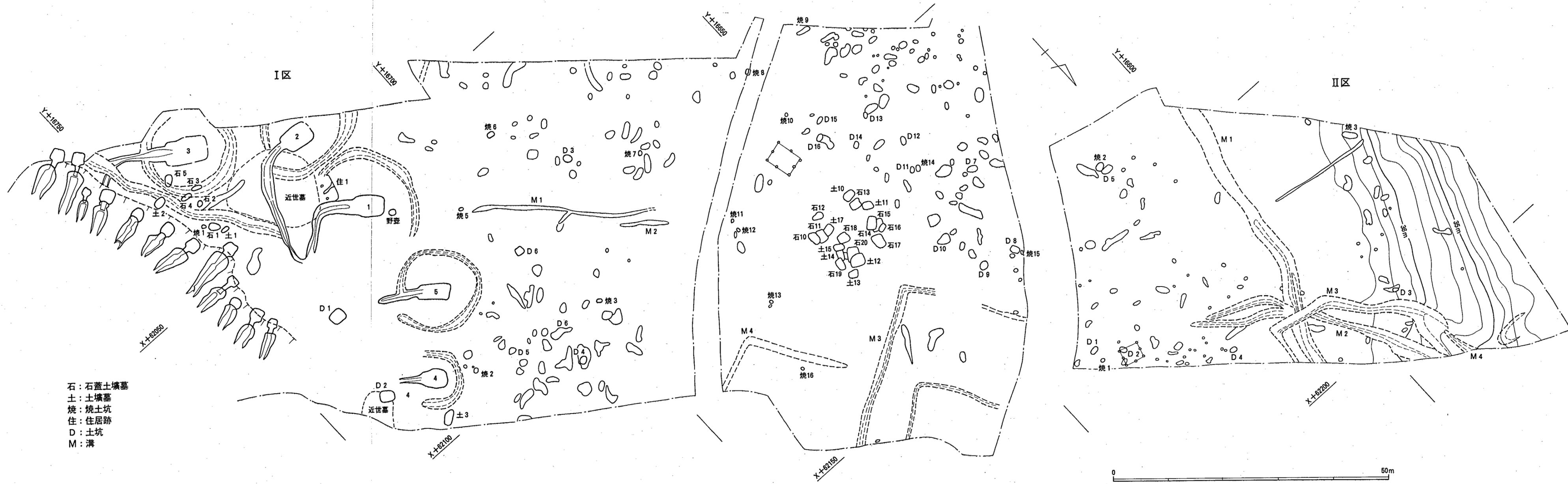
一般国道  
10号 豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

## 金居塚遺跡

平成8年3月31日

編集 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

発行 福博総合印刷株式会社  
福岡市博多区堅粕3丁目16番36号



金居塚遺跡遺構配置図 (1/500)